千提寺市阪遺跡 2 区　　17 土壙 地区割 2C1b,1C10

土壙の形態	検出面 方形	検出面直径・一辺	80～ × 69 cm	深さ 185 cm		
	底 面 方形	底面直径・一辺	60 × 50 cm	軸方向 N-40° -W		
上部施設	○有 ◉無	下部施設	○有 ◉無			
埋葬方法	土葬	所 見	残存状態が非常に良好であり、座位による土葬である。	棺の形態	箱形木棺 土壙の形状や釘の出土から箱形木棺の使用が考えられる。他の墓に比べ、人骨の形状から推測する木棺規模より土壙が大きめに掘削されている。	
	骨 ◉有 ○無	被熱痕 ○有 ◉無	炭化物 ○有 ◉無	蔵骨器 ○有 ○無		
人骨	性別 不明	年齢 成人	顔面方位 N-5° -E	疾病 ○有 ○無	備考	
	歯	所 見				

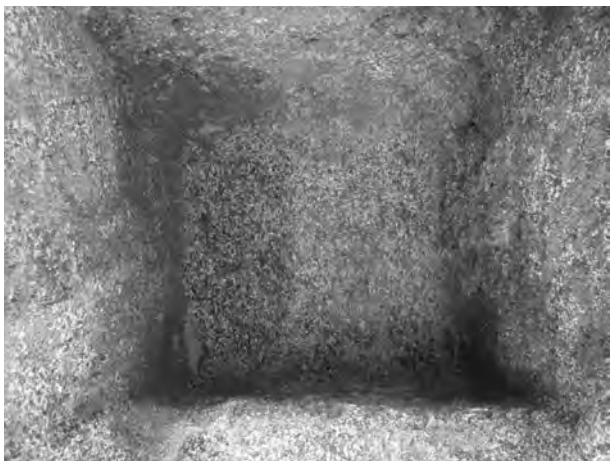
副葬品

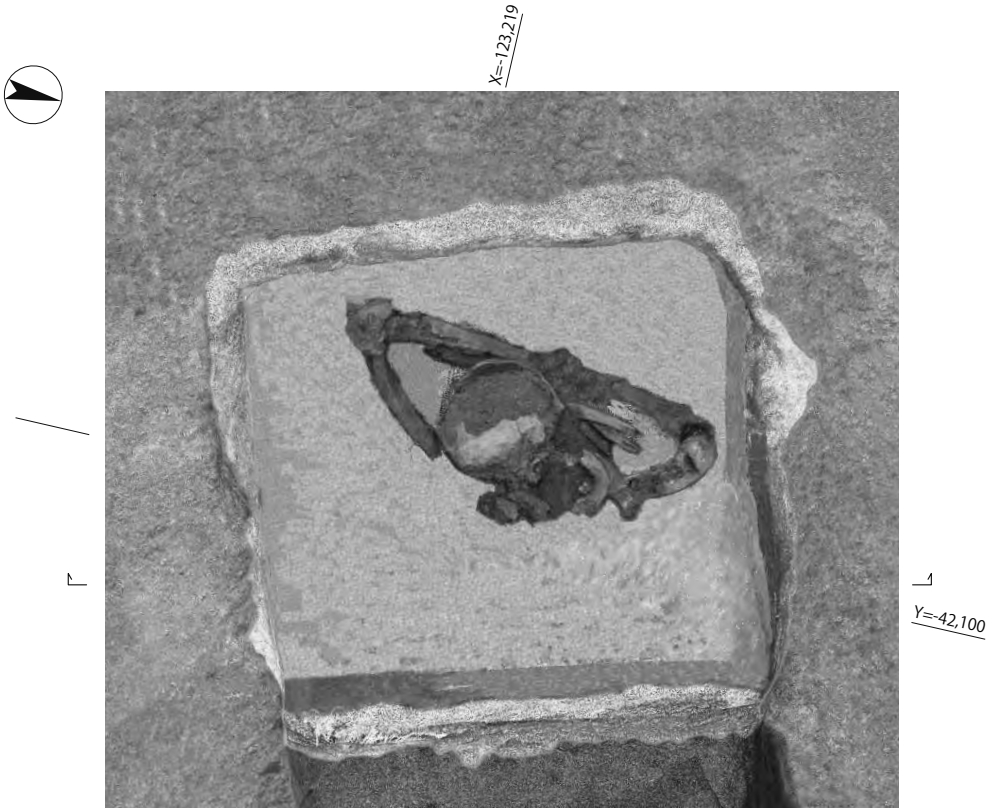
器 種 ☒土器 ☒銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 ☒玉類 ☒釘

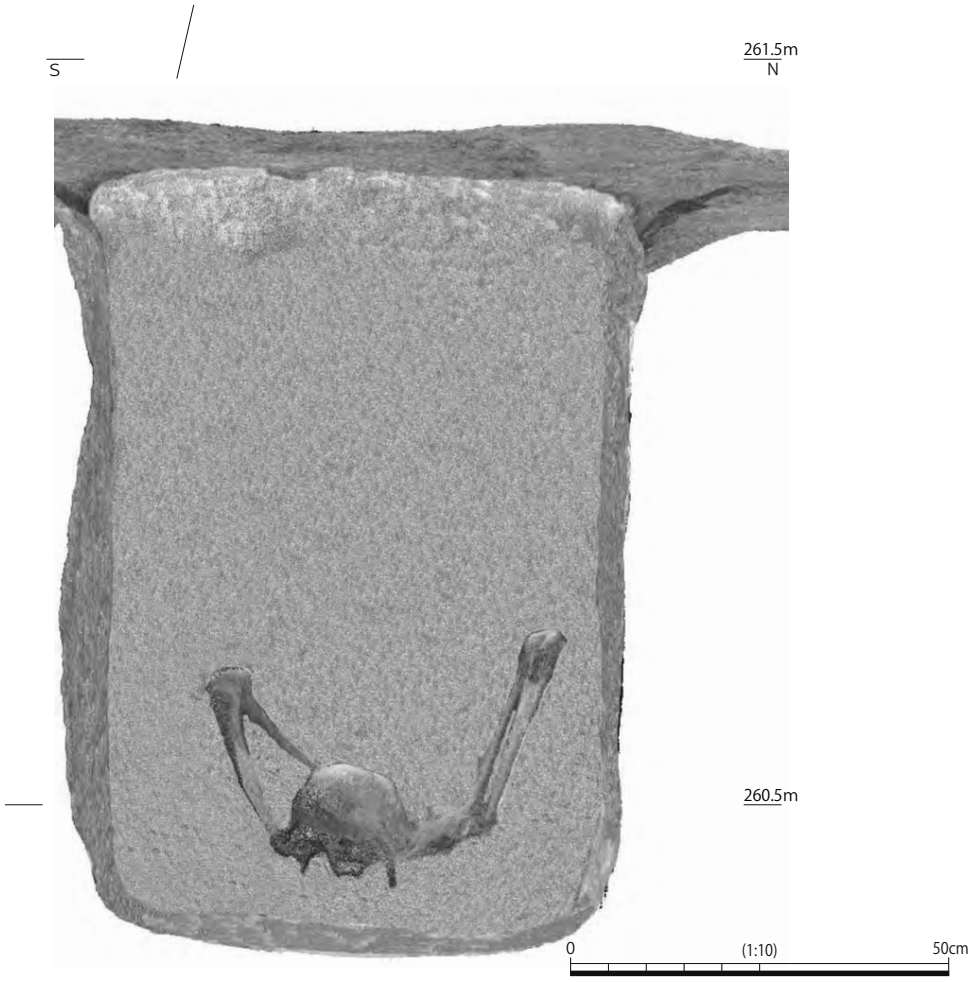
名 称	材 質	数 量	所 見
碗？	陶器	1	唐津焼、見込みに刷毛目、18世紀中頃か。
銭貨	銅	6	錆による癒着著しく、繊維質、不明鉄製品付着 寛永通寶。2期新寛永（文銭）2点、不明4点
ガラス小玉	ガラス	67	青緑色41点、無色26点、平均直径4.15㎜、平均重量0.095g
釘	鉄	5～	短小 木質付着、断面四角

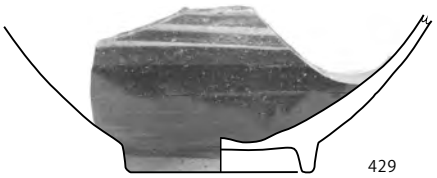
備考

近世墓集中部の南西寄り、16土壙の北側に位置する。土壙形状・木質付着釘・人骨の出土状況から、箱形木棺による座位葬とみられる。人骨・副葬品ともに遺存状態が良好であり、特に遺物が豊富に認められる。ガラス小玉が出土する土壙は本遺跡で2例を確認するのみであり、束ねられた銅銭と合わせ、葬送習俗を考える鍵となる。完形ではないが、共伴する唐津焼の一部は18世紀中頃のものと推測する。なお、出土地不明のガラス小玉1点を成分分析した結果、本土壙のガラス小玉に類似する結果がでており（第4章第4節参照）、計68点になる可能性がある。

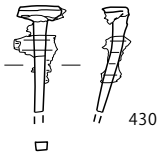



X=-123,219
Y=-42,100

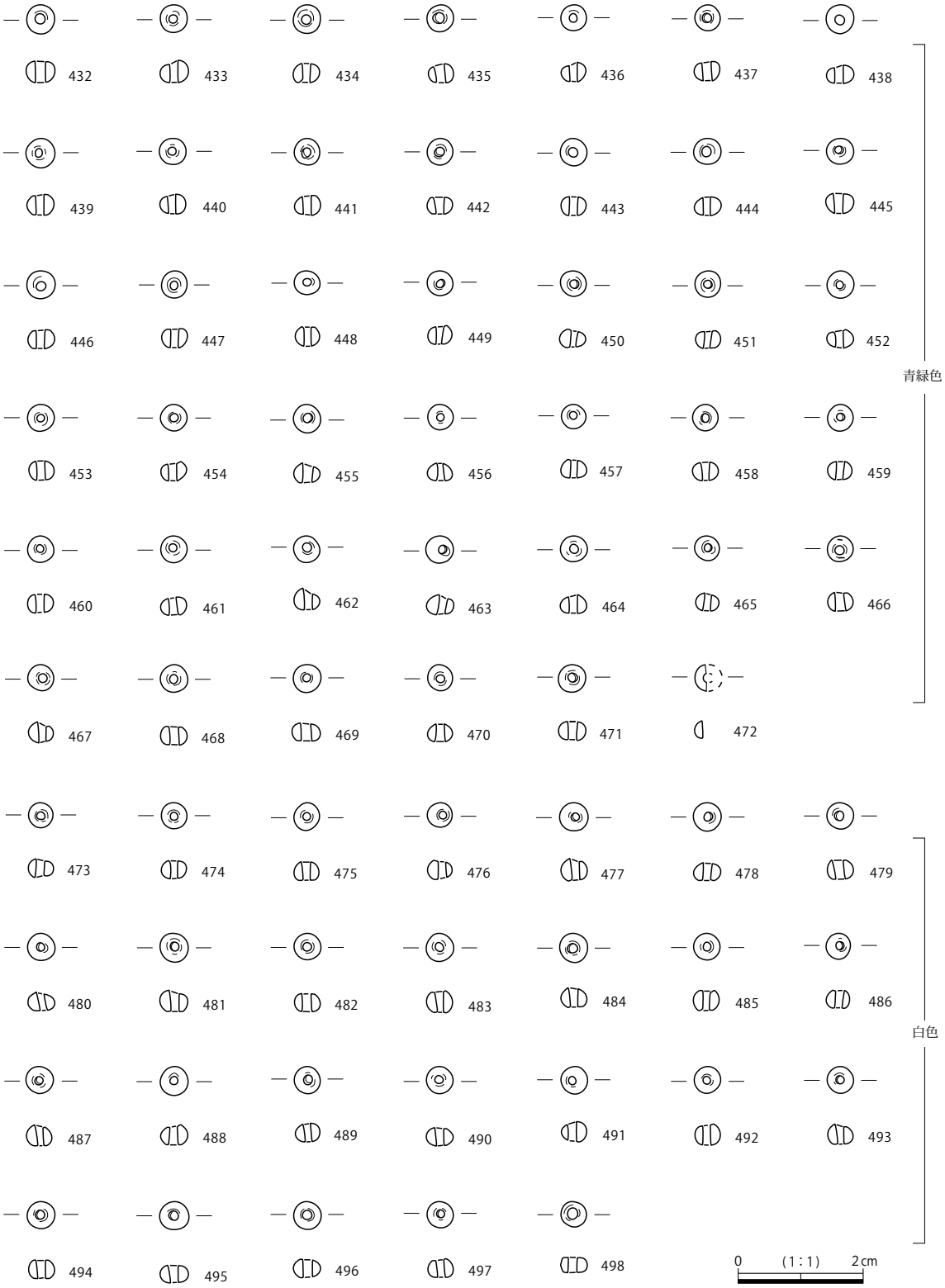

S
261.5m
N
260.5m
0
(1:10)
50cm



0 (1:4) 10cm



0 (1:2) 5cm

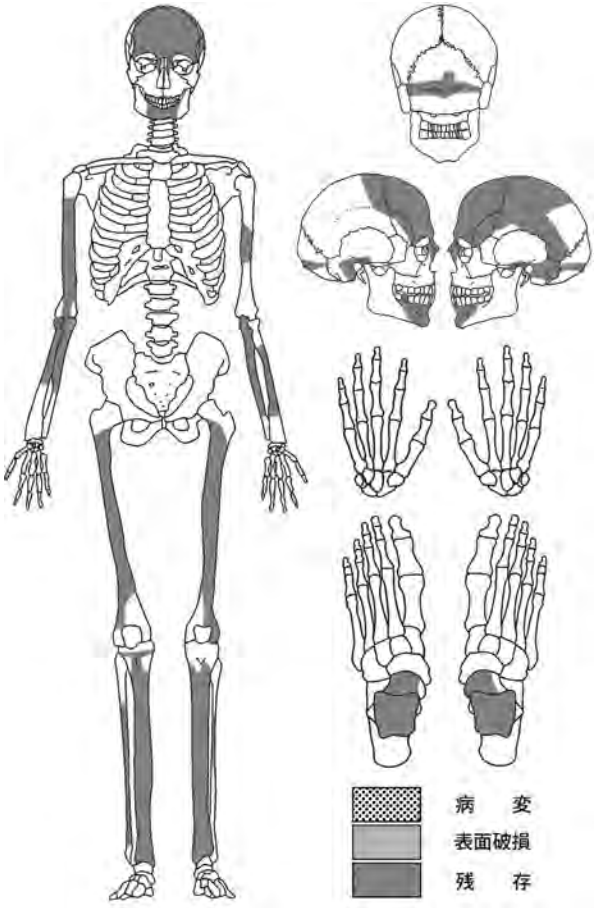


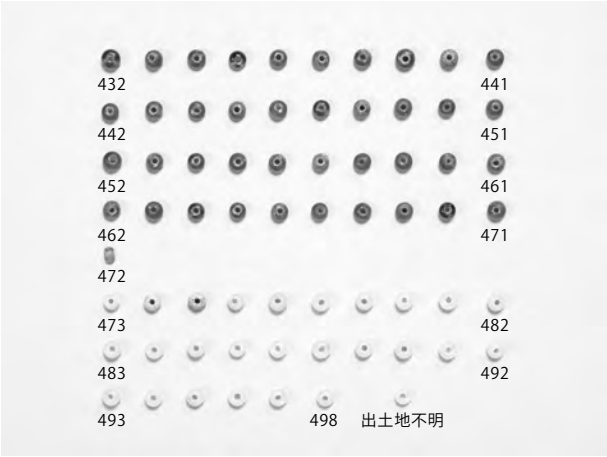
0 (1:1) 2cm

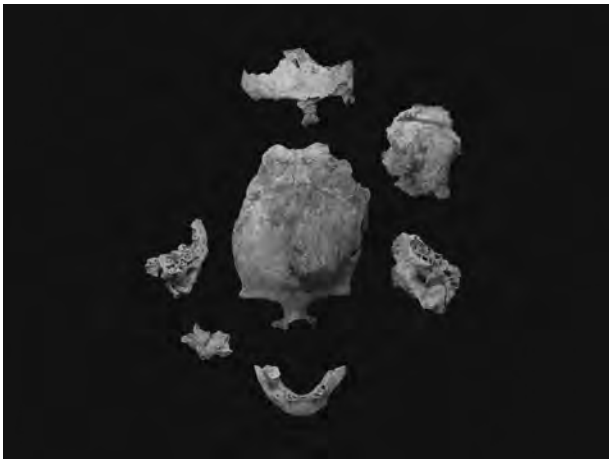
429

430

431


病　変
表面破損
残　存


432
441
442
451
452
461
462
471
472
473
482
483
492
493
498　出土地不明



千提寺市阪遺跡 2 区　　24 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態	検出面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	68 × 65 cm	
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	54 × 49 cm	
			深さ	126 cm	軸方向 N-30° -W

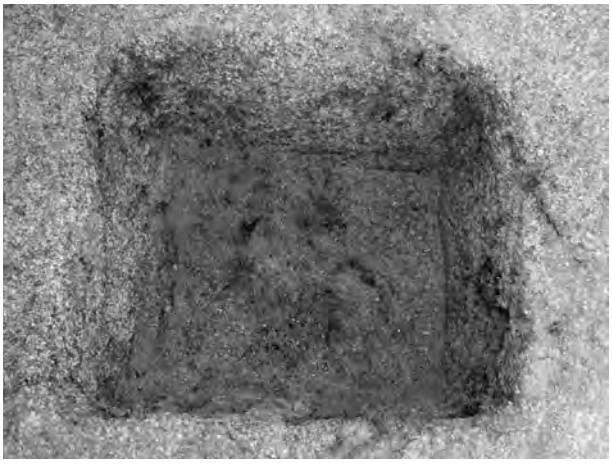
上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

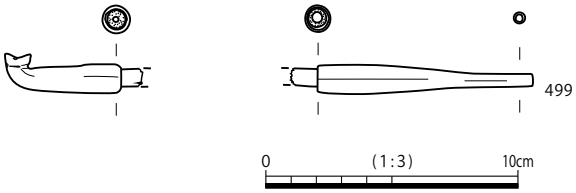
埋葬方法	土葬	骨 ◉有 ○無 被熱痕 ○有 ◉無 炭化物 ○有 ◉無 蔵骨器 ○有 ◉無	所見 人骨の状況から、座位による土葬と判断される。
棺の形態	不明	所見 土壙の形状と鉄釘から箱形木棺の使用が推測される。人骨と土壙の間隙が非常に狭く、かなり小さめの木棺と考えられる。	

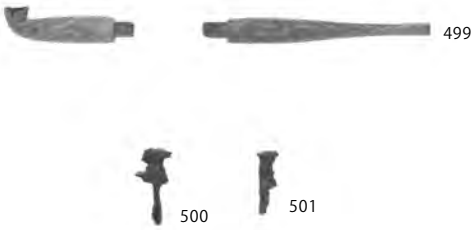
人骨	性別 女性	年齢 成人	顔面方位 N-20° -E	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所見			

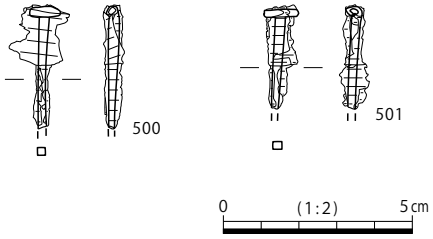
副葬品	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 ☒銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名称	材質	数量	所見
	煙管	銅？	2	雁首(羅宇一部残存)、吸口(羅宇一部残存)。
	釘	鉄	11～	短小　木質付着、錆が著しい。

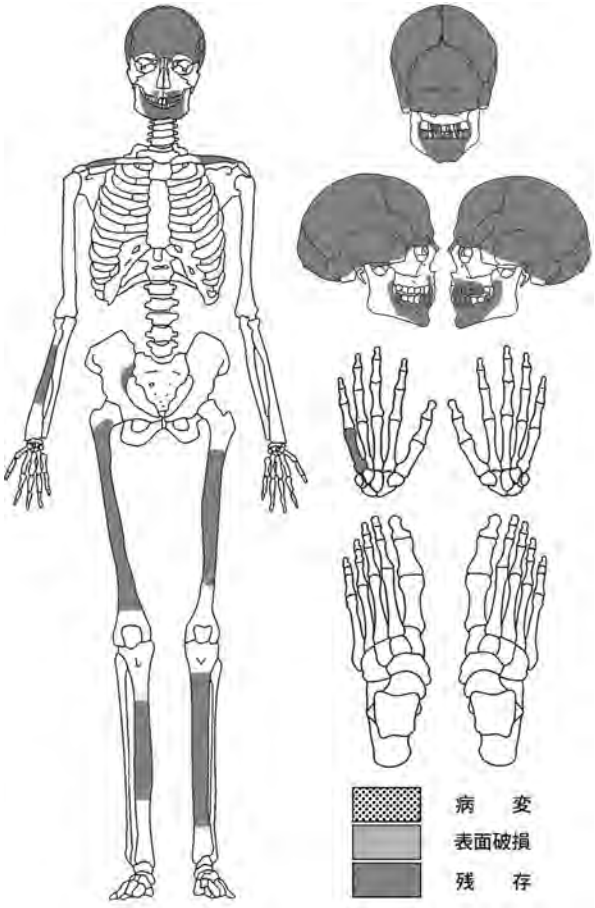
備考	近世墓集中部の北寄りに位置する。方形の土壙内に残存状態の良好な胡坐座の人骨を検出したことから、箱形木棺を用いた座位による土葬は明らかである。副葬品は煙管のみである。

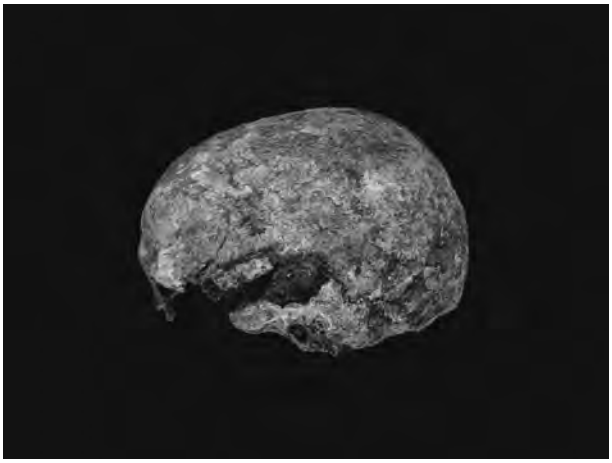



499
0
(1:3)
10cm


499
500
501


500
501
0
(1:2)
5cm


病　変
表面破損
残　存



千提寺市阪遺跡 2 区　　28 土壙 地区割 2C1b

土壙の形態	検出面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	68 × 67 cm	
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	42 × 42 cm	
			深さ	140 cm	軸方向 NS

上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

埋葬方法	土葬	骨 ◉有 ○無 被熱痕 ○有 ◉無 炭化物 ○有 ◉無 蔵骨器 ○有 ◉無	所見 残存が部分的ではあるが、座位を想定できる。

棺の形態	推定箱形木棺	所見	土壙の形状から推測する。

人骨	性別 不明	年齢 不明	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所見			

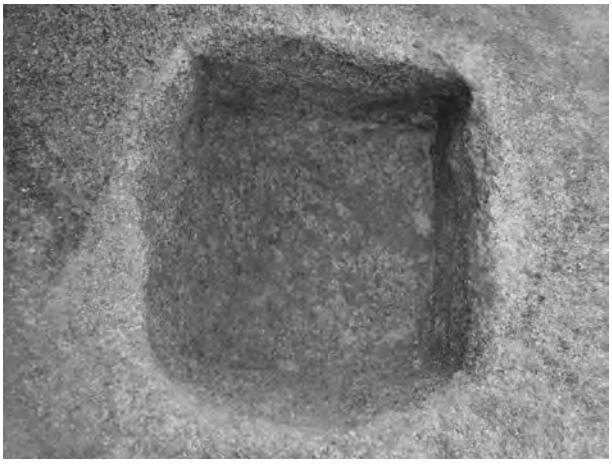
副葬品

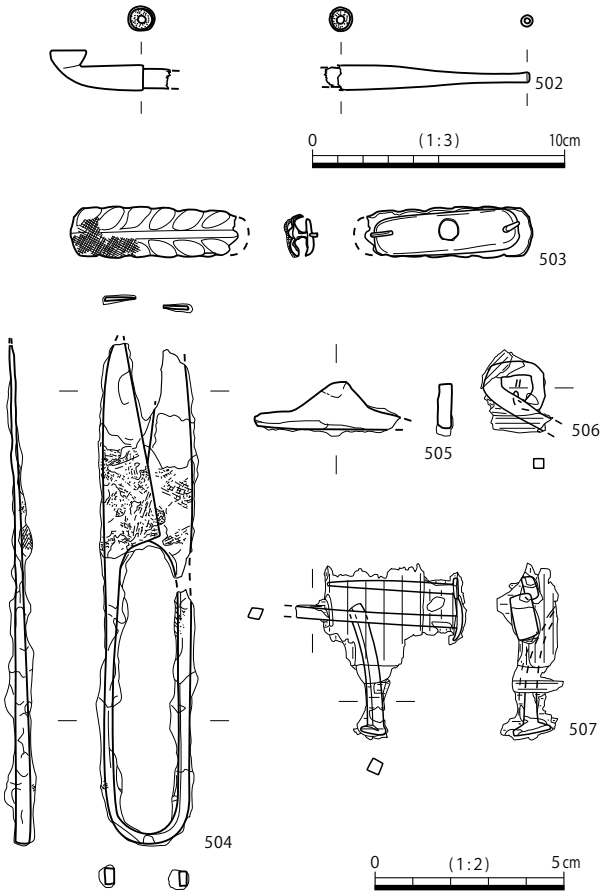
器種 □土器 □銭貨 ☒鉄製品 □土製品 ☒銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

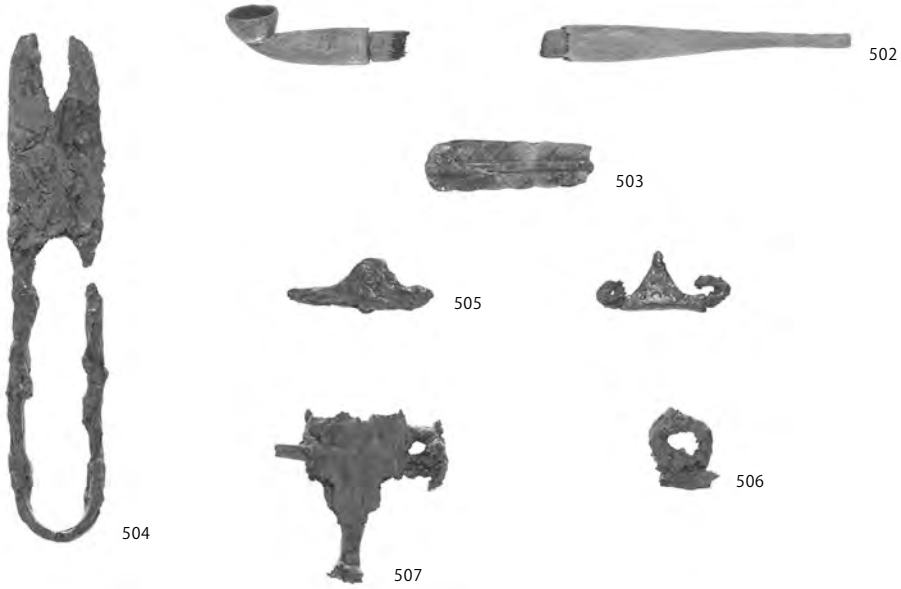
名称	材質	数量	所見
握り鋏	鉄	1	布が付着。
火打金	鉄	2	
煙草入れ(前金具・裏座)	銅	2	前金具は矢羽状の文様。
煙管	銅？	2	雁首(羅宇一部残存)、吸口(羅宇一部残存)。
火打石	石	1	
釘	鉄	20～	短小・長大

備考

近世墓集中部の西端に位置する。土壙の形状と人骨の出土状態から、箱形木棺による座位の土葬と考えられる。人骨の残存部位が少ないため性別は不明である。副葬品内に握り鋏が混じることから女性の可能性が高く、また同時に出土した煙管は、当時の女性の高い喫煙率を想起させるものである。なお、布が付着する塊が同時に出土しており、これを慎重に分解したところ、煙草入れの前金具・裏座とみられる金具、火打金2点、火打石1点が明らかとなった。煙草入れに火打金、火打石を入れていたのであろうか、煙草入れとともに火打袋があったのであろうか、判然としない。




502
0 (1:3) 10cm
503
505
506
507
504
0 (1:2) 5cm


502
503
505
506
504
507

千提寺市阪遺跡 2 区　　32 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態	検出面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	60 × 60 cm	
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	46 × 39 cm	
			深さ	161 cm	軸方向 N-40° -E

上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

埋葬方法	土葬	骨 ◉有 ○無 被熱痕 ○有 ◉無 炭化物 ○有 ◉無 蔵骨器 ○有 ◉無	所見 出土状況から座位による土葬が明らかである。

棺の形態	推定箱形木棺	所見	土壙の形状と釘から箱形木棺と推測する。

人骨	性別 男性	年齢 40～60才	顔面方位 S-30° -E	疾病 ◉有 ○無	備考 身長の推定可
	歯	所見	黄色靭帯骨化症。髪の毛の一部？残存する。		

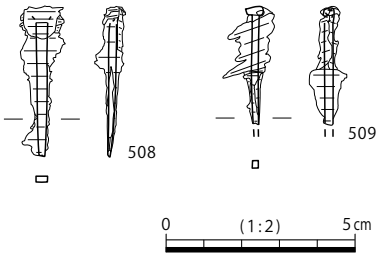
副葬品

器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

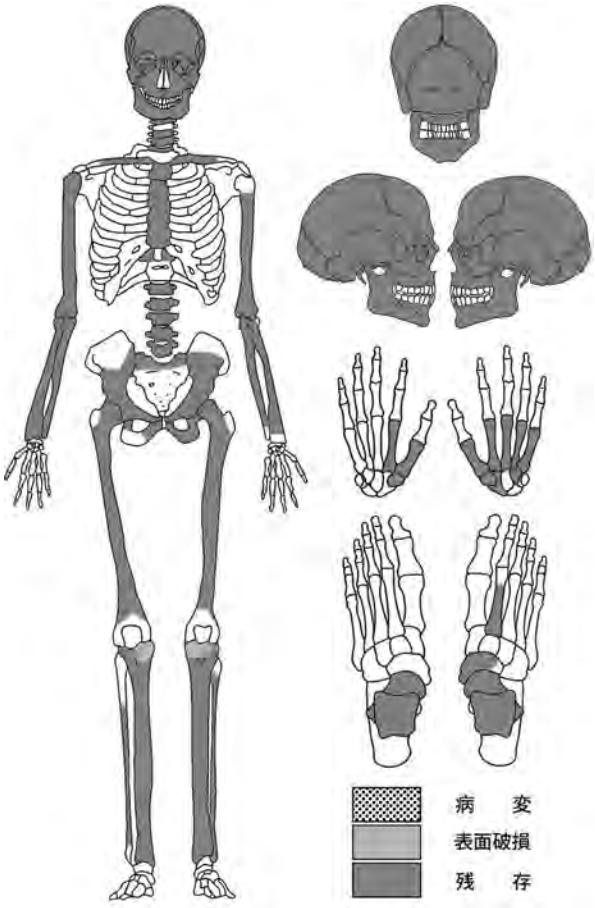
名称	材質	数量	所見
釘	鉄	12	短小

備考

近世墓集中部の北東寄りに位置する。集中部の内側に在りながら1基だけ点在していることから目を引く。人骨の遺存状態が極めて良好であり、毛髪の一部も残ることから、かなり新しい段階の埋葬と考えられる。人骨の形状から座位による納棺は明らかであり、棺材は認められないものの、土壙の形状や釘の出土から箱形木棺が使用されたと考えられる。


508
509
0
(1:2)
5cm

508
509


病　変
表面破損
残　存

千提寺市阪遺跡 2 区　　38 土壙 地区割 2C1b

土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 □長方形 □円形 ☒不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	94 × 94 cm	
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	76 × 70 cm	
			深さ	179 cm	軸方向 N-40° -E

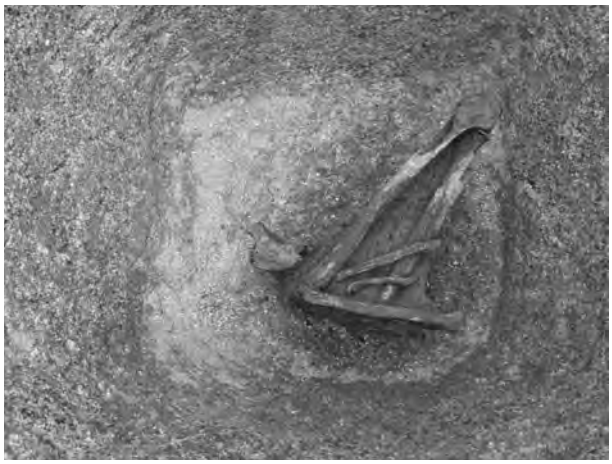
上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

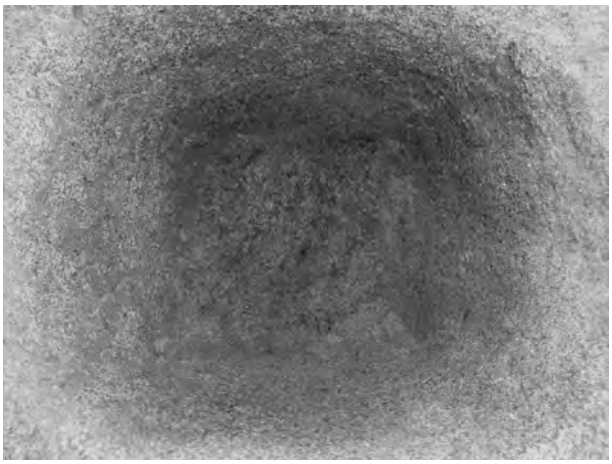
埋葬方法	土葬	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無	所見 良好に残存する人骨に被熱痕跡が認められず、座位による土葬である。
棺の形態	推定箱形木棺	所見 土壙の形状と人骨の状態による。	

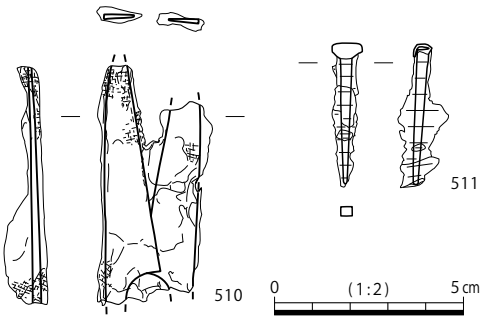
人骨	性別 女性	年齢 成人(老年)	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考 髪の毛有り
	歯	所見			

副葬品	器種 □土器 □銭貨 ☒鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名称	材質	数量	所見
	握り鋏	鉄	1	
	釘	鉄	4	短小

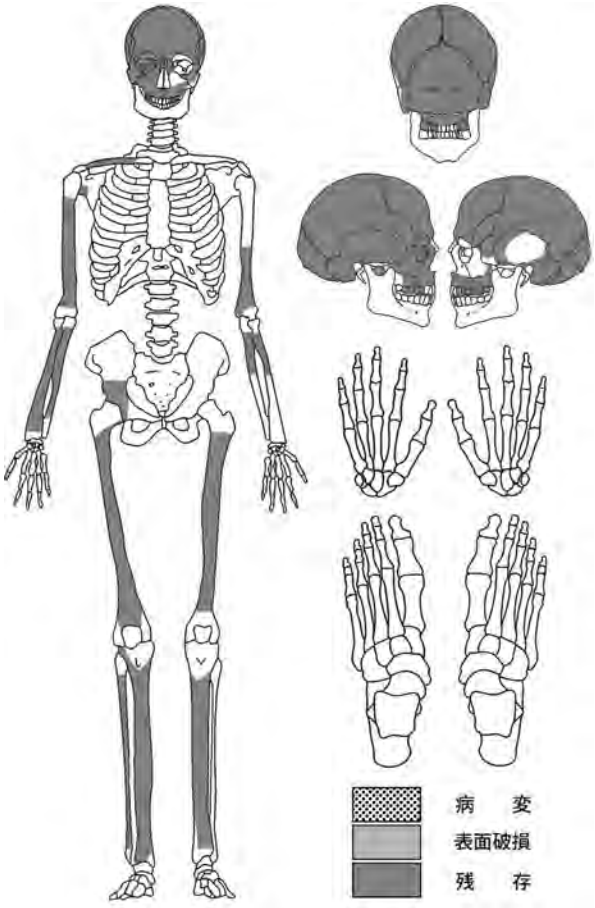
備考	近世墓の集中部から北西にやや離れて位置する。39土壙と並存していることからセット関係にあった可能性も考えられる。木棺の残存は認められなかったが、人骨の残存状態は非常に良好で胡坐座で埋葬されたことがよくわかる。






510
511
0
(1:2)
5cm

510
511


病　変
表面破損
残　存

千提寺市阪遺跡 2 区　　45 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態	検出面　方形	検出面直径・一辺	74	×	67	cm	深さ	99 cm
	底　面　方形	底面直径・一辺	60	×	50	cm	軸方向	N-50°-E

上部施設	○有 ◉無	下部施設	○有 ◉無

埋葬方法	土葬	所見	被熱痕跡が認められないことや人骨の出土状況から座位による土葬と考えられる。	棺の形態	推定箱形木棺 土壙の形状から箱形を使用した可能性が高い。
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無				

人骨	性別 女性	年齢 成人	顔面方位 W	疾病 ◉有 ○無	備考
	歯	所見	黄色靭帯骨化症		

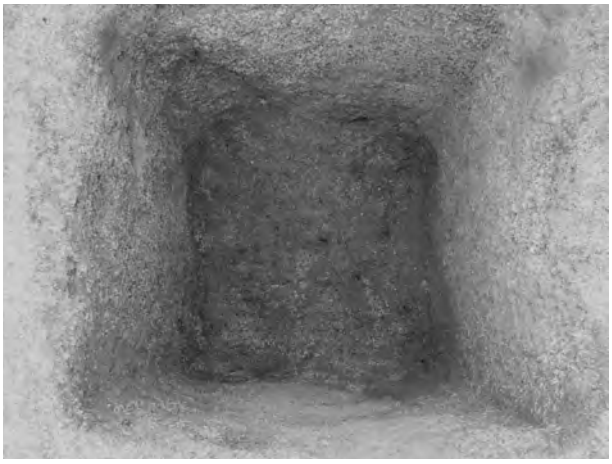
副葬品

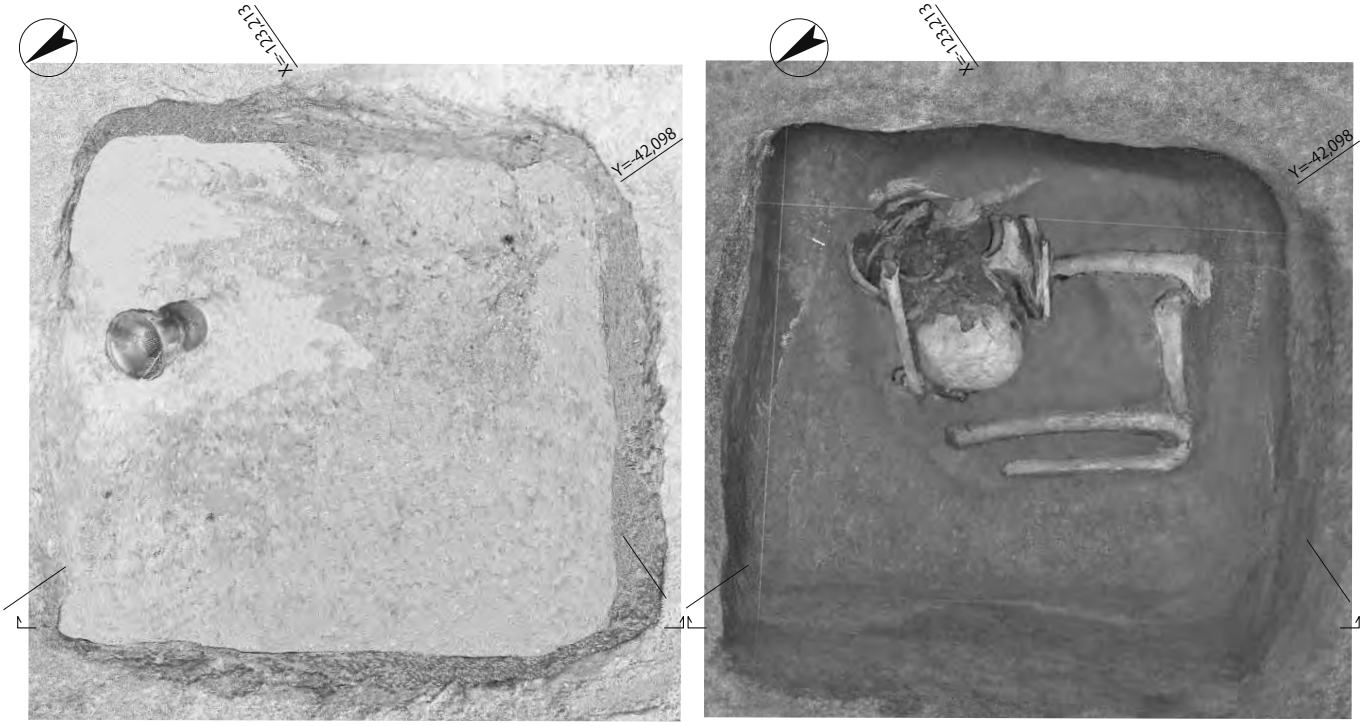
器種 ☒土器 ☒銭貨 ☒鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

名称	材質	数量	所見
耳付花入	陶器	1	古瀬戸飴釉耳付花瓶、18世紀後半か。
銭貨	銅	6	塊。寛永通寶。3期新寛永1点、不明5点。鉄銭は含まない。
握り鋏	鉄	1	
釘	鉄	30～	短小・長大

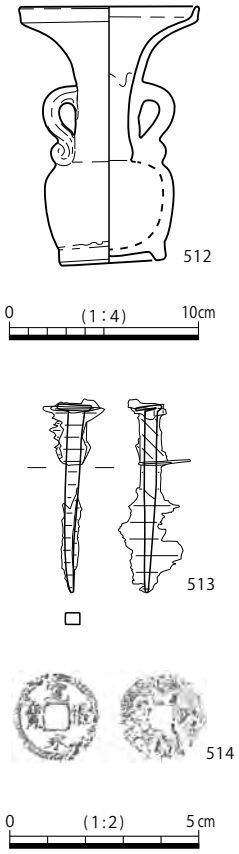
備考

近世墓集中部の北東端に位置する。人骨の出土状況と土壙の形状から、箱形木棺を使用した座位による土葬と考えられる。共伴する遺物から女性が葬られた可能性が高く、瀬戸焼花瓶から18世紀後半以降に埋葬されたものと思われる。



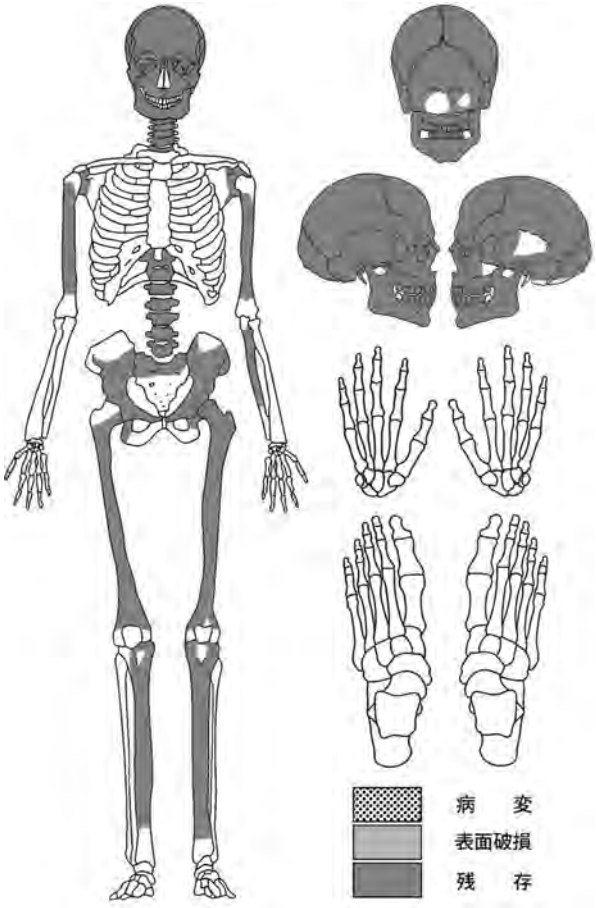


0 (1:10) 50cm


512
0
(1:4)
10cm
513
514
0
(1:2)
5cm

515

512
513
514
515


病　変
表面破損
残　存

千提寺市阪遺跡 2 区　　47 土壙 地区割 2C1a

土壙の形態	検出面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	96 × 64 cm	
	底面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	69 × 49 cm	
			深さ	17 cm	軸方向 N-30° -E
上部施設	◉有 ○無	構造・所見 石仏や石臼が散乱	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
埋葬方法	不明	所見	棺の形態	不明	
	骨 ○有 ◉無	被熱痕 ○有 ◉無	炭化物 ○有 ◉無	蔵骨器 ○有 ◉無	

副葬品　器種 ☒土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 ☒銅製品 ☒石製品 □木製品 □玉類 □釘

名称	材質	数量	所見
碗	磁器	2	染付
煙管	銅？	1	雁首
石臼	花崗岩	1	下臼、溝（目）はかなり磨耗。

備考　墓域の北端に位置し、現地表面では石仏や石臼の散乱を確認した。表土の除去後、幅約2m、長さ約3mを測る方形状の土坑を検出し、その底面において本遺構を含む3基の小土坑を検出した（47～49土壙）。いずれも深度が浅いことから、本来は方形土坑の上端から開削された可能性が高い。本遺構内から人骨や遺物の出土は認められないが、上部の方形土坑や地表面に遺物が散見できることから、周辺と同様の墓として扱うものとする。

47～49 土壙上面

47 土壙

48 土壙

千提寺市阪遺跡 2 区　　50 土壙 地区割 2C1b

土壙の形態	検出面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	84 × 76 cm	
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	58 × 46 cm	
			深さ	171 cm	軸方向 N-25° -E

上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

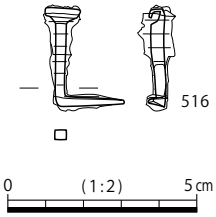
埋葬方法	土葬	骨 ◉有 ○無 被熱痕 ○有 ◉無 炭化物 ○有 ◉無 蔵骨器 ○有 ◉無	所見 座位による木棺直葬

棺の形態	推定箱形木棺	所見 土壙の形状と人骨出土状況による

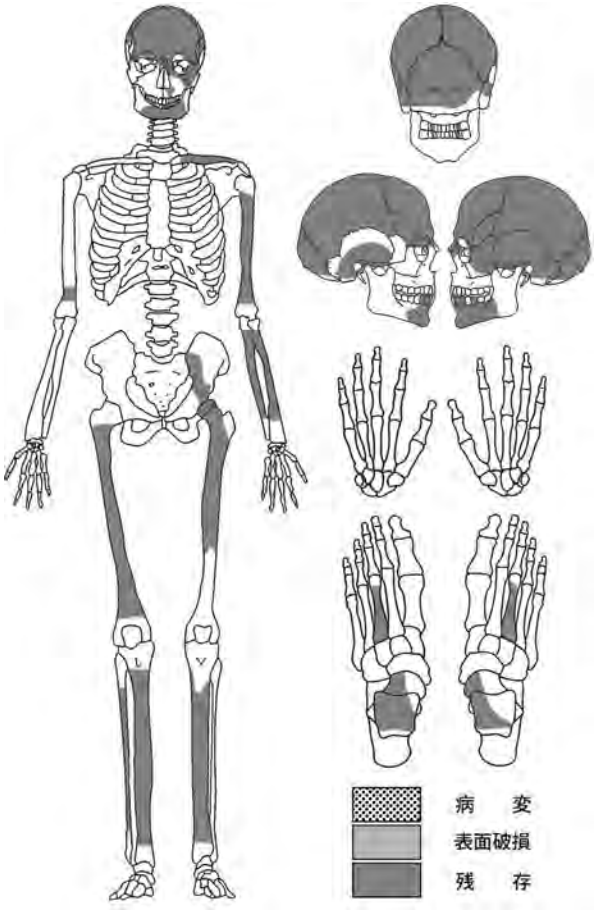
人骨	性別 女性	年齢 成人	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所見			

副葬品	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名称	材質	数量	所見
	釘	鉄	7～	短小・長大

備考	近世墓集中部の北西にやや離れて位置する。人骨と土壙の状況から箱形木棺を使用した座位による土葬と考えられるが、遺物が出土していないため時期等は不明である。


516
0
(1:2)
5cm

516


病　変
表面破損
残　存

千提寺市阪遺跡 2 区　　54 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態	検出面	不整円形	検出面直径・一辺	149	×	134	cm	深さ	219 cm
	底 面	円形	底面直径・一辺	102	×	90	cm	軸方向	N-20° -E

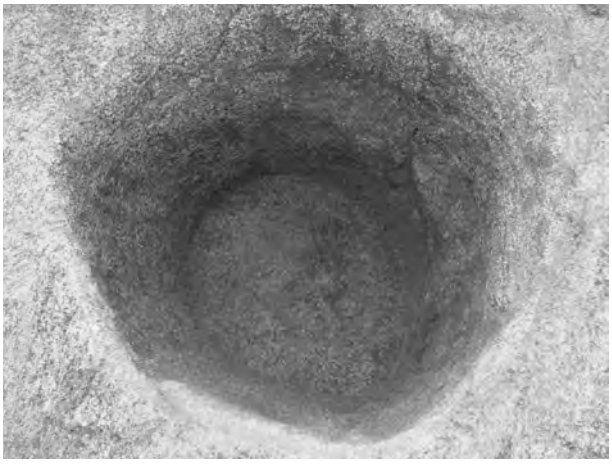
上部施設	○有 ◉無	下部施設	○有 ◉無

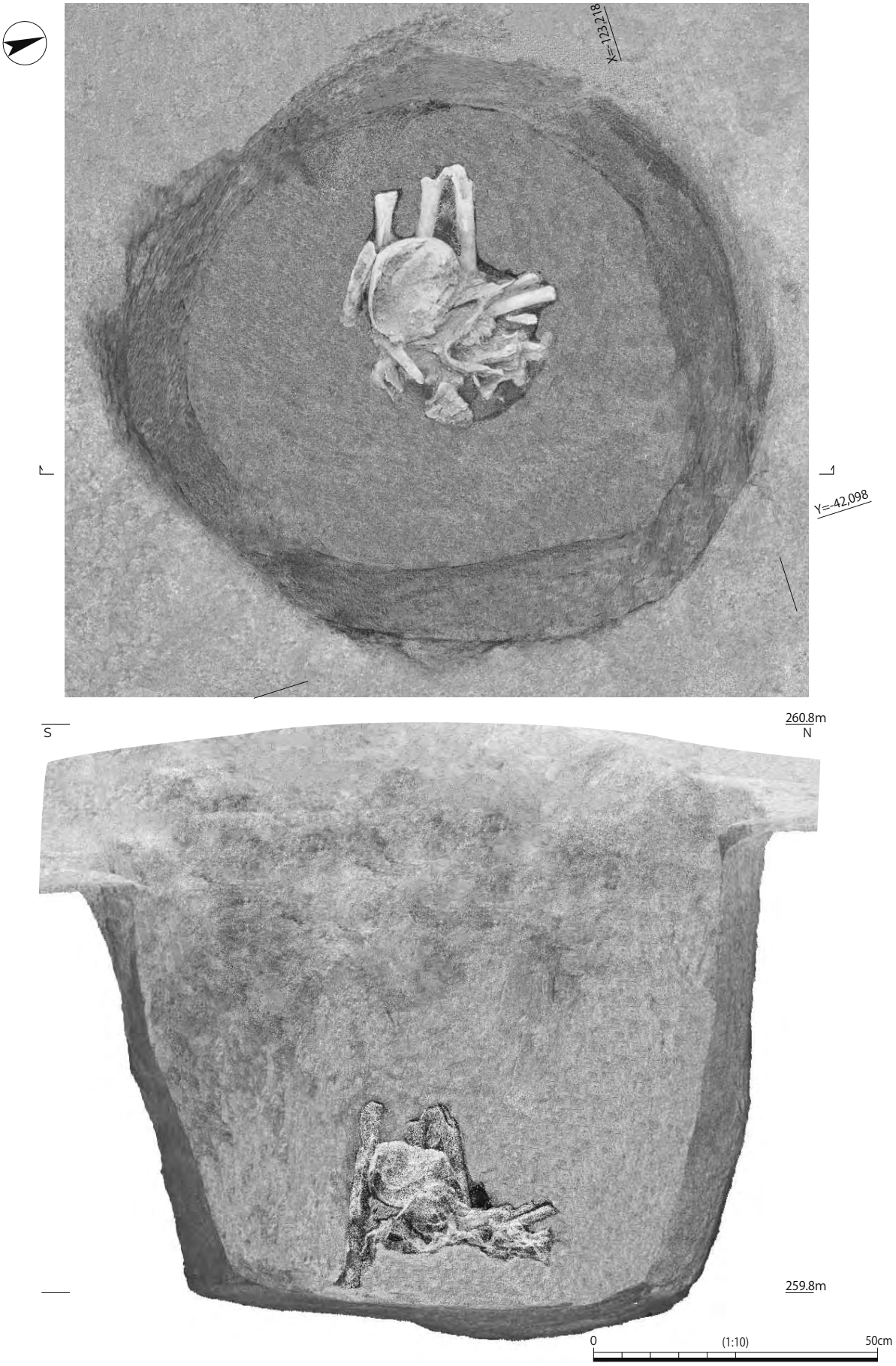
埋葬方法	土葬	所 見	人骨と遺構の出土状況から、木棺直葬と判断する	棺の形態	推定桶形木棺 土壙の形状から推測する。
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無				

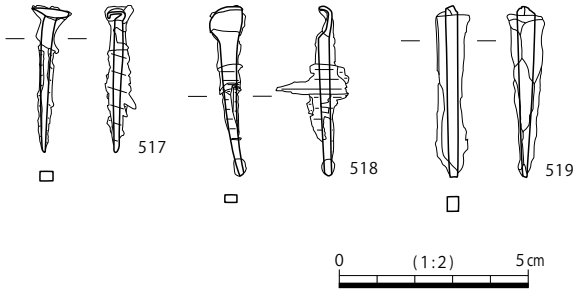
人骨	性別 男性	年齢 40～60才	顔面方位 不明	疾病 ◉有 ○無	備考
	歯	所 見	左右変形性肘関節症？		

副葬品	器 種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名 称	材 質	数 量	所 見
	釘	鉄	16～	長大・短小

備考	近世墓集中部のほぼ中央に位置する。周辺の土壙に比して一回りほど大きな掘形を持ち、桶形木棺の規模も相当のものと考えられる。出土した鉄釘が大型品が多いことも関連するものと思われる。

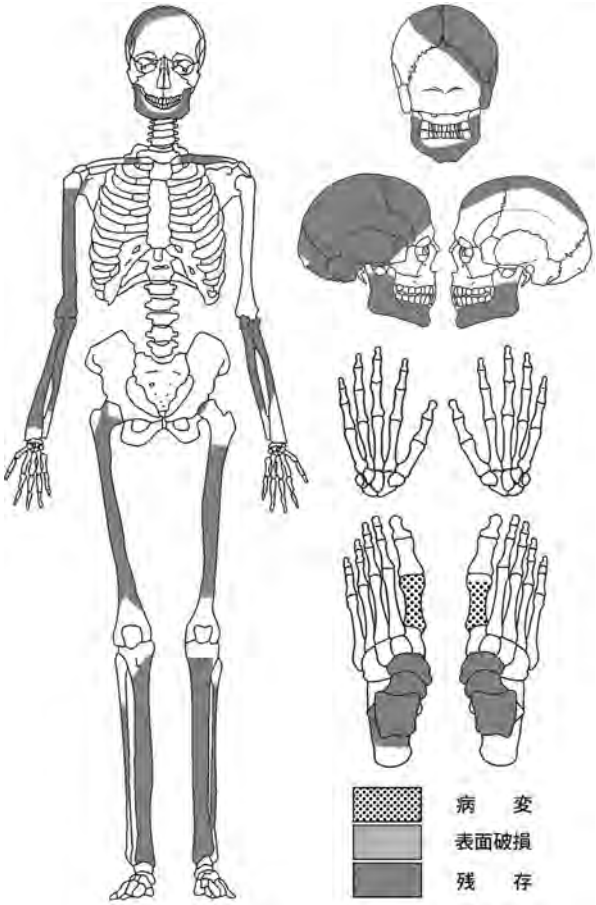



X=-173.218
Y=-42.098
S
260.8m
N
259.8m
0
(1:10)
50cm


517
518
519
0
(1:2)
5cm

517
518
519

517
518
519


病　変
表面破損
残　存

千提寺市阪遺跡 2 区　　58 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 117 × 66 cm
	底面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 106 × 54 cm
			深さ 38 cm　軸方向 N-10° -E
上部施設	◉有 ○無	構造	□配石 □自然石組 ☒自然石単体 □自然石複数 □五輪空風 □五輪水 □石仏 □石敷 □加工石組 □加工石単体 □一石五輪塔 □五輪火 □五輪地
		所見	土壙長軸上の南端に配置する。火葬骨のため正確ではないが、頭位の反対側に据えられていたと考えられる。
下部施設	◉有 ○無	構造・所見	土壙底面に炭化物層が堆積し、その中に4点の自然石がほぼ正方位に配置される。この間隙から炭化物混じりの火葬骨がみつかっており、北側の石の周辺では頭蓋骨片と、これらを覆うように東播系須恵質鉢が伏せて置かれている。
埋葬方法	◉火葬 ○推定火葬 ○土葬 ○推定土葬 ○不明		蔵骨器 ○有 ◉無
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ◉有 ○無　炭化物 ◉有 ○無		東播系須恵質鉢は蓋状に被せた状態でみつかっていることから、容器としての機能は認められないと考える。
	所見	土壙一面に炭化物層を検出し、やや高さのある西壁に被熱による赤変が認められる。人骨は砕片で白化しており、火葬による埋葬が行われている。	
棺の形態	○桶形木棺 ○長方形木棺 ○推定桶形木棺 ○推定長方形木棺 ○箱形木棺 ○その他 ○推定箱形木棺 ◉不明		所見
人骨	性別 ○男性 ○女性 ◉不明	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無　備考
	年齢 不明	歯	
	所見 火葬骨		

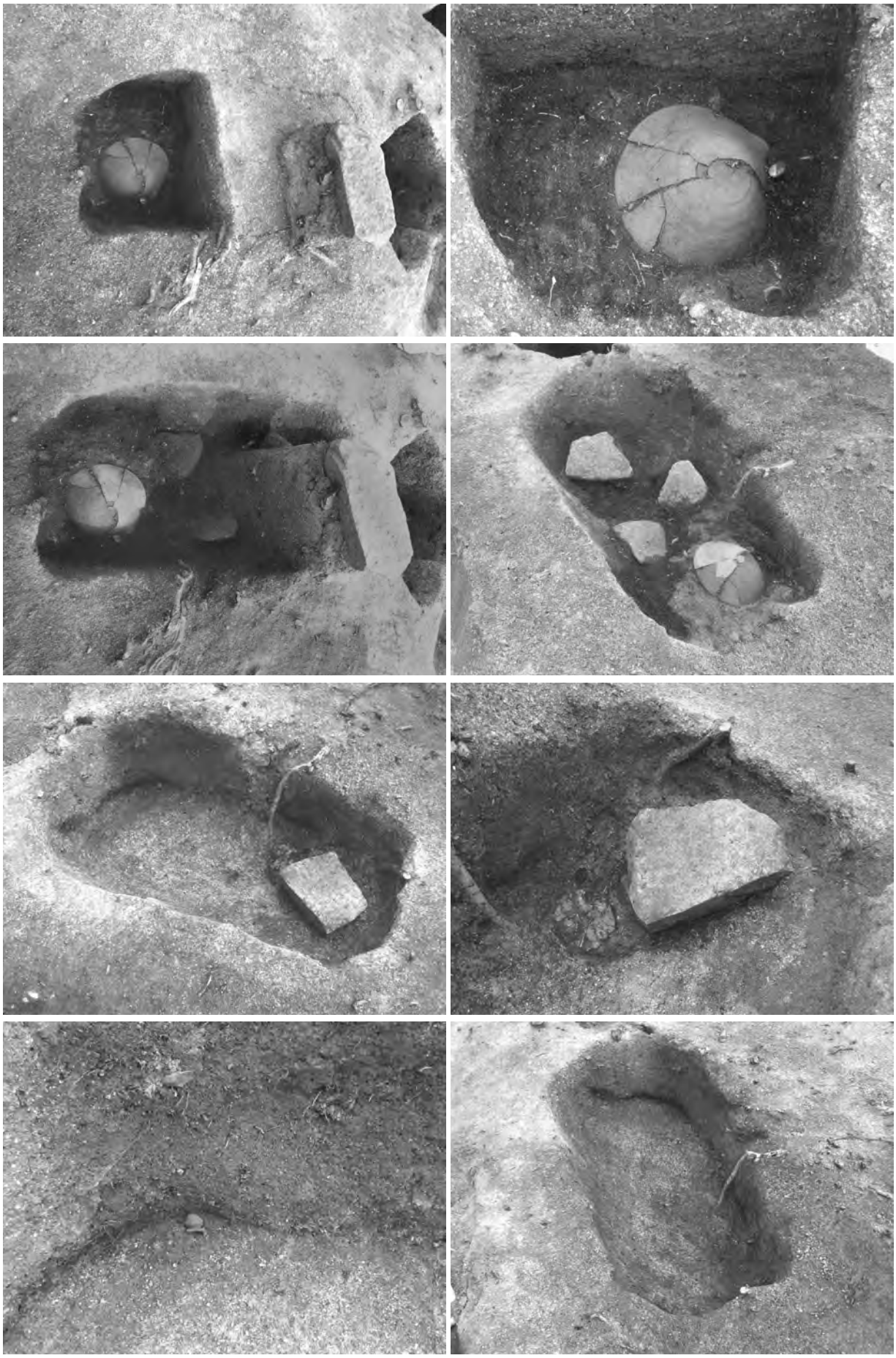
副葬品

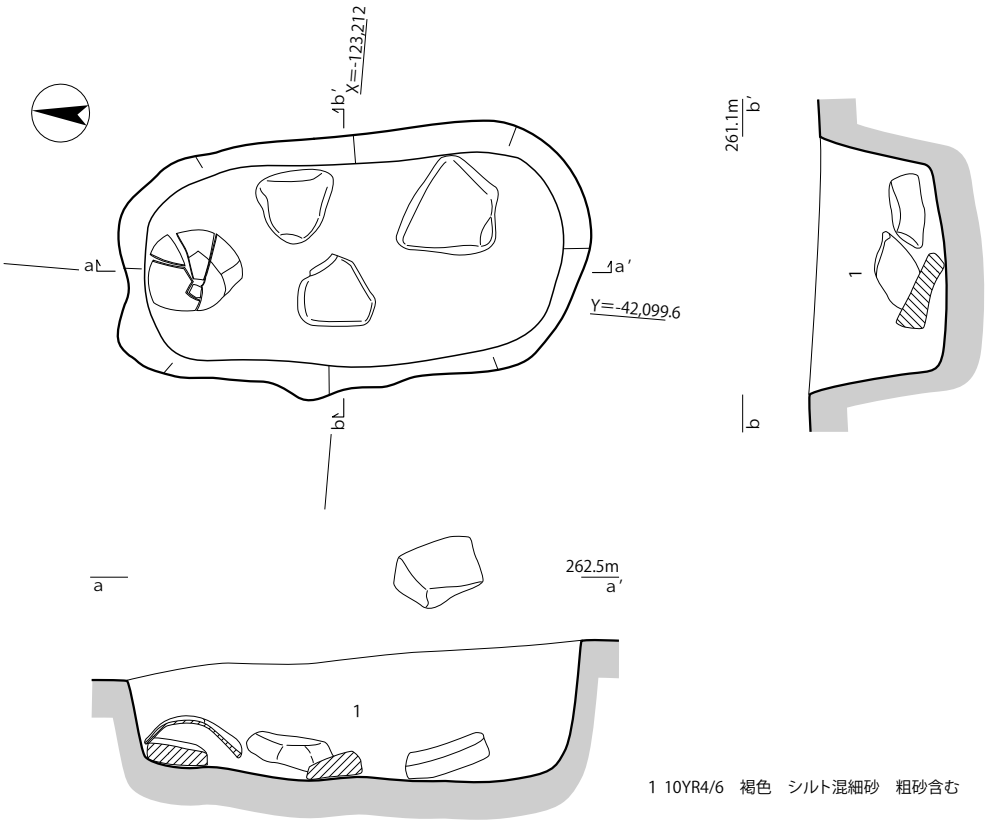
器種 ☒土器 ☒銭貨 ☒鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

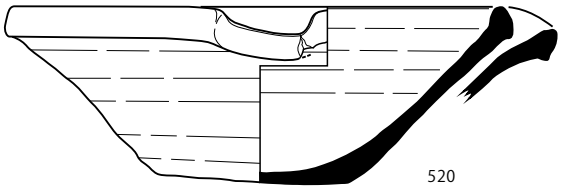
名称	材質	数量	所見
片口鉢	須恵器	1	12世紀末～13世紀前半の東幡系、完形品。
銭貨	銅？	2	錆付着のため種類は不明。
鎌	鉄	1	なかごに約110°の角度で半月状刃部が付く。
飾金具	鉄	2	宝珠形で基部に板状留具が付く。
釘	鉄	1	長大　先端が屈曲。

備考

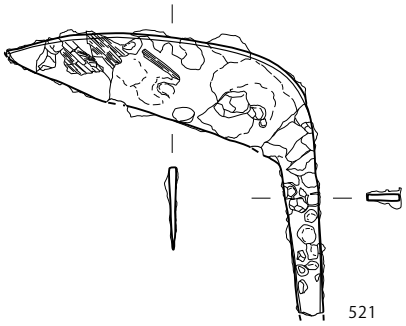
近世墓集中部の北端に位置する。東側にほぼ同規模の65土壙が平行するが、遺物が確認できないため両者の関係は不明である。検出した土壙の中で中世の遺物が認められる唯一の遺構であり、本墓域が中世から続く可能性を示唆するものである。一帯の中世墓として成立したと考える集団墓の「墓の丸」との関係に注意が必要である。

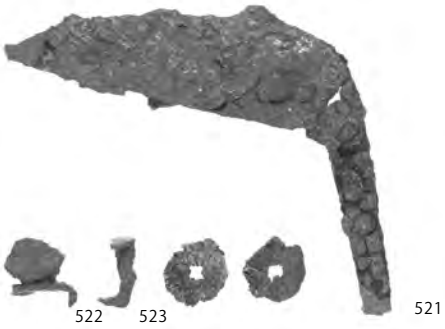


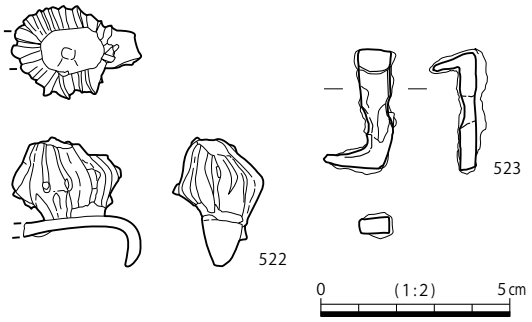

X=-123,212
b'
a
a'
Y=-42,099.6
b
261.1m
b'
1
b
a
262.5m
a'
1
1 10YR4/6 褐色 シルト混細砂 粗砂含む
0
(1:20)
1 m


520

520


521
0
(1:4)
10cm


522
523
521


523
522
0
(1:2)
5cm

千提寺市阪遺跡 2 区　　61 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態	検出面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 64 × 60 cm
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 50 × 44 cm
			深さ 156 cm　軸方向 N-80° E

上部施設	○有 ◉無	構造 □配石 □自然石組 □自然石単体 □自然石複数 □五輪空風 □五輪水 □石仏 □石敷 □加工石組 □加工石単体 □一石五輪塔 □五輪火 □五輪地
		所見
下部施設	○有 ◉無	構造・所見

埋葬方法	○火葬 ○推定火葬 ◉土葬 ○推定土葬 ○不明	蔵骨器 ○有 ◉無
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無	
	所見 人骨の出土状況から座位による木棺直葬と考えられる。	

棺の形態	○桶形木棺 ○長方形木棺 ○推定桶形木棺 ○推定長方形木棺 ○箱形木棺 ○その他 ◉推定箱形木棺 ○不明	所見 土壙の形状と人骨の状態から推測する。

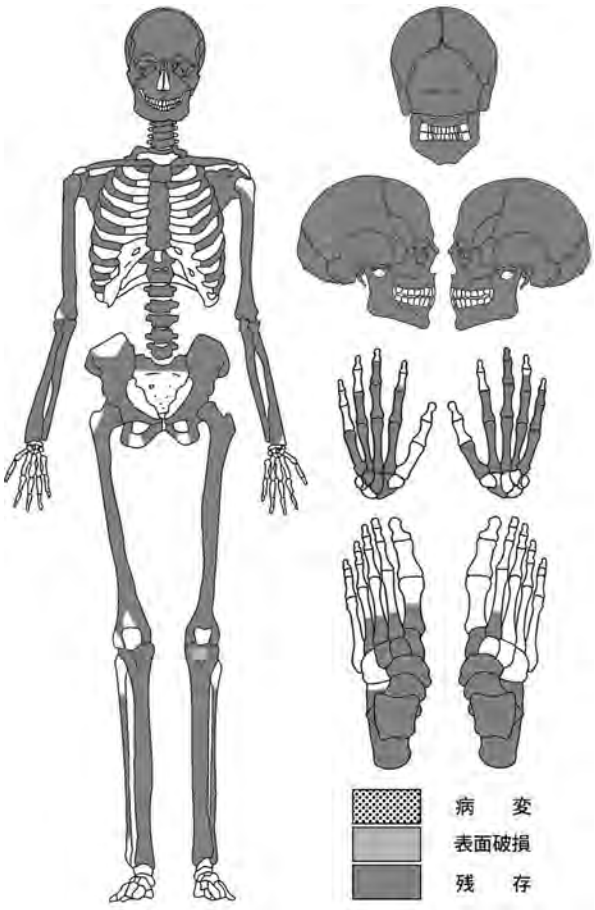
人骨	性別 ○男性 ◉女性 ○不明	顔面方位 N-50° -W	疾病 ◉有 ○無	備考 髪の毛有り
	年齢 20～40才	歯		
	所見 変形性脊椎症、黄色靭帯骨化症、圧迫骨折			

副葬品

器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

名称	材質	数量	所見
釘	鉄	7～	短小

備考	近世墓集中部の中央北寄りに位置し、55・56土壙に隣接する。83土壙と重複関係にあり、83土壙→61土壙である。遺構形状や人骨の遺存状態から推測しても、比較的新しい墓の一つと考えられる。


病　变
表面破損
残　存

千提寺市阪遺跡 2 区　　64 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態	検出面 不整円形	検出面直径・一辺	134	×	87	cm	深さ	131	cm
	底　面 円形	底面直径・一辺	68	×	63	cm	軸方向 EW		

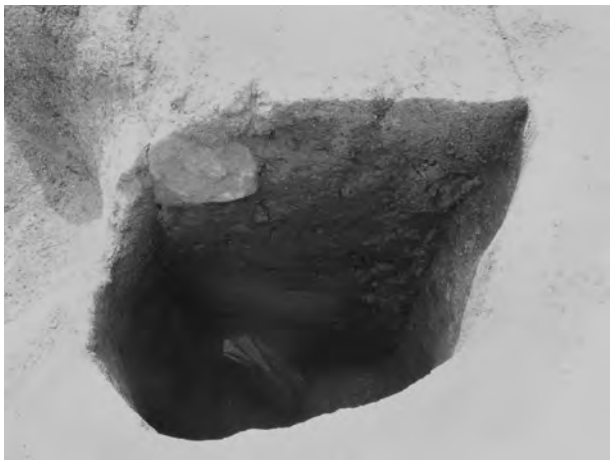
上部施設	◉有 ○無	下部施設	○有 ◉無

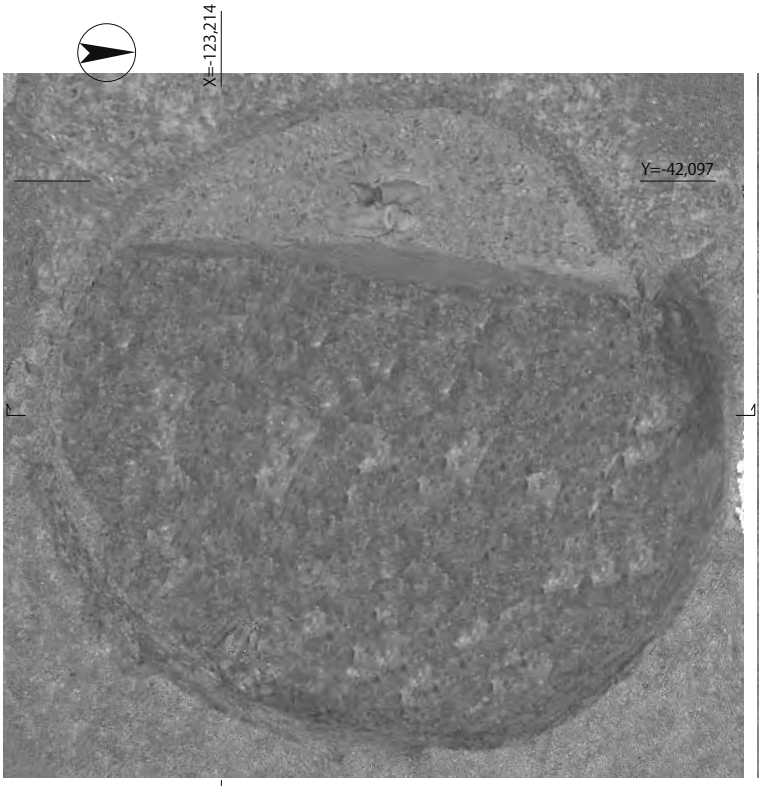
埋葬方法	土葬	所見	人骨の出土状況から座位による木棺土葬と考えられる。	棺の形態	推定桶形木棺 土壙の形状と人骨や遺物の出土状態から推測する。
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無				

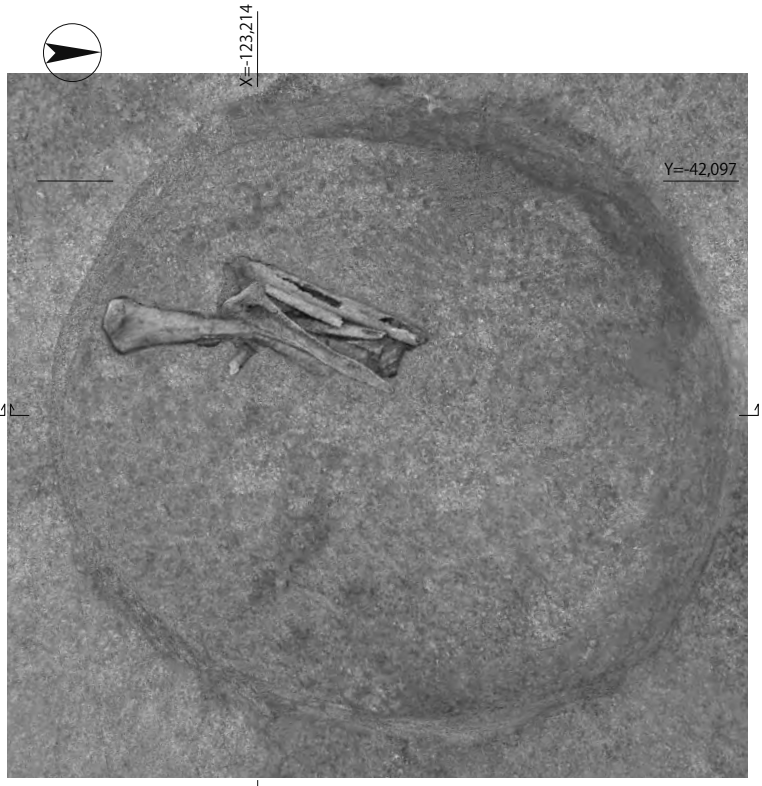
人骨	性別 不明	年齢 成人	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所見			

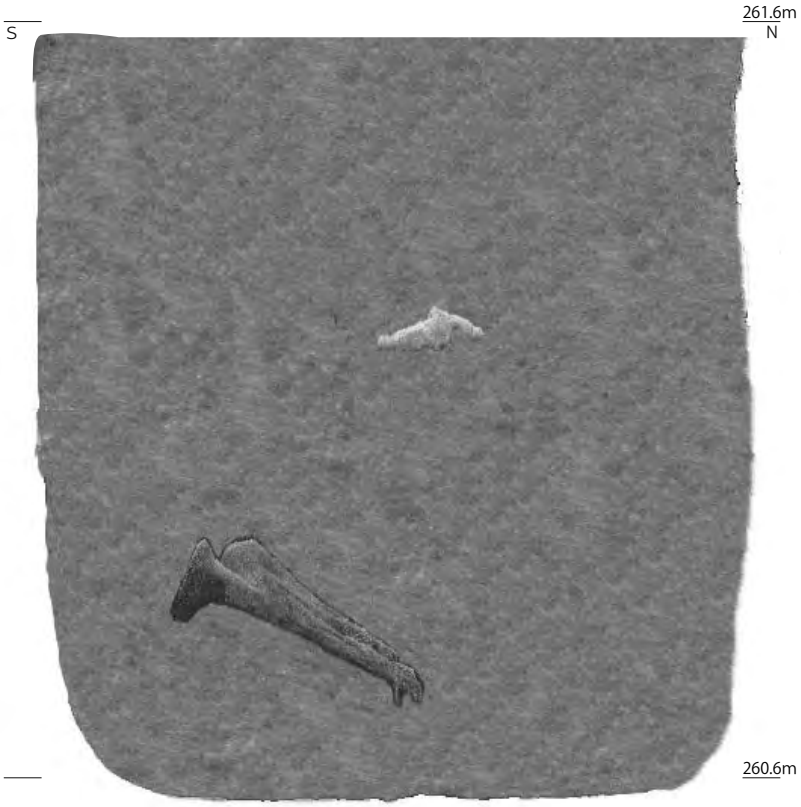
副葬品	器種 ☒土器 □銭貨 □鉄製品 ☒土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名称	材質	数量	所見
	土人形	土	5	鶏・鳩・酒飲猿・虚無尼僧・饅頭喰い、高さ5.7～8.8cm、淡い橙色の胎土で表面に剥離剤(雲母)が認められないことから18世紀以前の製作か。
	釘	鉄	25～	短小・長大

備考	近世墓集中部の北東端付近、平坦面の東側肩口に位置する。掘形の西半に掘り込みが一段あり、土壙の東肩と高さがほぼ一致することから、納棺時の足場用に掘削されたものと推測する。土人形は一括で埋土中位から出土しており、棺上あるいは埋め戻し土内に埋納されたと考えられる。胎土や形態から伏見人形と思われ、副葬品としての使用例は全国的にも少なく、今回の調査では千提寺西遺跡5区の例と合わせ4例のみである。

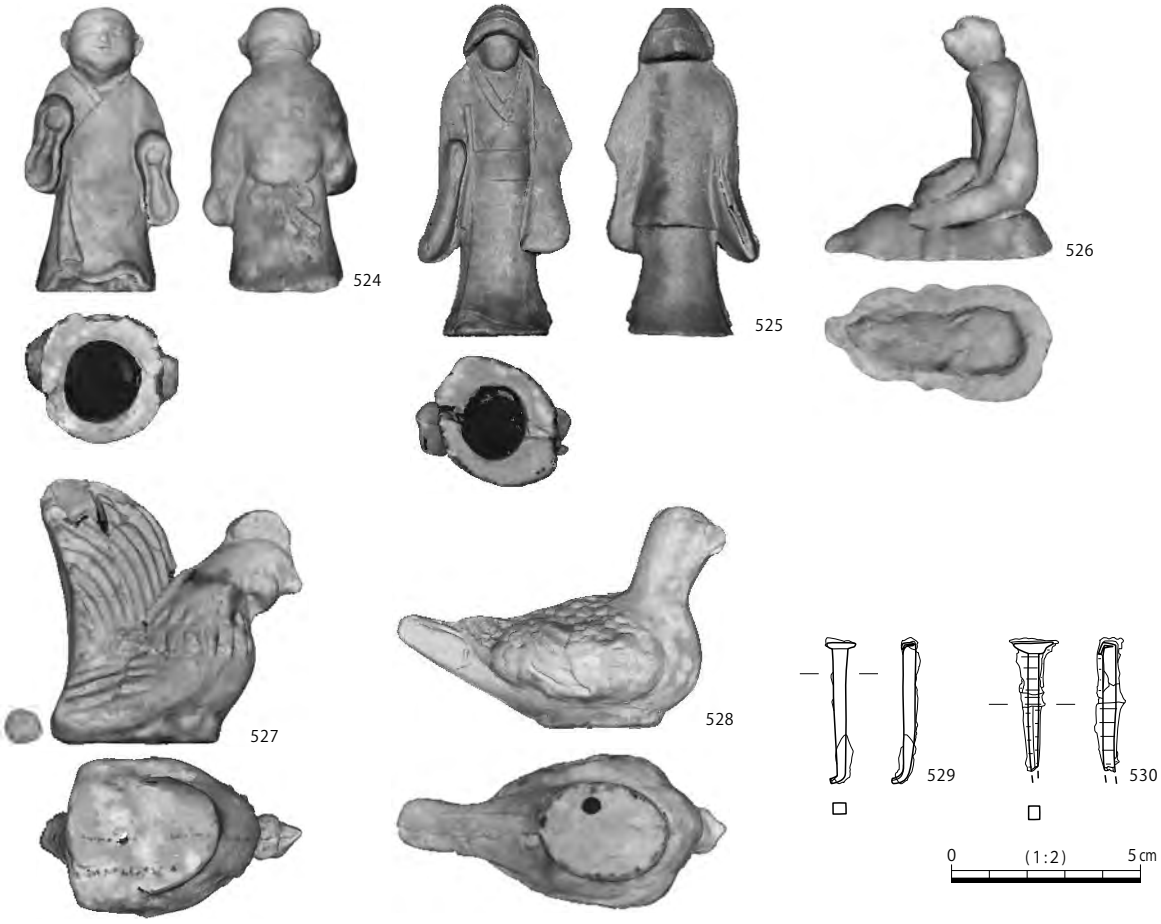








0 (1:10) 50cm


524
525
526
527
528
529
530
0
(1:2)
5cm

524
525
526
524
525
526
527
528
527
528

529
530

千提寺市阪遺跡 2 区　　66 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態	検出面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 92 × 80 cm
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 76 × 66 cm
			深さ 93 cm　軸方向 N-20° -E

上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	◉有 ○無	構造・所見
		所見			

埋葬方法	土葬	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無	所見 人骨の出土状況から、座位の木棺直葬と推測する。
棺の形態	推定箱形木棺	所見 土壙の形状から推定する。	

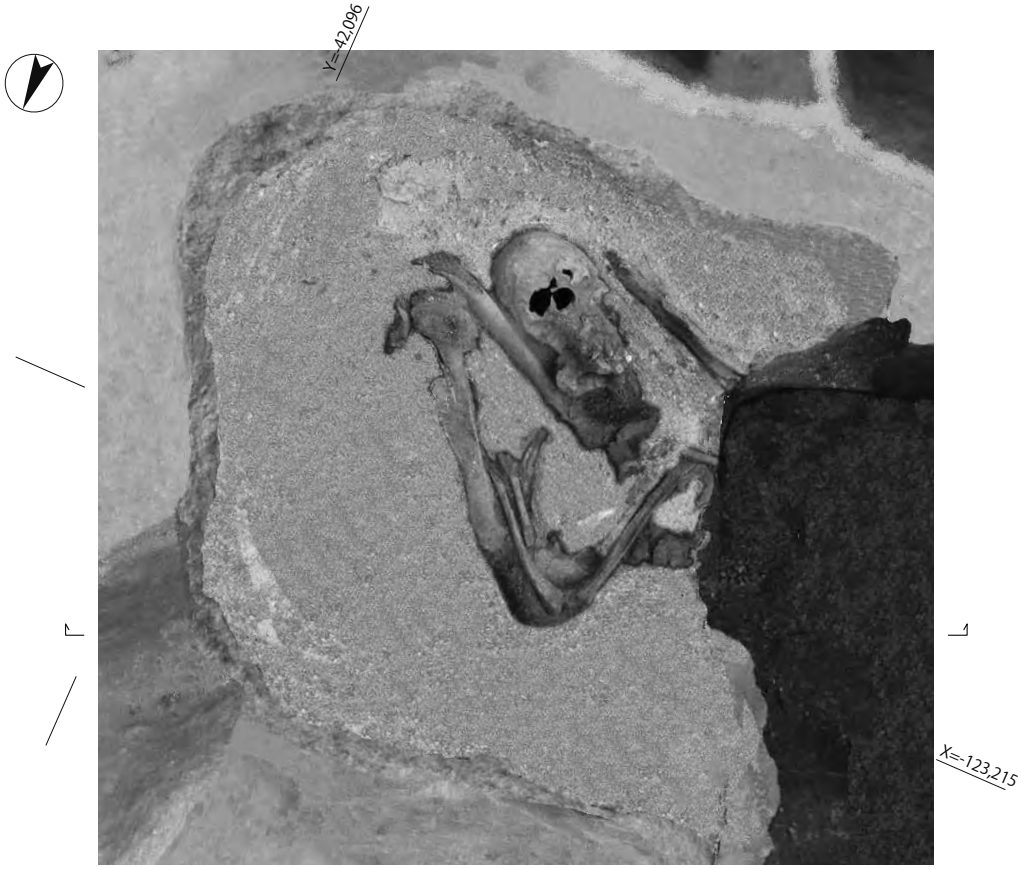
人骨	性別 女性	年齢 20～40才	顔面方位 不明	疾病 ◉有 ○無	備考 身長の推定可
	歯	所見 左大腿骨骨膜 66－1、66－2の2体あり。66－1が本体。66－2は一部のみ(写真2の下にある大腿骨と上腕骨？)。			

副葬品　器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 ☒木製品 ☒玉類 ☒釘

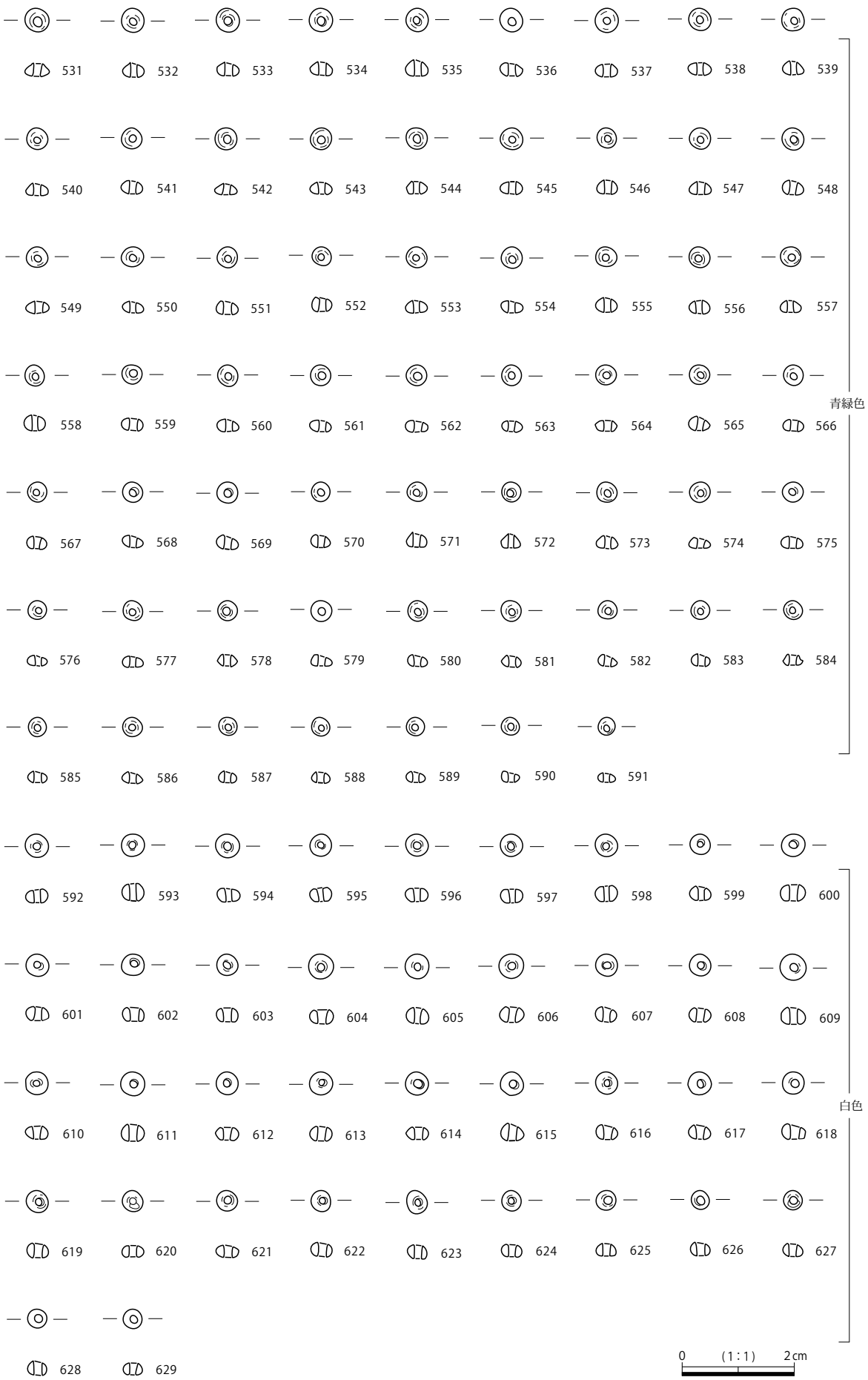
名称	材質	数量	所見
棺材	木・鉄	25	腐朽した後の痕跡のみ。棺材の端に鉄板が付く。
ガラス小玉	ガラス	99	青緑色61点・無色38点、平均:直径3.67㎜、高さ2.27㎜、内孔1.10㎜、重量0.054g。
釘	鉄	3～	短小

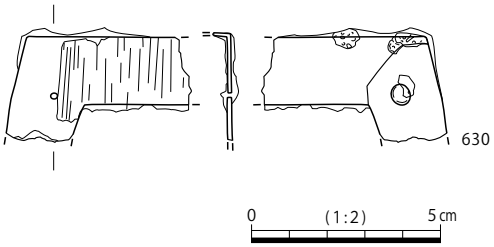
備考

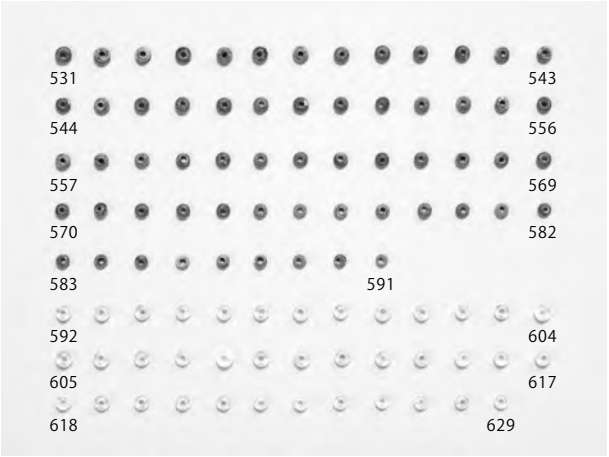
近世墓集中部の北東端、平坦面の東側肩口付近に位置する。重複関係から、北東側の67土壙と西側の56土壙の間に築かれたことが明らかである。また、56土壙との重複状態に酷似する90土壙や68土壙が南側に並列しており、意識的に配置された可能性が高いと考える。本遺跡では2例目となるガラス小玉が出土しており、点数は99点と最多になる。17土壙に比べて概して小さいが、形状は非常に似ている。しかし、成分は異なるとの結果を得た(第4章第4節参照)。なお、66土壙の底面から一回り小さな円形の95土壙を検出した。95土壙が埋没後、本遺構が掘削されたことは明らかである。95土壙出土のガラス小玉2点は、本土壙のガラス玉が混入した可能性がある。



0 (1:10) 50cm

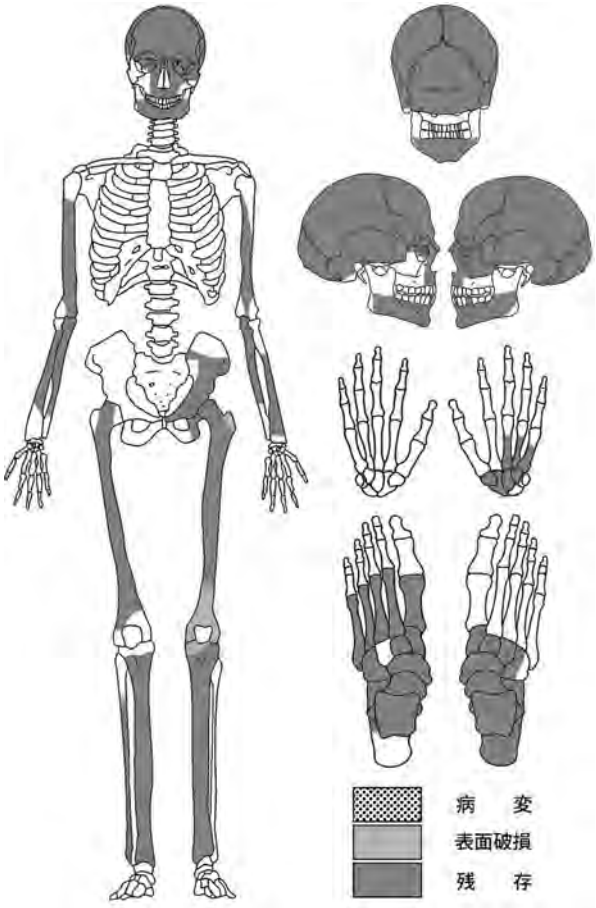

531 532 533 534 535 536 537 538 539
540 541 542 543 544 545 546 547 548
549 550 551 552 553 554 555 556 557
558 559 560 561 562 563 564 565 566
青緑色
567 568 569 570 571 572 573 574 575
576 577 578 579 580 581 582 583 584
585 586 587 588 589 590 591
592 593 594 595 596 597 598 599 600
601 602 603 604 605 606 607 608 609
610 611 612 613 614 615 616 617 618
白色
619 620 621 622 623 624 625 626 627
628 629
0 (1:1) 2cm


630
0
(1:2)
5cm


531
543
544
556
557
569
570
582
583
591
592
604
605
617
618
629

630

630


病　変
表面破損
残　存

千提寺市阪遺跡 2 区　　72 土壙 地区割 1C10d

土壙の形態	検出面 長方形	検出面直径・一辺	126	×	76 cm	深さ	26 cm
	底 面 長方形	底面直径・一辺	63	×	59 cm	軸方向	N-20° -E

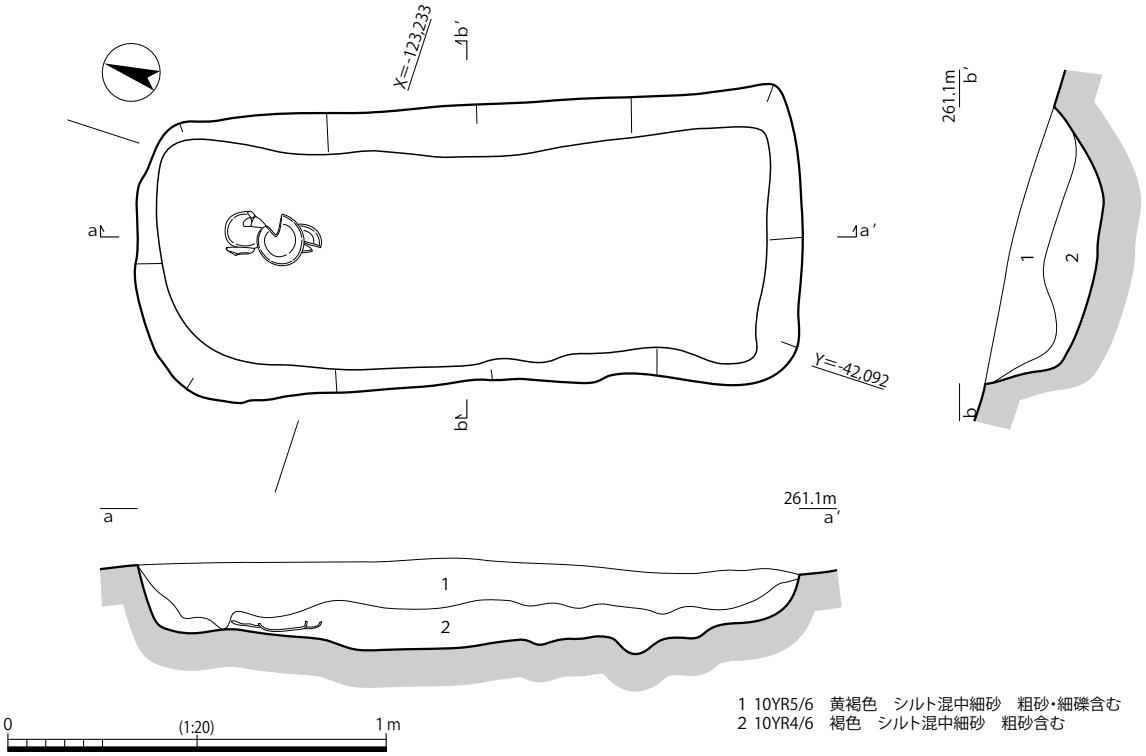
上部施設	○有 ◉無	下部施設	○有 ◉無

埋葬方法	推定土葬	所 見	
	骨 ○有 ◉無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無		
棺の形態	推定長方形木棺		

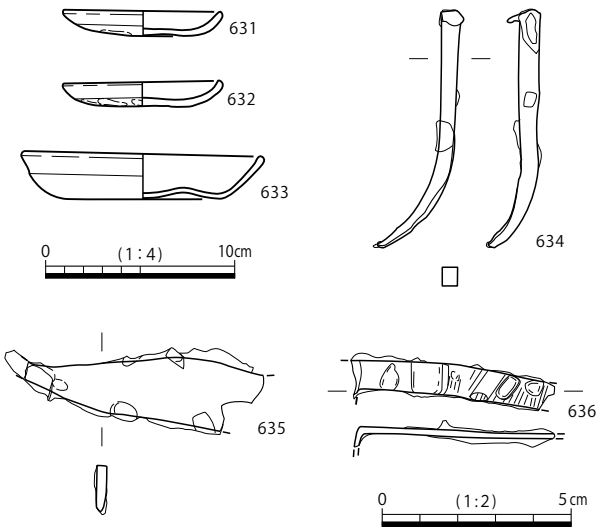
人骨	性別	年齢	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所 見 出土なし			

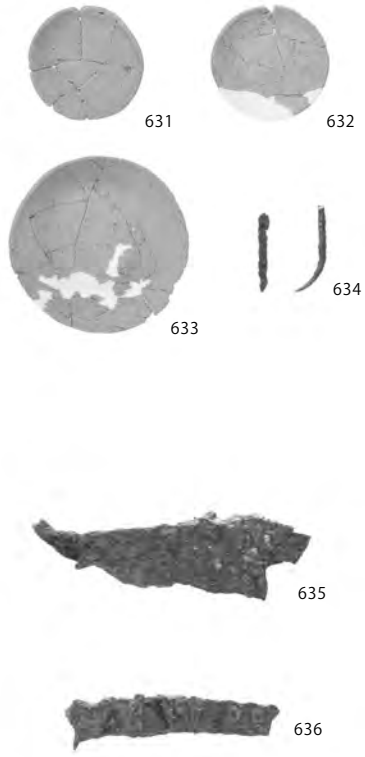
副葬品	器 種 ☒土器 □銭貨 ☒鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名 称	材 質	数 量	所 見
	皿	土師器	3	淡褐色、16世紀か。
	不明	鉄	3	
	釘	鉄	4～	長大

備考	近世墓集中部より南南東へ10mほど離れた、尾根上平坦面の東肩に位置する。土壙は長軸がほぼ尾根の稜線に平行する長方形を呈し、遺構底面は緩く窪んだ平坦に整形される。人骨は確認できないが、鉄釘がみつかったことから木棺を使用した埋葬施設と考えられる。棺内と思われる北端付近から土師器皿が3点重なった状態で出土しており、埋葬に伴う副葬品と推測する。土壙の形態や遺物の時期からキリシタン墓の可能性が高いと考えるが、土器の副葬例は他に無いため向後の調査に期待する。



1 10YR5/6　黄褐色　シルト混中細砂　粗砂・細礫含む
2 10YR4/6　褐色　シルト混中細砂　粗砂含む





千提寺市阪遺跡 2 区　　85 土壙 地区割 1C10c

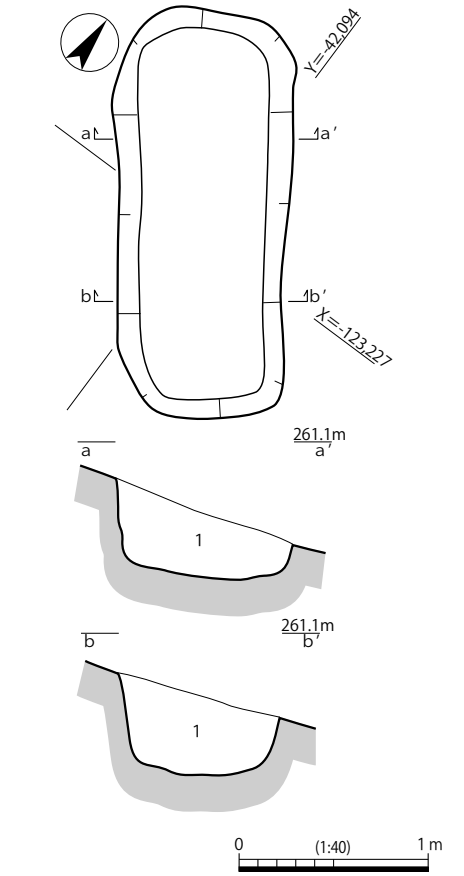
土壙の形態	検出面 長方形	検出面直径・一辺	215	×	95	cm	深さ	56 cm
	底 面 長方形	底面直径・一辺	195	×	67	cm	軸方向	N−40° −E
上部施設	○有 ◉無						下部施設	○有 ◉無

埋葬方法	推定土葬	所 見	人骨が一切出土していないため詳細は不明であるが、土壙の長さが身丈以上であることから土葬と推測する。
	骨 ○有 ◉無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無		
棺の形態	不明 遺構底面があまり平坦ではなく、深度も浅く釘等も出土していないため箱状の棺の設置は考えにくい。関東のキリシタン墓にみられる布巻きの可能性も考えられる。		

人骨	性別 不明	年齢 不明	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所 見	出土なし		

副葬品	器 種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 □釘			
	名 称	材 質	数 量	所 見

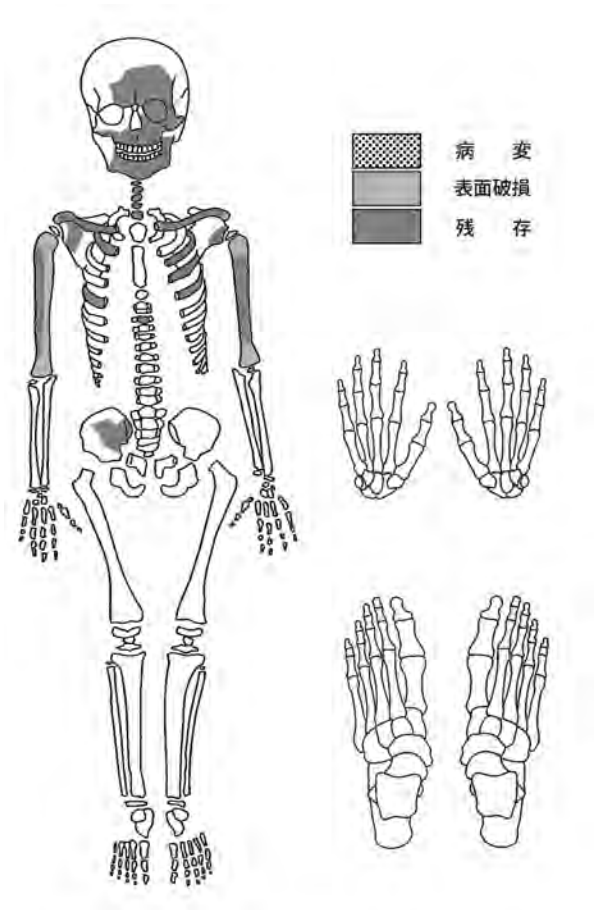
備考	近世墓集中部から南東に約12m離れた、尾根上の平坦面から東にやや下った緩斜面に位置する。遺構の長軸を尾根筋に平行させており、南に位置する72土壙とはわずかに異なる。遺物の出土がみられないため詳細は不明であるが、規模や形状が類似することからキリシタン墓の可能性が高いと考える。

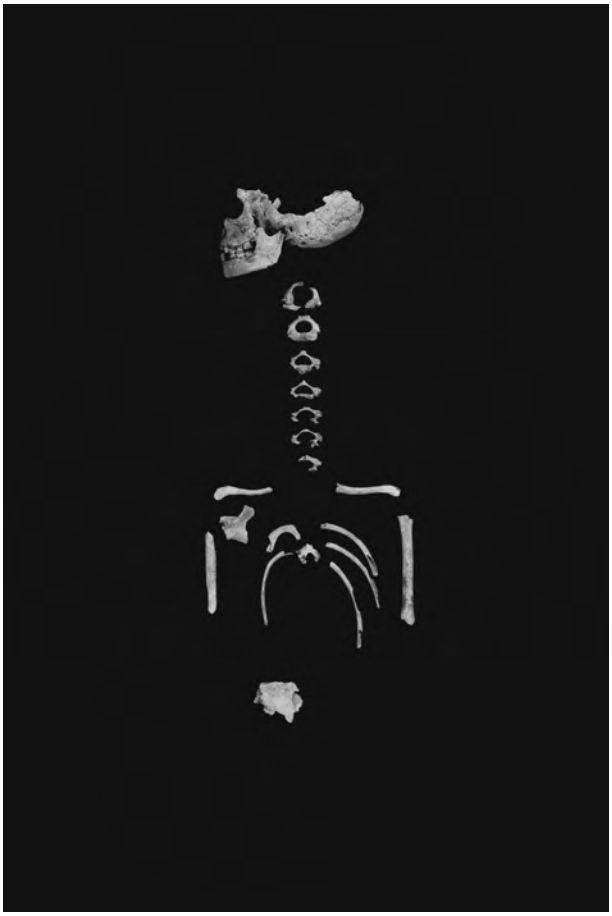


1 10YR4/6　褐色　シルト混中粗砂　細砂含む　細礫僅かに含む

千提寺市阪遺跡 2 区　　86 土壙 地区割 1C10b,2C1

土壙の形態	検出面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 102 × 63 cm
	底面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 93 × 44 cm
			深さ 62 cm　軸方向 N-30° -E
上部施設	○有 ◉無	構造 □配石 □自然石組 □自然石単体 □自然石複数 □五輪空風 □五輪水 □石仏 □石敷 □加工石組 □加工石単体 □一石五輪塔 □五輪火 □五輪地	
		所見	
下部施設	○有 ◉無	構造・所見	
埋葬方法	○火葬 ○推定火葬 ◉土葬 ○推定土葬 ○不明		蔵骨器 ○有 ◉無
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無		
	所見 座位と推測するが、頭蓋骨が両下肢の上に乗っているようにも見えるため、両足を揃えていたか横臥の可能性も考えられる。		
棺の形態	○桶形木棺 ○長方形木棺 ○推定桶形木棺 ○推定長方形木棺 ○箱形木棺 ○その他 ○推定箱形木棺 ◉不明	所見	
人骨	性別 ○男性 ○女性 ◉不明	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無　備考
	年齢 少年	歯	
	所見 脊椎や大腿骨が華奢なことから、子供と推測される。		
副葬品	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 □釘		
	名称	材質	数量	所見
備考	近世墓集中部の中央やや南西寄りに位置する。南西側の17土壙と重複しており、周辺の墓の中では最も早い段階に築かれた可能性が高い。土壙の平面形が北西南東にやや長くみえるが、遺構底面の形状や1体分の人骨が南東に偏って出土したことから、2基の墓が連なっているものを誤認した可能性がある。		


病　変
表面破損
残　存



千提寺市阪遺跡 2 区　　90 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態			
検出面　方形	検出面直径・一辺　75 × 60 cm	深さ　113 cm
底　面　方形	底面直径・一辺　69 × 31 cm	軸方向　N-10°-E

上部施設	○有 ◉無	下部施設	○有 ◉無

埋葬方法			所見	棺の形態
土葬	骨 ◉有 ○無	被熱痕 ○有 ◉無	炭化物 ○有 ◉無	蔵骨器 ○有 ◉無
			人骨の出土状況から、座位による土葬と考えられる。	推定箱形木棺 出土した人骨の状態や、掘形との間隙が少ないことから、箱形木棺による埋葬の可能性が高い。

人骨					
性別　不明	年齢　成人	顔面方位　W	疾病　○有 ○無	備考	
歯	所見				

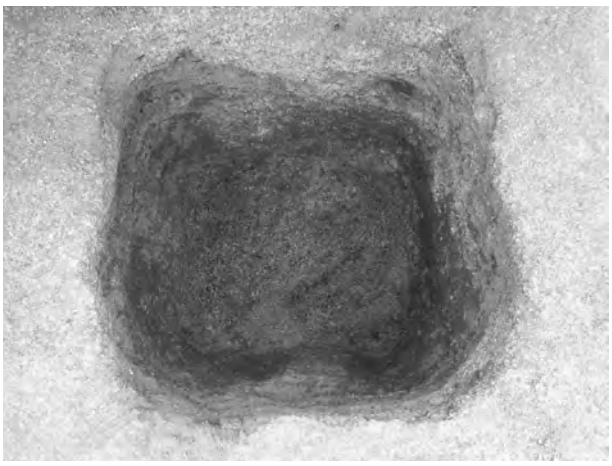
副葬品

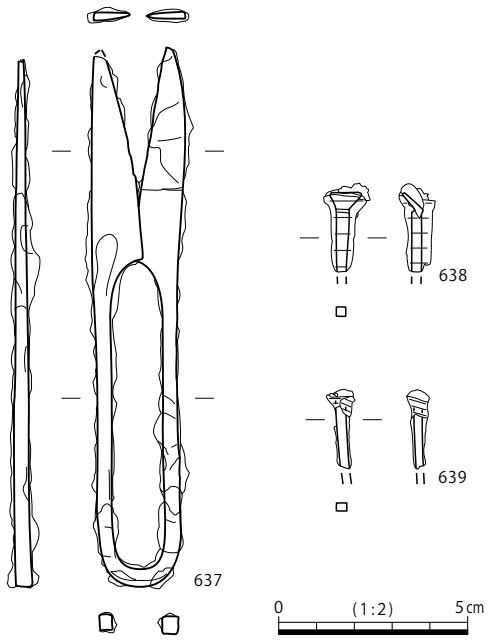
器種　☐土器　☐銭貨　☒鉄製品　☐土製品　☐銅製品　☐石製品　☒木製品　☐玉類　☒釘

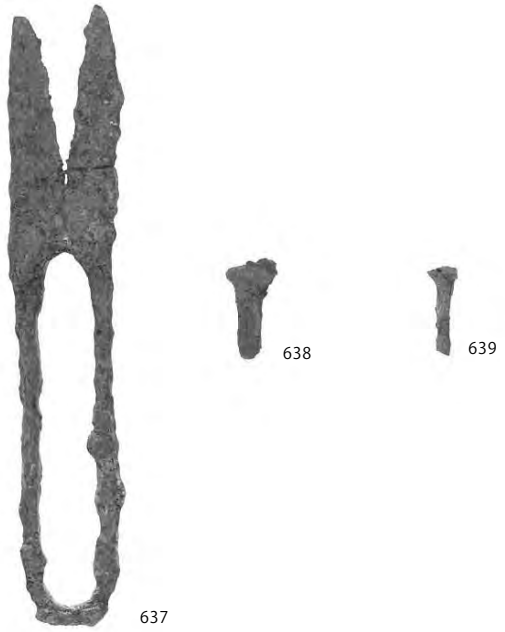
名称	材質	数量	所見
握り鋏	鉄	1	
棺材？	木		孔ありか。腐朽著しい。
釘	鉄	5～	短小

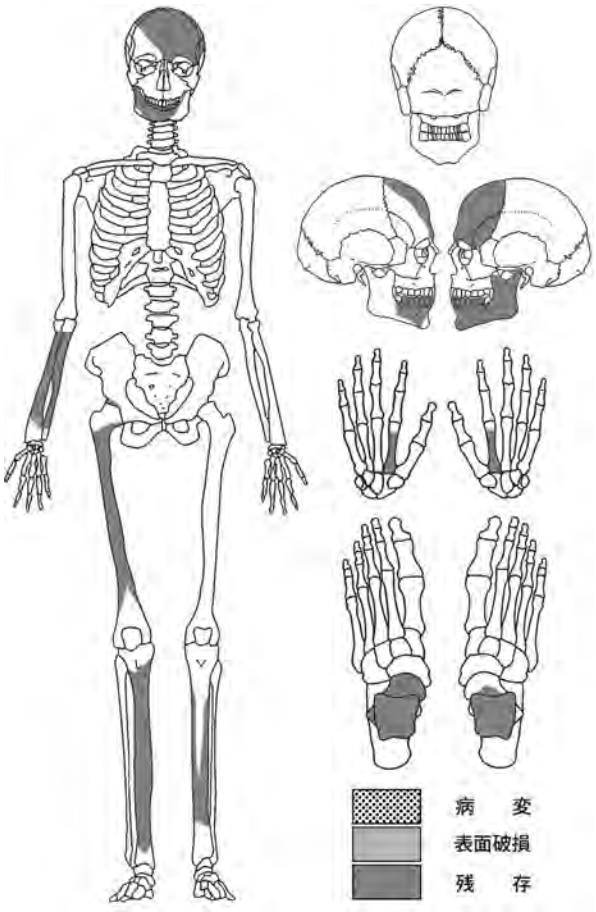
備考

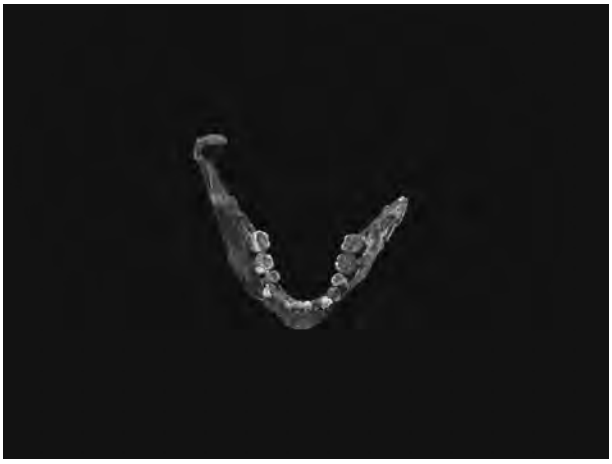
近世墓集中部の東端、平坦面の東側肩口付近に位置する。62土壙の東側に重複しており、本遺構が先行して築かれたことは明らかである。土壙の西側三分の一がかく乱されているようにみえるが、それぞれの土壙底面の高低差があるため埋葬部は破壊されていない。意識的に重複して築かれた可能性が高く、隣接する56・66土壙、63・68土壙も同様の概念で構築されたものと思われる。握り鋏を副葬する。時期は不明であるが、先述のグループ内では先に亡くなられたことは間違いなく、墓域全体の中ではやや斜面地の不便な立地であることから後出する墓と推測する。




637
638
639
0
(1:2)
5cm


637
638
639


病　変
表面破損
残　存



千提寺市阪遺跡 2 区　　95 土壙 地区割 1C10b

土壙の形態	検出面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	96 × 85 cm	
	底面	□方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 ☒不整形	底面直径・一辺	70 × 29 cm	
			深さ	(66)+31 cm	軸方向 N-20° -E

上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見 上部に66土壙が位置するため不明			

埋葬方法	土葬	骨 ◉有 ○無	被熱痕 ○有 ◉無	炭化物 ○有 ◉無	蔵骨器 ○有 ◉無
	所見	人骨の状態から座位による土葬と推測する。			

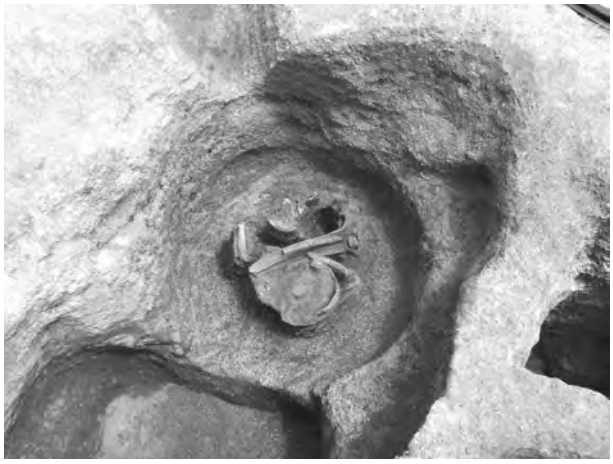
棺の形態	推定桶形木棺	所見 土壙の形状から推測する。

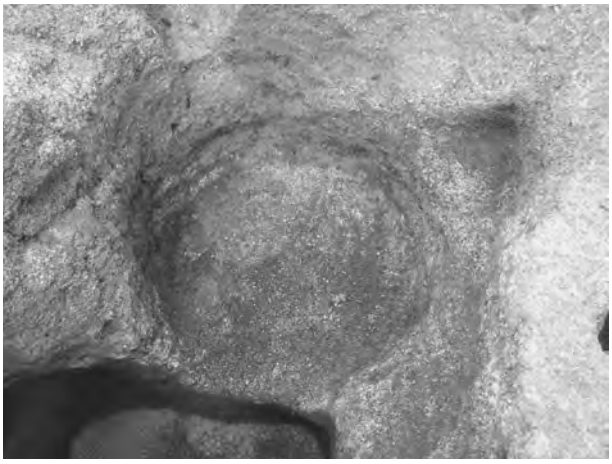
人骨	性別 男性	年齢 40～60才	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所見			

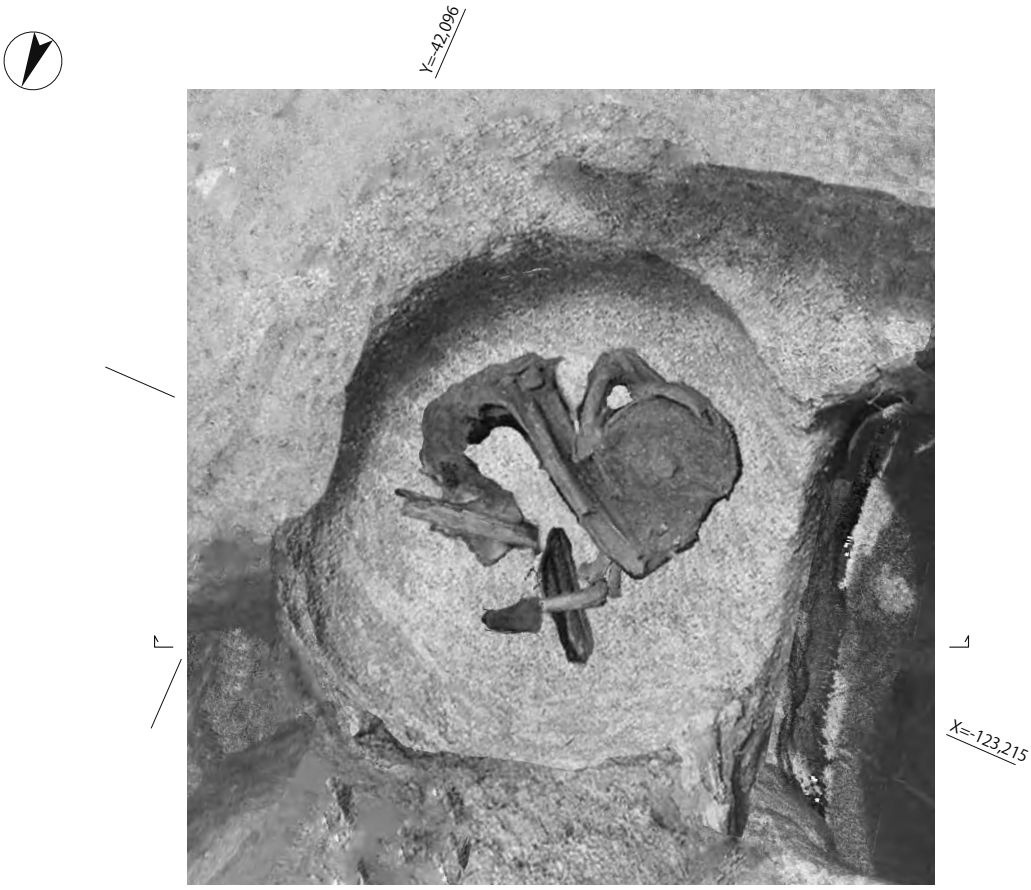
副葬品	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 ☒玉類 □釘			
	名称	材質	数量	所見
	ガラス小玉	ガラス	2	青緑色。成分分析により66土壙出土ガラス玉と化学組成の特徴が類似（第4章第4節参照）。

備考

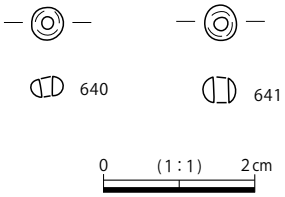
近世墓集中部の東に位置する。66土壙の完掘後、その底面に円形の掘形を検出し、先行する土壙の存在が明らかとなった。66土壙と本遺構の底面との比高差はわずか16～22cmを測り、早桶の高さもないことから、66土壙構築時にはすでに腐朽して陥没していたものと考えられる。おそらく95土壙の人骨が露頭したために掘削を止めたものであろう。人骨の崩落や木棺の腐朽の状況から、両者の時間差は最低でも50年はあったと考えられる。なお、出土したガラス玉2点は66土壙から混入した可能性が高い。



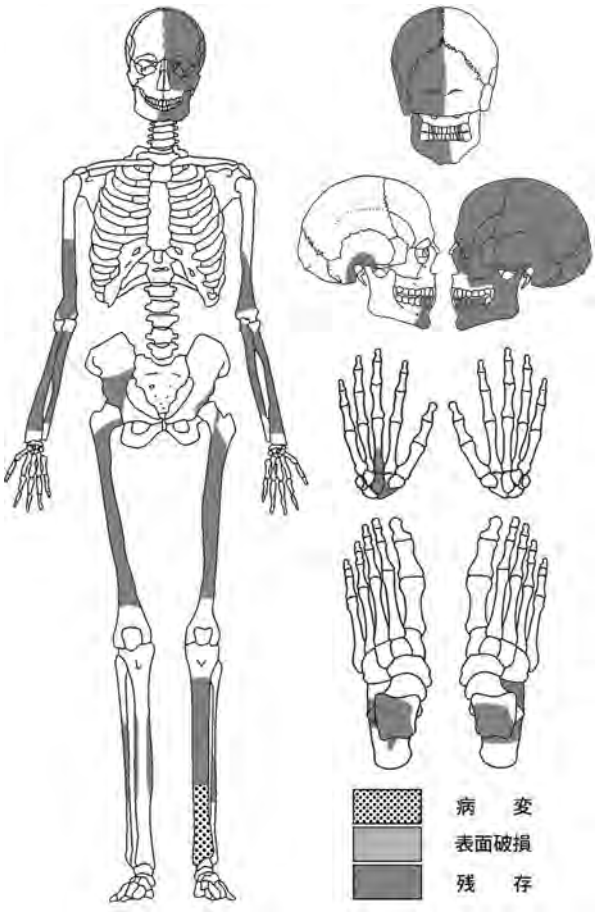




0 (1:10) 50cm


640
641
0
(1:1)
2cm

640
641


病　変
表面破損
残　存

b．その他の遺構

道路状遺構　調査区の北西端、X=-123,195、Y=-42,121 付近では、尾根筋に平行する切通し状の道路状遺構を確認した（図 54）。この周辺には矢穴の残る花崗岩製石材が散乱しており、人為の及んだことは明らかである。調査区の全域において、尾根上に至る道が確認できないことから、この切通しが本来の道の一部を示す可能性を否定できない。これより北側は道路予定地外のため調査対象となっておらず、また東西両側の斜面は非常に急峻で里道の存在は確認できないため、詳細は不明である。墓地まで遺骸を運搬するためには適当な道が必要であったはずであり、当該墓地の性格を知る上で重要な手掛りとなるであろう。

土坑・小穴群　調査区の南端に近い X=-123,244、Y=-42,093 付近において、複数の土坑とその周囲に並ぶ小穴群を検出した（図 54）。

２土坑は直径約 90 ㎝、深さ約 48 ㎝を測る円形を呈し、12 土坑は一辺約 60 ㎝、深さ約 14 ㎝を測る隅丸方形状を呈する（図 58・59）。８土坑は最大径約 1.10 m、深さ約 0.40 mを測る平面不定形の遺構であり、埋土の状態から風倒木痕である蓋然性が高いと判断する（図 58･59･写真図版 39 －２）。

ピットは上記の土坑の周囲において計９基を検出しており、全体的には円形に配されているようにみえる（図 58・59）。埋土や深度に差異が認められないため区分の根拠は薄弱であるが、３と９、４と５のそれぞれに軸を平行する小穴の組み合わせが認められることから、１× １間程度の小規模な建物を建替えた跡であった蓋然性が高いと考える。これらの遺構の周辺では墓と推測する 21・59 土壙がわずかに散見されるものの、遺構内に人骨や副葬品は確認できず、墓域が形成されたとまでは判断しにくい。むしろ、確実に断定できる墓のいずれからも距離がおかれ、また、ほとんどの墓が尾根筋より東側にみられるのに対し、西側の一段下った小さな平坦地に築かれている点が特徴的にみえる。当該期の墓

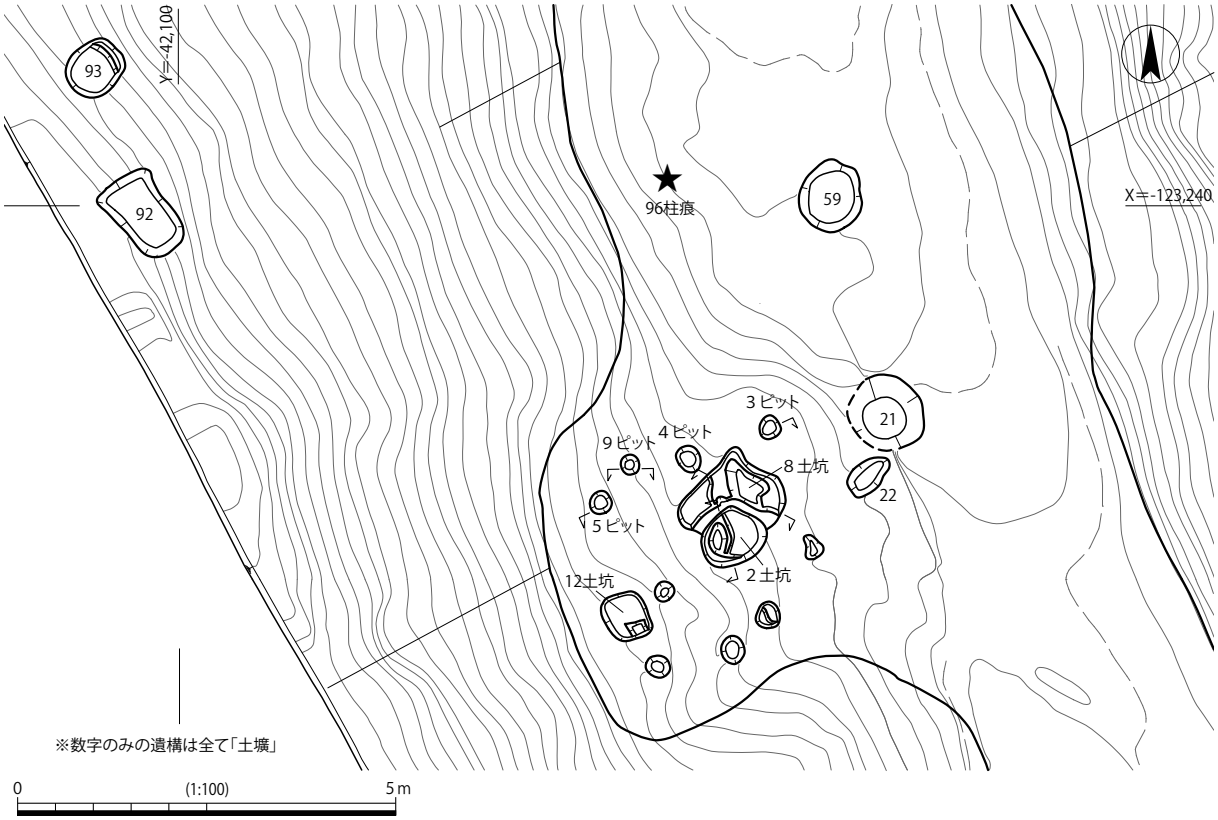


図 58　千提寺市阪遺跡２区　土坑・小穴群　平面図

域で全体像が明らかな調査例は少なく、類似する遺構は明らかではない。わずか２基ではあるが、長方形木棺の伸展葬とみられる 72・85 土壙がキリシタン墓と考えた場合、パードレ・ヴァリニアーノとパシオの『服務規程』第 19 章に示されたとおり（ロペス・ガイ　1983)、墓域内に築かれた礼拝施設であった可能性が考えられる。これらの小穴群には木質遺物がまったく残存していなかったが、これより北側の X=-123,239.5、Y=-42,093.5 付近において、柱痕１基（96 柱痕）を検出した（図 58 の★印)。直径約 20 ㎝の小穴に、一辺約４～５㎝の角材の周りに均質な砂混じり粘土が充填されて埋まっていた（写真図版 39 － 4)。当初、砂混じり粘土は角柱を立てた際の裏込め材と考えたが、地面との親密性よりも角材への接着が強い点や、付着する土が周辺の遺構ではみられない均質で土器の胎土のようなものであることから、予め角柱に塗られていた蓋然性が高いと考える。また、検出時の角柱上面が切断されたように平滑に整っていたことや、念入りに周囲を調査したものの類似する小穴が確認できなかったことから、本遺構は単独で設置されたと判断する。

このような墓に伴わない単独の柱痕として管見できる例はないものの、キリシタン墓地として捉えられるならば、十字架を設置した跡の可能性が考えられる。先述の小穴群を礼拝施設、本遺構を大十字架と仮定すれば、これらを一式として本格的なキリシタン墓地の建設を試みたものの、禁教令等の外因によって存続することが不可能となり、破壊してしまったものではないかとも推論できる。残念ながら証左のまったく無い推測の域を出ないものであるため、向後の調査例に期待する。

〈参考文献〉

ロペス・ガイ　井手勝美訳 1983『キリシタン時代の典礼』キリシタン文化研究会

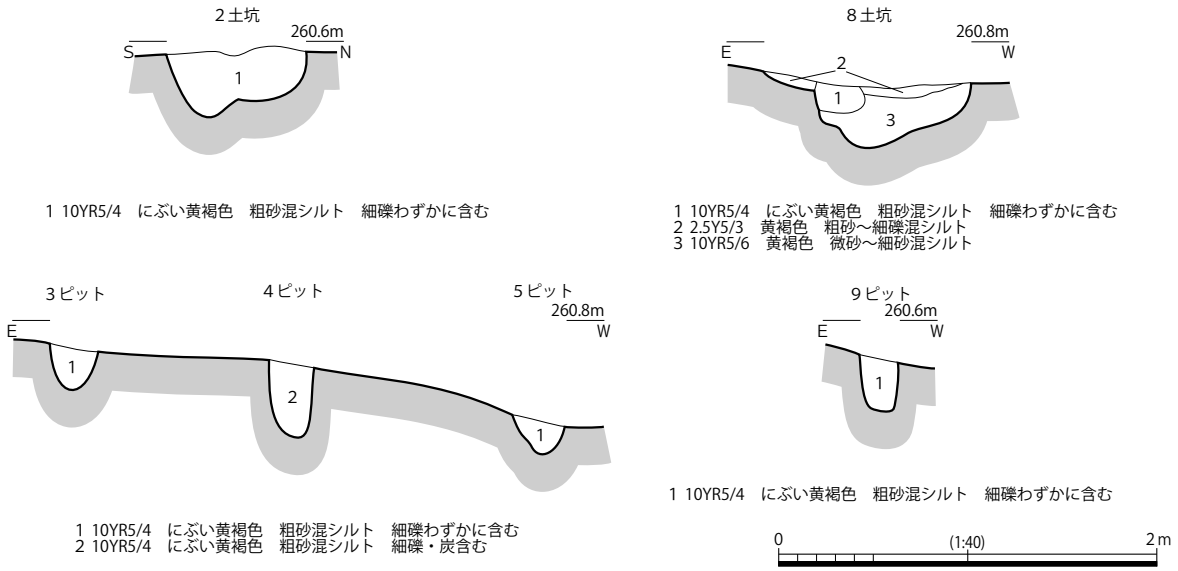


図 59　千提寺市阪遺跡２区　遺構断面図

（５）千提寺クルス山遺跡１区

千提寺クルス山遺跡の調査区は、北西から南東にのびる尾根の頂部と、その西側の斜面及びその裾の平坦部からなる。発掘調査で生じた残土の回送の都合上、丘陵頂部と斜面上部と、丘陵西側斜面の残りの部分及びそれに連なる平坦部とに調査区を分割し、前者を１区、後者を２区とした。地形の差を反映して、調査区ごとに土地利用の経緯に明確な差が認められた。１区は主に墓域として利用されたのに対し、２区の平坦部分は主に耕作地や作業場として利用されていた。ここでは１区の調査成果をもとに、クルス山で検出された墓域の成立と、その形成過程をまとめたい。

ａ．墓域

１区で検出した墓は、可能性のあるものも含めると 37 基である。それ以外に土坑、道路状遺構、ピット、火葬場の可能性のある土坑を検出した（図 60）。また、墓域内には墓道に類する通り道があったと考えられる。盛土や側溝など、道に付随して造られた施設は認められなかったが、丘陵頂部の土壙集中部において、38・30・20 土壙と５～２土壙の間や、18・17 土壙と 14・15 土壙の間にみられるように、50 ㎝前後の幅で帯状に遺構を検出しない空閑地があった。この空閑地が墓道として機能していた可能性はあろう。

墓の配置にはその粗密により、いくつかのまとまりが認められる。丘陵西側の緩傾斜部分には、北側に 33 ～ 35・39 ～ 44 土壙の墓群と南側に 27・29 土壙の墓群が認められるが、それらは地形的にみても独立性が高い一群である。丘陵頂部に位置する墓群は、14・18 土壙と、12・20 土壙との間に遺構のない部分があることから、これを境にして南北に墓群を区別できる可能性がある。この丘陵は、調査区の北側と南側にも延長していることから、長さ 12 ～ 13 ｍの範囲で形成された墓群が、丘陵頂部全体にわたって間隔を置きながら、いくつか連なっていた可能性もある。なおこれらの墓群と離れて位置する 24・25 土坑に関しては、遺物が出土しなかったこともあり、その時期や機能を明らかにすることができなかった。

24 土坑と 25 土坑が重複している、丘陵東側斜面の落ち際に沿うように設けられた切通し状の道路状遺構は、最も残りの良いところで２ｍ以上の深さがある大規模なものである。ただこの遺構は北に向かって徐々に浅くなり、25 土坑より４ｍほど北のところで途切れている。丘陵尾根の形状をみると、36 土壙と 37 土壙より北に数ｍのところに位置する高まりを境に、それより北にいくにつれて徐々に尾根筋の標高が低くなり、25 土坑より北の部分にいたると尾根筋があいまいになってしまう。

調査区の北側に目を転じると、東西方向にはしる現在の道を介して丘陵頂部に平坦地が形成されている。その平坦地から１区北寄りの部分を見下ろすと、最も比高差のある部分で数ｍの段差が生じている。以上のことからこの部分が、大規模な地形改変を受けたことは明らかである。特に１区北寄りの部分は大きく削平され、それにより、もとは北に向かってのびていた切通し状の道路状遺構が、調査区内で途切れた状態になった可能性を類推できる。そうであれば、24・25 土坑も大半が削平され、今回の調査ではその底部をかろうじて検出したのかもしれない。このように考えると、土壙を検出しなかった丘陵頂部の北半においても、もともとは何らかの遺構があった可能性は否定できない。

墓の全容は表６のとおりである。うち遺構や遺物の出土が顕著である 16 基について、個別に報告する。

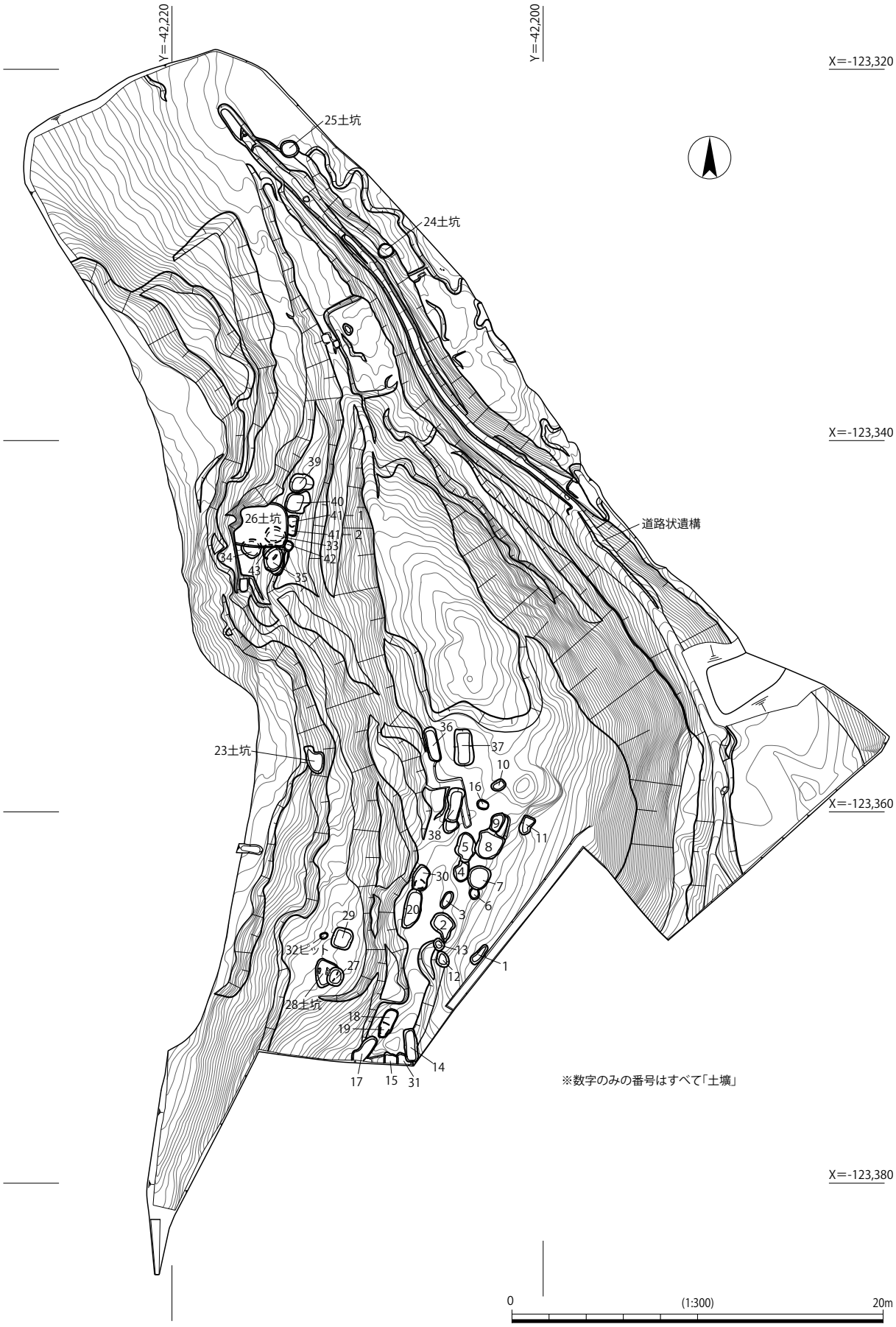


図 60　千提寺クルス山遺跡１区　全体平面図

表６　千提寺クルス山遺跡１区土壙一覧

個別報告の土壙

土壙№	検出面形態	底面形態	検出面　直径･一辺(cm)		底面　直径･一辺(cm)		深さ(cm)	上部施設	下部施設	埋葬方法	棺の形態	人骨	副葬品
			長	短	長	短							
1土壙	不整円形	不整円形	126	48	100	26	17	無	無	推定火葬	不明	有	
2土壙	不整方形	不整方形	130	124	100	98	35	有　自然石複数	無	推定火葬	不明	有	釘
3土壙	不整円形	不整円形	102	50	82	32	19	無　石敷	無	推定火葬	不明	有	磁器碗
4土壙	不整円形	不整円形	114	84	98	66	27	有　加工石単体	無	推定火葬	不明	有	磁器碗･銭貨
5土壙	不整円形	不整円形	160	110	136	74	25	無	無	推定火葬	不明	有	土師器不明･銭貨
6土壙	不整方形	不整方形	60	60	45	45	15	無	無	推定火葬	不明	有	
7土壙	不整円形	不整方形	130	120	108	96	100	有　配石	無	土葬	推定箱形木棺	有	土師器不明･瓦器椀
8土壙	不整方形	不整方形	140	140	130	110	53	無	無	推定火葬	不明	有	磁器不明
9土壙	不整円形	不整円形	108	70	92	56	25	無	無	推定火葬	不明	無	
10土壙	不整方形	不整方形	76	54	56	34	10	無	無	推定火葬	不明	有	磁器不明
11土壙	不整円形	不整円形	105	65	80	50	62	無	無	推定火葬	不明	有	磁器碗
12土壙	不整円形	不整円形	90	70	60	40	25				不明	無	
13土壙	方形	方形	60	54	38	28	65	無	無	不明	不明	無	釘
14土壙	長方形	長方形	178	74	155	45	45	有　石敷･石仏	無	土葬	推定長方形木棺	有	釘
15土壙	方形	方形	60	72	40	60	100	無	無	不明	不明	無	
16土壙	不整円形	不整方形	63	50	45	35	53	無	無	推定火葬	不明	無	
17土壙	長方形	長方形	170～	65	155～	50	30	無	無	推定土葬	推定長方形木棺	無	釘
18土壙	長方形	長方形	168	74	149	60	55	無	無	推定土葬	推定長方形木棺	無	
19土壙	方形	方形			58	38	85	無	無	推定火葬	不明	無	
20土壙	長方形不整方形	長方形	217	92	184	50	80	無	無	推定土葬	推定長方形木棺	無	
27土壙	不整方形	方形	100	85	74	56	140	有　自然石単体	無	土葬	推定箱形木棺	有	釘
29土壙	方形不整円形	方形	117	110	80	73	96	無	無	土葬	推定箱形木棺	有	釘
30土壙	不整円形	長方形	140	80	120	68	40	有　自然石複数	無	推定土葬	不明	無	
31土壙	不整方形	不整方形	100	60～	80	50～	45	無	無	推定土葬	不明	無	瓦器椀
33土壙	不整円形	円形	92	80	66	52	108	無	無	推定土葬	推定円形木棺	有	鉄製品･釘
34土壙	不整円形	方形	108	100	84	78	100	無	無	推定土葬	推定箱形木棺	有	釘
35土壙	不整円形	円形不整形	154	126	90	78	65	無	無	推定土葬	推定桶形木棺	有	釘
36土壙	長方形	長方形	190	66	166	52	32	無	無	不明	不明	無	
37土壙	長方形	長方形	195	104	165	66	60	無	無	不明	推定長方形木棺	有	
38土壙	長方形	長方形	250	85	217	60	58	無	無	推定土葬	推定長方形木棺	有	釘
39土壙	不整円形	不整方形	128	100	83	62	105	無	無	土葬	推定箱形木棺	有	釘
40土壙	不整方形	方形	132	112	95	86	75	無	無	土葬	推定桶形木棺	有	釘
41-1土壙	方形	円形	64	48	40	40	26	無	無	推定火葬	不明	有	釘
41-2土壙	不整方形	不整方形	74	64	60	54	23	無	無	推定火葬	不明	有	釘
42土壙	不整方形	方形	58	38	54	30	30	無　加工石単体	無	推定火葬	不明	無	
43土壙	不整方形	方形	79	77	58	55	100	無	無	土葬	推定箱形木棺	有	釘
44土壙	方形	方形	54	52	40	30	45	無	無	不明	不明	無	

千提寺クルス山遺跡 1 区　　2 土壙 地区割 3D1g

土壙の形態	検出面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 130 × 124 cm
	底面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 100 × 98 cm
			深さ 35 cm　軸方向 N-51°-W

上部施設	◉有 ○無	構造 □配石 □自然石組 □自然石単体 ☒自然石複数 □五輪空風 □五輪水 □石仏 □石敷 □加工石組 □加工石単体 □一石五輪塔 □五輪火 □五輪地
		所見 自然石は3点あり、うち2点は大きさが近似するが、1点はそれらより小さい。石の配置には規則性は認められない。
下部施設	○有 ◉無	構造・所見

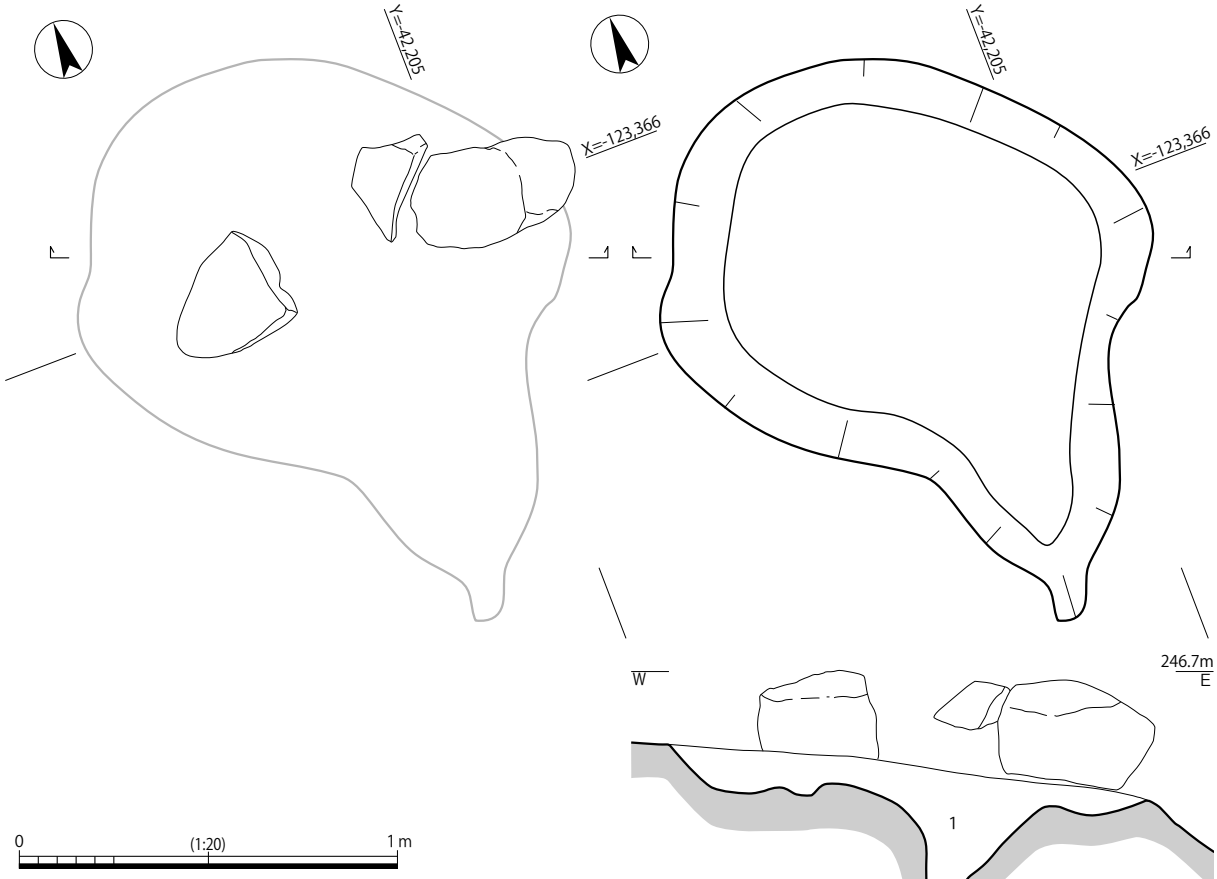
埋葬方法	○火葬 ◉推定火葬 ○土葬 ○推定土葬 ○不明	蔵骨器 ○有 ◉無
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ◉有 ○無	
	所見 埋土には骨の砕片とともに炭化物が多く含まれていた。木の根に一部かく乱されており断定はできないが、断面は不整形な皿形で、掘り窪めた穴の中に、火葬骨や灰を集めて充填したようにみえる。	

棺の形態	○桶形木棺 ○長方形木棺 ○推定桶形木棺 ○推定長方形木棺 ○箱形木棺 ○その他 ○推定箱形木棺 ◉不明	所見 掘形が全体的に不明瞭で、埋土全体に炭化物が含まれていることから、人骨を納める容器は用いられなかった可能性がある。

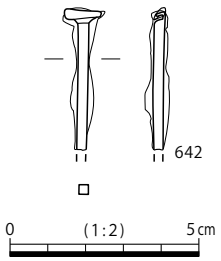
人骨	性別 ○男性 ○女性 ◉不明	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考
	年齢 不明	歯		
	所見			

副葬品				
	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名称	材質	数量	所見
	釘	鉄	1	短小

備考	尾根のほぼ中央に位置する。木の根が一部重なっていたため、全体の形状・規模には推定が含まれる。



1 10YR2/1　黒色　粗砂混砂質細砂　炭化物多く含む



千提寺クルス山遺跡 1 区　　7 土壙 地区割 3D1g

土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 □長方形 □円形 ☒不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	130 × 120 cm	
	底面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	108 × 96 cm	
			深さ	100 cm	軸方向 不明

上部施設	◉有 ○無	構造 配石 所見 土壙上面の自然石6点が上部施設だった可能性ある。	下部施設	○有 ◉無	構造・所見

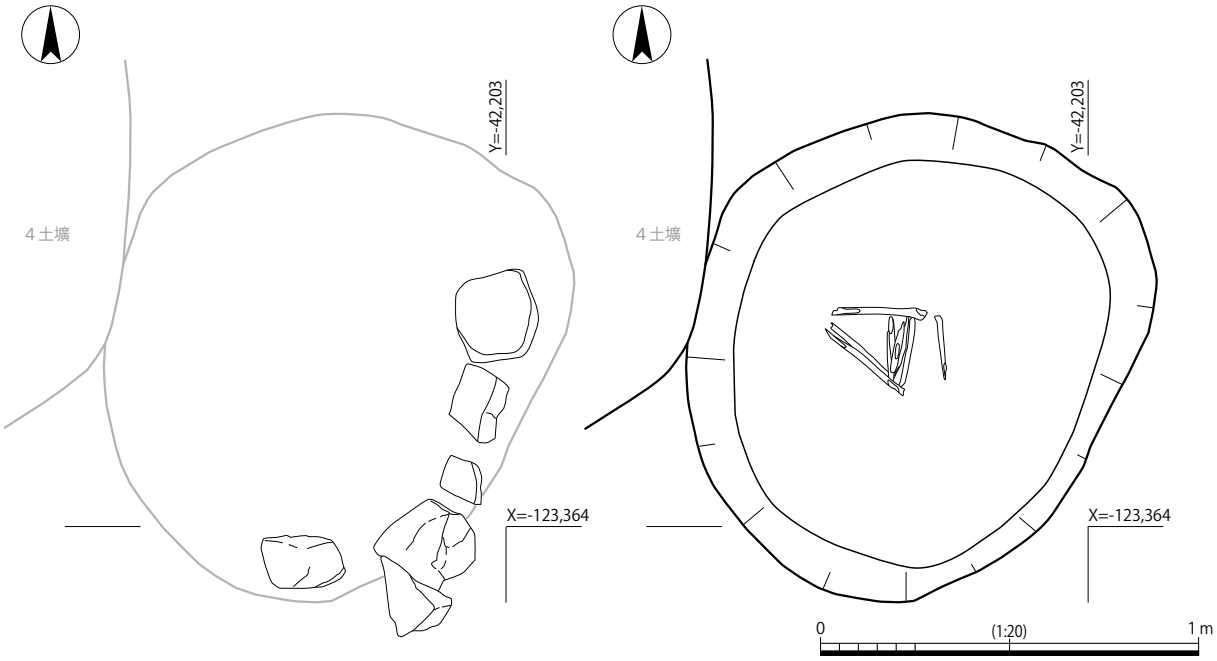
埋葬方法	土葬 骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ◉有 ○無　蔵骨器 ○有 ◉無	所見 人骨の残存状態は、比較的良好で、座位による土葬と考えられる。
棺の形態	推定箱形木棺	所見 土壙底面の平面形態と壁面の立ち上がりの形状からみて、箱形木棺の可能性が高いと考える。

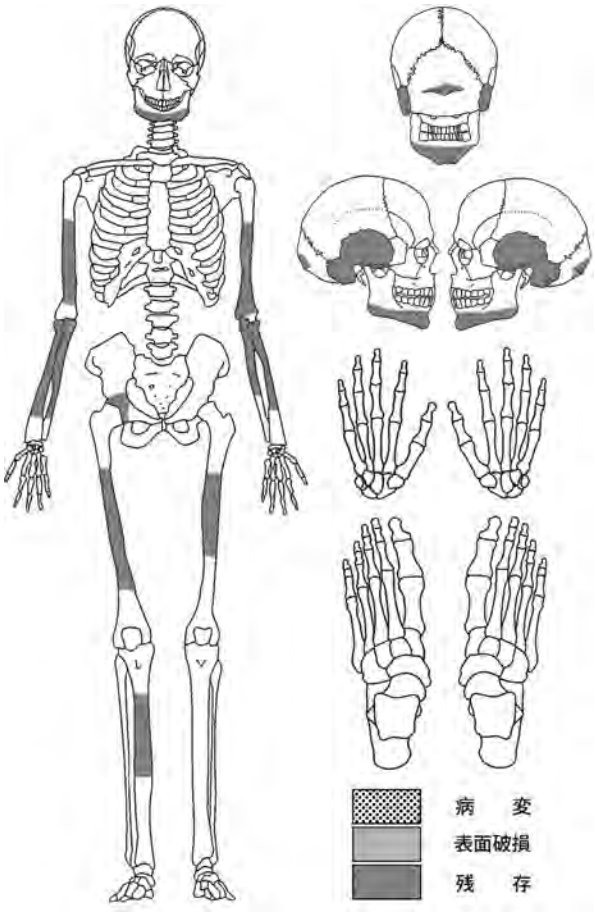
人骨	性別 不明	年齢 成人	顔面方位 不明	疾病 ○有 ◉無	備考
	歯	所見 左上腕骨が2体分あり(チャートと写真は同一個体分のみ)。火葬骨が混入。			

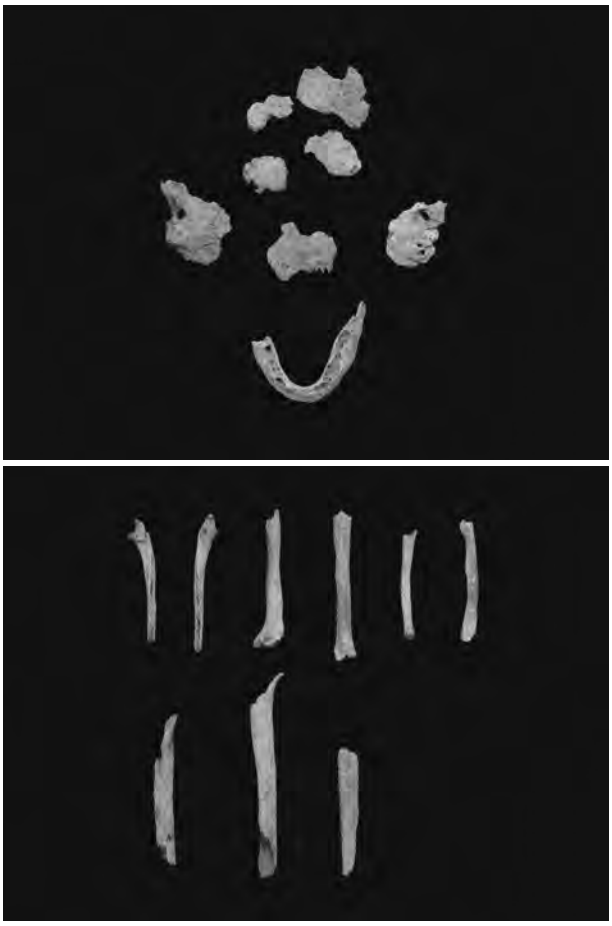
副葬品　器種 ☒土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 □釘

名称	材質	数量	所見
不明	土師器	1	細片のため、器種不明。体部が途中で屈曲して外反するタイプの皿か。
椀	瓦器	1	口縁部のみの細片。最終段階のもの。

備考　尾根のほぼ中央に位置する。自然石が7土壙上面の東端に並んでいたことから、これが7土壙の上部施設だった可能性がある。尾根の東肩に位置する。隣接する4土壙に先行して形成された。埋土の最上層のみ炭化物が混入する。


Y=-42,203
4土壙
X=-123,364
Y=-42,203
4土壙
X=-123,364
0
(1:20)
1 m


病　変
表面破損
残　存



千提寺クルス山遺跡 1 区　　11 土壙 地区割 3D1f

土壙の形態	検出面	不整円形	検出面直径・一辺	105	×	65	cm	深さ	62 cm
	底 面	不整円形	底面直径・一辺	80	×	50	cm	軸方向	N-23° -E

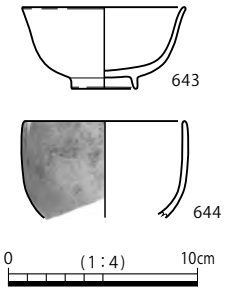
上部施設	○有 ◉無	下部施設	○有 ◉無

埋葬方法	推定火葬	所 見	火葬骨片と炭化物が多く含まれる。断面は不整形なU字形で、掘り窪めた穴の中に、火葬骨と炭化物を充填したものか。	棺の形態
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ◉有 ○無　蔵骨器 ○有 ◉無			不明 掘形が不明瞭で、埋土全体に炭化物が含まれていることから、人骨を納める容器は用いられなかった可能性がある。

人骨	性別 不明	年齢 不明	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所 見	火葬骨		

副葬品	器 種 ☒土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 □釘			
	名 称	材 質	数 量	所 見
	碗	磁器	2	いずれも小型の碗であり、白無地である。1点は貫入がみられ、京焼風である。

備考	尾根の東肩もしくは東斜面の上部に位置する。斜面側の側壁は垂直に掘り窪めたような形状で、断面はV字形を呈する。平面形態は長楕円形で、同じく東側斜面に位置する1土壙と似た形状である。



千提寺クルス山遺跡 1 区　　14 土壙 地区割 3D1h

土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 178 × 74 cm
	底面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 155 × 45 cm
			深さ 45 cm　軸方向 N-4° -W

上部施設	◉有 ○無	構造 □配石 □自然石組 □自然石単体 □自然石複数 □五輪空風 □五輪水 ☒石仏 ☒石敷 □加工石組 □加工石単体 □一石五輪塔 □五輪火 □五輪地
		所見 転用した石仏1点(写真図版104-835)と、自然石4点を配置する。自然石4点のうち3点は大きさが類似する。それらより小さい1点は、石の座りを良くするために置かれたものか。
下部施設	○有 ◉無	構造・所見

埋葬方法	○火葬 ○推定火葬 ◉土葬 ○推定土葬 ○不明	蔵骨器 ○有 ◉無
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無	
	所見 土壙から釘が出土している点、人骨の状態から、伸展位による木棺直葬と考える。頭位を南に向けてて埋葬した可能性が高いと考える。	

棺の形態	○桶形木棺 ○長方形木棺 ○推定桶形木棺 ◉推定長方形木棺 ○箱形木棺 ○その他 ○推定箱形木棺 ○不明	所見

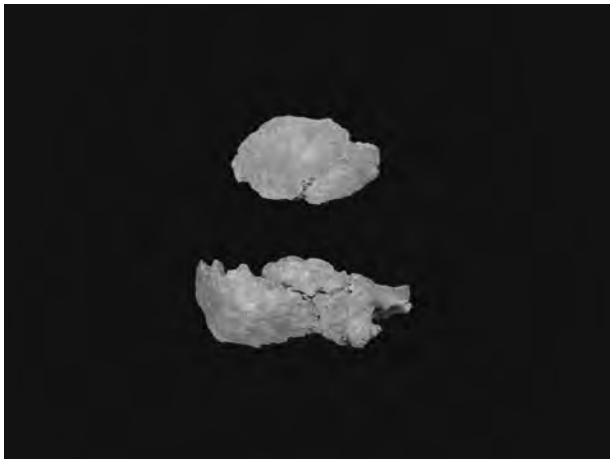
人骨	性別 ○男性 ○女性 ◉不明	顔面方位 S(頭位)	疾病 ○有 ◉無	備考
	年齢 成人	歯		
	所見			

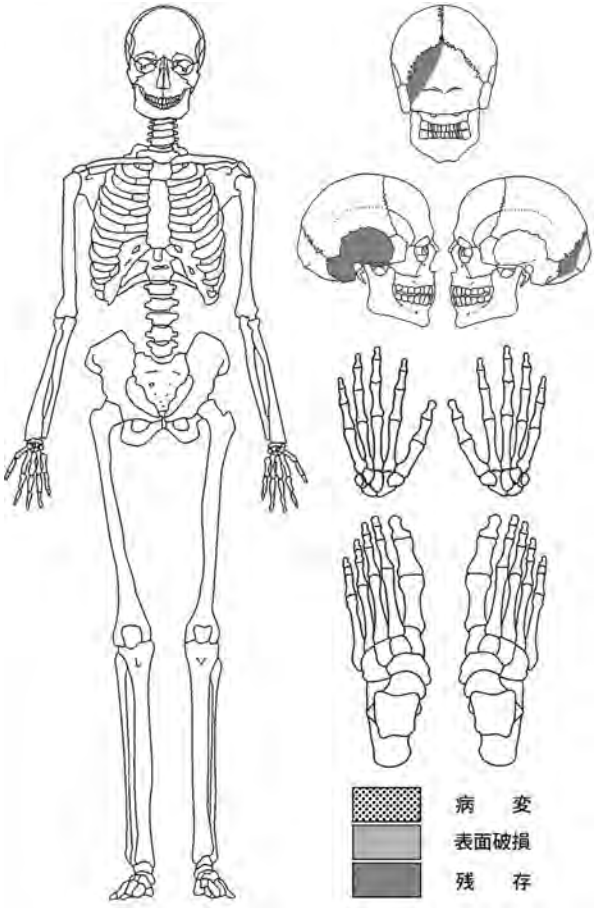
副葬品	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名称	材質	数量	所見
	釘	鉄	4	長大・短小

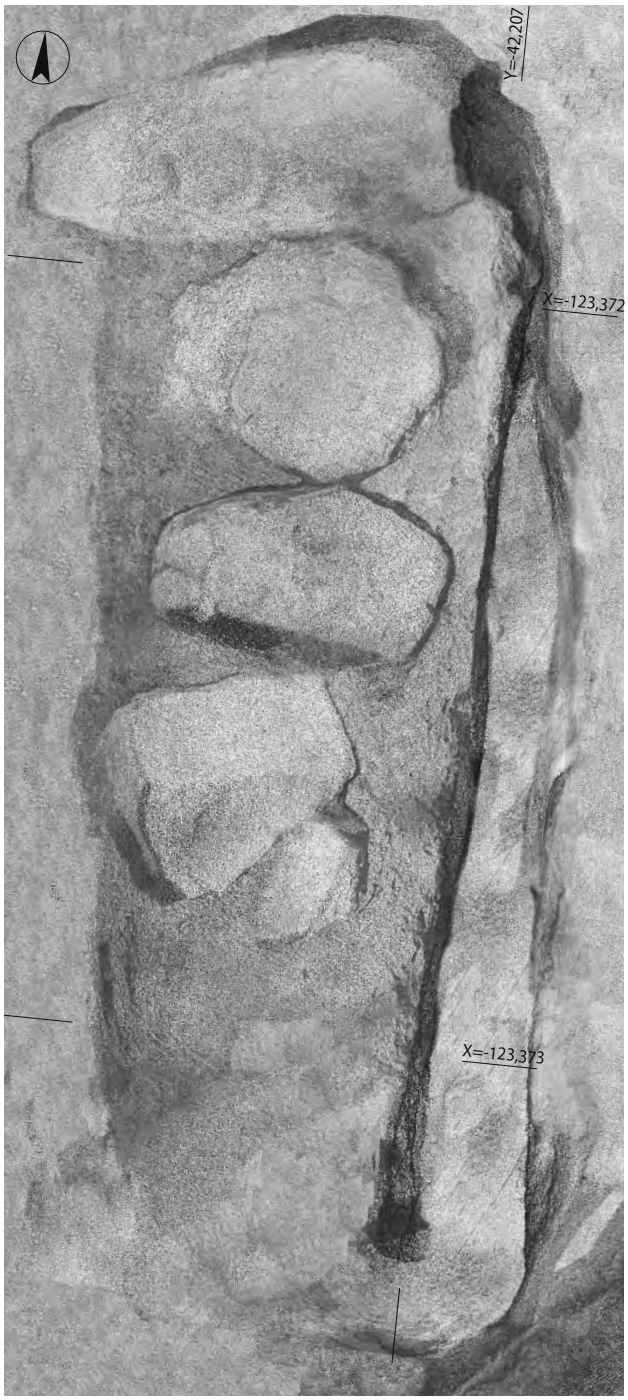
備考	尾根のほぼ中央に位置する。上部施設の石は、土壙の長軸方向に沿うように直線的に並べている。現存するのは土壙の北半分のみだが、もとは全体を覆っていた可能性がある。土壙の断面観察により、土壙の中央に向けて土が落ち込んでいる状況がみられる。これも遺骸が棺に納められていた証左となろう。長方形墓のみでみると、14・17・18土壙で一つのまとまりを形成する。

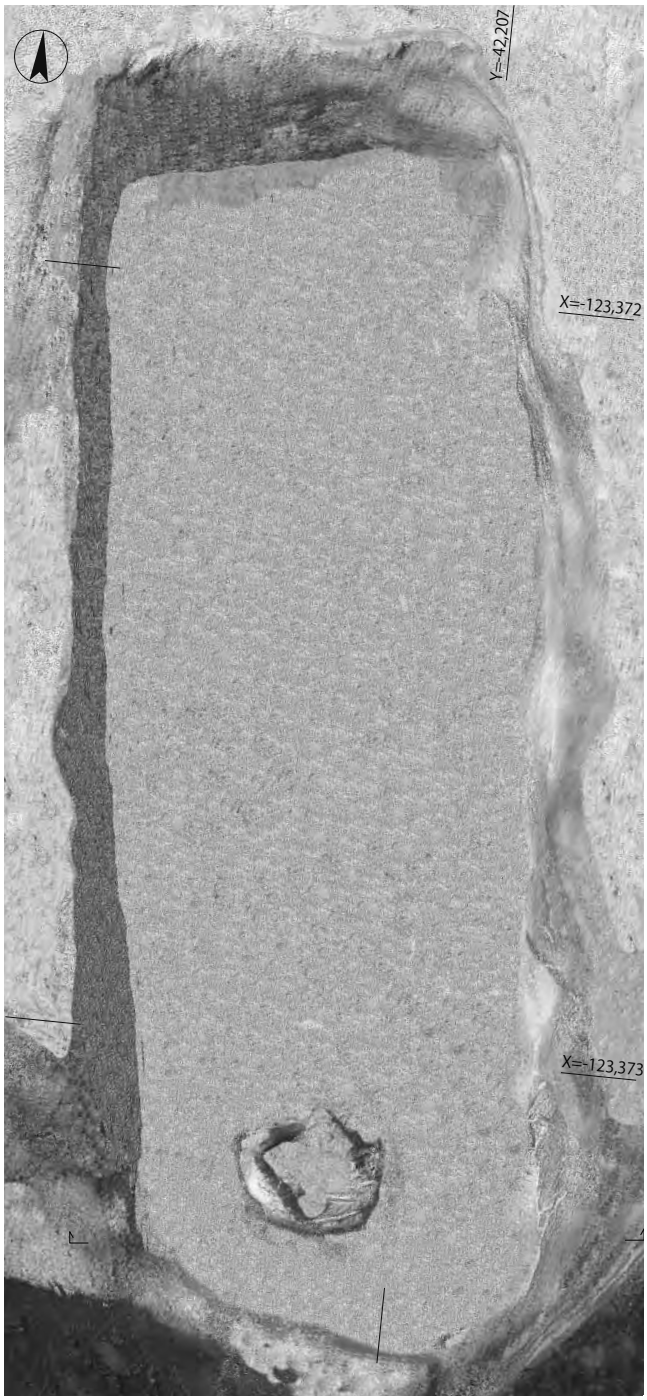
645

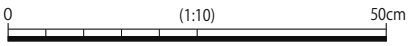
646



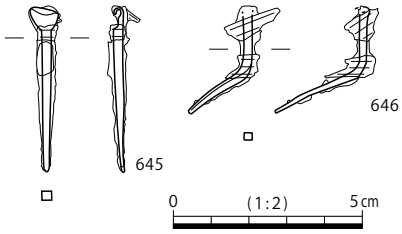



Y=-42,207
X=-123,372
X=-123,373


Y=-42,207
X=-123,372
X=-123,373


0
(1:10)
50cm

W
247.0m
E
246.5m


645
646
0
(1:2)
5cm

千提寺クルス山遺跡 1 区　　17 土壙 地区割 3D1・2h

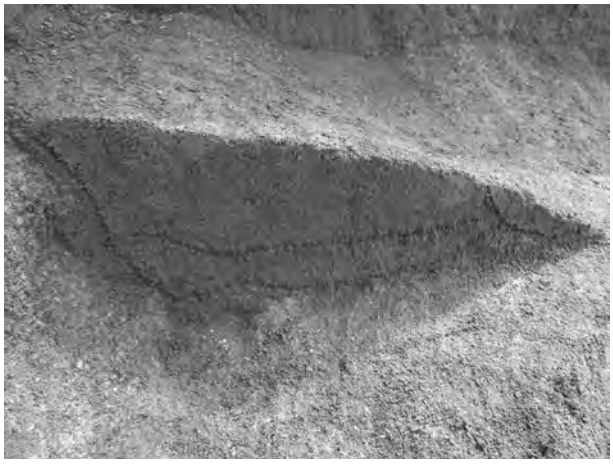
土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 170～ × 65 cm
	底面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 155～ × 50 cm
			深さ 30 cm　軸方向 N-35° -E

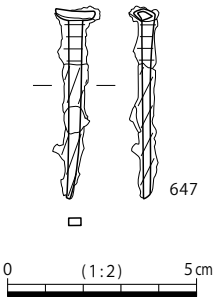
上部施設	○有 ◉無	構造・所見	下部施設	○有 ◉無	構造・所見

埋葬方法	推定土葬	所見	棺の形態 推定長方形木棺 釘の出土より、木棺に埋葬されたとみられる。14土壙より幅の狭い木棺が使用されたと考えられる。
	骨 ○有 ◉無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無		

副葬品	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名称	材質	数量	所見
	釘	鉄	4	短小・長大

備考	尾根の西肩部分に沿うように位置する。長辺と短辺の比率から見て、長方形墓の範疇に含まれるとみられるが、検出面・底面共に形態はやや不整形である。底面は平坦だが、側壁の立ち上がりは検出面に向けて、やや外側に傾く。長方形墓のみでみると、14・17・18土壙とで一つのまとまりを形成する。





千提寺クルス山遺跡 1 区　　27 土壙 地区割 3D2g

土壙の形態	検出面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	100 × 85 cm	
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	74 × 56 cm	
			深さ	140 cm	軸方向 N-16° -E

上部施設	◉有 ○無	構造 自然石単体	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

埋葬方法	土葬	所見
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ◉有 ○無　蔵骨器 ○有 ◉無	

棺の形態	推定箱形木棺	所見

人骨	性別 不明	年齢 成人	顔面方位 S(頭位)	疾病 ◉有 ○無	備考
	歯	所見 中手骨または中足骨に病変あり			

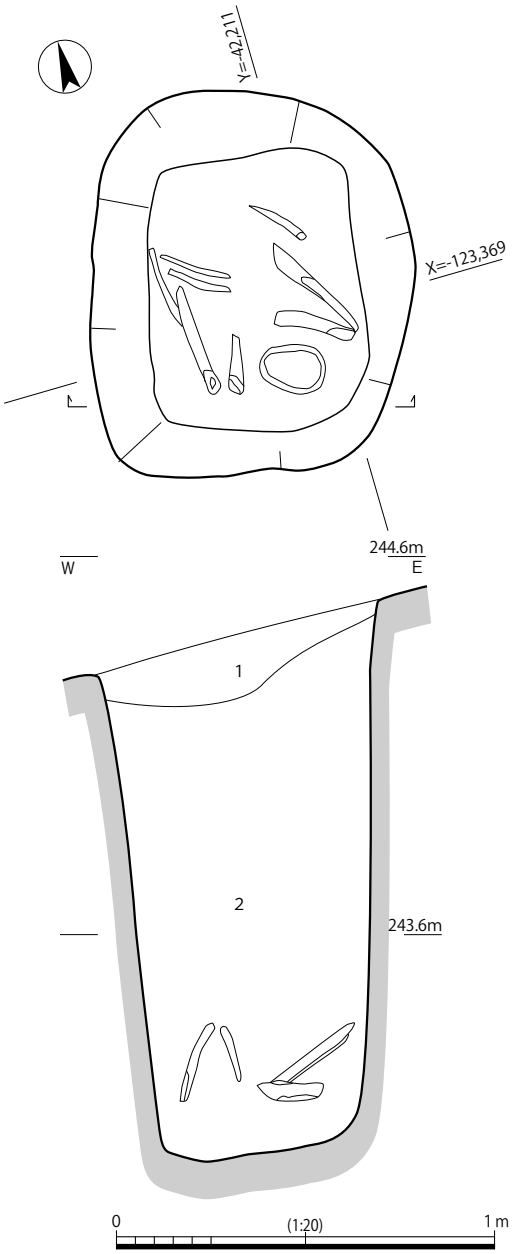
副葬品

器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

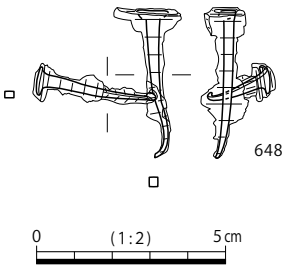
名称	材質	数量	所見
釘	鉄	38	長大・短小

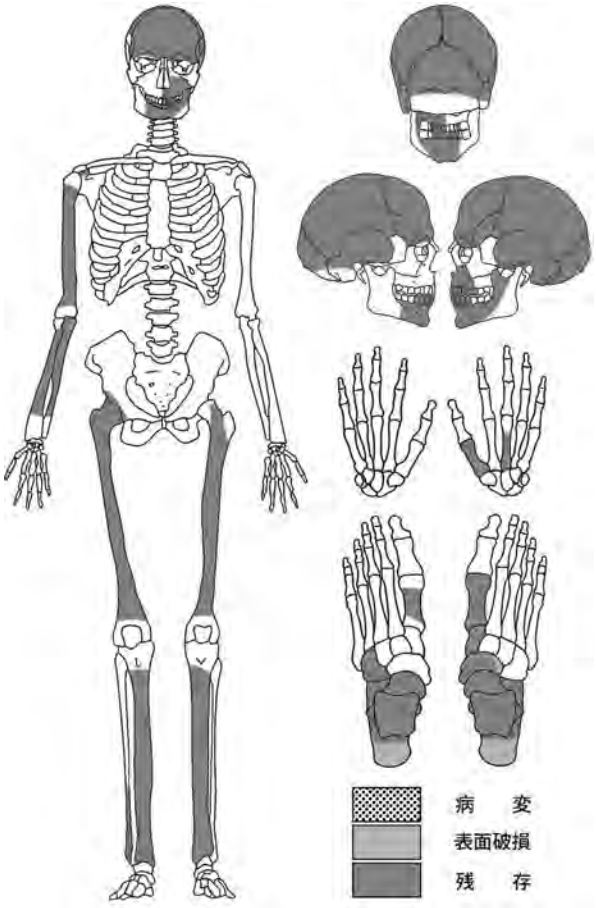
備考

尾根の西側斜面、南側の緩斜面に位置する。28土坑と重複し、これに後出して形成されたことがわかる。27・29土壙で、一つのまとまりをつくる。中世後葉とみられる2点の土師器皿が近接して出土しており、28土坑に含まれる可能性がある。



1 2.5Y6/4　にぶい黄色　中砂混砂質細砂
2 2.5Y6/3　にぶい黄色　粗砂混砂質中砂～細砂





千提寺クルス山遺跡 1 区　　29 土壙 地区割 3D2g

土壙の形態	検出面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 ☒不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	117 × 110 cm	
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	80 × 73 cm	
			深さ	96 cm	軸方向 不明

上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

埋葬方法	土葬	所見
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無	

棺の形態	推定箱形木棺	所見

人骨	性別 男性	年齢 成人	顔面方位 N(頭位)	疾病 ○有 ◉無	備考
	歯	所見			

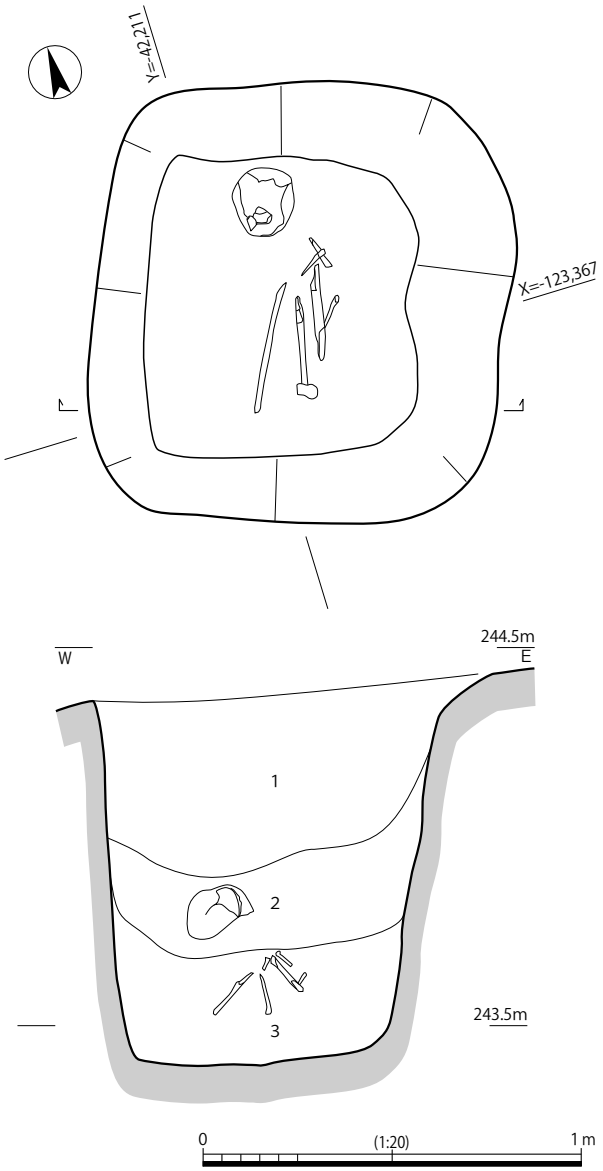
副葬品

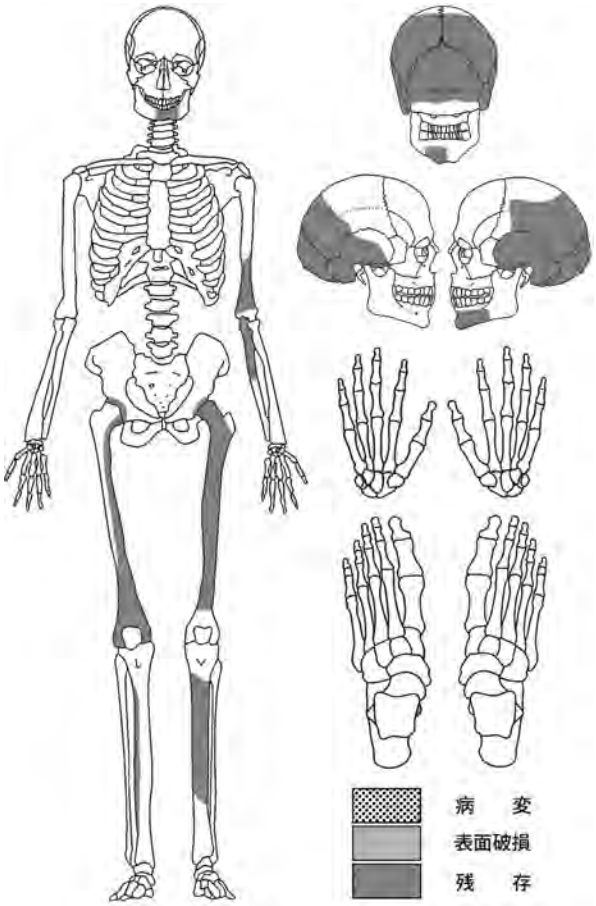
器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

名称	材質	数量	所見
釘	鉄	1	短小

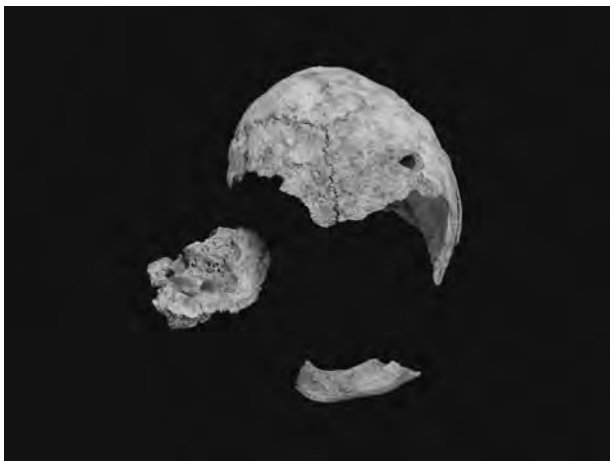
備考

尾根の西側斜面、南側の緩斜面に位置する。27・29土壙で一つのまとまりをつくる。



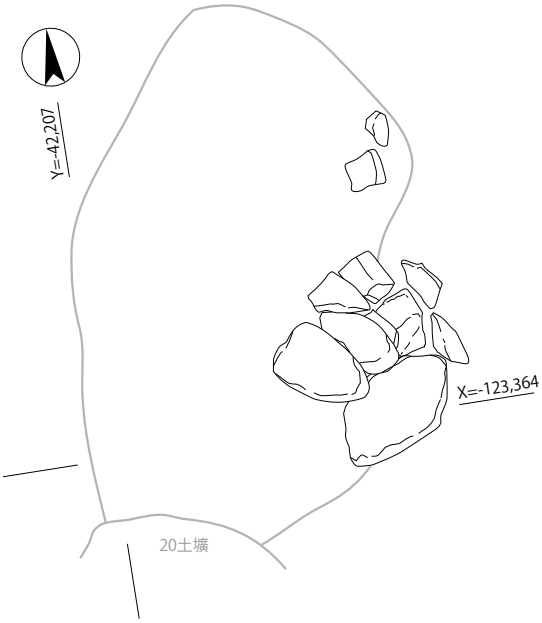


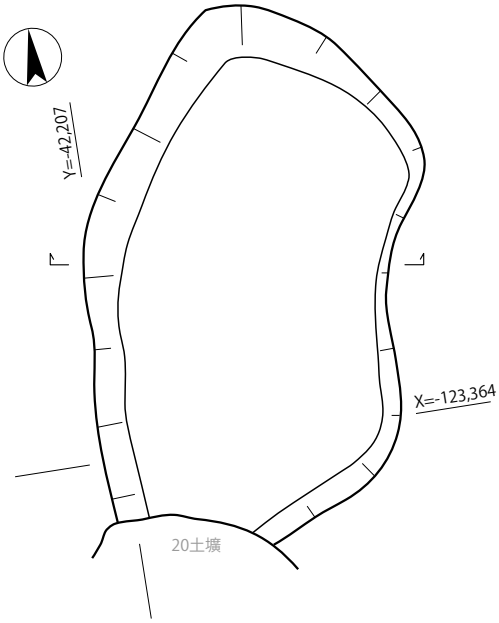
1 10YR6/4　にぶい黄橙色　小礫中砂混粘土質細砂　花崗岩バンラン土に似る
2 10YR6/2　灰黄褐色　中砂～粗砂混粘土質細砂　花崗岩バイラン土に似る
3 10YR5/2　灰黄褐色　中砂～粗砂混粘土質細砂　２に似るが粘性有り
　花崗岩バイラン土に似る

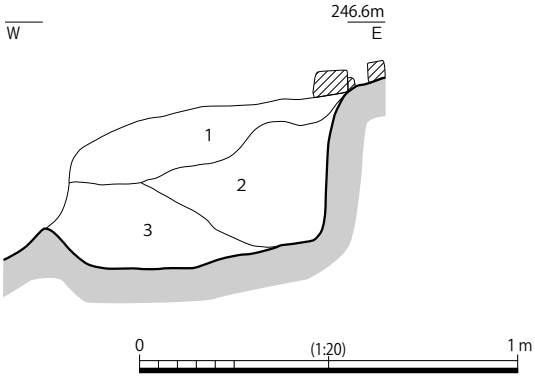


千提寺クルス山遺跡 1 区　　30 土壙 地区割 3D1g

土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 □長方形 □円形 ☒不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 140 × 80 cm
	底面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 120 × 68 cm
			深さ 40 cm　軸方向 N-17° -E
上部施設	◉有 ○無	構造 □配石 □自然石組 □自然石単体 ☒自然石複数 □五輪空風 □五輪水 □石仏 □石敷 □加工石組 □加工石単体 □一石五輪塔 □五輪火 □五輪地	
		所見	
下部施設	○有 ◉無	構造・所見	
埋葬方法	○火葬 ○推定火葬 ○土葬 ◉推定土葬 ○不明		蔵骨器 ○有 ◉無
	骨 ○有 ◉無 被熱痕 ○有 ◉無 炭化物 ○有 ◉無		
	所見		
棺の形態	○桶形木棺 ○長方形木棺 ○推定桶形木棺 ○推定長方形木棺 ○箱形木棺 ○その他 ○推定箱形木棺 ◉不明	所見	
人骨	性別 ○男性 ○女性 ○不明	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無　備考
	年齢	歯	
	所見 出土なし		
副葬品	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 □釘		
	名称	材質	数量	所見
備考	尾根の西肩に位置する。上面に複数の自然石が位置し、上部施設となる可能性がある。南端がわずかに20土壙と重複し、これより先に形成されたことがわかる。土壙の西肩は徐々に崩落したとみられ、西側の側壁は立ち上がり部分がわずかに残っていたのみである。やや不整形だが、全体的には長方形墓の形態をもち、掘削深度も20土壙とほぼ同じことから、それと同じ範疇でとらえ得る。ただ長軸が短く、底面や側壁もあまり平坦ではないことや、横断方向の土層断面の堆積状況が、他の長方形墓と異なることから、棺が用いられなかった可能性もある。長方形墓のみでみると、20・30・36～38土壙とで一つのまとまりを形成する。			



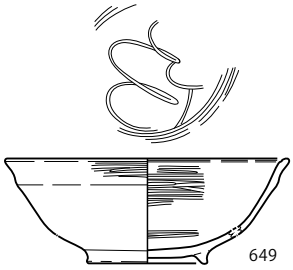




1 10YR6/3　にぶい黄橙色　小礫混粘土質中～細砂
2 10YR7/4　にぶい黄褐色　小礫混粘土質細砂　1に似るがそれより粘性弱い
3 10YR6/6　明黄褐色　小礫混粘質細砂　5cm以下の花崗岩礫含む

千提寺クルス山遺跡 1 区　　31 土壙 地区割 3D1h

土壙の形態	検出面 不整方形	検出面直径・一辺	100 × 60～ cm	深さ 45 cm			
	底 面 不整方形	底面直径・一辺	80 × 50～ cm	軸方向 不明			
上部施設	○有 ◉無	下部施設	○有 ◉無				
埋葬方法	推定土葬	所 見	埋土に炭化物等を含まないので、おそらく土葬と考えられる。	棺の形態	不明 調査区内では土壙の北端部のみを検出した。したがって、遺構の全形や棺の形態は不明である。		
	骨 ○有 ◉無	被熱痕 ○有 ◉無	炭化物 ○有 ◉無	蔵骨器 ○有 ◉無			
人骨	性別	年齢	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考		
	歯	所 見	出土なし				
副葬品	器 種 ☒土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 □釘						
	名 称	材 質	数 量	所 見			
	椀	瓦器	1	樟葉型。12世紀前半に位置付けられる。			
備考	調査区南端、尾根の東肩に位置する。14土壙の南西端と、31土壙の北東端がほぼ接するような位置関係である。遺構の一部を検出したのみで、土壙の形状その他に関しては不明。出土遺物は山頂部調査区南端の、14土壙の延長部分と31・15土壙が重なる部分を側溝として掘削中に出土したもの。遺構の重複関係からみて、31土壙の埋土から出土した可能性が高いと考える。						



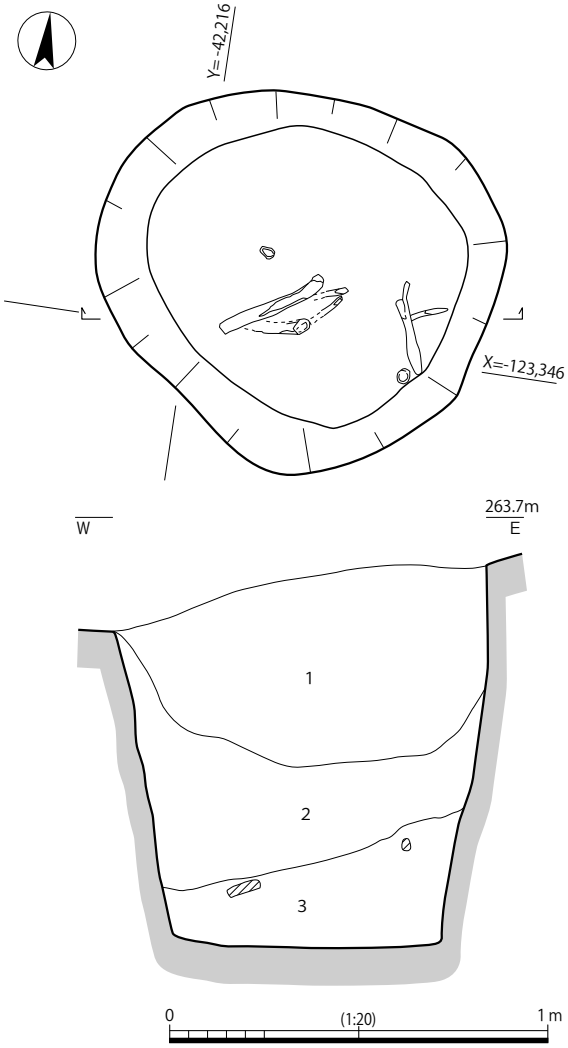
0 (1:4) 10cm

千提寺クルス山遺跡 1 区　　34 土壙 地区割 3D2e

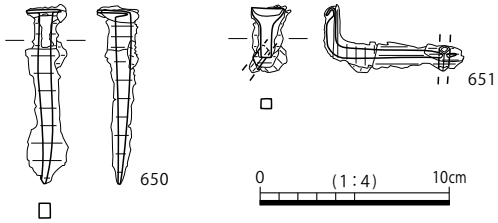
土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 □長方形 □円形 ☒不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 108 × 100 cm
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 84 × 78 cm
			深さ 100 cm　軸方向 N-63° -W
上部施設	○有 ◉無	構造 □配石 □自然石組 □自然石単体 □自然石複数 □五輪空風 □五輪水 □石仏 □石敷 □加工石組 □加工石単体 □一石五輪塔 □五輪火 □五輪地	
		所見	
下部施設	○有 ◉無	構造・所見	
埋葬方法	○火葬 ○推定火葬 ○土葬 ◉推定土葬 ○不明		蔵骨器 ○有 ◉無
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無		
	所見 埋土最上層から出土した炭化物は、近接する26土坑から混入した可能性が高い。出土状況や人骨から土葬と考えられる。		
棺の形態	○桶形木棺 ○長方形木棺 ○推定桶形木棺 ○推定長方形木棺 ○箱形木棺 ○その他 ◉推定箱形木棺 ○不明	所見	
人骨	性別 ○男性 ◉女性 ○不明	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無　備考
	年齢 成人	歯	
	所見		
副葬品	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘		

名称	材質	数量	所見
釘	鉄	9	長大

備考	尾根の西側斜面、北側の緩斜面に位置する。26土坑・33～35・39・40～44土壙とあわせて、ひとまとまりの遺構群を形成している。埋土の堆積状況や土質が33土壙の埋土と近似する。



1 10YR6/4　にぶい黄橙色　中砂混粘土質細砂
2 10YR5/3　にぶい黄褐色　中砂混粘土質細砂
3 10YR7/6　明黄褐色　微砂混砂質中～細砂



千提寺クルス山遺跡 1 区　　35 土壙 地区割 3D2e

土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 □長方形 □円形 ☒不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 154 × 126 cm
	底面	□方形 □不整方形 □長方形 ☒円形 □不整円形 ☒不整形	底面直径・一辺 90 × 78 cm
			深さ 65 cm　軸方向 N-4° -E

上部施設	○有 ◉無	構造 □配石 □自然石組 □自然石単体 □自然石複数 □五輪空風 □五輪水 □石仏 □石敷 □加工石組 □加工石単体 □一石五輪塔 □五輪火 □五輪地
		所見
下部施設	○有 ◉無	構造・所見

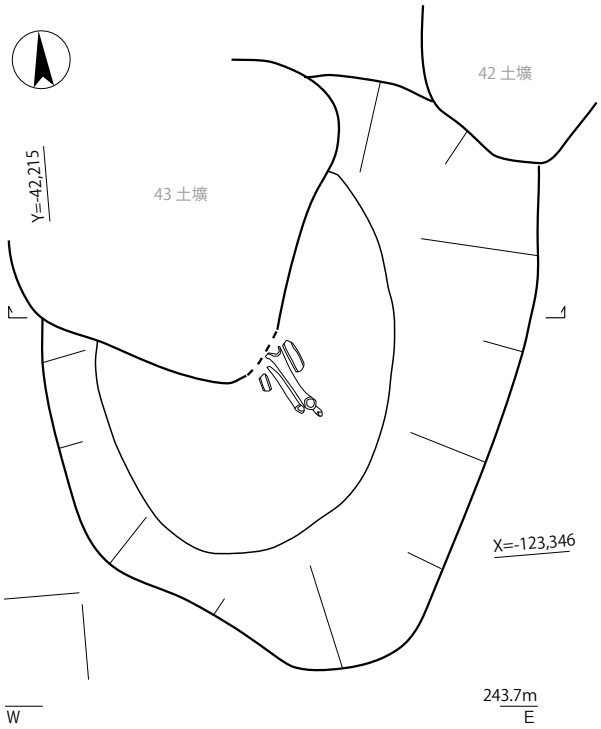
埋葬方法	○火葬 ○推定火葬 ○土葬 ◉推定土葬 ○不明	蔵骨器 ○有 ◉無
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無	
	所見 埋土最上層から出土した炭化物は、近接する26土坑から混入した可能性が高い。出土状況や人骨から土葬と考えられる。	

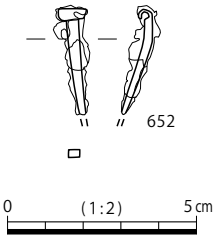
棺の形態	○桶形木棺 ○長方形木棺 ◉推定桶形木棺 ○推定長方形木棺 ○箱形木棺 ○その他 ○推定箱形木棺 ○不明	所見

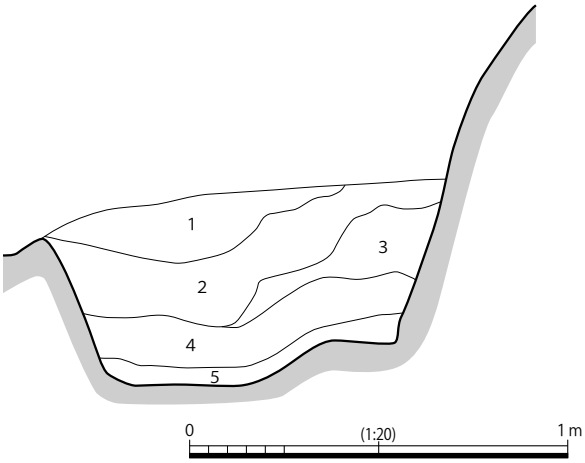
人骨	性別 ○男性 ○女性 ◉不明	顔面方位 不明	疾病 ○有 ○無	備考
	年齢 不明	歯		
	所見			

副葬品	名称	材質	数量	所見
器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘				
	釘	鉄	1	短小

備考	尾根の西側斜面、北側の緩斜面に位置する。26土坑・33～35・39～44土壙とあわせて、ひとまとまりの遺構群を形成している。43土壙とほぼ重複する位置関係だが、土壙の直径はこちらのほうが一回り大きい。遺構の検出状況からみて、35土壙が43土壙よりも後に形成されたと考える。土壙の中で掘削深度が浅めなのは、43土壙に埋葬されている遺骸をかく乱しないよう配慮したためか。土壙の規模が他の土壙と比べても大きく、やや長方形気味だが、骨の検出状況からみて、座棺に胡坐座で遺骸を納めて埋葬したことがうかがえる。



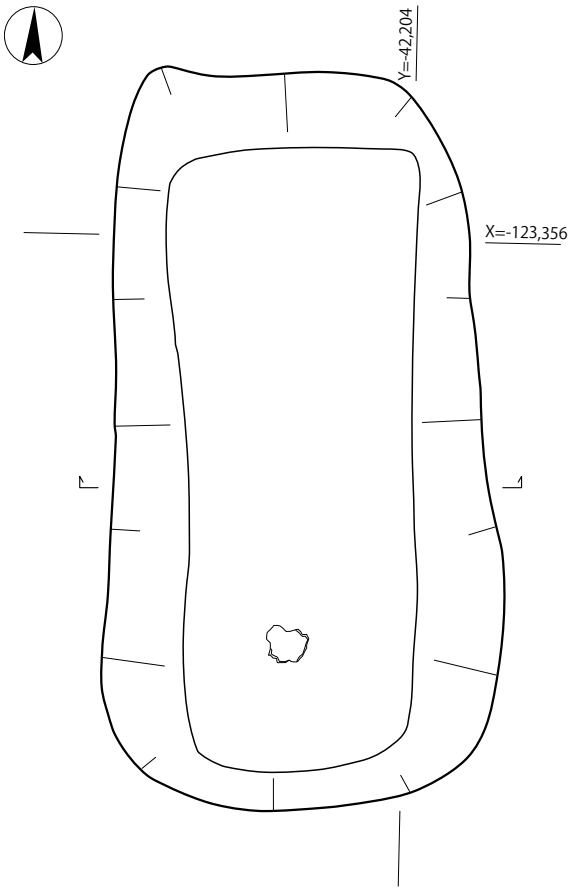


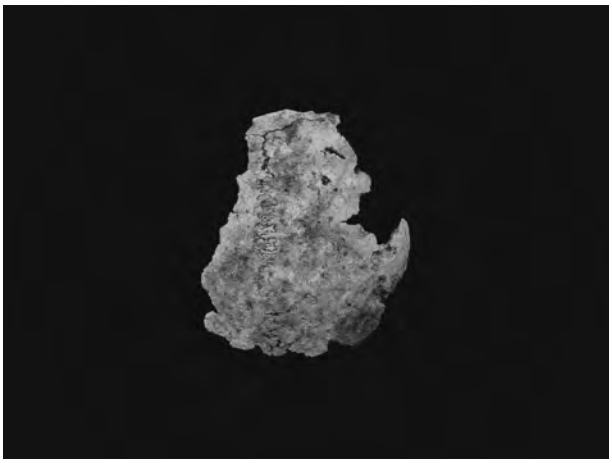


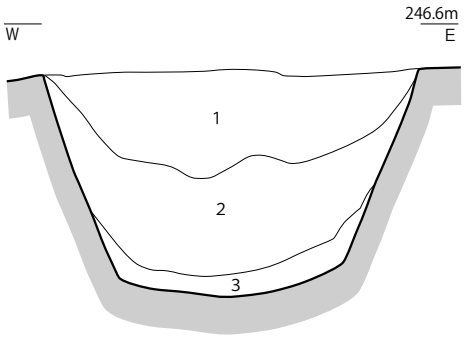
1 10YR6/4　にぶい黄橙色　中砂混粘土質細砂
2 10YR5/4　にぶい黄褐色　細砂混砂質中～粗砂
3 10YR5/2　灰黄褐色　中砂混粘土質細砂
4 10YR6/4　にぶい黄橙色　中砂混粘土質細砂
5 10YR6/3　にぶい黄橙色　中～粗砂混砂質細砂

千提寺クルス山遺跡 1 区　　37 土壙 地区割 3D1f

土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 195 × 104 cm
	底面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 165 × 66 cm
			深さ 60 cm　軸方向 N-2° -W
上部施設	○有 ◉無	構造 □配石 □自然石組 □自然石単体 □自然石複数 □五輪空風 □五輪水 □石仏 □石敷 □加工石組 □加工石単体 □一石五輪塔 □五輪火 □五輪地	
		所見	
下部施設	○有 ◉無	構造・所見	
埋葬方法	○火葬 ○推定火葬 ○土葬 ○推定土葬 ◉不明		蔵骨器 ○有 ◉無
	骨 ◉有 ○無 被熱痕 ○有 ◉無 炭化物 ○有 ◉無		
	所見	残存する頭蓋骨の位置から、遺骸は伸展した状態で、頭部を南に向けて埋葬したとみられる。人骨の出土状況や埋土の観察からは伸展位の木棺直葬と考える。人骨がやや黒色を呈し、生焼けのような状態であると鑑定されたことから、火葬の可能性も考えられるが、炭化物は出土しておらず判然としない。	
棺の形態	○桶形木棺 ○長方形木棺 ○推定桶形木棺 ◉推定長方形木棺 ○箱形木棺 ○その他 ○推定箱形木棺 ○不明		所見 棺材・釘等の残留物はなかったが、土壙中央に向けて落ち窪むように埋土が堆積しており、木棺の存在を推定できる。
人骨	性別 ○男性 ○女性 ◉不明	顔面方位 S(頭位)	疾病 ○有 ○無　備考
	年齢 不明	歯	
	所見		
副葬品	器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 □釘		
	名称	材質	数量	所見
備考	尾根平坦部の中央部分に位置する。この調査区内で検出された長方形墓の中では、最も幅広である。遺構は底面、側壁とも平坦に作り出されている。36土壙とはほぼ並列し、38土壙とは直列する位置関係である。長方形墓のみでみると、20・30・36～38土壙とで一つのまとまりを形成する。		







1 10YR6/4　にぶい黄橙色　小礫～粗砂混砂質中～細砂
2 10YR7/4　にぶい黄橙色　粗砂混砂質中～細砂
3 10YR8/4　浅黄橙色　細砂混中砂

0　(1:20)　1 m

千提寺クルス山遺跡 1 区　　38 土壙 地区割 3D1f-g

土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺 250 × 85 cm
	底面	□方形 □不整方形 ☒長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺 217 × 60 cm
			深さ 58 cm　軸方向 N-14° -E

上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

埋葬方法	推定土葬	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ○無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無	所見 頭蓋骨の検出状況から、伸展葬で、頭位を南に向けて埋葬されたとみられる。人骨からは土葬と鑑定された。

棺の形態	推定長方形木棺	所見	備考参照

人骨	性別 不明	年齢 不明	顔面方位 S(頭位)	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所見			

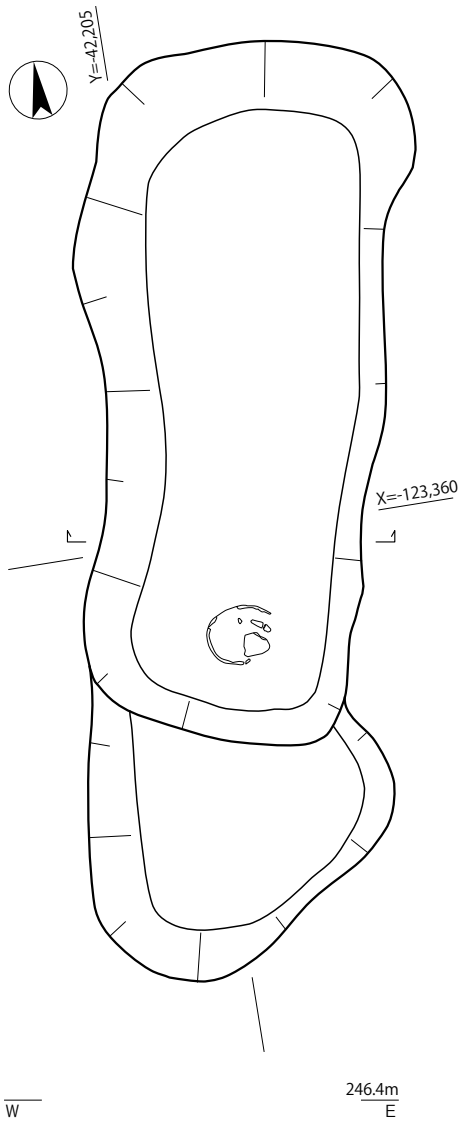
副葬品

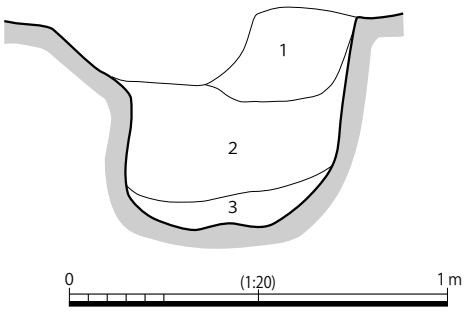
器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

名称	材質	数量	所見
釘	鉄	5	短小

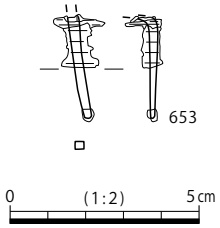
備考

尾根平坦部の中央部分、やや西側斜面よりの部分に位置する。土壙の南端に、浅く掘り窪めた箇所が付随するので、検出面の平面形態が長大でやや不整形だが、底面の形状をみると、37土壙とほぼ同規模であり、同規模の木棺が使用されていた可能性がある。37土壙とは直列する位置関係で、長方形墓のみでみると、20･30･36～38土壙とで一つのまとまりを形成する。なお、出土人骨の放射性炭素年代測定を行った結果、2σ暦年代範囲(確率95.4%)が1455-1524 cal AD(55.1%)、1559-1564 cal AD(1.3%)、1571-1631 cal AD(39.0%)であった。(第4章第2節参照)。





1 10YR6/4　にぶい黄橙色　小礫～粗砂混砂質中～細砂
2 10YR7/4　にぶい黄橙色　粗砂混砂質中～細砂
3 10YR7/3　にぶい黄橙色　小礫混砂質細砂



千提寺クルス山遺跡 1 区　　39 土壙 地区割 3D2e

土壙の形態	検出面	□方形 □不整方形 □長方形 □円形 ☒不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	128	×	100	cm
	底面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	83	×	62	cm
			深さ	105 cm	軸方向	不明	

上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

埋葬方法	土葬	所見 箱形木棺に胡坐座で遺骸を納めて土葬したとみられる。
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ○有 ◉無　蔵骨器 ○有 ◉無	

棺の形態	推定箱形木棺	所見

人骨	性別 女性	年齢 成人	顔面方位 N(頭位)	疾病 ○有 ◉無	備考
	歯	所見			

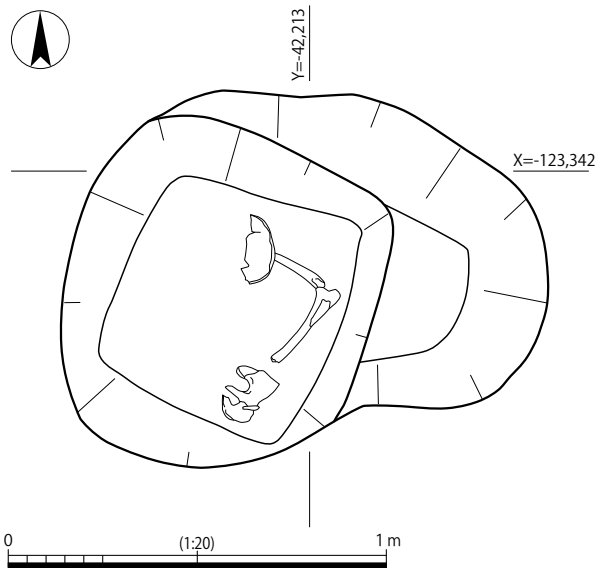
副葬品

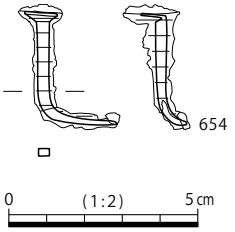
器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

名称	材質	数量	所見
釘	鉄	20	長大・短小

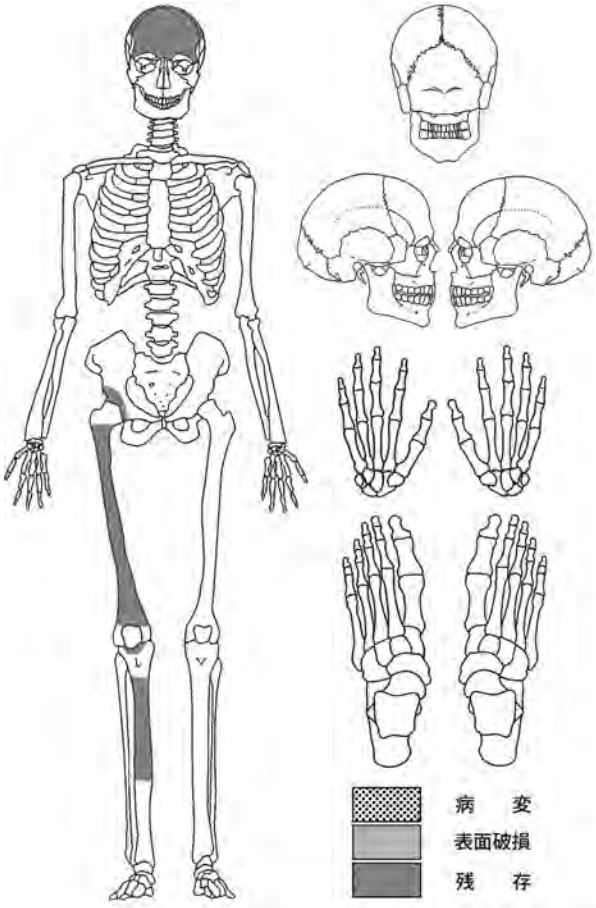
備考

尾根の西側斜面、北側の緩斜面に位置する。26土坑・33～35・39・40～44土壙とで一つのまとまりをつくる。40土壙とは横位置にほぼ接するように並ぶが掘削深度はこちらの方がやや深い。


Y=-42,213
X=-123,342
0
(1:20)
1 m


654
0
(1:2)
5 cm

654


病　変
表面破損
残　存

千提寺クルス山遺跡 1 区　　40 土壙 地区割 3D2e

土壙の形態	検出面	□方形 ☒不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	検出面直径・一辺	132 × 112 cm	
	底面	☒方形 □不整方形 □長方形 □円形 □不整円形 □不整形	底面直径・一辺	95 × 86 cm	
			深さ	75 cm	軸方向 N-14° -E

上部施設	○有 ◉無	構造	下部施設	○有 ◉無	構造・所見
		所見			

埋葬方法	土葬	骨 ◉有 ○無 被熱痕 ○有 ◉無 炭化物 ○有 ◉無 蔵骨器 ○有 ◉無	所見 膝を立てるようにして座った状態で座棺に納めて埋葬したとみられる。

棺の形態	推定桶形木棺	所見

人骨	性別 女性	年齢 成人	顔面方位 E(頭位)	疾病 ○有 ◉無	備考
	歯	所見			

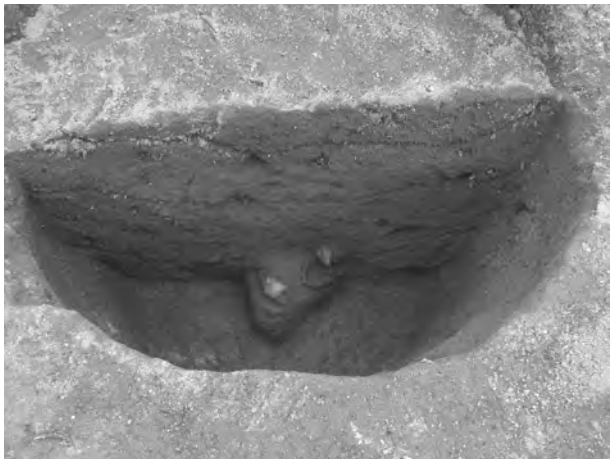
副葬品

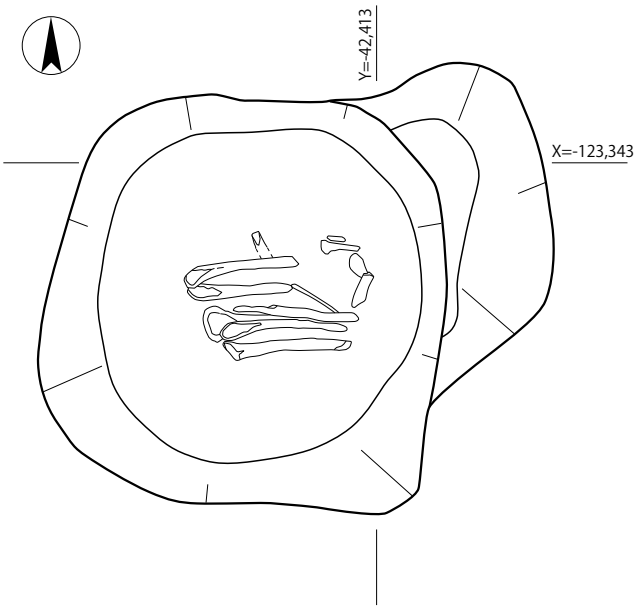
器種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘

名称	材質	数量	所見
釘	鉄	4	短小

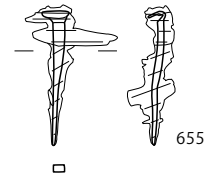
備考

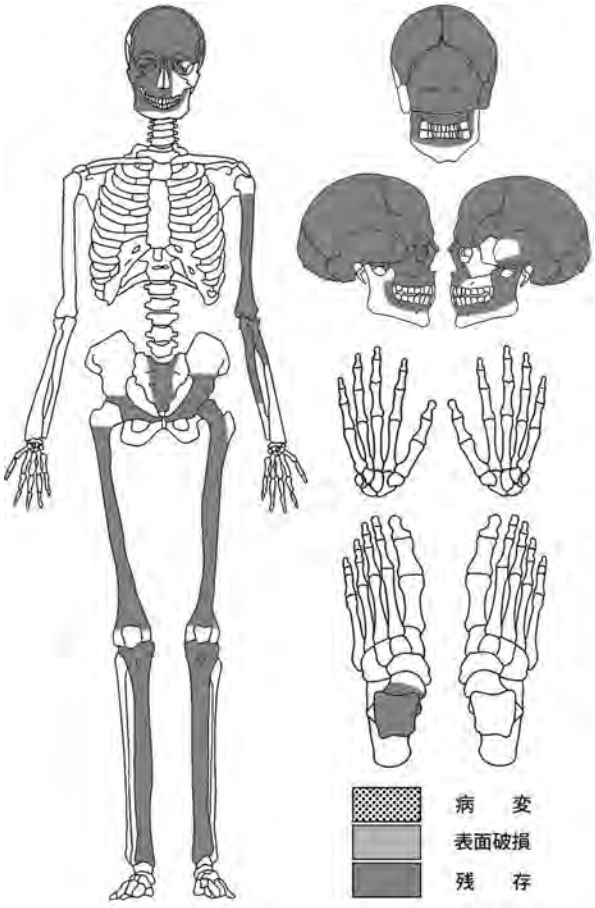
尾根の西側斜面、北側の緩斜面に位置する。26土坑・33～35・39・40～44土壙とで一つのまとまりをつくる。39土壙とは横位置にほぼ接するように並ぶが、掘削深度はこちらの方がやや浅い。




Y=-42,413
X=-123,343
0
(1:20)
1 m

655


655
0
(1:2)
5 cm


病　変
表面破損
残　存

千提寺クルス山遺跡 1 区　　43 土壙 地区割 3D2e

土壙の形態	検出面	不整方形	検出面直径・一辺	79	×	77	cm	深さ 100 cm
	底 面	方形	底面直径・一辺	58	×	55	cm	軸方向 N-68° -W

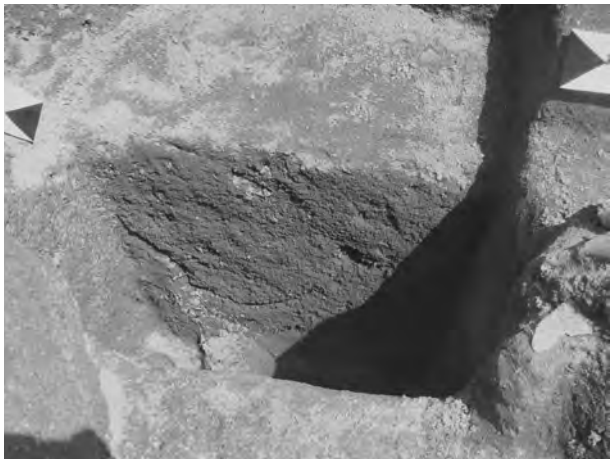
上部施設	○有 ◉無	下部施設	○有 ◉無

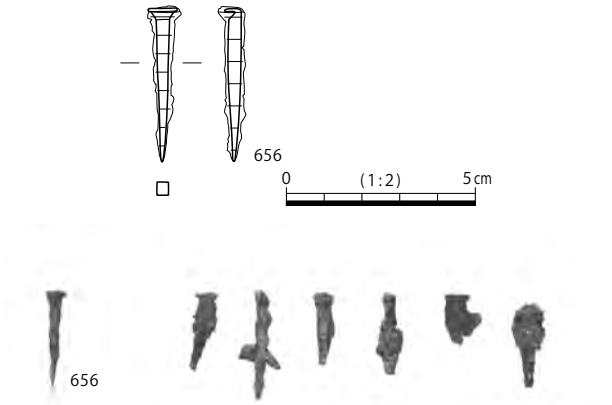
埋葬方法	土葬	所 見	座棺に胡坐座で埋葬したとみられる。	棺の形態 推定箱形木棺
	骨 ◉有 ○無　被熱痕 ○有 ◉無　炭化物 ◉有 ○無　蔵骨器 ○有 ◉無			

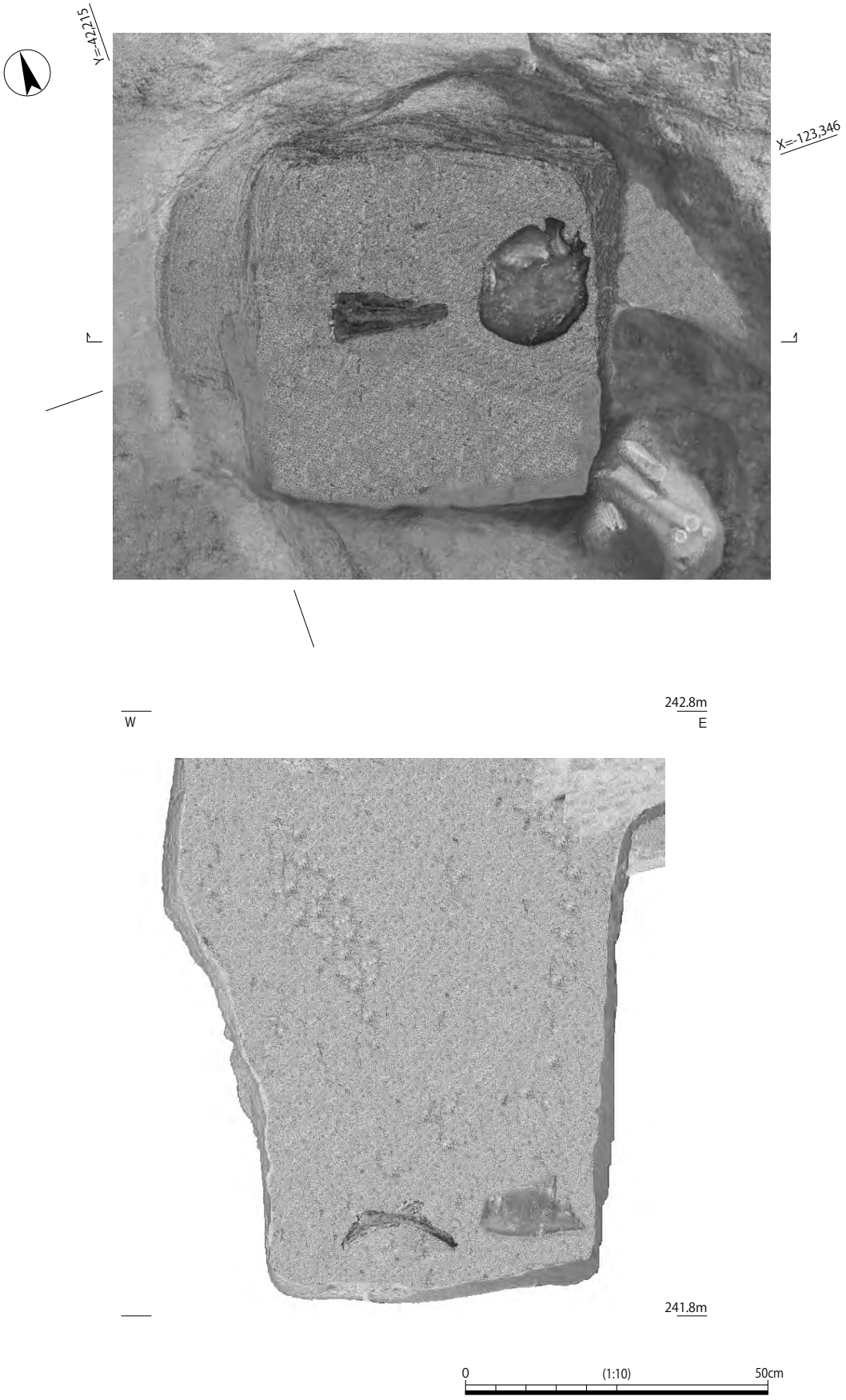
人骨	性別 不明	年齢 不明	顔面方位 E(頭位)	疾病 ○有 ○無	備考
	歯	所 見			

副葬品	器 種 □土器 □銭貨 □鉄製品 □土製品 □銅製品 □石製品 □木製品 □玉類 ☒釘			
	名 称	材 質	数 量	所 見
	釘	鉄	7	短小・長大

備考	尾根の西側斜面、北側の緩斜面に位置する。26土坑・33～35・39・40～44土壙とで一つのまとまりをつくる。この土壙が形成された後、中心をややずらしてほぼ重複する位置に35土壙が形成されたため、43土壙の上半部はほぼ削平されている。土壙の規模は隣接する33・34土壙と類似する。






Y=-42,215
X=-123,346
242.8m
W
E
241.8m
0
(1:10)
50cm

b．その他の遺構

26 土坑　丘陵西側斜面の緩傾斜部分で検出した（図 60・61・写真図版 43 － 1 ・ 2）。平面形は楕円形に近い不整円形で、長軸が 2.46 m、短軸が 2.15 m以上、深さは 21 ～ 45 ㎝である。短軸の長さが不明確なのは、この遺構に重複してケヤキが大きく根を張っており埋土がかく乱されていたこと、調査の過程で全体の形状を見極めないうちに、地表面で確認した炭化物層の分布範囲のみを残し、周囲を先に掘削したことによる。本来の炭化物層の分布範囲は、斜面下方に向けて、もう少しひろがっていたと考えられる。

埋土を除去すると、底面西側は固く焼けしまり、赤変する部分を認めた。埋土は炭化物中に、火葬骨片や釘が多量に含まれていた。また磁器碗や土師器の破片も出土した。

以上のことからこの遺構は、近世後半以降に使用された火葬場と考えられる。33 土壙と 44 土壙は 26 土坑埋土を掘削した後に検出された。したがってこれらの墓がおそらく無縁墓となった後、その部分が火葬場として使用されたのではないかと考える。

28 土坑　丘陵西側斜面の緩傾斜部分で検出した（図 60･61）。一部を 27 土壙に切られていることから、正確な平面形態はわからないが、おそらく楕円形に近い不整円形とみられる。大きさは検出面で長軸が 1.47 m、短軸が 1.20 mで、深さは 38 ㎝である。埋土は炭化物中に火葬骨片が多量に含まれ、土師器片や釘も出土した。この遺構の底面に近い部分で、自然石を 2 点検出した。 1 点は底面の平坦部に、他の 1 点は側壁の立ち上がり部分に位置する。それらは熱を受けて、石の表面の風化が若干進んでいるように見受けられるが、赤変するまでには至っていない。これらのことからこの遺構は、火葬場の可能性があると考える。

この遺構に後出する土壙が重複することからみて、近世に入り、土葬が一般的になる以前に使用された火葬場と捉えることができる。埋土から出土した土師器は口縁部片で、正確にその器形を復原することはできないが、近世の土師器に特有な胎土とは異なる印象を受けるものである。この遺構に近接する斜面の土壌化層を除去している際に出土した、少なくとも 2 個体分の土師器皿は、中世後葉の時期に含まれうるものである。以上のことからこの遺構は、中世後葉の火葬場の可能性がある。

23 土坑　丘陵西側斜面の緩傾斜部で検出した（図 60・写真図版 43 － 4）。平面形は楕円形で長軸長が 1.60 m、短軸長は 90 ㎝である。断面の形状は皿型で、深さは 20 ㎝と浅い。埋土は細かい炭化物が均等に混入する。また底面は被熱してわずかに赤みを帯びる。埋土に火葬骨片や遺物が含まれなかったため、火葬墓もしくは火葬場と積極的に判断できる根拠がなかった。千提寺クルス山遺跡 2 区で多数検出した焼土坑と同じ機能をもつとすれば、炭焼窯の痕跡と捉えられる。

24 土坑　道路状遺構の東肩付近で検出した（図 60・写真図版 43 － 5 ・ 6）。道路状遺構が埋積した後に形成された遺構である。平面形はわずかに楕円形に近い円形で、大きさは長軸長が 82 ㎝、短軸長は 72 ㎝である。深さは 10 ㎝程度であるが、前述したように遺構の上部は大半が削平された可能性がある。側壁は熱を受けて赤変し、埋土は炭化物を含む。千提寺クルス山遺跡 1 区で検出した土壙より、同 2 区で多数検出した焼土坑に類似する。

25 土坑　道路状遺構の東肩付近で検出した（図 60・写真図版 43 － 7 ・ 8）。道路状遺構が埋積した後に形成された遺構である。平面形は円形で、大きさは直径 95 ㎝である。深さは 17 ㎝程度であるが、前述したように遺構の上部は大半が削平された可能性がある。側壁は熱を受けて赤変し、埋土は炭化物を含む。前述の 24 土坑とは遺構の形状や検出状況が類似する。千提寺クルス山遺跡 1 区で検出した土

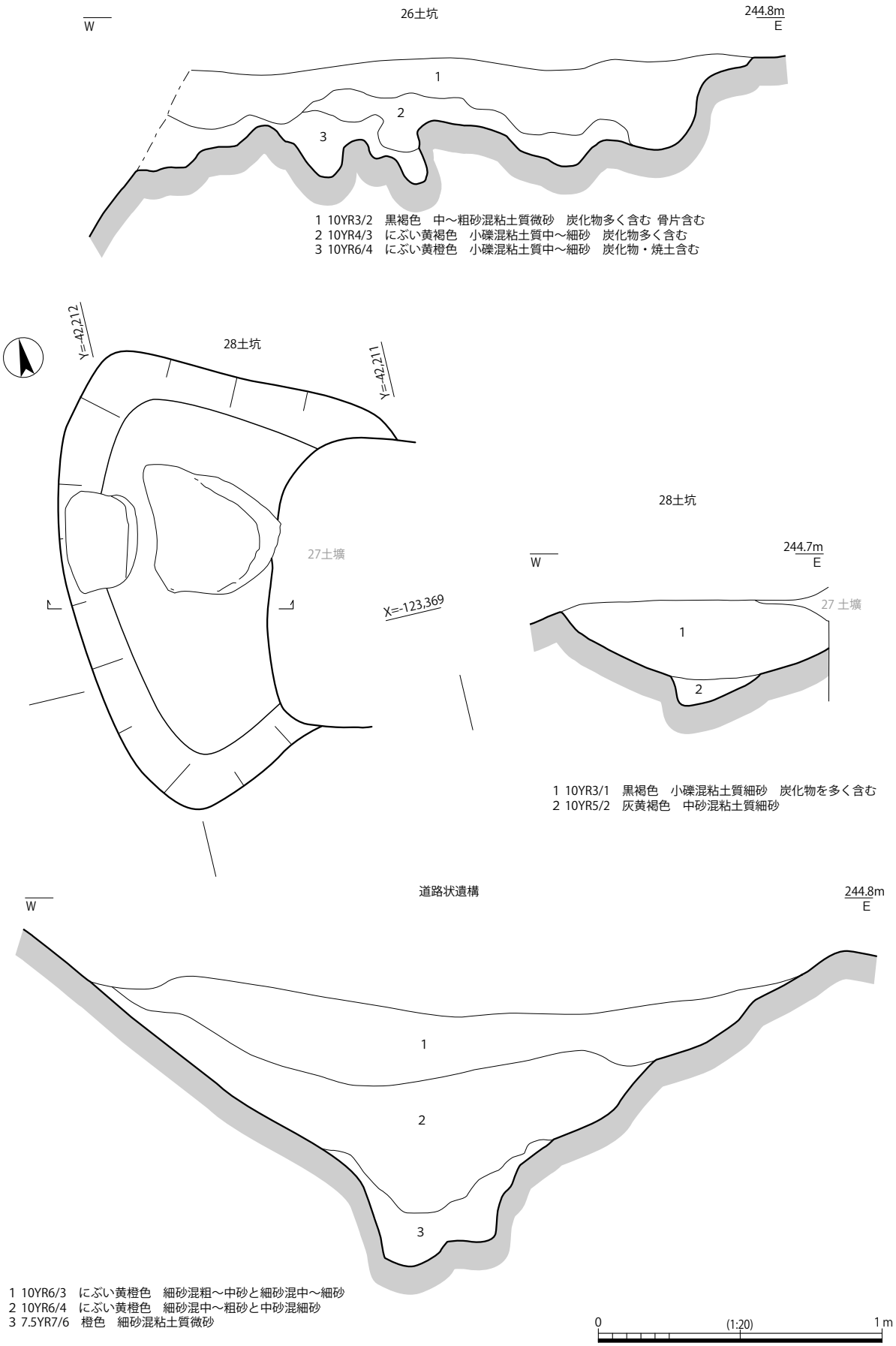


図 61　千提寺クルス山遺跡 1 区　26・28 土坑　平・断面図

壙より、同２区で多数検出した焼土坑に類似する。

32 ピット　丘陵西側斜面の緩傾斜部分で検出した 29 土壙の西側に位置する（図 60・写真図版 43 －３）。平面形態は楕円形で、長軸が 50 ㎝、短軸が 35 ㎝、深さは 15 ㎝である。遺物は出土しなかった。29 土壙の前面に置かれた墓碑もしくは花入れの痕跡だろうか。

道路状遺構　丘陵東側斜面の落ち際に沿って、ゆるやかに蛇行するように南東から北西にかけてのびる（図 60・61）。最も残りの良いところで 2.0 m以上の深さがある大規模なものである。この遺構に道の可能性をみる根拠は２点ある。ひとつは底面が平坦に整った、幅約 50 ㎝の溝状の段落ちが遺構の底部に認められること、ひとつは調査区の東側に現代の道が、この遺構に並行するように通っていたことである。1 区の北寄りの部分でこの遺構が途切れているのは、前述したように後世の地形改変に伴って、尾根筋が削平されたことによるのかもしれない。土層断面の観察によりこの遺構の下部は、地山とした花崗岩から崩落してきた風化土で、比較的短時間の内に埋積したことがうかがえる。埋土の中位から上部には、流水堆積層ほど顕著ではないものの、層理構造が認められた。周囲から供給される地山の崩落土に加え、降雨時に雨水によって運ばれた土砂の堆積が介在して、徐々に埋まったと考えられる。埋土から遺物が出土していないため、その成立時期を捉えることは難しい。

千提寺クルス山遺跡 1 区で検出した墓域は、他の調査区で検出された墓域と比べ、比較的多様な形態の土壙により構成されている点が特徴的である。その中で時期比定が可能な遺物を伴う土壙は必ずしも多くないが、ここでは遺構同士の重複関係や形態の類似性も参考にしながら墓域の形成過程を類推したい。

当区で出土した土壙に伴っていたとみられる土器は、中世前葉から近代までの時期に及ぶ。そのうち 31 土壙に伴うとみられる瓦器椀は、降っても 12 世紀中頃の時期に含まれると考える。ただこの土器と同時期のものは包含層資料の中にも含まれず、これが当区出土品の中では突出して古い印象を受ける。したがって当区で検出した遺構の中では 31 土壙が最も古く、これと同時期の遺構はもし丘陵上に存在したとしても、極めて数が限られると考える。そしてそれ以外の遺構は、中世後葉から近世を通じて形成されたと考えられる。

当区で検出した遺構の大半は墓とみられるが、それに混じって小規模な火葬場を複数箇所検出した。火葬場の可能性がある遺構のうち、墓の築造後に形成された 26 土坑は、埋土出土遺物により、近世後葉に比定できる。それに対し、墓の成立前に形成された 28 土坑は、中世後葉に位置付けられる可能性があり、両者は時間的に連続するものではない。そうであればここで検出した墓域では、火葬から土葬へ、その後また火葬へという埋葬方法の変遷が捉えられる可能性がある。次にこのような埋葬方法の違いと、土壙の大きさや形態がどのように関連付けられるかを検討したい。

検出した遺構のうち、土壙もしくは火葬場の可能性が高いと判断した遺構の深度を集計したものが図 62 である。これをみると、遺構の深さが 1.0 mを超えるものと、10 ㎝以上 90 ㎝未満のものに明確な区分があることがわかる。また後者に関してみると、深さが 20 ㎝前後のものと 50 ㎝前後のもの、80 ㎝前後のものという３箇所に小さなピークをもつことがわかる。

深さが 1.0 m以上の土壙に限り、底面の短軸長・長軸長をもとに土壙の大きさの分布状況を示したのが図 63 である。ここに挙げられる遺構はすべて、遺骨の出土状況などからみて、土葬墓と捉えられるものである。これらの遺構は必ずしも母数が多くないが、長軸長・短軸長ともにおおむね 60 ～ 90 ㎝

のなかに含まれ、規格性の高さがうかがえる。おそらくこの大きさが、成人の遺体を胡坐座もしくは両膝を立てて座った状態で納めるのに、最低限必要な木棺の大きさに由来すると考える。このタイプの土壙に土器が共伴する例は７土壙のみである。前項で述べたように、それは土師器皿の細片で、時期を明確に示すことは難しいが、最終段階の瓦器椀の破片が出土しているので、それ以降の時期であることは確かである。７土壙は近世後葉の磁器を伴う４土壙と重複し、先行する。７土壙と同タイプの27土壙は、中世後葉に比定できる28土壙と重複し後出する。したがって箱形木棺を土葬するこのタイプの墓（７・15・27・29・33・34・39・43土壙）は、近世前葉から中葉にかけての時期に形成された可能性を指摘できる。底面の形状から、このタイプの遺構には、方形もしくはそれに類する形状の箱形木棺を使用したものと、円形の桶形木棺を使用したものがあったことがわかる。ただそれらが通時的に併用されていたものか、時期的に使い分けられていたのかは不明である。

次に深さが1.0ｍ未満のものについて検討したい。図64をみると長軸長が40㎝弱から60㎝強、短軸長が30㎝弱から60㎝弱の範囲（一点破線で囲んだ範囲）と、長軸長が1.50ｍ強から1.80ｍ強、短軸長が40㎝強から60㎝の範囲（実線で囲んだ範囲）とに明確なまとまりが認められる。その間には、まとまりをもたずに点が散在する。このうち実線で囲んだ範囲に含まれている遺構は、長方形墓であり、規格性を認めることができる。なお30土壙は長方形墓と同様の規格を意識して造られたものと類推できることから、子供を埋葬した長方形墓と想定したい。

一点破線で囲った範囲に含まれる遺構をみると、炭化物を多量に含むものを２基含むが、それらを除くと類似する特徴を有する土壙が占める。すなわち埋土にわずかに炭化物を含み、平坦な底部から側壁がほぼ垂直に立ち上がり、整った形状に掘り窪められている土壙である。つまり一点破線内に含まれる遺構のうち、13・16・19・41－１・41－２・42・44土壙の規格性の高さが指摘でき、それらを同型式の遺構群と捉えることができる。骨の残存状況や遺構の大きさ、埋土にわずかに炭化物を含む状況にみると、それらは火葬墓と推測される。なおこれらの遺構から時期比定が可能な遺物は出土しなかったが、19土壙が長方形墓である18土壙の完掘後に検出されたことから、長方形墓が築造されるより以前に形成されていたものと捉えることができる。

当調査区で検出した長方形墓には、時期比定が可能な遺物を含むものはなかった。ただ14土壙では、中世後葉（15～16世紀）の墓の標石として据えていたとみられる石仏を転用し、土壙上面に敷き並べていた。これは千提寺西遺跡３・４区における長方形墓が、その検出状況から中世末葉から近世初頭の時期に築かれたとみられることと矛盾しない。そこで当調査区で検出した長方形墓も、千提寺西遺跡３・４区検出例と同時期に含まれると考えると、19土壙はそれより前に築かれていたことになる。さらに19土壙と同タイプの遺構も、同様の時間軸に位置付けられるとすれば、それらは中世後葉の時期に含まれうる。

ちなみに中世前葉の遺物を伴うとみられる31土壙は、全体の大きさを把握することはできないが、現状でも一辺が80㎝を超えることは明らかである。これを図64で比較すると、一点破線の範囲にも実線の範囲にも含まれないことがわかる。つまり31土壙は、中世後葉から末葉の火葬墓と類推できる遺構群とも、中世末葉から、近世初頭に比定される長方形墓とも異なる規格に含まれる。またその深さが1.0ｍを超えないことから、近世の土葬墓とも異なる可能性が高い。そこから唯一、中世前葉の遺物が出土したとみられる点を考慮すると、この時期に帰属する土壙は、中世後半以降のものとは別の規格だった可能性を指摘できる。なお31土壙の埋土には炭化物が含まれなかったことから、土葬の可能性

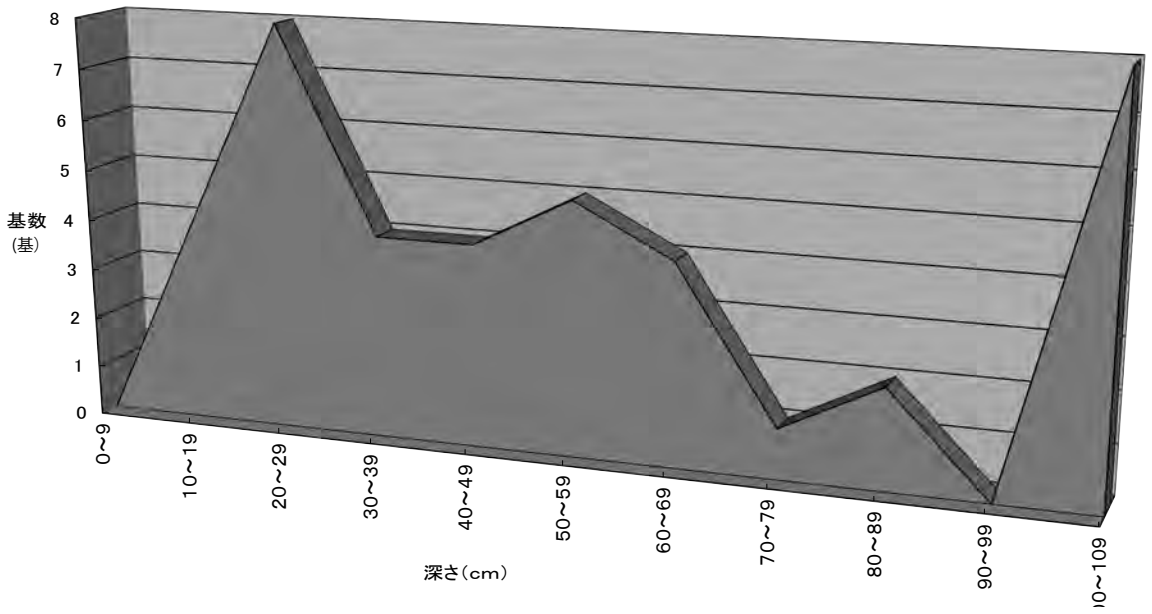


図 62　千提寺クルス山遺跡１区　土壙深度分布

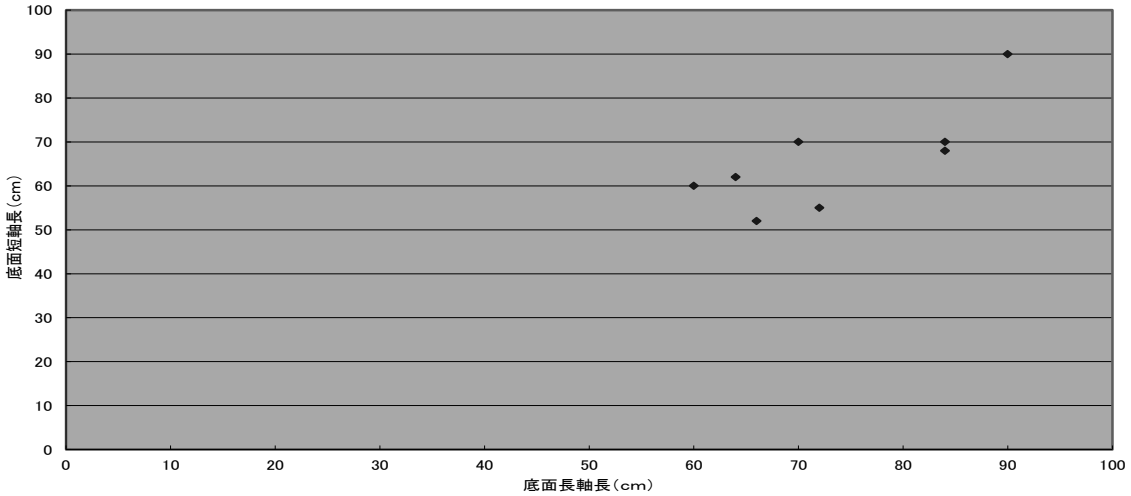


図 63　千提寺クルス山遺跡１区　土壙規模分布（深さ１m以上）

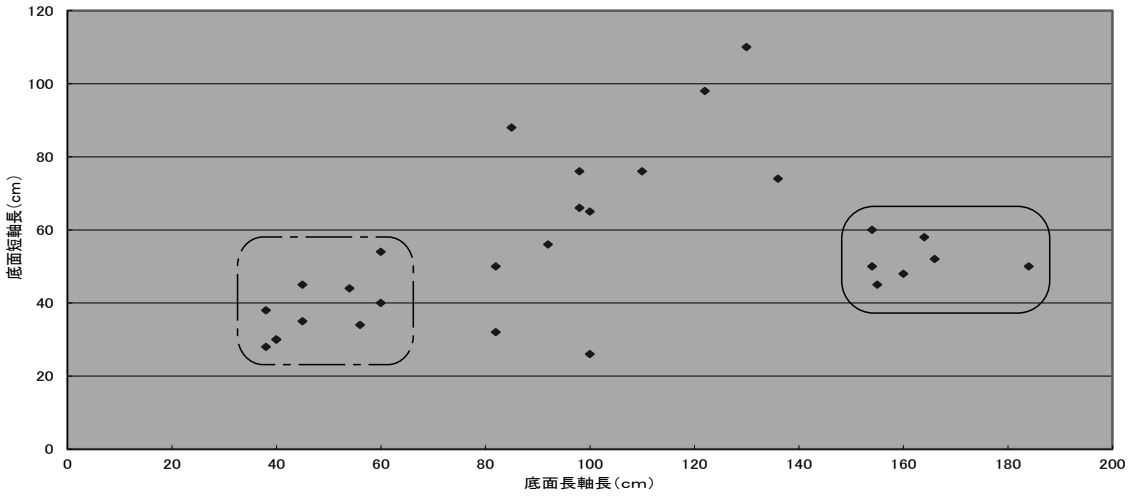


図 64　千提寺クルス山遺跡　土壙規模分布（深さ１m未満）

がやや高いかと考えるが、遺構の形状が不明であること、骨を検出しなかったことから断定はできない。

図 64 のうち、中世後葉の火葬墓とみられる土壙（主に一点破線で囲った中に含まれる）と長方形墓（実線で囲った中に含まれる）を除いた中で散在する点のうち、中世前葉の土壙と近世の土葬墓とみられる土壙を除くと、大半は近世後葉以降の火葬墓とみられる遺構である。例外は 23・26・28 土坑で、火葬場と推測した遺構である。これをみると近世後葉の火葬墓は、大きさがまちまちで、特に決まった形態がなかったように見受けられる。掘形も不整形で、深さは約 20 ㎝と概して浅い。ただ平面形が大きいものほどやや深い傾向がある。

以上を念頭において、千提寺クルス山遺跡 1 区で検出した墓域の形成過程をまとめると次のようになる。中世前葉に丘陵頂部に造られた墓が、当墓域では最も時期の古いものである。ただこの時期の墓は、調査区内では 1 基が認められただけだったため、その実態は不明である。中世後葉になると、丘陵西側斜面の北側と、丘陵尾根筋とで火葬墓が築かれる。この時期に含まれるとみられる土壙は、丘陵尾根筋上では 5 m以上の間隔で散在するのに対し、西側斜面に形成されるものは、斜面際に沿うように近接して設けられる傾向がある。丘陵西側斜面の 2 箇所の緩傾斜部のうち、この時期の土壙が配置されない南側の方には、同時期に含まれる可能性のある火葬場が位置する。丘陵尾根上及び西側緩傾斜面の北側上では、火葬場を検出しなかったことを考え合わせると、墓を築く場所と火葬場とは、近接しつつも場所が区別されていた可能性がある。

中世末葉から近世初頭の時期には丘陵尾根筋でキリシタン墓とみられる長方形墓が構築されている。それらは丘陵尾根の中央部から西側肩部にかけての場所に、尾根筋の方向に沿わせるように直列して位置する。小児用とみられる長方形墓のみ、わずかにその南端部を成人用とみられる長方形墓によって切られるが、それ以外のものは重複しない。近世以降の土壙にも長方形墓に重複するものがないことから、もとは何らかの上部構造があり、後年に墓を造るにあたって、長方形墓と重複することを避けた可能性がある。なお、長方形墓のうち、頭蓋骨が残存していたものはすべて南側に頭位をもって埋葬されていた。

近世以降になると座棺を用いた土葬墓が、丘陵頂部と丘陵西側の 2 箇所の緩傾斜部分とに築かれる。近世土葬墓の遺構密度は場所によって差があり、西側緩傾斜部の北側、西側緩傾斜部の南側、丘陵頂部の順に遺構密度は低くなる。一方、近世火葬墓は丘陵頂部東肩から丘陵東側緩傾斜部にかけての範囲のみに、密集して設けられている。それら近世火葬墓と時期的に対応する可能性がある火葬場は、西側緩傾斜部の北側で認められている。現時点で両者の対応関係は確定できないが、少なくとも丘陵頂部で火葬場を検出していないことから、墓地と火葬場は区分されていた可能性が高い。ただ近世火葬墓の埋土には、人骨だけでなく炭化物や釘なども含まれていることから、遺骸を火葬後、骨を焼却灰ごと集めて埋葬したと考えられる。近世土葬墓と近世火葬墓との偏在は、西側緩傾斜部の北側にある 26 土坑（近世火葬場）と 33 土壙の検出状況を勘案すると、時期差を反映している可能性をうかがわせる。ただ当調査区が墓域として機能していた時期の記憶がある地元の方によると、丘陵頂部と西側緩傾斜部とでは、それぞれを墓域として管理していた家族が異なっていたという意見もあり、近世後半以降は立地を違えて土葬と火葬が並存していた可能性もある。

なお、38 土壙出土人骨は放射性炭素年代測定を実施し、15 世紀後半～ 17 世紀前半の暦年代範囲が示された（第 4 章第 2 節参照）。

第３節　集落域の調査

（１）　千提寺西遺跡 11 － 1 － 1 ～ 4 区

千提寺西遺跡 11 － 1 － 1 ～ 4 区は、千提寺西遺跡 3・4 区「墓の丸」の丘陵の南東側に位置する。「墓の丸」の丘陵東側の中腹には、「墓の丸」の南側谷部に設定した 9 区の東側を通り、天満宮御旅所へつづく道が通っており、この道の東側に千提寺西遺跡 11 － 1 － 1 ～ 4 区を設定した。11 － 1 － 1 区の南側の道には、崖の裾近くに「庚申塚」があり、地元の方々の信仰を集めている（図 9 ・写真 24）。本区は千提寺西遺跡で最初に発掘調査を実施した箇所である。

11 － 1 － 1 区

11 － 1 － 1 区は同 1 ～ 4 区のなかで最も南側に位置し、千提寺西遺跡の遺跡範囲の南東隅にあたる。東側へ向かって下降する谷部であり、調査前は、南北方向に幅広の棚田が、西から東へ向けて下降しながら連なっていた。調査区南側には、急峻な丘陵があり、その裾に沿って用水路が東へ向かって流れる。水量は豊富であり、山の湧水を源とする清流である。当区は南側にそびえる丘陵のため、日照時間が短い場所であった。

近現代の耕土、及び棚田造成土を第 1 層とし機械掘削で除去後、遺物を包含する灰黄褐色シルトを第 2 層、その下層の灰色シルトを第 3 層とした（図 16・写真図版 7 － 2 ～ 4）。第 2 層と第 3 層は各々その下位で細砂の混入が認められるため、第 2 － 1 層、第 2 － 2 層、第 3 － 1 層、第 3 － 2 層とした。その下層は自然石を含む微砂混じりシルト層がつづき、遺物が出土しないことからこれを地山とした。谷の埋積土とみられる。第 2 層は土師器片、瓦器片、陶器片など中世の遺物が主であるが、わずかに染付片が含まれることから中世～近世に位置付けられる。第 3 層は土師器片、瓦器片、陶器片など中世の遺物が主であり、なかでも 13 世紀前後の遺物が多い。また、少量ではあるが、10 世紀前後の土師質羽釜片が含まれることから古代末～中世に位置付けられる。第 2 － 1 層と第 2 － 2 層除去後面を第 2 面、第 3 － 1 層、第 3 － 2 層除去後面を第 3 面とした。

第 2 面では、棚田を検出し、西側の高い部分でピット、土坑、畦畔を、東側の低い部分で、土坑、溝を検出した（図 65 ～ 67・写真図版 45・46）。

西側の高い部分では、11 － 1 － 2 区との境で、25・27 ～ 30 ピットと 24・26 土坑を検出した。ピットは直径 20 ～ 30 ㎝、深さ 15 ～ 30 ㎝を測り、大きさ、深さは不揃いである。間隔も一定ではないことから建物や柵に関わるものではない。段落ち際の土留めに使用された杭の痕跡かと考える。土坑は段落ち際にあり、埋土下層が微砂～粗砂であることから、棚田の水口とみられる。畦畔はその段落ち下で等高線に沿って検出されており、棚田に伴うものと考えられる。棚田は幅 1 ～ 3 mの狭小なもので、谷頭に向かって幅が狭くなる。東側の低い部分では、二種類の土坑が検出された。18・20・22 土坑は円形で炭化物が埋積するもので、底面の一部に被熱痕跡がある。遺物は出土しない。性格は不明であるが、同種の遺構は、千提寺西遺跡のほか、千提寺市阪遺跡、千提寺クルス山遺跡においても多く検出されている。17・19 土坑は、溝の肩部や底部に位置し、水口とみられる。17 土坑では曲げ物が出土することから、いったん水を溜めたのであろう。溝は、調査区の南端に沿って 3 溝がはしる。3 溝は微砂～粗砂が堆積し、溝底では大小の自然石が検出された。現在の用水路が整備される以前の溝とみられる。その他、11 ～ 13・23 溝は、ほぼ南北方向に、等高線に沿ってはしる。いずれも肩部が不明瞭な浅いものであり、棚田の段下に伴う溝と考えられる。

第３面では、顕著な遺構は検出されなかった。

11－1－2区

11－1－2区は、天満宮御旅所へつづく道に沿う調査区であり、同1区と同3・4区が位置する谷部に挟まれた小さな尾根部にあたる。調査前は、北側が道に沿った狭い平坦面、南側が同1区の棚田に向かって落ちる急斜面であった。

北側では表土、南側では近現代の耕土、及び棚田造成土を第1層とし機械掘削で除去後、遺物を包含する灰黄褐色シルトを第2層とし、その下層は花崗岩からなる地山に至る。第2層の出土遺物はわずかであり、土師器片、瓦器片、陶器片に染付を含む磁器片が含まれることから中世～近世に位置付けられる。第2層除去後面である地山上面を第2面とした（図16・写真図版7－5）。

第2面では、北側の高い部分でピット、土坑を、南側の低い部分で、棚田とともにピット、溝を検出した（図65・68・写真図版47）。

北側の高い部分では、中央で34土坑を検出した。半円形状に検出され、当初遺構かと考えたが、底面は東に向かって下降していることから小さな谷になるものと考える。45土坑は、底部から、親指大から拳大の黒色と白色の石英の塊が8点出土した。他に遺物は出土していない。地山がやや汚れたような状態で検出され、埋土がしまっていることから、他の遺構とは異なり古い様相を示す。埋土にブロック土が含まれることから、風倒木痕の可能性もある。南側の低い部分では、段落ちとともに幅約2mと1mの平坦面を検出し、溝とピットを検出した。棚田とそれに伴う溝とみられる。

11－1－3・4区

11－1－3・4区は、千提寺西遺跡3区「墓の丸」の南側谷部に設定した千提寺西遺跡9区の東側につづく谷部である。ここは、土置場がないために二分割し、西側を11－1－3区、東側を11－1－4区として調査したが、検出された遺構は一連の棚田であるため、まとめて報告する。

調査前は、調査区の西側、9区との境に道が通り、道の東側は高さ約3mのコンクリート擁壁であり、その裾から南北方向に幅広の棚田が、西から東へ向けて下降していた。調査区南側は、11－1－2区が位置する小さな尾根であり、その裾に沿って用水路が東へ向かって流れる。11－1－1区同様、ここでも水量が豊富な清流である。道際となる用水路の西端は、地山の花崗岩を削り出しており、近代以降の整備であろう。

層序、面ならびに各層出土遺物の様相は、基本的に11－1－1区と同じである。ただし、第3層は土師器片、瓦器片、陶器片など中世の遺物が主であり、10世紀前後の遺物が含まれないことから中世に位置付けられる。本区では、谷部における地山の確認のため、第3面よりサブトレンチを入れ、下層確認を実施した。その結果、シルトと微砂～細砂の互層がみられ、一部で灰色のしまった細砂に至ったことから、これを地山と考えた。下層の確認において遺物は出土しなかった（図16・写真図版7－6～8・8－1）。

第2面は、11－1－3区の北端、南端が高くその間が窪んだ状態で11－1－4区へと下降する。窪んだ箇所では、主に棚田を検出し、その他ピット、溝、落込みを検出した（図65・69・写真図版48・49－1～4）。

ピットはいずれも直径20～30㎝、深さ10～20㎝の浅い皿状のものである。土留めの杭の痕跡であろうか。溝は等高線に沿って、11－1－3区では10・11溝が弧状に、11－1－4区では弧状の2溝が直線状の1溝に先行する状態で検出した。いずれも肩部が不明瞭な浅いものであり、棚

X=-123,560
54ピット
57ピット
58ピット
56ピット
52ピット
50溝
49ピット・土坑
11－1－3・4区　第3面
X=-123,560
11－1－4区
1溝
2溝
7ピット
5・6ピット
3落込み
Y=-42,260
10溝
15ピット
11溝
21ピット
X=-123,600
Y=-42,280
11－1－3区

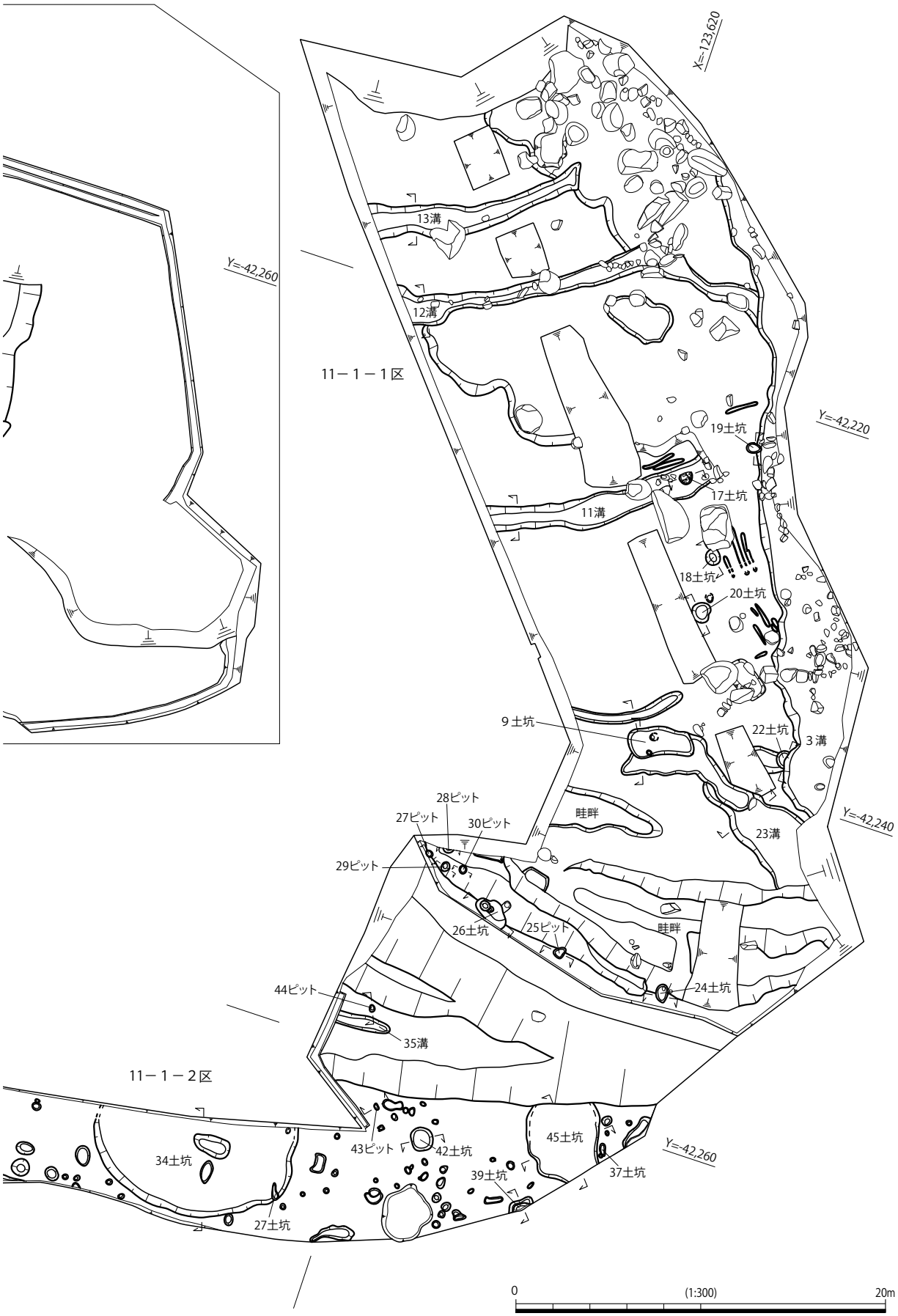
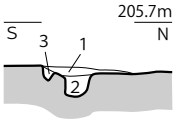


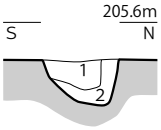
図65　千提寺西遺跡11－1－1～4区　第2・3面　全体平面図

25ピット



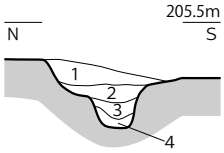
1 10YR5/2　灰黄褐色　シルト
2 10YR6/2　灰黄褐色　シルトに
　10YR6/6　明黄褐色　シルト
　直径１センチの地山ブロック含む
3 10YR6/3　にぶい黄橙色　微砂混シルト

27ピット



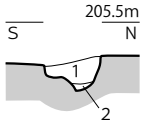
1 10YR5/2～4/2　灰黄褐色　シルト
2 10YR6/2　灰黄褐色　シルトに
　10YR6/6　明黄褐色　シルト
　直径２～３cmの地山ブロック含む

28ピット



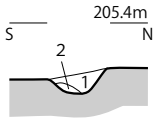
1 10YR5/2～4/2　灰黄褐色　シルト
2 10YR5/2　灰黄褐色　細砂混シルト
3 10YR6/2　灰黄褐色　微砂混シルト
4 10YR6/2～7/2　灰黄褐～にぶい黄橙色
　微砂混シルト

29ピット



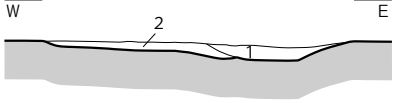
1 10YR5/2～4/2　灰黄褐色　シルト
2 10YR6/6　明黄褐色　シルト
　地山ブロックに
　10YR6/2　灰黄褐色　シルト含む

30ピット



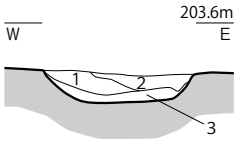
1 10YR5/2　灰黄褐色　シルトに
　10YR6/6　明黄褐色　シルト
　地山ブロック含む

9土坑



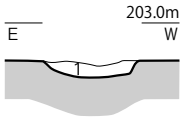
1 10YR6/1　褐灰色　微砂混シルト
2 10YR7/1　灰白色　微砂

18土坑



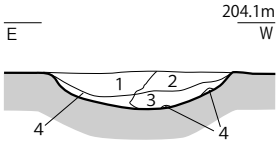
1 10YR6/2　灰黄褐色　シルトに
　直径0.5cmの炭化物少量含む
2 10YR6/1　褐灰色　シルトブロックに
　直径３～７cmの炭化物入る
3 10YR2/1　黒色　炭化物
4 5YR5/4　にぶい赤褐色　シルト（被熱痕）

19土坑



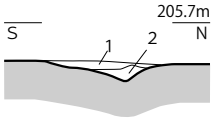
1 5BG6/1　青灰色　シルト

22土坑



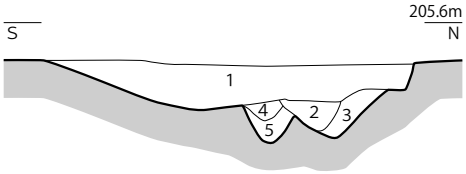
1 10YR6/2　灰黄褐色　シルトに炭化物
　直径１～２cm含む
2 10YR7/1～6/1　褐灰～灰白色　微砂混シルト
3 10YR7/2　にぶい黄橙色　細砂～粗砂
4 10YR2/1　黒色　シルト（炭化物）

24土坑



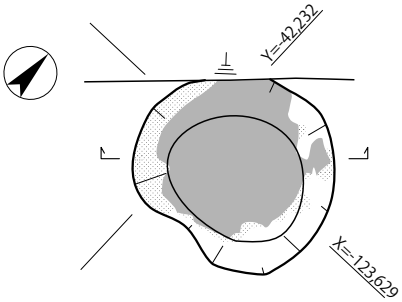
1 10YR5/2　灰黄褐色　しまったシルト
2 10YR6/2　灰黄褐色　しまった微砂

26土坑

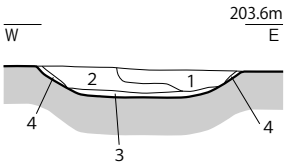


1 10YR5/2　灰黄褐色　シルトに
　10YR6/6　明黄褐色　シルト　直径３～５cmの地山ブロック含む
2 10YR6/2　灰黄褐色　細砂～粗砂
3 10YR6/2　灰黄褐色　しまった微砂
4 10YR7/1～7/2　灰白～にぶい黄橙色　細砂～粗砂
5 10YR6/2　灰黄褐色　微砂

0　(1:40)　2m

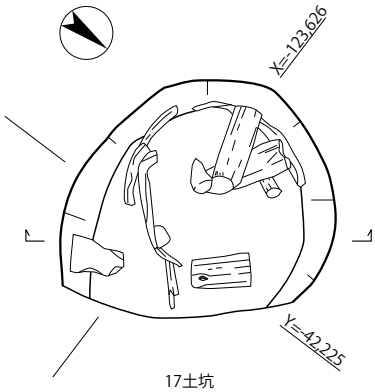


20土坑



1 7.5YR5/1　褐灰色　シルトに炭化物直径0.5cm少量含む
2 7.5YR5/1　褐灰色　シルトに
　5Y5/2　灰白色　シルト（３層地山）ブロック直径３cm含む
3 10YR2/1　黒色　炭化物
4 5YR5/4　にぶい赤褐色　シルト（被熱痕）

0　(1:40)　2m



17土坑

0　(1:20)　1m

図 66　千提寺西遺跡 11－1－1区　ピット・土坑　平・断面図

田の段下に伴う溝と考えられる。3落込みは微砂～細砂が堆積し、底部では一部、自然石を検出した。現在の用水路が整備される以前の溝とみられる。

弧状または直線状の溝で区画された部分が1枚の棚田になるとみられ、弧状の溝より直線状の溝が後出することから、谷の中央部分で等高線に沿って設けられていた棚田が、その後の改変で谷の幅いっぱいに幅を拡張し、これに伴い段下の溝も直線状になった棚田の変遷が考えられる。

第3面では、棚田を検出し、棚田に伴う段落ち、溝のほか、調査区中央周辺でピットを検出した（図65・69・写真図版49－5～8）。

52･54･56～58ピットは直径20～30㎝、深さ10～30㎝を測る。段落ち下に集中することから、土留め、あるいは溝の肩部に打たれた杭の痕跡であろうか。

以上の成果から、本区では次のような変遷が考えられる。

11－1－1区では、第3層から10世紀前後の土師質羽釜片が出土している。第3面では遺構として棚田は確認できなかったが、第3層は同1区の谷部中央でほぼ同じ層厚で堆積していることから耕土とみられる。同1区の開発は10世紀前後までさかのぼる可能性がある。一方、11－1－3・4区では10世紀前後にさかのぼる遺物はみられないため、この時期にはまだ開発が及んでいないと考えられる。11－1－1区が位置する谷は、清阪街道まで至る谷幅が大きな谷筋であり、同3・4区が位置する谷は、そこから派生する。谷幅が小さな谷であることから、開発の時期に時間差が生じたものと考える。

11－1－1区、同3・4区ともに、第2・3層出土遺物は13世紀前後のものが多いことから、この時期には、同1区に加え同3・4区においても棚田がひろがる景観が復原できる。また11－1－1区の棚田はこの時期、すでに谷頭まで開発が及んでいた可能性がある。

11－1－3・4区では、谷の中央部分で等高線に沿って設けられた棚田が、その後の改変で谷の幅いっぱいに幅を拡張し、棚田1枚あたりの面積を拡張したと考えられる。棚田に伴う溝は、近世の磁器を含まず、中世の遺物が出土していることから、こうした棚田の拡張は中世のなかでおこなわれた可能性が考えられる。

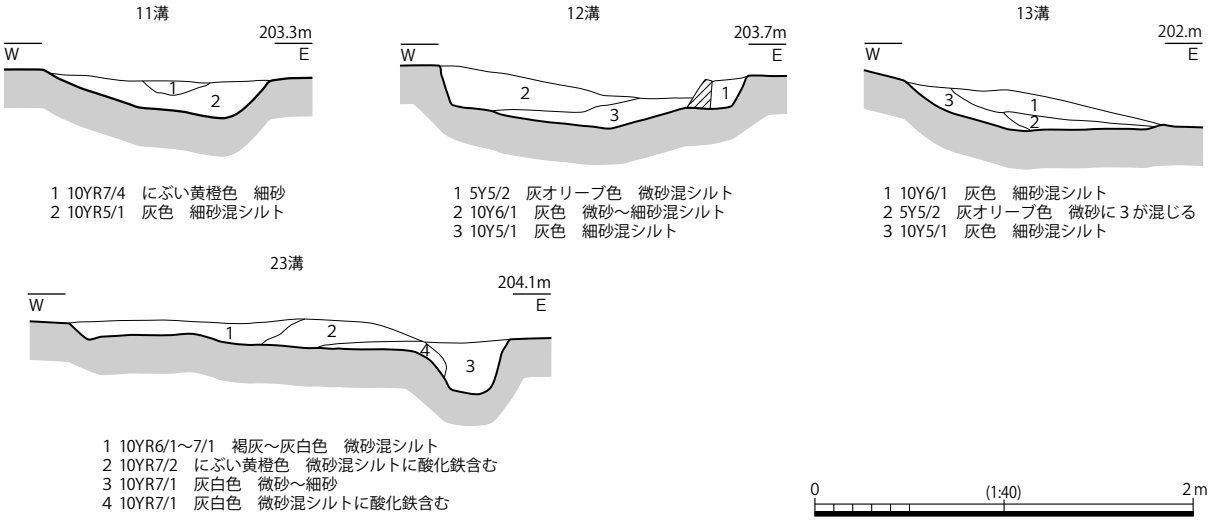


図67 千提寺西遺跡11－1－1区 溝 断面図

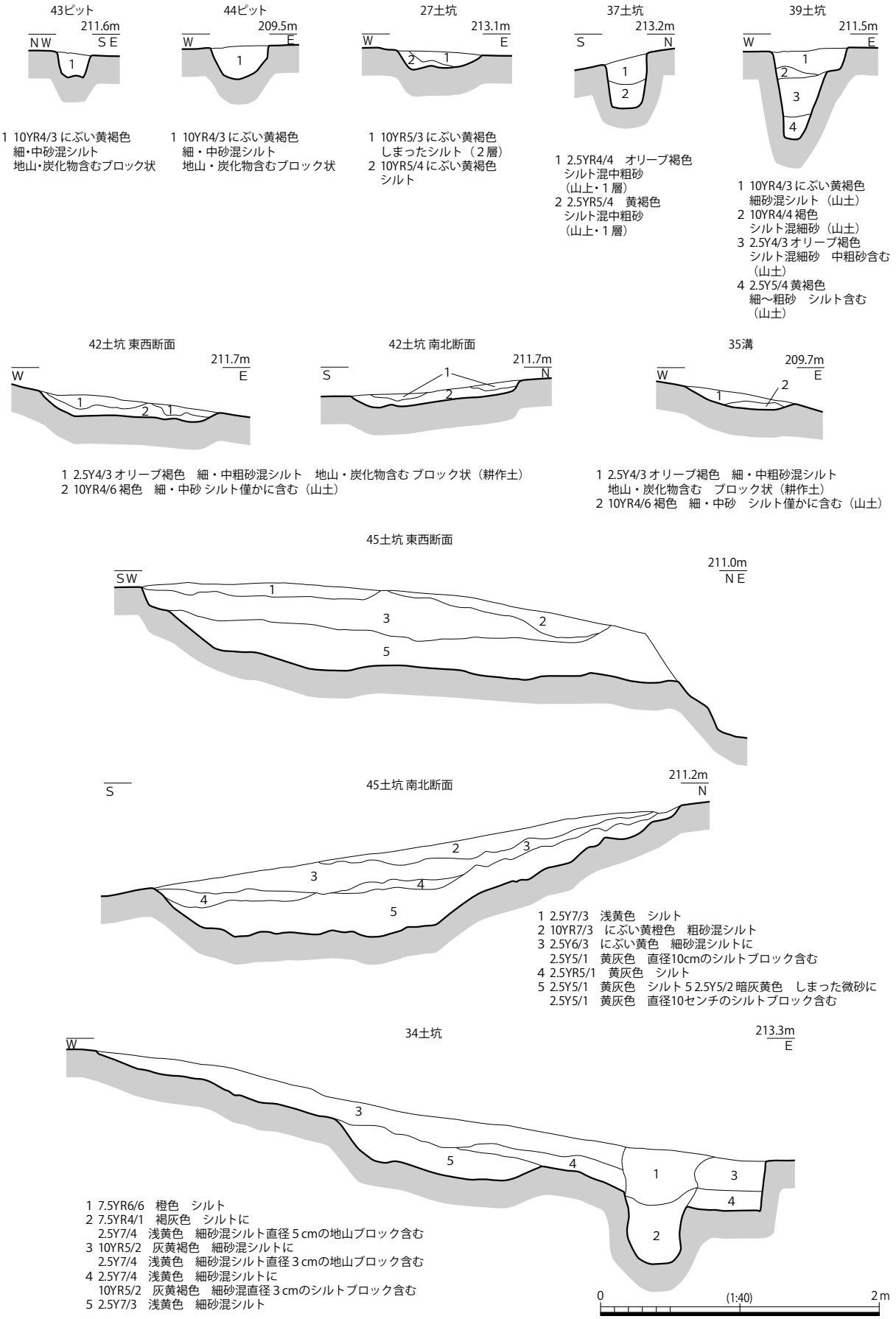
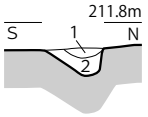


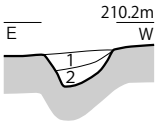
図 68　千提寺西遺跡 11 － 1 － 2 区　ピット・土坑・溝　断面図

21ピット



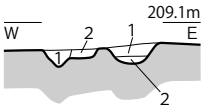
1 10YR6/2　灰黄褐色　微砂混シルト
2 10YR6/3　にぶい黄橙色　シルト

15ピット



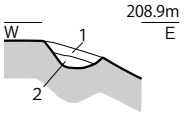
1 10YR7/2　にぶい黄橙色　微砂～細砂
2 10YR6/2　灰黄褐色　微砂混シルト

5ピット・6ピット



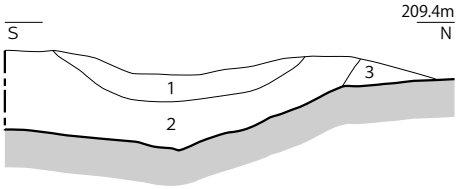
5ピット
1 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト
2 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルトに
　10YR6/8　明黄褐色　直径３cmの礫含む
6ピット
1 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト
2 10YR6/2　灰黄褐色　微砂混シルト

7ピット



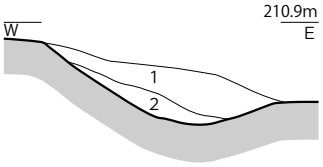
1 10YR6/2　灰黄褐色　シルト
2 10YR6/3　にぶい黄橙色　シルト

3落込み



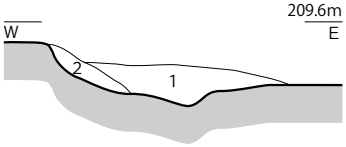
1 10YR6/2　灰黄褐色　微砂に
　10YR5/1　褐灰色　シルトブロック含む
2 10YR6/3　にぶい黄橙色　微砂～細砂に
　10YR5/1　褐灰色　シルトブロック含む
3 10YR6/2　灰黄褐色　しまった微砂混シルト

11溝



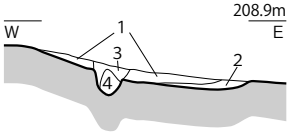
1 10YR6/3～6/4　にぶい黄橙色　細砂～粗砂に
　10YR7/6　明黄褐色　直径３～10cmの粘土ブロック
2 10YR5/6　黄褐色　微砂～細砂

10溝



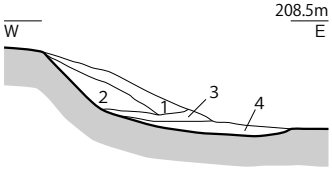
1 10YR6/3～6/4　にぶい黄橙色　細砂～粗砂に
　10YR7/6　明黄褐色　直径３～10cmの粘土ブロック含む
2 10YR5/6　黄褐色　微砂～細砂

2溝



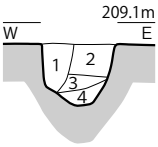
1 10YR6/2　灰黄褐色　微砂
2 10YR6/2～6/1　灰黄褐色～褐灰色　微砂混シルト
3 10YR7/1　灰白色　細砂
4 10YR6/1　褐灰色　シルト

1溝



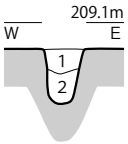
1 10YR7/2　にぶい黄橙色　微砂に
　10YR6/6　明黄褐色　シルトブロック含む
2 10YR6/2　灰黄褐色　細砂
3 10YR7/2　にぶい黄橙色　微砂
4 10YR6/1　褐灰色　微砂混シルト

52ピット



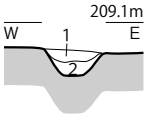
1 5YR5/3　灰オリーブ色　細・中砂
　シルトブロック含む
2 5Y5/4　灰オリーブ色　細・中砂
　シルトブロック含む
3 5Y5/2　灰オリーブ色　細・中砂
　シルトブロック含む
4 5Y5/1　灰色　細砂
　シルトブロック含む

54ピット



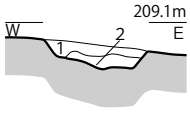
1 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色
　細～粗砂混シルト　細礫・炭化物含む
2 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色
　細砂混シルト　中砂含む

56ピット



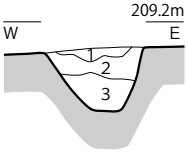
1 2.5Y/4/2 暗灰黄色
　シルト混中粗砂　細砂、炭化物含む
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
　細砂混シルト　中砂含む

57ピット



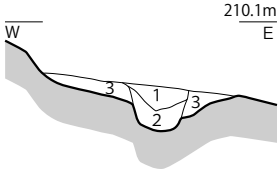
1 2.5Y4/2 暗灰黄色
　シルト混中粗砂　細砂・細礫含む
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
　細砂混シルト　中粗砂含む

58ピット



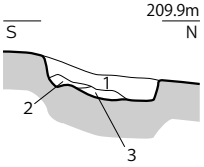
1 2.5Y4/2 暗灰黄色
　シルト混細～粗砂　細礫・炭化物含む
2 2.5Y4/2 暗灰黄色
　細・中砂混シルト　炭化物含む
3 2.5Y4/3 オリーブ褐色
　細・中砂混シルト　炭化物含む

49ピット・土坑



1 2.5Y4/2 暗灰黄色
　細砂混シルト　中粗砂含む
2 5Y3/2 オリーブ黒色
　細・中砂混シルト　粗砂・炭化物含む
3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
　細・中砂混シルト　粗砂含む

50溝



1 2.5Y4/2 暗灰黄色
　細～粗砂混シルト　炭化物含む
2 2.5Y4/2 暗オリーブ褐色
　細・中砂混シルト　炭化物多く含む
3 2.5Y4/2 にぶい黄褐色　細・中砂

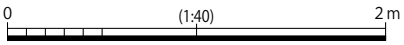


図69　千提寺西遺跡11－1－3・4区　ピット・落込み・溝・土坑　断面図

（２）千提寺西遺跡１区

１区は、「墓の丸」の丘陵の東側斜面裾部に位置する棚田に設定した調査区である。調査前は、東西方向に幅広の棚田が、北から南に向けて下降しながら連なっていた。１区はその棚田の西寄りで、丘陵斜面に接する一角にあたる。調査区の西辺で、丘陵の東斜面際にあたる部分は、石組やコンクリートで所々を護岸した水路が流下しており、調査対象から除外した。

現代の耕作土と床土、及び近世以降に水田区画のために施されたとみられる盛土を第１層とし、重機で除去した。第１層を除いたところ、現代の水田区画では、調査区内で最上段にあたる部分において、下層に暗灰色粘質土層の遺物包含層が分布するのを認めたため、これを第２層とした。また、調査区の北東角をしめる部分は微高地を呈することがわかった。その微高地西端の緩傾斜部分では、第１層を除去した段階で直径 50 ㎝を超える大きな自然石が多数出土した。それらの天端の標高はおおむね T.P.220 m前後だったことから、おそらく水田造成の際にその高さを超えるものは除去して、水田耕作面を整えたと考えられる。なお調査区北縁の東寄りの部分で検出した平坦部において、直径約 30 ㎝の自然石を線状に敷き並べた遺構を検出したが、これは暗渠と捉えられる。

第２層の分布域においては、第２層を除去した段階で地山面を検出したが、第２層の分布域外では、おおむね第１層を除去した段階で地山面を検出した。一方、調査区の北東部分をしめる微高地の西側裾部では、第２層より下に、旧谷地形の最終埋積土と、それを基盤層とする土壌化層が堆積する部分があったので、これを第３層とした。

地山はおおむね風化が著しく、脱色して白色化ないしグライ化した花崗岩盤である。そこに、上方から転落した巨大な自然石が堆積する状況が認められた。水田区画の土留めとして築かれた石垣は、これらの自然石を利用して造られたものである（図 17・写真図版８－２～４）。

旧地形の微高地以外の部分はかつての開析谷にあたるとみられ、緩やかに蛇行しながら、大きくみて北から南に旧流路がはしる様子をみてとれた。前述した微高地はその谷の東肩にあたる部分で、南北方向にのびるとみられる。谷地形だった部分は棚田の造成時に、膨大な量の盛土で埋められていた。調査区西辺を流下する水路は、その際の水田造成に伴って付け替えられたものとみられる。

遺構は、第１層ならびに第２層除去後の地山面で検出した（図 70・写真図版 50・51）。とくに第２層の分布域にほぼ重なる範囲において、高密度に分布する。このことから第２層はおそらく、もとは微高地上に立地した集落の居住域全体に堆積していたものとみられるが、後世の水田造成の際に、大半が削平されてしまったとみられる。微高地中央部分の、第１層除去段階において地山面が露出した箇所で遺構の分布密度が低かったのは、水田造成の際に、第２層とともに遺構も削平されたためと考えられる。

第２層を除去した第２面では、ピットをはじめとする多数の遺構を検出したほか、微高地の南半部でもピット・土坑を検出した。ピットの高密度分布域では、少なくとも４棟の掘立柱建物が復原できるのではないかと考える。それらの建物は、位置が重なっているため、同時期に併存したものとは考えられない（図 71）。

建物１と建物２・建物３は、位置と主軸方向・建物の規模等が近似する。その中で建物２と建物３は、建物の位置及び方向が極めて近似することから、どちらかが同じ場所で建て替えられたものとみることができる。建物１～４の新旧関係は、建物４の柱穴が、建物１と建物２の柱穴と重複し、１・２が先行するので、建物４が最も新しいと捉えられる。建物１と建物２の柱穴には重複関係がなかったのに加え、柱穴埋土から時期の手掛かりになる遺物を検出しなかったので、新旧関係は正確にはわからない。ただ

図 70　千提寺西遺跡 1 区　第 2 面　全体平面図

建物の主軸方向は、建物１と建物４がより近いことから、建物２→建物１→建物４と移行した可能性が指摘できる。一方、建物１と建物３の新旧関係については、南西隅の柱の位置が、ほとんど重なっているとみられるものの、遺構自体が後世のかく乱で欠損しているため、重なり具合を検討することができなかった。ただ、建物２と建物１の規模や構造が近いことから、それら二つの時期がより近い可能性がある。もしそうであれば、建物３→建物２→建物１→建物４へと移行したと捉えることができる。そのように考えると、建物２と建物３が正方位を意識して位置が設定されているのに対し、それ以降の建物は微高地の長軸方向に対してほぼ直交するように徐々に変化したと捉えることができる。つまり磁北を意識した建物配置から居住地全体の地形を意識した配置に徐々に変化した可能性が考えられる。

微高地の西端では、直径約１ｍの巨大な自然石を用いた、鉤状の石列を検出した。おそらくこれは、現況の水田区画の前に設けられていた水田区画に伴う石垣の、基礎部分と捉えられる。この石垣の検出範囲は、旧谷地形に向けて地盤が下降する部分にあたるため、とくに土留めの意味合いが強かったとみられる。また第３層を除去している段階で、この石列より数メートル南側に、これとほぼ並行する石列を検出した。これは、それよりさらに前の段階に造られた、水田区画の土留めの石垣の基礎部分と捉えられる。このことから、微高地上に居住域が展開していた時期においては、微高地際の緩斜面等に、小規模な水田が造られ、それを手入れしながら継続させていたことがうかがえる。

次に各層における遺物の出土状況を述べたい。第１層は基本的に重機で掘削したが、地形的な制約などにより、重機で除去しきれなかった部分に関しては人力で掘削した。その際、検出した遺物を第１層出土遺物として取り上げた。第１層から検出した遺物は 121 点あり、その大半は細片だった。そのうち土師器皿とみられる土器片が 51 点と、最多数をしめる。そのうち、かろうじて器形を把握できるものに関してみると、底部から体部への立ち上がりが明瞭で、体部が明瞭に外反しており、おそらく 14 世紀以降とみられるものと、底部から体部への立ち上がりがゆるやかでやや内湾する、13 世紀代以前とみられるものが数点ずつ認められた。その他に、瓦器椀が 28 点、土師質土器が 16 点、染付の磁器が７点、片口鉢とみられる東播系須恵器が６点、中～近世陶器と古式土師器以前のものとみられる素焼きの土器が各４点、瓦質土器２点、青磁・天目茶碗が各１点出土した。

瓦器椀では、口縁部や底部を含んでおり、かろうじて時期を類推できるものが 10 数点認められた。そのうち 13 世紀代のものとみられるものが８点あり、４点はおそらく 13 世紀後半と捉えられるものだった。加えて、14 世紀代のものとみられるものも３点あった。一方、12 世紀以前のものとみられるものはなかった。それらは細片が大半をしめるため断定はできないが、13 世紀から 14 世紀前半までのものが主体をしめると考えられる。

第２層からは 135 点の遺物が出土した。大半を細片がしめる。そのうち土師器皿が 64 点と多数をしめ、瓦器椀 41 点、土師質土器 13 点、古式土師器以前のものとみられる素焼きの土器が７点、東播系須恵器４点、瓦質土器３点、瓦器皿・須恵器・中世陶器各１点とつづく。土師器皿には 14 世紀代とみられるものが数点含まれる。瓦器椀にはミニチュアと､外面にミガキを施すものが各１点含まれていた。

瓦器椀のうち、形態的な特徴からかろうじて時期比定が可能なものに関してみると、12 世紀代から 13 世紀前葉とみられるものが３点、13 世紀後葉とみられるものが 12 点あった。後者には 14 世紀まで下る可能性のあるものが半数程度含まれていた。土師質土器には、三足羽釜の脚部とみられる破片が１点含まれる。

第２層出土遺物が第１層における土器の出土状況と比べ、明らかに時期がさかのぼるというわけで

はないが、出土土器全体における、土師器皿と瓦器椀の割合がやや近くなる点や、近世以降の土器が含まれない点に、やや古い様相を捉えることができるかもしれない。またかろうじて時期比定ができそうな遺物を見る限り、第２層では、明らかに 14 世紀以降の時期とみられる遺物の量が、第１層に比べてかなり減り、13 世紀後半代の遺物が最も多い印象を受ける。

第２層除去面で検出したピット埋土から出土した遺物には、明らかに埋納したとみられるものはなかった。それらはおそらく、ピットが埋積していく過程で混入したとみられる。13 ピットから古式土師器以前の素焼きの土器とみられる破片が１点、14 ピット・49 ピット・55 ピット・74 ピットから土師器皿の破片が各１点、67 ピットから瓦器椀の破片が１点出土した。また 16 ピットから土師器皿の破片が４点、17 ピットから瓦質羽釜の口縁部片が１点と土師器皿の破片が５点、21 ピットからミニチュアの三足羽釜の脚部とみられる破片が１点出土した。それらをみると、第２層同様、14 世紀を下限とする時期の遺物からなると考えられる。これらの遺物の混入状況から、この場所に建てられていた建物は、14 世紀の段階には完全に機能を失っていたと考えられる。

第３層からは、97 点の土器が出土した。その中にはあまり磨滅を受けず、完形に近い土器が含まれていたことから、旧流路の最終的な埋積段階には、すでに近辺に集落の居住域が出現していた可能性が高いと考える。第３層出土遺物中、最も多かったのは瓦器椀の 42 点で、土師器皿 31 点、土師質土器７点、瓦器皿６点、古式土師器以前とみられる素焼きの土器３点、須恵器２点、瓦質羽釜・中世陶器・天目茶碗・11 世紀代の黒色土器・弥生土器が各１点とつづく。

瓦器椀の中には、外面の口縁部付近にわずかにミガキが認められるものが１点含まれるが、それ以外のものには、外面にミガキを施したものはみられなかった。また炭素吸着が少なく、一見すると土師器と区別し難いものが一定量含まれていた。形態的特徴から時期比定が可能なものに関してみると、13 世紀前葉から中葉の時期とみられるものが５点、13 世紀後葉以降とみられるものが 18 点で、第２層に似た出土状況がみられる。

弥生土器とみられる土器片は、おそらく甕の胴部とみられ、タタキ調整が認められる。ただ器面は磨滅が著しく、それ以外の調整痕は観察できなかった。

建物１　東西方向にやや長い、２間×２間の掘立柱建物で、建物の主軸方向は東に対してやや北に振る（図 72）。北西隅の柱穴はかく乱により半分ほど削平されていたが、掘形が他の柱穴より大きいことから、おそらく東辺の隅柱と同様、数個の柱穴が近接する状況だったと捉えられる。東辺の柱穴１基が、建物４の柱穴と重複しており、建物４に先行して建てられたことがわかる。

建物２　東西方向にやや長い、２間×２間の掘立柱建物である（図 73）。位置が建物１に近接するのに加え、主軸方向や大きさが建物１に似ることから、どちらかが先行する建物を踏襲して建て替えられたとみられる。建物２は東に対してやや北に振るが、ほぼ正方位であること、建物１と建物４の主軸方向がより近いことから、建物２の方が建物１に先行する可能性がやや高いと考える。南東隅柱が建物４の柱穴と重複しており、建物４に先行して建てられたことがわかる。

建物３　東西方向に長い、１間×３間の建物である（図 74）。

建物４　東西方向に長い１間×４間の掘立柱建物である（図 75）。この建物の柱穴が、建物１と建物２の柱穴と重複しており、建物４が建物１・２より後出する。

65 ピット　微高地中央～南半部の、ピットがわずかに散在する箇所で検出した（図 71）。周囲のピットと異なり、遺構埋土に第２層に似る中～細砂ブロックが混入していたことから、柱が抜き取られた柱

図 71　千提寺西遺跡 1 区　第 2 面　建物　平面図

穴の可能性があると考える。これにより、微高地の中央部分にも建物が存在した可能性があるが、その周囲で検出したピットの数が限られており、このピットとセットをなし、同一の建物の柱穴となりうる遺構を特定することができなかった。

69 ピット　微高地の南端部に位置する、深さ 20 ㎝強のピットである（図 70）。周囲のピットと異なり、下半部の埋土に地山ブロックが多量に含まれていた。柱穴を穿った後、掘り上げた土で若干埋戻して深さを調整し、柱を据えるための平石を置いた可能性がうかがえる。これにより、微高地の南端部にも建物が存在したことがうかがえるが、その周囲で検出したピットが限られており、これとセットをなして、同一の建物の柱穴となりうる遺構を特定することができなかった。

57 土坑　微高地の南端部に 58 土坑と並んで位置し、深さは 50 ㎝強、底部は平坦である（図 70）。埋土から遺物が出土しなかったため、時期比定はできなかった。

58 土坑　微高地の南端部に 57 土坑と並んで位置するが、こちらは底部が平坦ではなく、最も深いと

1 2.5Y5/1　黄灰色　中砂混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
3 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
5 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
6 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
9 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
12 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
13 5Y5/1　灰色　細～中砂混粘土質シルト
20 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
42 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
77 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
79 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる

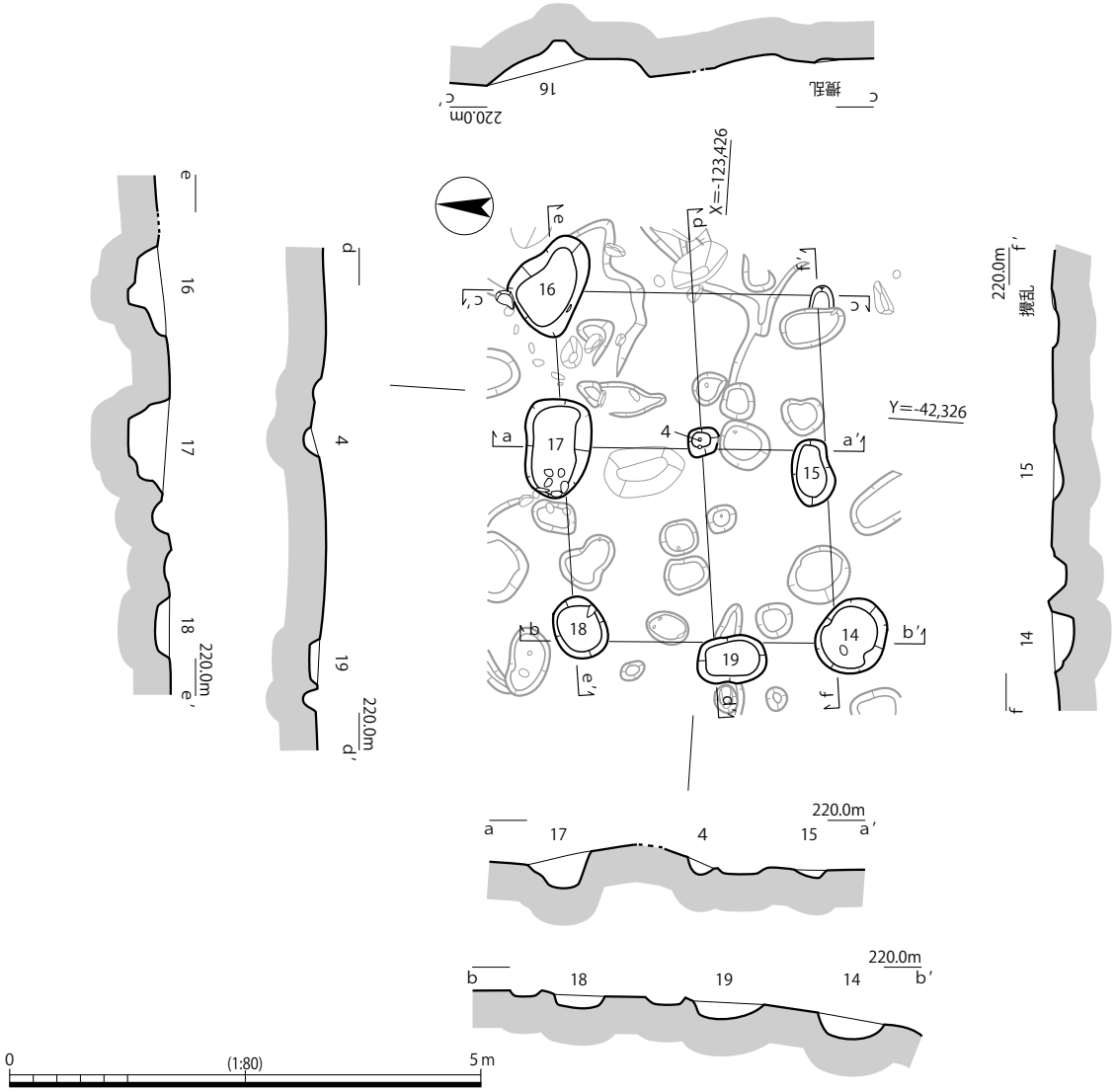
図 72　千提寺西遺跡１区　第２面　建物１　平・断面図

ころで約 20 ㎝と浅い（図 70）。埋土から遺物が出土しなかったため、時期比定はできなかった。

75 土坑　建物 4 の南東隅柱から東に 1 m弱離れたところで検出した（図 71）。逆「く」字状に、一辺 1 m前後の岩が隣接して並ぶ、その間の平坦地に穿ったとみられる土坑である。深さは 50 ㎝強で、底部は平坦である。埋土最下層にラミナが認められた。伏流水を溜めて、井戸として用いたものだろうか。埋土から土器が出土しなかったため、時期比定はできなかった。

土器の出土状況も加味すると、次のような 1 区の変遷が捉えられる。古代以前の時期のものとみられる遺物が若干含まれていたことから、周囲に古代以前における生活痕跡が存在した可能性は否めない。ただそれらがきわめて少量で、磨滅も著しかったことを勘案すると、生活痕跡はこの調査区より上方に位置しており、継続期間も短期間だったのではないかと考える。

当調査区とその周辺に開発が及ぶのは、おそらく 13 世紀前半か、それをややさかのぼる時期だったのではないかと考える。開析谷の谷頭にあたる部分で埋積が進んだ場所のうち、小規模な土留めの積石



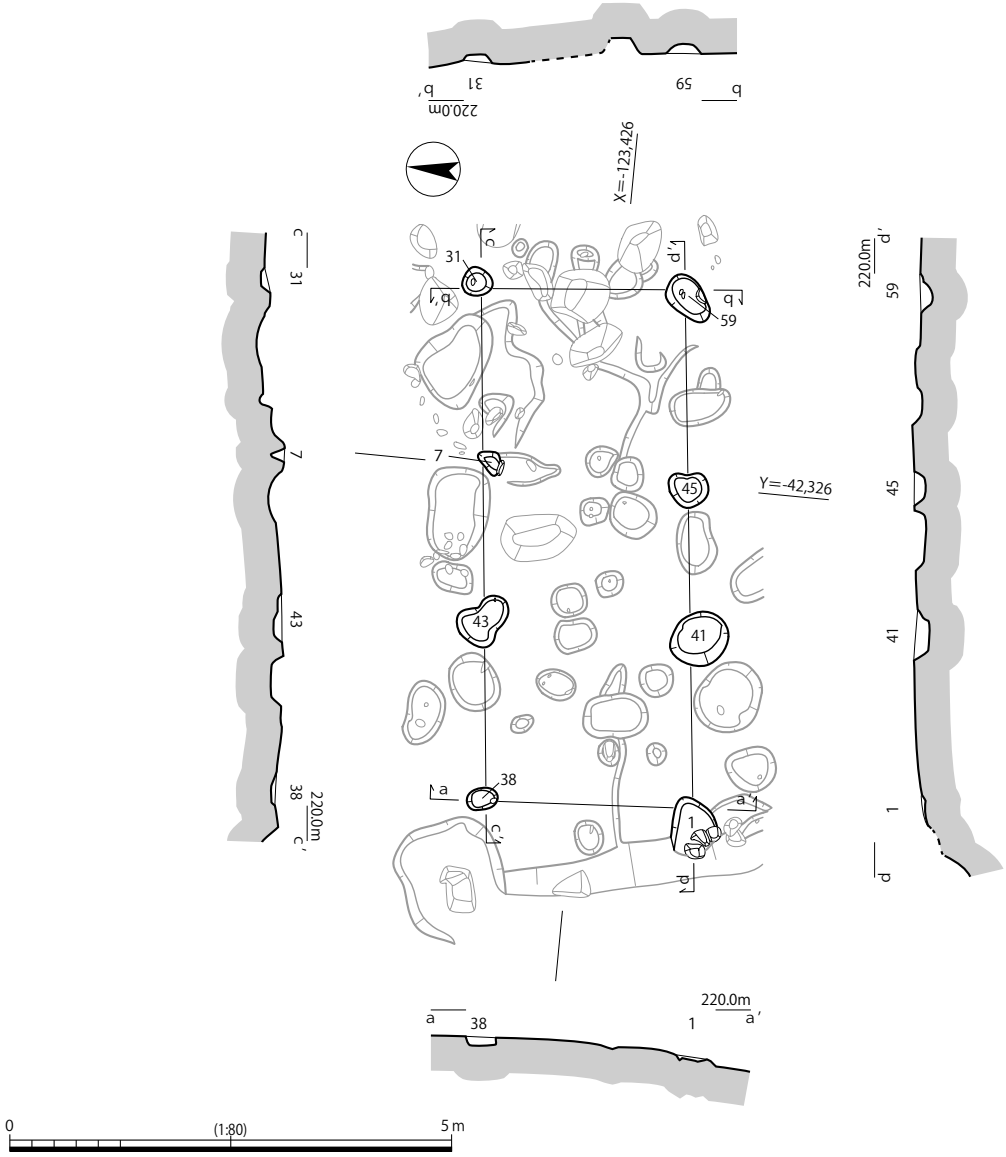
4 10YR5/1　褐灰色　細砂混粘土質シルト
14 2.5Y4/1　黄灰色　シルト混中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
15 10YR5/1　褐灰色　細砂混粘土質シルト
16 2.5Y4/1　黄灰色　シルト混粘土質細砂
17 2.5Y4/1　黄灰色　シルト混粘土質細砂
18 2.5Y6/2　灰黄色　中砂混粗砂
19 2.5Y6/2　灰黄色　中砂混粗砂

図 73　千提寺西遺跡 1 区　第 2 面　建物 2　平・断面図

などで水田造成が可能な部分を選び、小規模な水田が造られたとみられる。

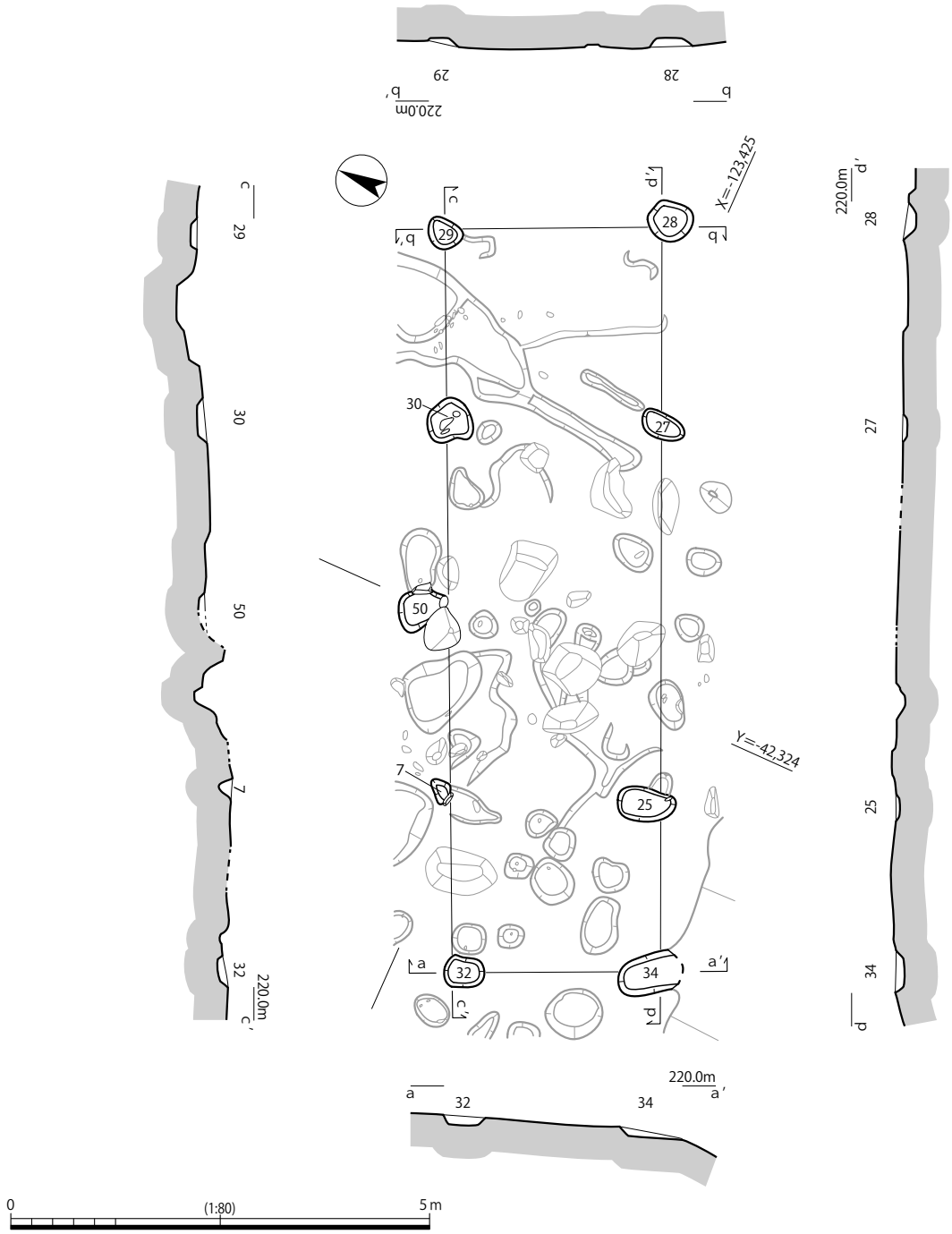
微高地上で検出したピットは、その時期の水田開発及び耕作に関わった人達の居住域の痕跡と捉えられる。微高地の中央部分は、後世の水田造成の際に大きく削平されたとみられるため、その場所にも建物の痕跡があった可能性は高いが、それを加味したとしても、微高地上に展開した居住域は小規模なものだったとみられる。以上、棚田の開発当初は、耕作可能な場所に造られた小規模な水田区画に隣接する微高地上に居住域が設けられたこと、つまり耕作域と居住域が近接していたことがうかがえる。

第 1 層に、14 世紀から現代に至るまでの遺物が含まれていることから、13 世紀前半以降引き続き水田経営が行われたとみられる。微高地上においても、現代の耕作土とは異なる埋土の、耕作痕跡がわずかに認められること、14 世紀には建物が機能していなかったとみられることから、微高地上へ水田域が拡大するのと連動し、居住域は別の場所へ移動した可能性が高いと考える。



1 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
7 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
31 2.5Y4/1　黄灰色　シルト混中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
38 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
41 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
43 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
45 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
59 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる

図 74　千提寺西遺跡１区　第２面　建物３　平・断面図



7 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
25 2.5Y4/1　黄灰色　シルト混中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
27 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
28 2.5Y5/1　黄灰色　細砂混粘土質中砂　風化した花崗岩と２層が混じる
29 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
30 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
32 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
34 2.5Y5/2　暗灰黄色　中礫混中～粗砂　風化した花崗岩の再堆積層
50 2.5Y4/1　黄灰色　シルト混中砂　風化した花崗岩と２層が混じる

図 75　千提寺西遺跡１区　第２面　建物４　平・断面図

（３）千提寺西遺跡２区

２区は、「墓の丸」の丘陵の東側斜面裾部に位置する棚田に設定した調査区で、１区の南側に連なるように位置する。調査前は、丘陵先端部に連なる緩傾斜部分に造られた南北方向に幅広の棚田が、西から東にむけて下降しながら連なっていた。調査区北西端部の方形グリッドを２－１区、主たる調査区を２－２区とした。２－１区では東へ下降する斜面を検出し、遺物は出土しなかった。以下、２－２区について記述する。

現代の耕作土と床土、近世以降に水田区画のために施されたとみられる盛土を第１層とし、重機で除去した。

第１層を除去した段階で、丘陵の斜面際にあたる調査区の西辺部では、地山が露出した。また調査区北半部では、近現代の水田区画に先立って設けられていた、旧水田に伴う耕作土層を認めた。一方、南半部では旧耕作土は認められず、それよりも前の時期に形成されたとみられる土壌化層が露出した。その土壌化層は、「墓の丸」をいただく丘陵の末端が、南東方向にのびる部分に分布していた。一方、その丘陵末端の微高地から外れる調査区北半部では、耕作土層が形成される以前、つまり谷水田が造成される以前においては、丘陵の東側を沿うようにのびる、谷地形をはしる流路が運んだ流水堆積層と、丘陵斜面からの崩落土からなる自然堆積層が認められる（図 17・写真図版８－５・６）。

遺構は主に調査区の南半部で、かつ前述の土壌化層の分布範囲において、土壌化層を除去した段階で検出した（図 76 ～ 78・写真図版 52）。地形的には西側の丘陵斜面からつづく緩傾斜面で、東側に向かってゆるやかに下降する。ピット・土坑などが散在する状況がみられたが、明確に建物の痕跡と認められる、規則性のある配列をなすものは認められなかった。ただ調査区南東隅の平坦部に位置するかく乱に、一部を切られた状態で検出したピットは、断面の形状からみて柱穴の可能性が高いと考えるが、これと対になるピットを検出することはできなかった。かく乱のひろがりからみて、建物の柱穴は削平された可能性が高いと考える。一方、その西側の緩傾斜面では、傾斜変換点に沿うように並ぶピットを検出した。それらは斜面の形状に沿って、ゆるやかなカーブを描くことから、土留めの施設に伴うものと考えられる。遺構埋土から遺物は出土しなかった。

遺構面を覆っていた土壌化層からも遺物はほとんど出土せず、土壌化層以下の土層の堆積状況を確認するためにサブトレンチを掘削している際に、須恵器の小片が出土したのみである。遺物の出土量が限られること、土留めの杭とみられるピットの検出状況からみて、当調査区は集落の居住域の西端部分にあたり、その主体は調査区の東側に展開していた可能性が考えられる。ただその場合も、旧地形における谷の肩部までの、限られた範囲を利用した、小規模なものだったのではないかと考える。

次に各層における遺物の出土状況を述べる。

主に調査区北半部で認められた、中世の水田耕作土である第２層出土遺物は 46 点だった。そのうち土師器が 24 点と最も多く、瓦器椀 17 点、土師質土器２点、備前系中世陶器・東播系須恵器・須恵器各１点がつづく。第２層は３層に細分して掘削し、遺物を取り上げた。遺物の出土量は第２－１層が最も多く、下層になるにしたがって徐々に減る傾向が認められた。形態的特徴から時期比定が可能な瓦器椀をみると、第２－１層では９点出土した中で、13 世紀後葉以降とみられるものが４点あり、そのうち 14 世紀以降とみられるものが２点含まれる。第２－２層では４点中、13 世紀前葉から中葉のものが１点含まれていた。このように瓦器椀のみをとりだしてみると、下層になるにつれて若干時期がさかのぼる傾向が捉えられるが、それ以外の遺物の出土状況も勘案すると、それほど明確な時期差は捉え

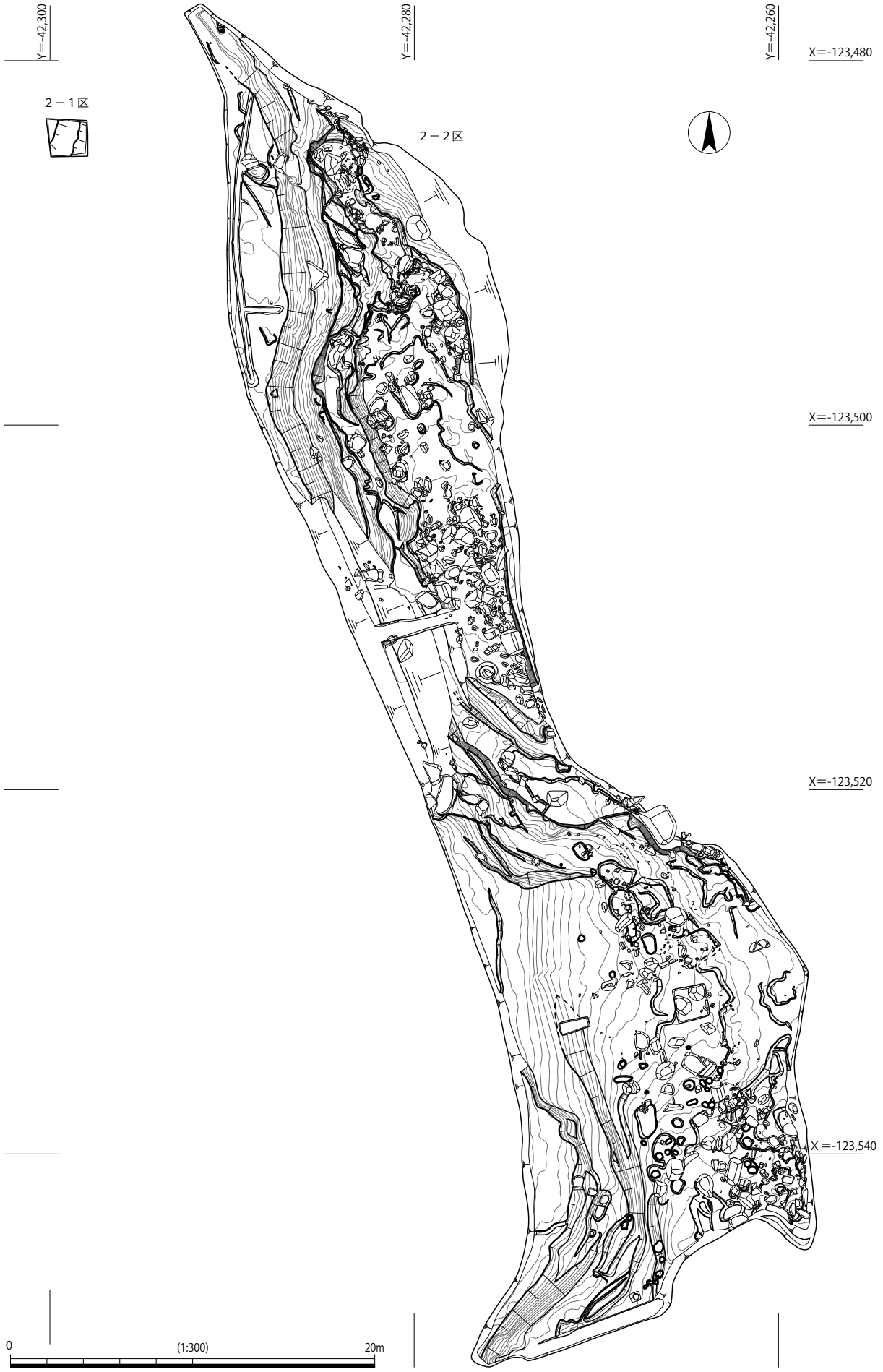


図 76　千提寺西遺跡２区　第２面　全体平面図

図 77　千提寺西遺跡２区　第２面　平面図

られなかった。一つには、出土遺物の大半が細片であることも関係するが、いずれにせよおおむね 13 世紀から 14 世紀に含まれる時期のものと考えられる。

第３層は調査区北半部の旧流路にあたっている部分で、旧耕作土の下に堆積する層である。旧耕作土に伴う棚田の整地層にあたる部分と、旧流路の最終堆積層にあたる部分が対象となる。３層に細分して掘削し、遺物を取り上げた。第３－１層と第３－２層が棚田の整地層、第３－３層を旧流路の最終埋積土と捉えた。出土遺物は第３層全体で 28 点あり、整地層とみられる部分では、13 世紀前葉から中葉のものとみられる瓦器椀や、11 世紀後半代のものとみられる黒色土器の破片、土師器皿やサヌカイト片が出土したのに対し、旧流路の最終埋積土部分とみられる第３－３層には、10 世紀後半とみられる土師質の煮炊具１点や、10 世紀後葉から 11 世紀初頭とみられる「て」字状口縁の土師器皿１点、12 世紀前葉のものとみられる土師器皿２点が含まれていた。調査区南半部で検出した遺構面を覆っていた第４層からは、下層確認のためのトレンチを掘削中に検出した須恵器片が１点出土したのみである。器種や器形は不明だが、器面の湾曲の度合いや内面がやや磨滅していることなどからみて、古代ないし中世の鉢の破片とみられる。

以上を勘案すると、調査区北半部の旧流路部分を利用して棚田造成が行われる時期は、10 世紀後半を上限とし、14 世紀前葉を下限とする時期と捉えることができる。調査区南半の微高地上で検出した居住域の時期は、時期比定が可能な遺物が出土しなかったこともあり、今回の調査で特定できなかった。

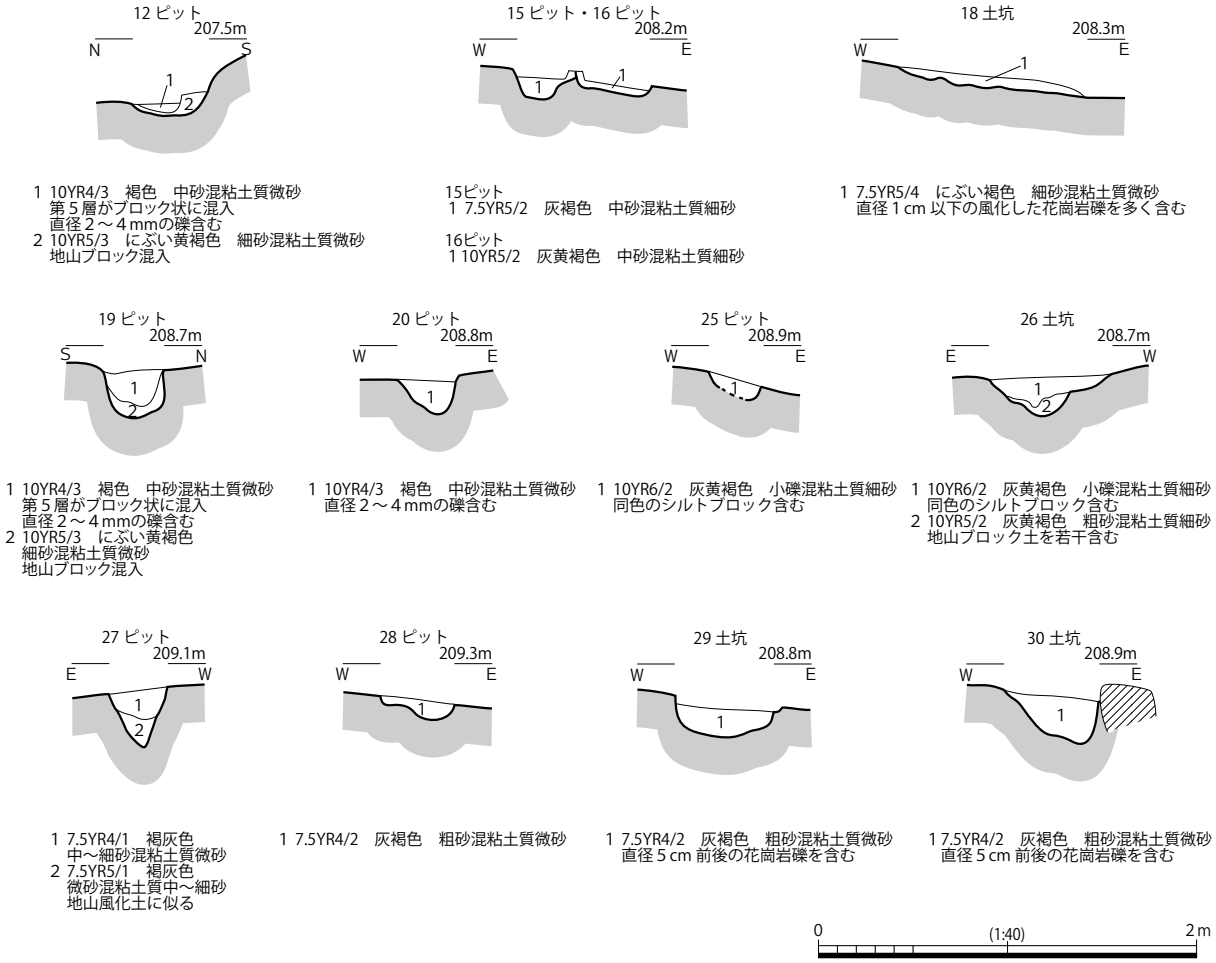


図 78　千提寺西遺跡２区　第２面　遺構　断面図

（４）千提寺西遺跡７区

７区は「マエノヤマ」が立地する丘陵西側をはしる谷の、谷頭にあたる部分に位置しており、北･東･西側の三方を丘陵斜面に囲まれている。現況では調査区の北及び東側は、道路の造成に伴って切土されているが、本来は「マエノヤマ」の尾根西側の斜面地に連なる、緩傾斜面に位置していたと捉えられる。発掘調査前は、部分的に盛土され、雛壇状に造成されていた。調査区の南側も含め、雛壇状の地形は、もとの棚田に盛土を施して、近年造成されたものである。特に調査区南側の平坦地には大量の盛土がなされていたが、もとは数mの高低差をもつ棚田が、下方に連なっていたとみられる。

当調査区の地山に至るまでの堆積土層は、近世～現代の耕作土とその整地層（第１層）を除くと、中世の遺物を含む包含層（第２層）と､古代を中心とする時期の遺物を含む包含層（第３層）に分けられる。中世遺物包含層（第２層）は、粘性や土壌化の度合い等をもとに、３層に細分した。最下層の第２－３層はシルトを含み、粘性があって土壌化が最も進んでいたことから、耕作土層の可能性が高い。またその上層も、後述するように下面で耕作痕がみられたことから、耕作土層と考えられる。第３層は炭化物を多く含む黒色化した土壌化層で、粘性が強い。黒色化の度合いや粘性の違い等をもとに、２層に細分した（図 18・写真図版８－７・８）。

今回の調査では２面の遺構面を検出した。第１面は第２－３層の上面であり、第２面は第３層を除去した、地山面である。

第１面

第１面で検出した遺構の帰属時期を推定する手掛かりとなる、第２－２層までの遺物の出土状況を述べたい。

機械掘削終了面である第１層除去後面から第２－２層除去後面である第１面までの間に掘削した土層（第２－１・２層）から出土した遺物は、煮炊具が主体とみられる土師質の土器片が約 100 点と最も多く、土師器 80 点弱、黒色土器約 60 点、須恵器約 30 点、瓦器約 20 点、土師器甕 20 点弱、中世陶器 10 点弱、弥生後期の甕とみられる破片と磁器片が数点ずつ、青磁・天目茶碗・瓦質鉢・サヌカイトチップ各１点とつづく。いずれも細片で磨滅したものが多かったため、時期比定できるものは限られるが、古代後葉から中世の遺物が大半を占める。具体的には土師質羽釜８点のうち、口縁部や鍔の形状で時期判断ができるものに関しては、10 世紀代･11 世紀代･12 ～ 13 世紀代のものが各１点であった。加えて他の器種の状況も含めてみると、概して 11 世紀代以前の時期の遺物が大半を占める。古代の遺物が多く含まれる状況は、第３層でとくに顕著なことから、これらの遺物は造成や耕作に伴って第３層が削平された際、第２層に混入したと考えられる。ただ瓦器椀には 13 世紀後半以降とみられるものがわずかに含まれていたほか、15 世紀代のものとみられる瓦質鉢が出土した。第１面で検出した遺構から出土した遺物には、近世の遺物は一切含まれていないことから、第２－１・２層は、中世段階に形成されたものと考えられる。

第１面では、耕作痕やピット、土坑、石垣を検出した（図 79）。

耕作痕は調査区の西半で検出した。幅 0.1 ～ 0.2 m、長さ１～４m程度で、谷頭の形状に沿うように、緩やかに湾曲する。埋土はその上層に類似することから、おおむね中世の耕作に伴って形成されたものと捉えられる。耕作痕の様子から耕作地は、大規模な地形改変を伴うような造成は行わず、むしろ周辺の微地形に適応する形で行われたことがうかがえる。

ピット、土坑は、調査区北東端の斜面に集中する。斜面のとくに上端では、第１層除去後に花崗岩

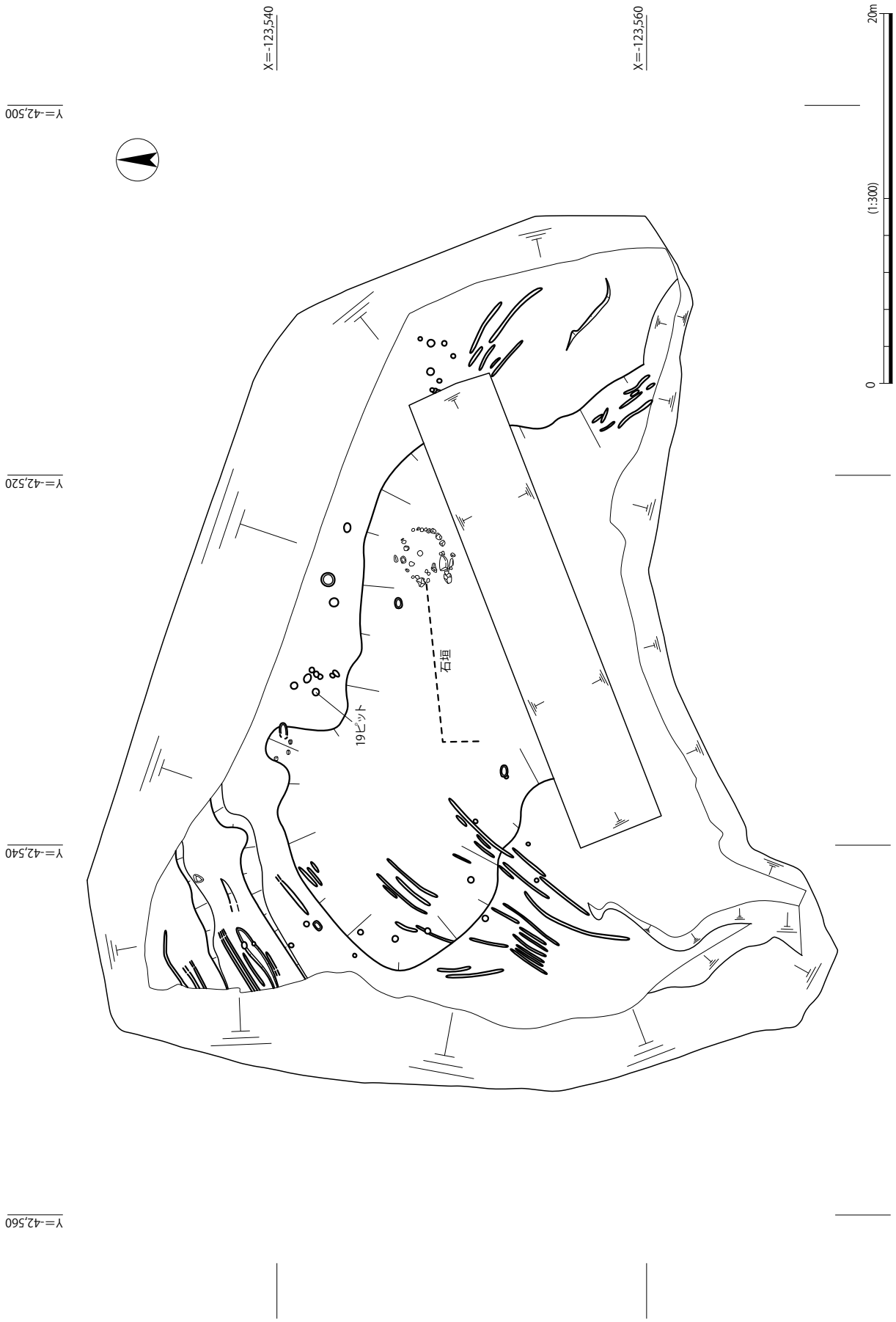


図 79　千提寺西遺跡７区　第１面　全体平面図

バイラン土の地山があらわれる箇所があるため、一部の遺構は第２面に含まれる可能性がある。

19 ピットからは土師器７点、黒色土器１点、土師器皿２点が出土した。いずれも細片で磨滅していたことから、意図的にピット内に埋納されたものではなく、遺構が埋まる過程で埋土に混入したとみられる。図化可能な遺物は２点である（図 85 － 677・678）。677 は土師器皿であり、「て」字状口縁をもつ。10 世紀中頃に位置付けられる。678 は黒色土器Ａ類の椀であり、高台が断面三角形のものである。10 世紀前半から中頃に位置付けられる。出土遺物のうち、かろうじて時期判別のできるものをみると、それらは 10 ～ 11 世紀に含まれる。

石垣は第１面を検出している際にその天端が露出したもので、第３層中に据えられている。大小の自然石を取り混ぜて３段以上積まれていた。石垣は基底部の高さがそろっているのに対して、天端の高さはそろっておらず、石垣の上部は耕作土層が形成される過程で、壊された可能性が高い。なお、石垣周辺では土器群が検出された。石垣を据える際に第３層中の土器がかく拌されたものであろう（写真図版 54 －２・３）。

第２面

第２面で検出した遺構の帰属時期を推定する手掛かりとなる、第３層出土遺物について述べたい。

前述したように第３層は２層に細分したが、層厚が薄かったため、遺物の掘り分けをしたのは、調査区の中央部のみに限られる。第３－１層からは土師質土器 36 点、器種不明の土師器 13 点、黒色土器８点、土師器甕７点、古代の須恵器５点、大型の須恵器の破片・土師質羽釜各３点、瓦器２点、弥生時代後期の土器片１点が出土した。それに対して第３－２層からの出土遺物は土師質土器の破片が１点で、圧倒的に第３－１層の遺物の包含量が勝る。したがって次に第３－１・２層を一括して掘削した際に出土した遺物の状況を述べるが、これはおおむね第３－１層の遺物の包含状況を示していると捉えられる。

第３－１・２層からは器種不明の土師器片が約 150 点、土師質土器 120 点、黒色土器 100 点弱、土師器皿 80 点弱、土師器甕 70 点強、大型器種の須恵器片 25 点、土師質羽釜 17 点、瓦器６点、弥生時代後期の土器片９点、土師器杯４点、須恵器杯３点、須恵器壺２点、須恵器鉢・白磁皿・緑釉陶器・土師器鉢・砥石各１点が出土した。土師器甕は９世紀代のものが大半を占めるが、古墳時代にさかのぼる可能性のあるもの、10 世紀後半～ 11 世紀初頭のものもわずかに含まれる。土師器杯や土師器皿も９世紀代の遺物を主体とし、それ以外では 10 世紀後半～ 11 世紀のものが多く含まれる。緑釉陶器は、高台の形状から 10 世紀前葉から中葉にかけてのものとみられる。須恵器類で器種が把握できるものは、８世紀末葉～９世紀初頭に比定できるものもわずかに含むものの、おおむね９世紀代に含まれるとみられる。黒色土器では 10 世紀後葉とみられるものが２点、10 世紀末葉～ 11 世紀前半に比定できるもの５点、11 世紀後葉とみられるもの 24 点が認められた。土師質羽釜で口縁部の形状がわかる９点は、10 世紀後半～ 11 世紀前葉の時期に含まれるとみられる。

第３層出土遺物で図化をした遺物は 20 点である（図 85 － 657 ～ 676）。657 ～ 660 は土師器皿である。657 ～ 659 は「て」字状口縁であり、658 は 10 世紀中頃、659 は 10 世紀後葉に位置付けられる。660 は口縁端部がやや肥厚するもので 10 世紀後葉～ 11 世紀に位置付けられる。661 は土師器壺、662 は土師器甕、663 ～ 665 は土師質羽釜である。664・665 は摂津に特有な土師質羽釜であり、11 世紀を前後する時期に位置付けられる。666 は須恵器杯であり篠窯のものとみられ、９世紀後半～ 10 世紀前半に位置付けられる。667 は須恵器甕であり、口縁部外面に線刻がみられる。668 は須恵器壺

図 80　千提寺西遺跡７区　第２面　全体平面図

であり、高台が打ち欠かれている。669 は緑釉陶器椀であり、削り出し高台で薄い緑色の釉が施される。洛北の栗栖野窯のものとみられ、9 世紀後半に位置付けられる。670 ～ 676 は黒色土器Ａ類椀である。高台が断面三角形のもの（670・675）から丸みをおびたもの（671・676）があり、10 ～ 11 世紀前半に位置付けられる。

以上を勘案すると、第 3 層出土遺物は 9 世紀～ 11 世紀の遺物を含むが、その中で 10 世紀前半代の遺物量が極めて少ないことが指摘できる。したがって必ずしも層位的に遺物を掘り分けて導いた結果ではないが、第 3 層の形成過程で成立した生活面は、少なくとも 2 時期にわたる可能性が指摘できる。8 世紀末葉を上限とし、10 世紀前葉を下限とする時期と、10 世紀前葉を上限とし、11 世紀後葉を下限とする時期である。

第 2 面では、建物 1 ～ 3 のほか、ピット、土坑、耕作痕とみられる溝を検出した（図 80・81）。

建物以外の遺構からは、9 世紀後葉～ 11 世紀後葉の土師器皿、黒色土器片が出土した。

建物以外の遺構出土遺物で図化をした遺物は 4 点である（図 85 － 679・680・682・683）。679 は 81 ピット出土の土師器皿である。10 世紀後半～ 11 世紀前半に位置付けられる。680 は 213 ピット出土の土師器甕である。682 は 79 溝、683 は 181 ピット出土の石鏃である。682 は凹基式、683 は折損のため不明である。

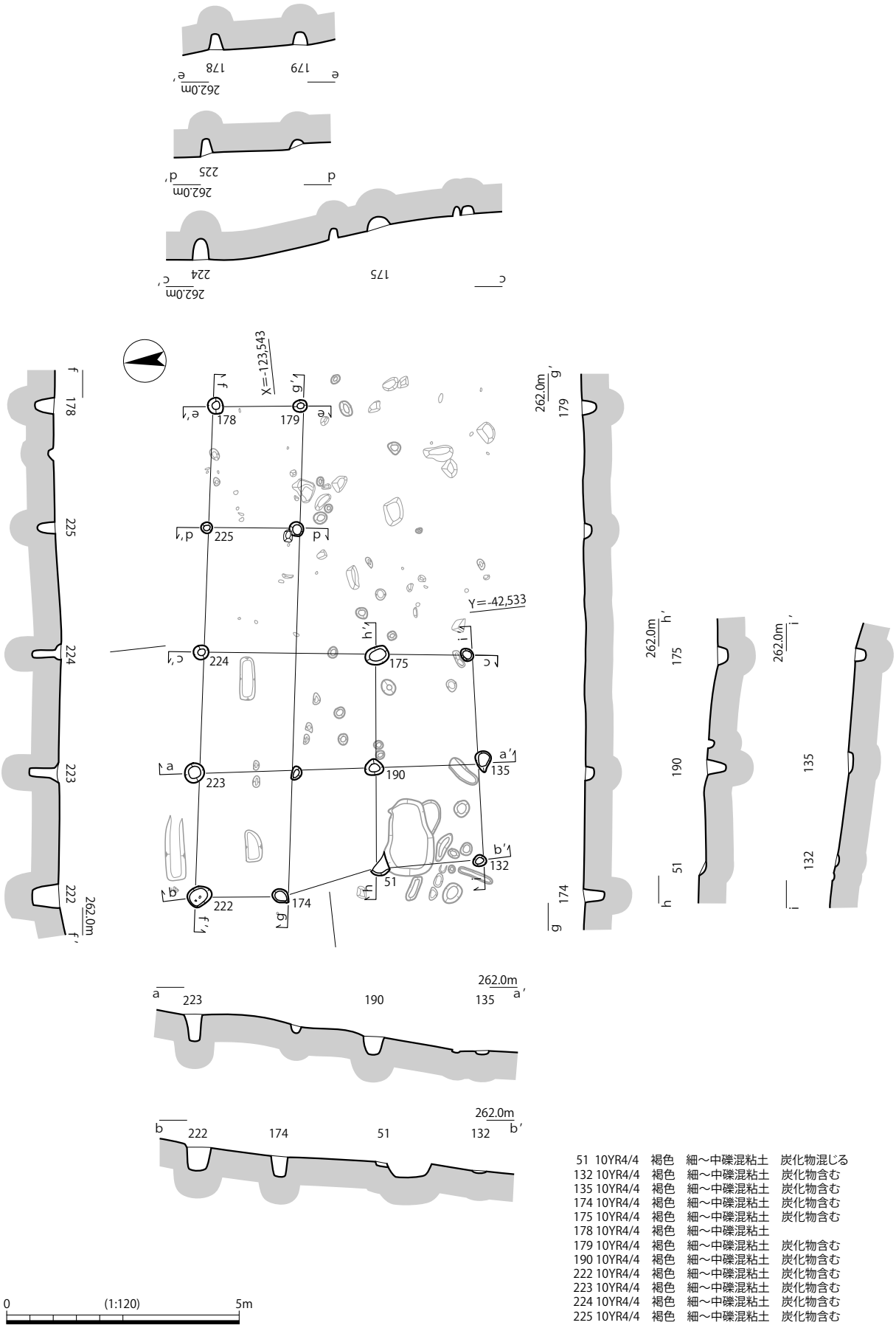
建物 1　調査区の北辺部付近に位置する（図 81・82）。平面形は東西に長いＬ字状だが、隣接する建物 3 と長軸方向が一致すると考えると、南北方向に長い 2 × 3 間の建物の北辺に接する 1 間分を、東側に張り出させて付属的な施設を設けたと考えることができる。東側に張り出す部分に関しては、1 間分の間隔をあけて東側に、1 間× 1 間の建物があったと考えることもできるが、これらをあわせた柱穴の通りと間隔に乱れがないことから、母屋と一体化したものと捉えた。柱間の距離と方向がわずかにばらつくため、建物 1 の平・断面図には含めなかったが、51 ピットの西側に位置する 48 ピットと、132 ピットの西側に位置する 60 ピットも、同様の付属施設を構成する柱穴となる可能性はある。もしそうであれば、建物の北辺では東側に、南辺では西側に、それぞれ張り出す部分がとりつく構造となる。

175 ピット、191 ピット、222 ～ 224 ピットの埋土から遺物が出土した。それらは意図的に埋納されたものではなく、遺構が埋まる過程で混入したものとみられる。175 ピットからは土師質の土器片が 4 点と、11 世紀後葉とみられる黒色土器片 1 点が出土した。191 ピットからは 9 世紀後葉とみられる須恵器壺片 1 点、222 ピットからは 10 世紀後葉とみられる土師器鍋が 2 点（図 85 － 681）、223 ピットからは土師質土器片 1 点、224 ピットからは 10 世紀後葉～ 11 世紀初頭とみられる黒色土器片 2 点が出土した。

建物 2　谷頭の緩傾斜部分に、長軸方向が谷ののびる方向と平行するように建てられた、1 × 3 間の建物で、西側に半間分の奥行きで庇を作り出していると考える（図 81・83）。建物の外側には、西辺と南辺に平行するように、Ｌ字状の柱穴列が認められた。Ｌ字状の柱穴列の位置は、建物の柱穴の通りとはややずれることから、庇や縁台を支える柱の痕跡とは考えにくく、建物の外側にめぐらせた、塀や柵の痕跡ではないかと考える。もしそうであれば、建物の南辺に沿う塀は、谷下から吹き上がってくる風をよけるために、西辺に沿う塀は土留めのためにめぐらせたものかもしれない。なお建物南辺に平行する塀もしくは柵の柱穴のうち、116 ピットの底部から、角礫が 2 点出土した。それらは柱を支えるための根石だった可能性がある。

81 ピットからは窯壁に似た固くしまった焼土が 1 点、138 ピットからは土師器片が 1 点、145 ピッ

図 81　千提寺西遺跡 7 区　第 2 面　建物　平面図



51 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物混じる
132 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む
135 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む
174 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む
175 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む
178 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土
179 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む
190 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む
222 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む
223 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む
224 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む
225 10YR4/4 褐色 細～中礫混粘土 炭化物含む

図 82　千提寺西遺跡７区　第２面　建物１　平・断面図

トからは土師器片２点と 11 世紀代とみられる土師器片１点が出土した。

建物３　建物１の張出し部から西に１間ほど離れて位置する、南北方向に長い２× ２間の建物である（図 81・84）。梁行きの柱間が、桁行の約半分の長さであるため、平面形は長方形である。建物の方向がほぼ一致するのに加え、桁行の柱間も近似することから、建物１と併存していた可能が高いのではないかと考える。

どの柱穴からも遺物は出土しなかった。

７区の調査では、２面の遺構面を検出した。

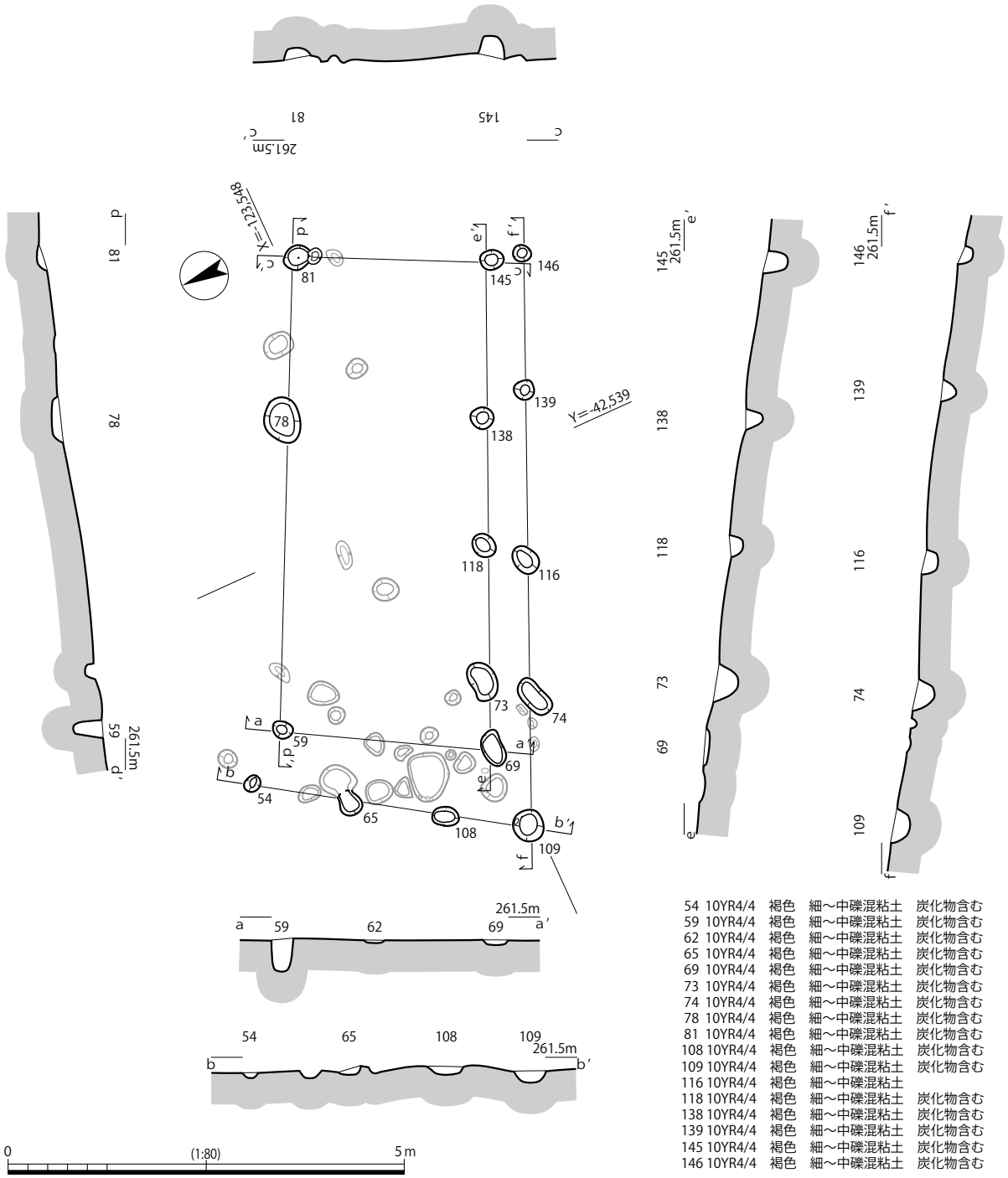


図 83　千提寺西遺跡７区　第２面　建物２　平・断面図

第２面ではピットや土坑、掘立柱建物、耕作痕とみられる溝等を検出した。第３層に含まれる遺物の状況から、古代においては８世紀末葉を上限、10 世紀前葉を下限とし、９世紀代を中心とする時期と、10 世紀前葉を上限、11 世紀後葉を下限とし、10 世紀後葉～ 11 世紀前葉を中心とする時期に居住域が展開した可能性が高い。第２面で検出した掘立柱建物は、すべてが同時併存していたわけではなく、少なくとも建物１・３と建物２が異なる時期に建てられたと捉えられる。建物１・２の柱穴埋土から出土した遺物をみると、10 世紀後葉～ 11 世紀前葉の時間幅の中で、機能したものと捉えられる。建物１・３と建物２の前後関係を特定するには至らなかった。

第１面で検出した遺構は、第２－３層の形成に先行して存在した、11 世紀後葉～ 12 世紀前葉を中心とする時期の居住域に伴う遺構と、12 世紀後半からおそらく 14 世紀にわたる期間に形成された遺構とが混在すると考えられる。また耕作痕は、第２－２層の形成過程で生じたものと推測できることから、古代末から中世前葉にかけての時期に、このあたりが居住域から生産域へ移行したと考えられる。第２－１・第２－２層からは 15 世紀から近世に至る時期の遺物が含まれるが、その量は極めて少量であることから、このあたりが生産域に移行してからは、もともとの居住域は大きく場所を移した可能性が高いと考えられる。

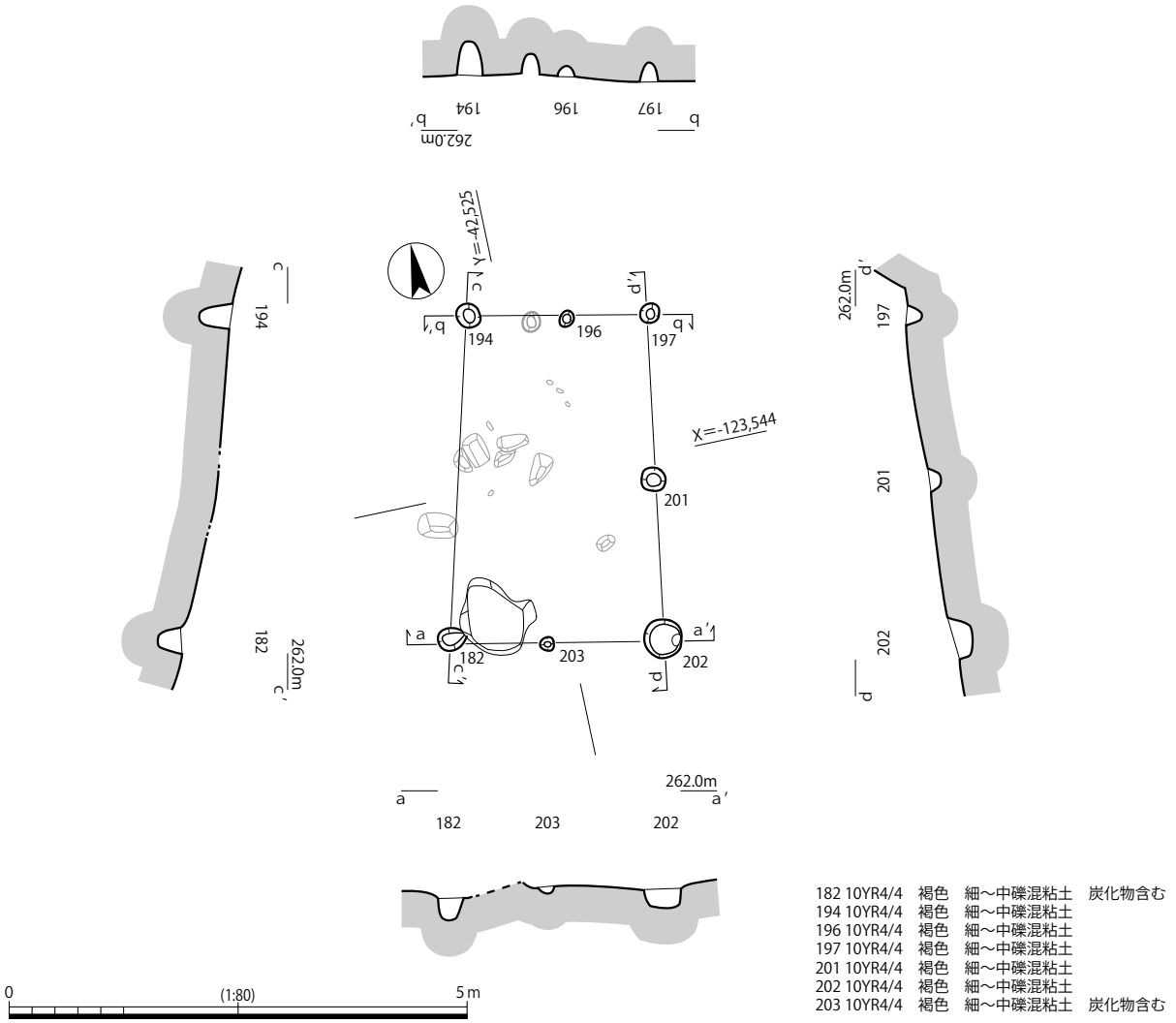


図 84　千提寺西遺跡７区　第２面　建物３　平・断面図

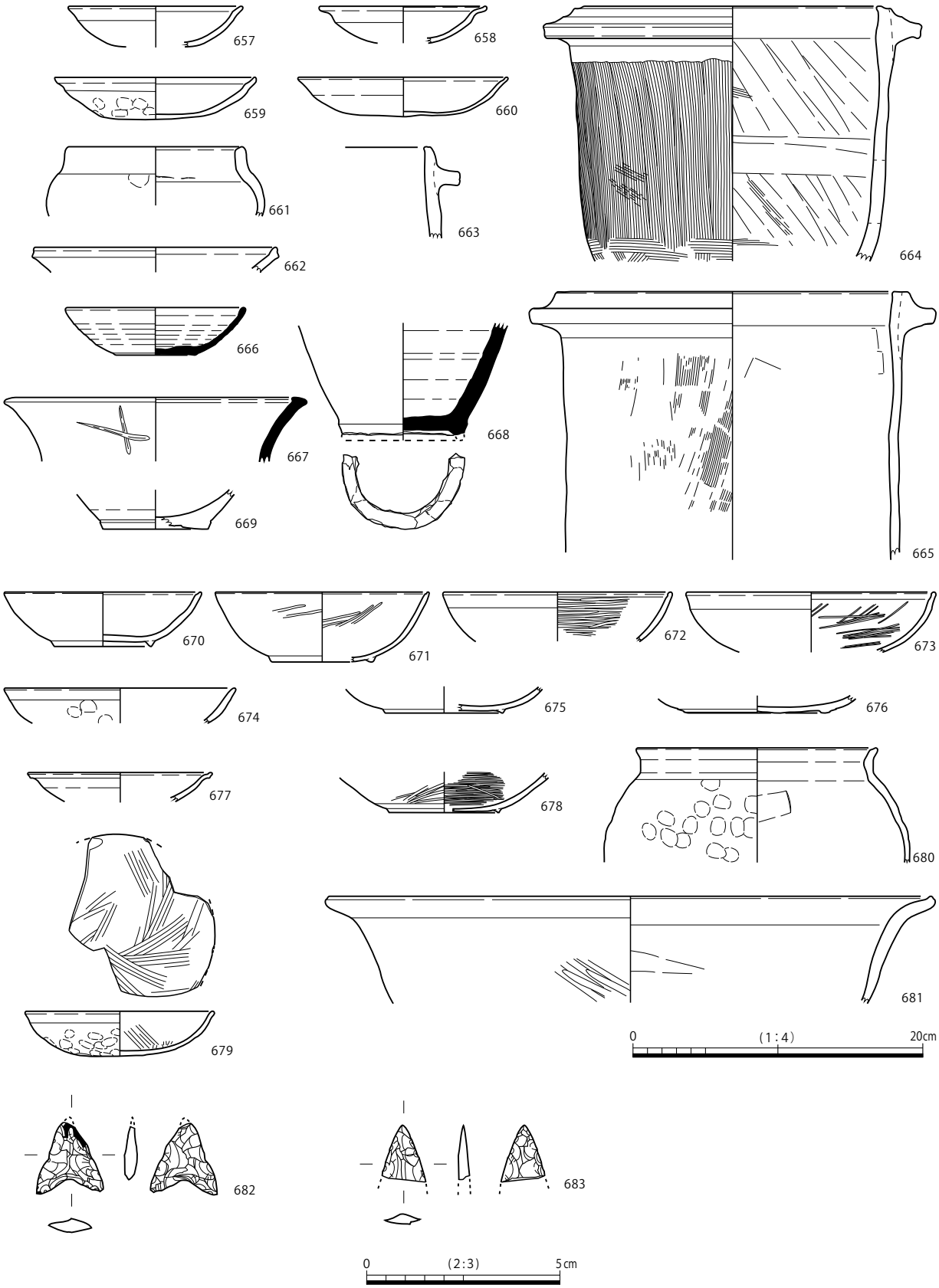


図 85　千提寺西遺跡７区　出土遺物

（５）千提寺西遺跡８区

８区は、３区の北へのびる尾根の西側谷部に位置する。狭小な谷部であり、南から北にかけてゆるやかに下降する地形に沿って調査区を設けた。

調査区の北側３分の２の部分は、近現代盛土除去後に岩や自然石からなる地山に至り湧水した。近現代のかく乱のため、本来の堆積層は残存しなかった。調査区北側にはコンクリート擁壁の溝があり、おそらくこの溝の造成時に改変されたものと考えられる。

残存する南側３分の１の層序は、上層から、表土（第１層）、にぶい黄褐色シルト（第２層）であり、その下層は木の根が入るシルト～粘土、その下層は微砂混シルトがつづき湧水した（図 19・写真図版９－１）。表土（第１層）除去後面を第１面、第２層除去後面を第２面として精査したが、遺構は検出されなかった（図 86・写真図版 55）。

遺物は、第１層から染付を含む陶磁器片が、第２層から五輪塔の空風輪が１点出土した（写真図版 103 － 827）。空風輪は、室町時代のものである。

本区は、中世を中心とする墓域である３区に隣接しており、空風輪はここから転落してきたものであろう。３区の墓は南側斜面にひろがり、北側斜面にはひろがらないため、北側に位置する本区ではあまり多くの石造物は出土しなかったと考えられる。

（６）千提寺西遺跡９区

９区は、３区の南側谷部に位置する。３区の丘陵とその南側の丘陵にはさまれた、幅約 20 ～ 30 ｍの谷部であり、西から東にかけて下降する。調査地の東側は、道をへだてて千提寺西遺跡 11 － １ － ３・４区である。

層序は、上層から、近現代耕土・造成土（第１層）、にぶい黄褐色シルト（第２層）、黄灰色微砂混シルト（第３－１層）、褐灰色微砂混シルト（第３－２層）、褐灰色シルト（第３－３層）であり、その下層は黄灰～暗灰黄色シルト～粘土がつづき、一部、地山とみられる青灰色粘土を検出した（図 21・写真図版９－２～５）。

遺物は、完形のものはなく、破片が大半をしめる。第２層は土師器、瓦器、陶器、染付片のほか石仏２点と五輪塔（水輪）が１点（写真図版 103 － 826・828・829）、第３層は土師器、瓦器、陶器片が出土した。第２層は近世、第３層は 13 世紀以降の中世の遺物が含まれ、第３－１層から第３－３層で、とくに時期差は認められない。遺物は、第３－３層まで出土しており、これより下層では遺物は出土しなかった。

第２層除去後面を第２面、第３－２層除去後面を第３－２面、第３－３層除去後面を第３－３面として精査した。第３－３面では土師器皿が出土したが、遺構は検出されなかった。第２面は近世、第３－２面は中世に位置付けられる。

第２面では、谷筋に直交する段と１～ 12 溝を検出した（図 87・写真図版 56 － １～３）。段は比高差約 30 ㎝～１ｍ、溝は幅約 50 ㎝～３ｍ、深さは約 20 ㎝である。段と溝は、谷筋に直交することから、棚田に伴うものと考えられる。溝が並行し、近接して検出されたことから、棚田の改変が複数回行われたことが推察できる。

第３－２面では、石列を伴う 13 段落ちと木を伴う 14 段落ちを検出し、北宋銭「祥符元寶」が出土した（図 87・写真図版 56 － ４～７）。13 段落ちは人頭大の自然石が谷筋に直交して並ぶ。14 段落ちは直径約 20 ㎝の丸太材が谷筋に直交して置かれる。13・14 段落ちは同じ方向であり、

棚田に伴うものと考えられる。

本区では、出土遺物より、中世、13 世紀以降に棚田が営まれたと考えられる。段の造成には石列や丸太が用いられる。

千提寺西遺跡 11 － 1 － 1 ・ 3 ・ 4 区においても谷部で棚田を検出しており、出土遺物から、開発の始まりが 10 世紀前後にさかのぼることが明らかである。本区は千提寺西遺跡 11 － 1 － 3 ・ 4 区より、現在の道をへだてて谷をさかのぼった場所であり、13 世紀以降、谷部における棚田の開発が谷頭付近まで及んだと考えられる。

近世に入ると、開発が進み、棚田は谷頭まで及ぶ。谷の傾斜にしたがって段と溝が設けられ、幾度かの改変があったと考えられる。おそらく、当初は幅のせまい棚田であったものが、しだいに一段の面積をひろげていったのではなかろうか。幅の狭い調査区ではあるが、中世、第 3 － 2 面の棚田の段の方向に比べ、近世、第 2 面の棚田の段の方向は谷の軸に対してややひろがっていることからも、近世には、棚田 1 枚あたりの面積がひろがった可能性が考えられる。

第 2 層から出土した石仏 2 点と五輪塔（水輪） 1 点は調査区端で出土しており、遺構との関連が特定できないが、棚田の段造成に転用された可能性が考えられる。本区北側の 3 区には中世墓がひろがり、15 ～ 16 世紀の石仏、五輪塔が多数出土した。おそらく、ここから転落したものを、近世、棚田の段造成に転用したものと考えられる。

9 区の北側では、石仏、五輪塔が表採されており、これらも 3 区から転落したものと考えられる。

（7）千提寺西遺跡 10 区

10 区は、 5 区と 6 区の間に位置する。5 区から南へのびる尾根は、3 区西側からつづく道により分断される。本区はこの道の南側へつづく、南北方向の狭小な尾根上に位置する。東側、西側ともに急斜面であり、西側は現在の道路に至る。本区の南側は 6 区北側の広場にあたるが、この広場は近年造成されたものであり、もとは 6 区の北から東へと回り込む道であった。本区は道と道にはさまれた尾根上に位置するものである。

層序は、上層から、表土（第 1 層）、にぶい黄橙～明黄褐色シルト（第 2 層）であり、花崗岩からなる地山へ至る（図 20・写真図版 9 － 6）。第 2 層除去後面である地山上面を第 2 面として精査した。

第 2 面では、いくつかの土坑を検出したが、 1 ・ 2 土坑は木の根の痕跡、 3 土坑は花崗岩が風化した痕跡とみられ、顕著な遺構はみられなかった（図 86・写真図版 57）。

本区は平坦面の幅が約 2 m と狭小な尾根上であり、両側が急斜面であるため、人為が及ばなかったと考えられる。

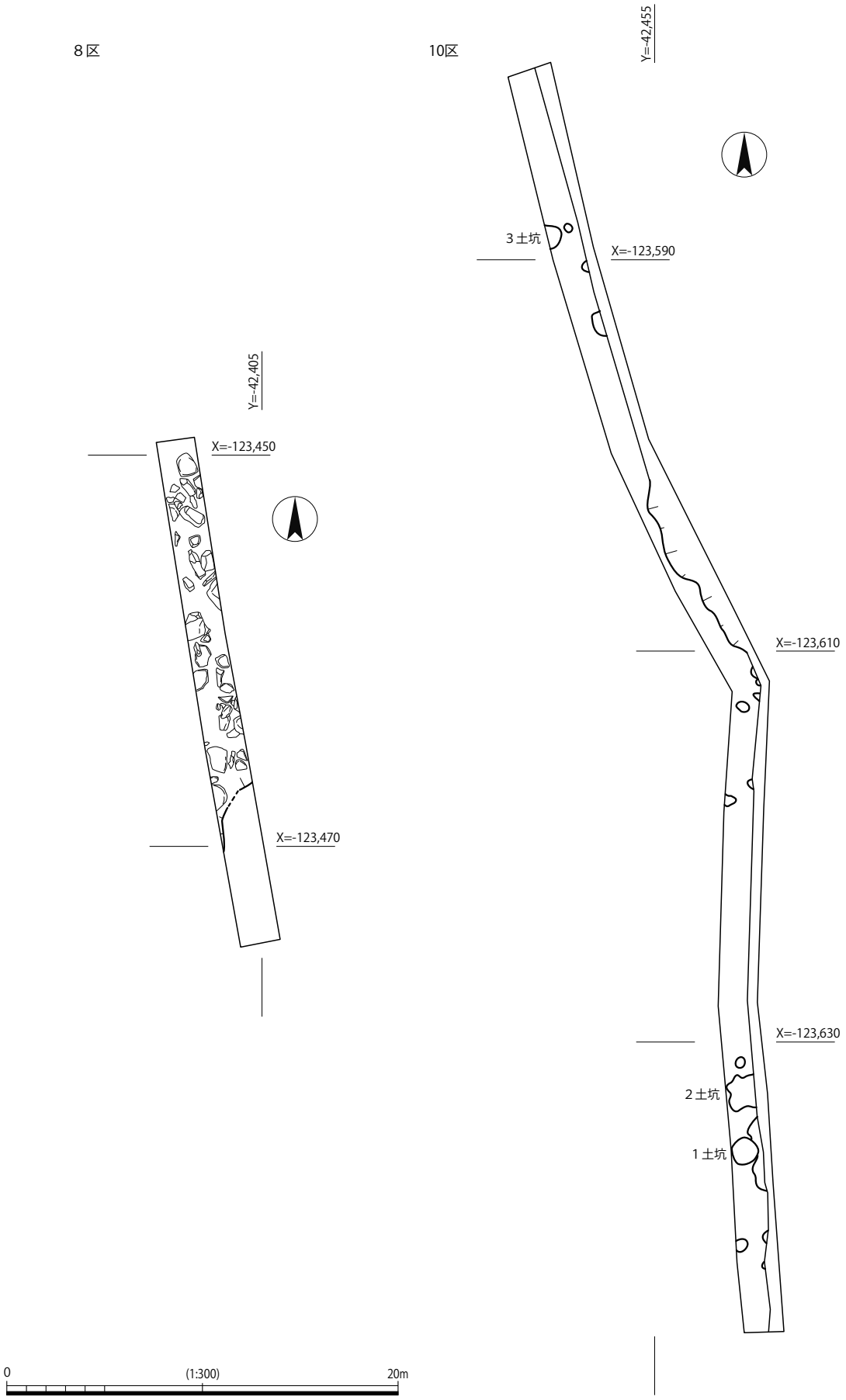


図 86　千提寺西遺跡８・10 区　全体平面図

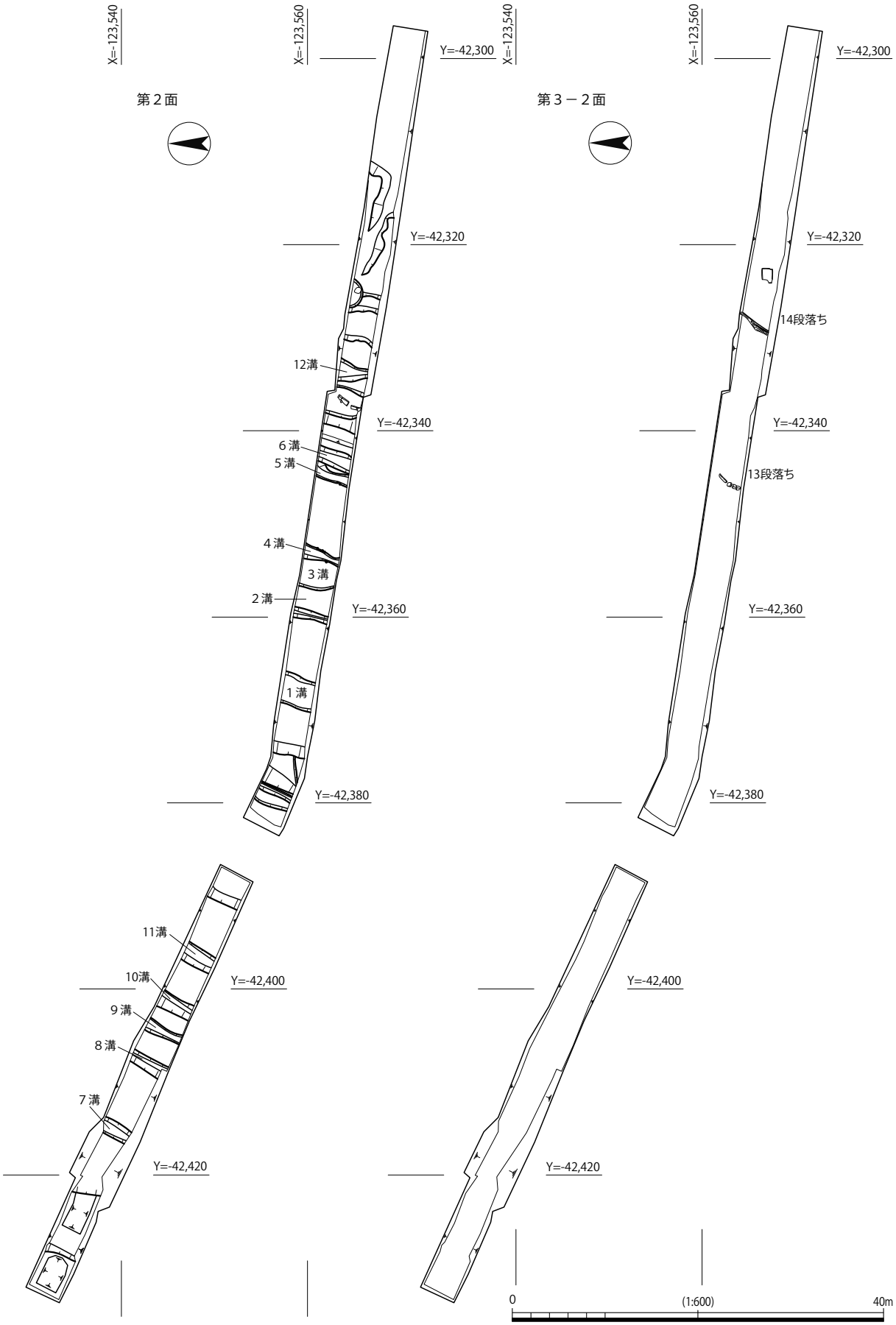


図 87　千提寺西遺跡９区　全体平面図

（８）日奈戸遺跡

日奈戸遺跡は千提寺西遺跡の西側に隣接する小さな遺跡である。大岩川に面する千提寺西遺跡、千提寺市阪遺跡、千提寺クルス山遺跡と、佐保川に面する泉原遺跡の中間に位置し、両遺跡の間をほぼ南北に連なる丘陵から東に流下する谷部を中心とした東西約 120 m、南北約 110 mの範囲にひろがる。標高は 258 ～ 272 mを測り、今回の発掘調査を実施する直前まで水田として利用されていた。そのため、当該谷部は調査中においても自然の湧水が激しく、古くより常に湿潤な環境であったことがうかがえる。

調査区は二つに分かれる各々の谷部の中央と、その開口部にひろがる緩斜面上に幅 10 mの調査区を設定したものであり、東西約 130 m、南北約 150 mに及ぶ。この調査区は、工事着手の事前に実施した試掘調査において古代以前の遺物や縄文土器がまとまって出土したことから、その分布範囲を明確にすることと、丘陵部や谷部の前面にひろがる緩斜面における遺構の状況を効率的に調査するために設定されたものである。

基本的な層序は、暗灰褐色を呈するシルト質土の近現代耕作土（第１層）、灰褐色を呈するシルト質土の近世耕作土（第２層）、暗茶褐色を呈するシルト質土の中世耕作土（第３層）、黒褐色を呈する砂質土の中世以前包含層（第４層）、花崗岩あるいは礫層の地山により構成される（図 22･写真図版９－７・８・写真図版 10）。遺構面は、第２層除去面を第１面、第３層除去面を第２面、第４層除去面を第３面として設定した。なお、上記の第４層は調査区のうちの一部にしか残存しないため、現地では第３層に引き続き第４層を除去し、全体的な遺構検出を行った後に埋土や重複関係の確認から各面に帰属する遺構を復原した。

調査は、まずはじめに谷を縦断する東西方向の最も長い調査区を１区として実施し、続いて北東に屈曲して隣接する谷にのびる２区、最後に南側の緩斜面上に設定した３区の順に行った。これらの調査区は調査を行うための便宜的なものであり、地形や遺構の連続性を説明する上では不要なため、本項では遺構面ごとにまとめて報告を行う。なお、遺物や写真・図面等の記録類に関しては調査区名を残したまま報告している場合があるが、位置を示す参考程度と考えていただきたい。

第１面

現代耕作土である第１層と近世耕作土の第２層を重機により慎重に掘削した結果、14 世紀代を中心とする遺物の包含された第３層を検出した。この時点において現代と異なる小さな雛壇状の耕作地を確認したが、これらを人力掘削によって慎重に除去し、その下面である第１面において当時の水田景観と耕作痕を検出した。

上記よりもさらに細かく雛壇の形成された水田は、その幅が現代の区画に比べてかなり狭いことを確認した。谷地形の等高線に沿って段が形成された点では相違ないものの、平坦面の間隔が大きく異なっており、場合によっては、現代では一筆となっている水田区画が３段に分かれていたものも存在する。このような雛壇の法面成形には当地域に産する花崗岩塊を多用しており、時代が下るにつれて石材の大型化が進むことから、造成工事の大規模化したことが看取される。

第２面

中世の耕作土である第３層を除去すると、調査区の大半において堅固な地山が露頭し、水田区画の山裾や低まりに第４層や有機質が残存する状況を検出した。上述のとおり、第４層の残存範囲が限定的なことや、同層上面ではほとんど遺構を検出しなかったことから、他と同様に地山面まで掘り下げ、遺構の確認を行うことした。なお、１区や２区の最上部である谷頭付近では、特に湧水が激しいためにグラ

イ化した花崗岩バイラン土が液状化し、調査を続行することは困難となった。その他の地点では下層より新たな雛壇状の水田区画を検出し、中世の古い段階かあるいは古代末頃の耕作痕と考えられる。また、部分的に土坑や小穴等の遺構も検出した（図 88）。

1 区の西側、Y=-42,700 から Y=-42,720 付近では、幅約 2 mの区画を検出した。区画の大部分は自然石を用いた石列状を呈するが、一部に枝打ちした丸太材を使用している（図 89）。前述の第 1 面において検出した雛壇の位置とほぼ変わらないことから、古代以前に形成された雛壇が後世の造成直下に残存していたものと推測する。このことから、中世における水田区画は初期の水田区画をほぼ踏襲しながら、耕作面の嵩上げだけを行ったのであろう。

1 区の中央付近は耕作地の様子がほとんど看取されず、自然石や岩の散乱するか少し起伏のある地形が確認され、その中に土坑等の遺構を複数検出した（図 90）。土坑や小穴はいずれも第 4 層を埋土とし、深浅の差はあるものの遺物の出土は認められなかった。これらの遺構群と前述の耕作地との間、X=-123,762、Y=-42,703 付近では、人頭大の自然石が直径約 3 mの範囲に集積された遺構を検出し、その内部に土器片が多数混在する状況を確認した（図 88）。土器は細片のため図化するには至らず、遺構の性格も不明であるが、この集積遺構 1 の周辺には多数の杭や立木の根株もみつかっており、人為的に形成された蓋然性が高いと考える。また、これらの遺構の分布範囲は Y=-42,685 から Y=-42,697 と、Y=-42,667 周辺の 2 箇所に分かれているが、両者の間には第 3 面で後述するブロック土が堆積しており、遺構形成に関連した可能性も考えられる。

ブロック土の上面では、Y=-42,680 付近において第 4 層を埋土とする浅い落込みや、その東側に並行する堤状のわずかな高まりを検出した（図 88）。また、この高まりの東側である X=-123,762、Y=-42,677.5 付近において、直径約 50 ㎝の範囲に炭化物と焼土のブロックが集中する状況を検出した（図 91）。焼土のブロックは厚さ約 4 ㎝を測り、緩く湾曲する側ほど赤変が著しい。接合面の風化が激しく、本来の形状を復原するには至らなかった。

1 区の東側、Y=-42,650 付近では、第 4 層が他の地点より良好に残存する状況を確認した。周辺では耕作溝や土坑・小穴をまとまって検出したが、遺物の出土は少ない（図 90）。なお、東端の最下段は近世の造成による削平が著しく、地山内の自然石が多く露頭する状況であった。

2 土坑　X=-123,772、Y=-42,653 に位置する（図 90）。東西方向にやや長い隅丸方形を呈し、長辺約 1.1m、短辺約 80 ㎝、深さ約 12 ㎝を測る（図 92）。

3 土坑　X=-123,767、Y=-42,657.5 に位置する（図 90）。南北方向にわずかに長い隅丸方形を呈し、長辺約 1.0 m、短辺約 80 ㎝、深さ約 20 ㎝を測る（図 92）。

2 土坑は平坦部の中央に単独で存在するが、3 土坑は水田の擁壁直下付近に位置し、周辺に同様の土坑が複数認められる点で、様相が若干異なる。しかし、いずれも遺物の出土はみられず、詳細は不明である。

2 区は尾根筋と谷の境界付近に設定されていたため、第 3 層を除去すると、尾根の北東側斜面を利用して成形された雛壇状の耕作地と、谷の南西側縁辺を検出した。谷の中央に近い調査区北側は調査深度が 3 m以上に達するが、尾根の斜面となる南側は極端に浅く、現代の耕作土が地山面を削平する。一方、南半部では、X=-123,744、Y=-42,662 付近において谷沿いを流れる小規模な流路を石積みによって閉塞した後、平坦に造成した状況を確認した（図 88）。この造成部分の先端付近は地下水によるものと考えられる鉄分が沈着しており、黒色土器等がまとまって出土した（図 93）。当地の土地開発は中世代が

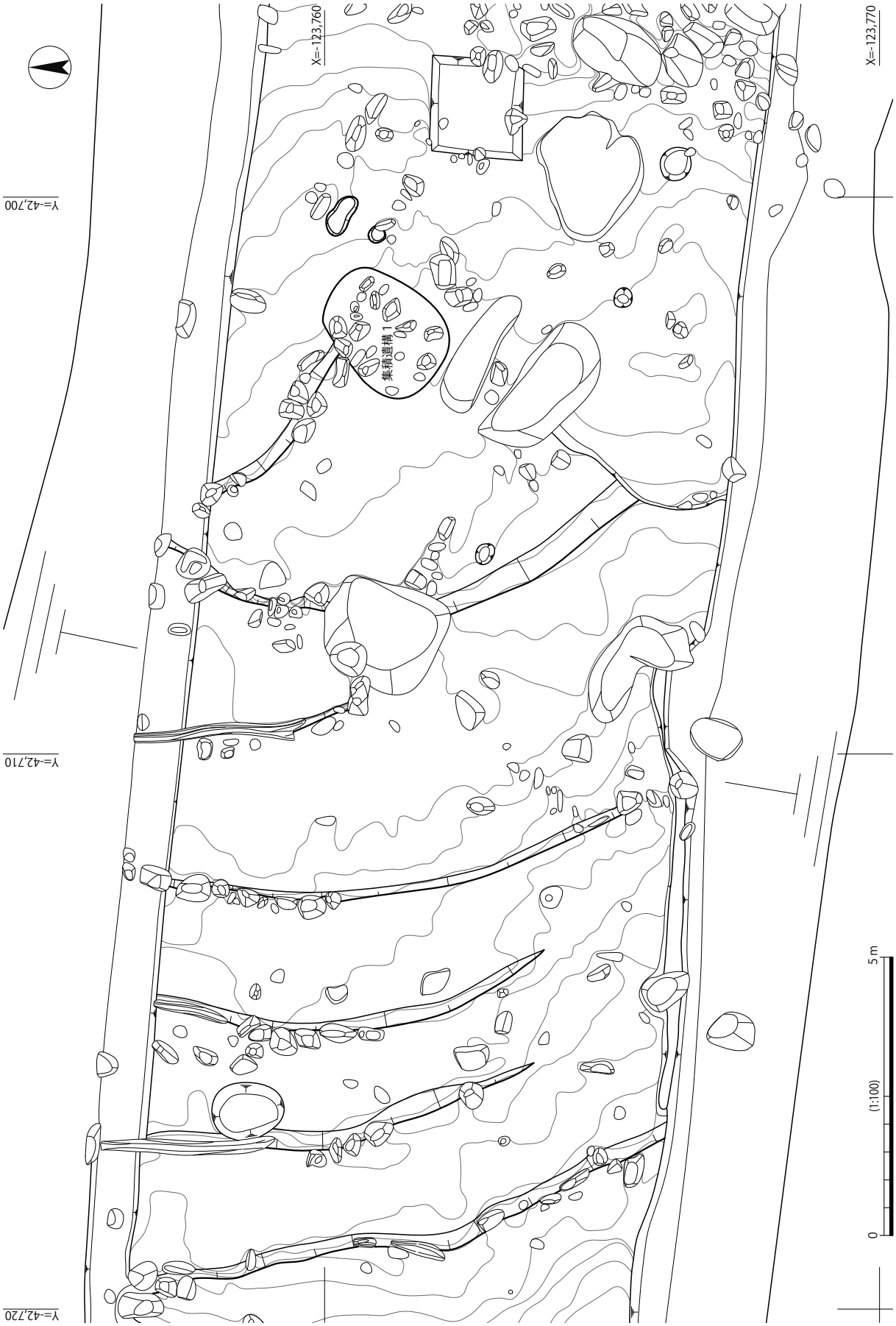


図 89　日奈戸遺跡　平面図（1）

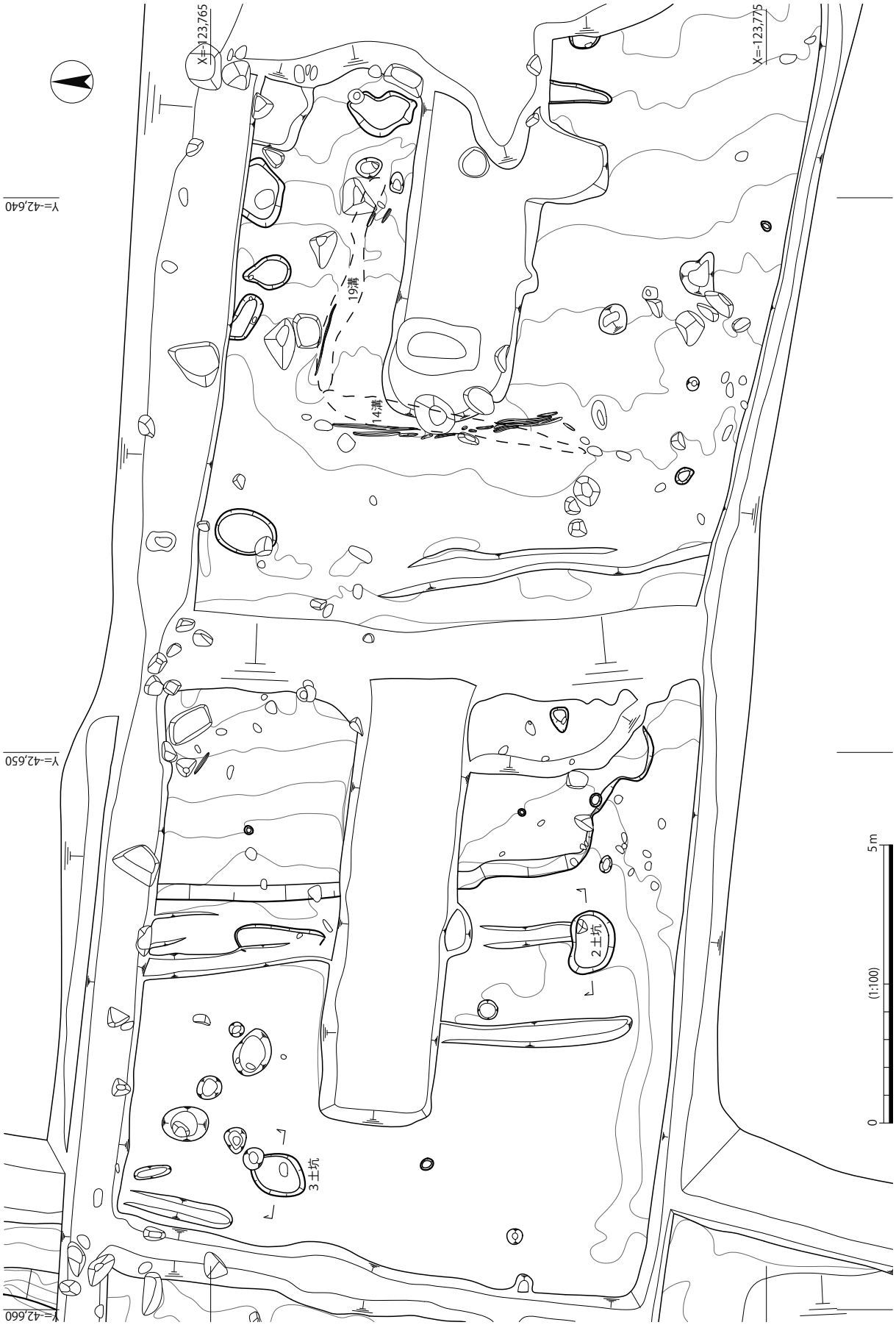


図 90　日奈戸遺跡　平面図（2）

中心と考えられるが、入植は 11 世紀代にさかのぼる可能性を示唆するものである。

その他の遺構としては、調査区の南西部を南にのびる尾根筋付近において土坑や小穴を検出した。遺物はほとんど出土しておらず、埋土の状況から中世以降のものが大半と推測する。

３区では北半に谷部、南半に緩斜面を検出した（図 88）。谷部は西から東へと流下する一部であり、幅約 15 mを測る。谷部には第３層に相当する泥層が１m以上と厚く堆積しており、これを分層して検出した各遺構面では、石列等を用いて成形された雛壇状遺構を確認し、耕作地として利用されたと考えられる。

南につづく緩斜面では、地形に沿って起伏はあるものの一様に耕作溝が検出され、上記の谷から連続する棚田が形成されていたと考えられる。

第３面

第２面検出時において確認した遺構や地形のうち、埋土が第４層以前のものについて取り上げることにする。遺構自体の数が非常に少ないため、全体平面図は図 88 をそのまま参照されたい。

１区の中央付近、Y=-42,670 から Y=-42,690 において、第４層のブロックを含む灰色の砂土を検出した。ブロック土の検出範囲は幅 15 ～ 20 mを測り、２区の南端を通って北東方向にひろがる状況を確認した。これらの層理の斜行する様子から、３区の北半を東西に流れる谷から北東方向へ溢流した際にもたらされた氾濫堆積層と推測する。１区では深さ 50 ㎝、２区では深さ 20 ㎝程度の堆積層を除去したところ、いずれも下部との層界は明瞭ではないが、花崗岩の礫層が露頭したため、これを地山相当として調査を終了した。堆積層の北側に接する２区では自然石をほとんど含まない砂混じり粘土シルトが検出され、対する南側の３区では花崗岩盤が露頭することから、地山と異なる下部の花崗岩礫層も同

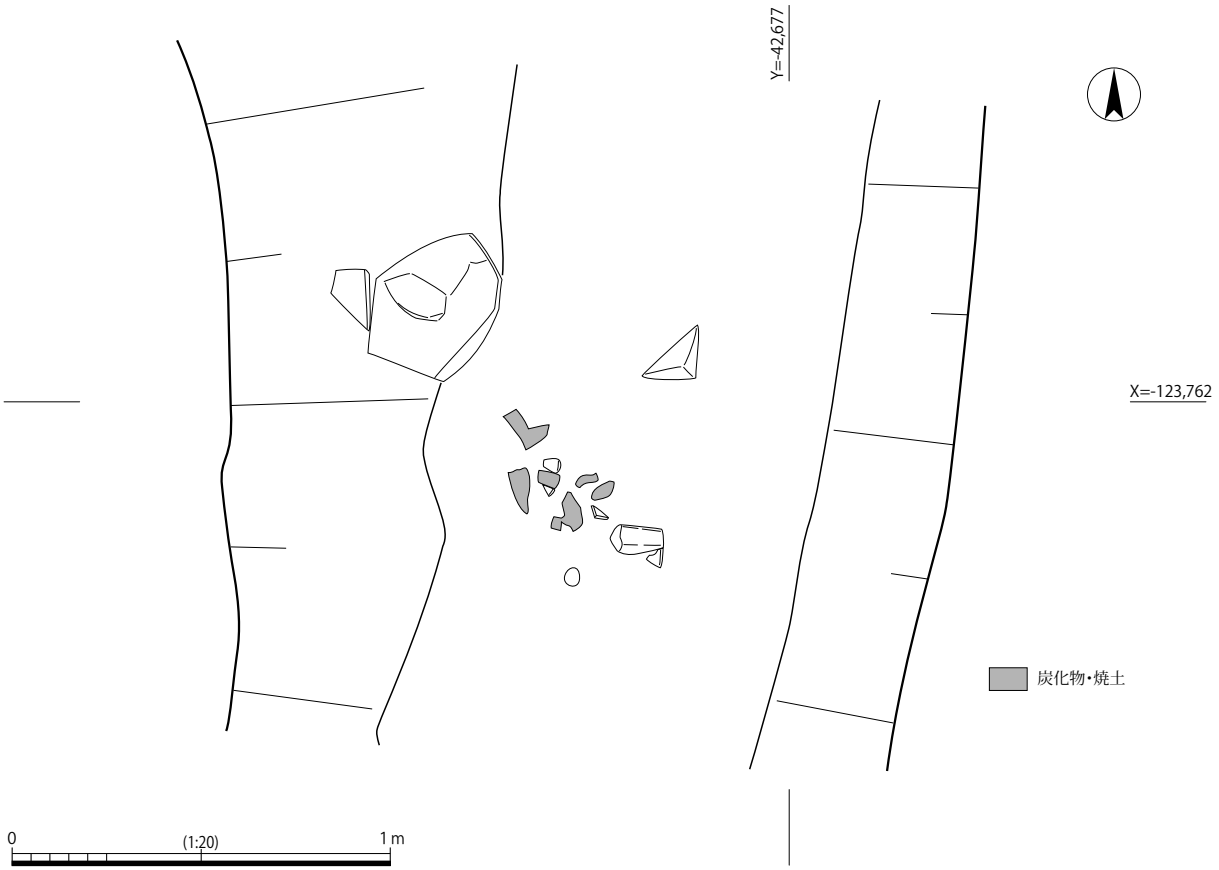


図 91　日奈戸遺跡　15 焼土坑　出土状況図

様の堆積層である可能性も考えられる。なお、上面において２区の南半で検出した小規模な流路は、その方向が溢流と一致することから、氾濫が終息した後に残された水路とも考えられる（図 88）。

これらの堆積層からは遺物が出土しなかったため氾濫の時期は不明であるが、前述のように上面の造成が 11 世紀以降に行われたことや、同層を除去した下位から弥生土器や縄文土器の細片が出土していることから、第４層として一定程度に土壌化が進んだ後であることは間違いない。

２区では、X=-123,752.5、Y=-42,660 付近において、上記の氾濫堆積層を埋土とする小穴から弥生土器の壺が出土した（図 93）。土器は器面の摩耗が著しいものの、わずかに残る櫛描文から中期Ⅲ様式の所産と考えられる。土砂に埋没していたことや摩耗が激しいことから、本調査区より離れた場所に存在した当該期の遺跡から運搬された可能性も考えられ、注意が必要である。

３区では、上面において検出された北半の谷部が、本来の自然地形として存在したと考えられる（図 94）。明瞭ではないが、耕作のために形成された雛壇とかく拌された第３層に相当する埋土が確認される上面に対し、第３面では植物遺体を多く含む炭化物層が薄く堆積する様子が看取され、主に緩やかな流水状態にあったと推測できる（図 95）。

谷部の周辺では土坑や小穴がみつかっており、特に北側にまとまって検出された（図 88）。

土坑 27　X=-123,785、Y=-42,661 付近に位置する（図 94）。直径約 50 ㎝、深さ約 30 ㎝を測る（図 96）。

南半の緩斜面上では、Y=-42,645 から Y=-42,655 付近にかけて扇形に堆積する第４層を検出した（図 88・写真図版 60 － 4）。扇形の範囲は東西に幅約 17 ｍを測り、斜面に堆積する暗褐色の第４層からは遺物がまとまって出土した。このため、当初は居住域の一部である可能性を視野に入れたが、調査の結果、建物を示すような遺構や層序は確認できなかった。かわって第４層を除去した下面において、傾斜に沿ってのびる幅 10 ㎝前後、深さ約５㎝の細い溝を数条検出した。

これらの溝は耕作に伴う痕跡の可能性も除外できないが、同じ方向に地山のずれた形跡や地割れの跡もみつかっており、地震や土砂崩れ等といった自然災害による痕跡の蓋然性が高いと判断する。また、この緩斜面周辺では縄文土器の細片がまとまって出土しており、この付近において当該期の遺構が確認できないことから、一時的な生業域として利用されたものと考えられる。

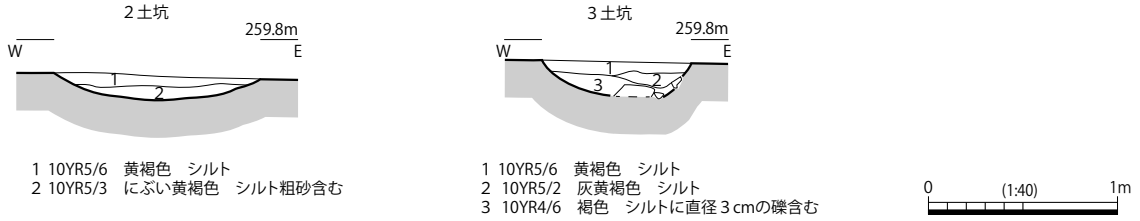


図 92　日奈戸遺跡　２・３土坑　断面図

図 93　日奈戸遺跡　平面図（3）

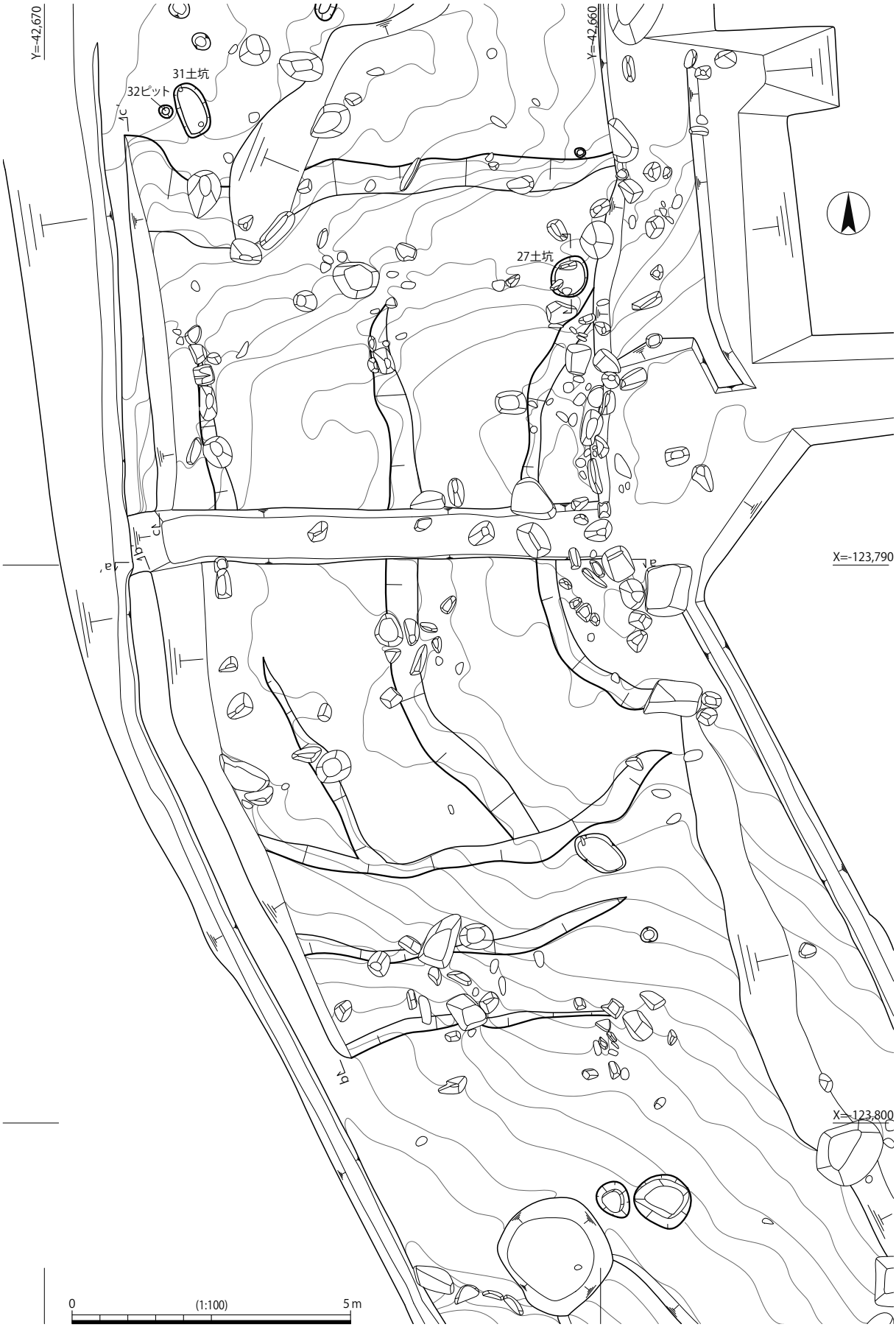
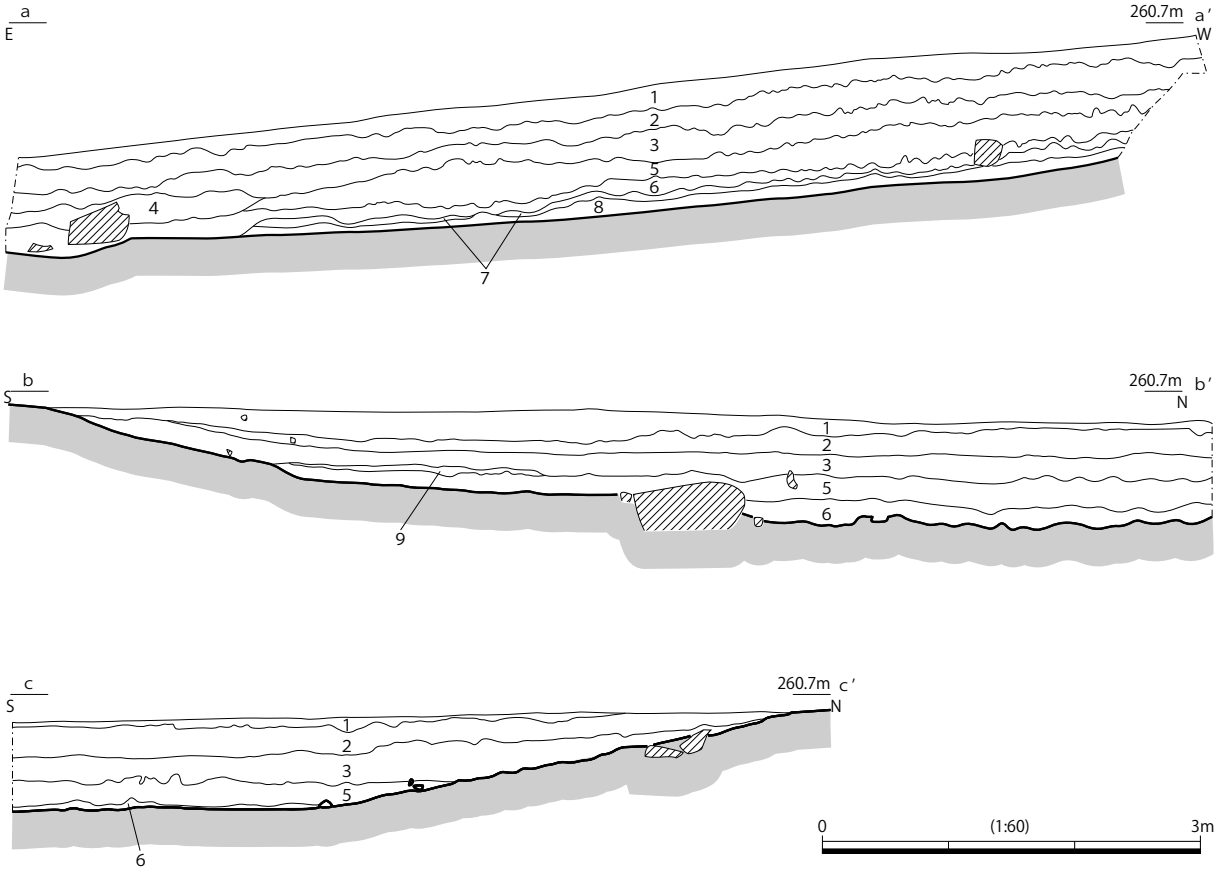
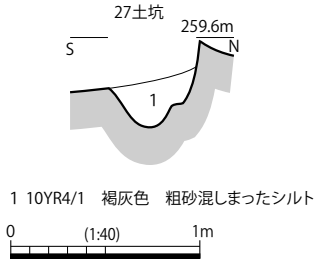


図 94　日奈戸遺跡　平面図（4）



1 2.5Y3/2　黒褐色　シルト混中細砂　粗砂～中礫含む　炭化物あり
2 2.5Y3/1　黒褐色　中細砂混シルト　粗砂・小礫含む　炭化物あり（第３－２層相当）
3 5Y3/2　オリーブ黒色　中細砂混シルト　粗砂・小礫・粘土含む　炭化物あり　植物遺体含む（第３－３（１）層相当）
4 5Y2/2　オリーブ黒色　中粗砂混シルト　小礫・炭化物含む
5 5Y3/2　オリーブ黒色　中粗砂混粘土シルト　粗砂・小礫含む　炭化物あり（第３－３（２）層相当）
6 2.5Y3/2　黒褐色　粘土シルト（植物遺体）と7.5Y4/1　灰色　粘土シルト（中粗砂含む）のブロック土（第４層相当）
7 10YR3/3　暗褐色　植物遺体　すぐに黒変
8 2.5Y5/2　暗灰黄色　細砂～小礫　中礫以上を含む
9 2.5Y3/1　黒褐色　中砂混年粘土シルト　粗砂含む　炭化物多く含む

図 95　日奈戸遺跡　３トレンチ谷部　断面図



1 10YR4/1　褐灰色　粗砂混しまったシルト

図 96　日奈戸遺跡　27 土坑　断面図

（9）千提寺市阪遺跡１・３区

千提寺市阪遺跡１・３区は、同２区の墓が立地する「市坂山」と呼ばれる丘陵の東側に位置する。大岩川に向かって下降する斜面に位置し、清阪街道に面する。

１区の調査前の状況は、西から東へ向かって南北に幅の広い棚田が１mほどの高低差をもって下方に連なる状態であった。西端の最も高い部分は東西の幅がある平坦部であり、道具を収納する小屋が建っていた。本区は千提寺地区に展開するほかの調査区に比べ、街道沿いの開けた場所であり、丘陵の日陰となる南西隅部を除けば、日当たりの良い場所である。調査地は南北に二分割し、南側を先に、北側を後で調査を実施した。

３区は１区の南西隅に隣接する小さな谷部に形成された平坦部である。１区の調査に際し、接する断面に炭化物を多く含む層が露頭したことにより、調査区を追加したものである。

１区の堆積土層は、近世から現代の耕作土と棚田造成土（第１層）を除去すると、中近世の遺物を含む包含層（第２層）、古代末から中世の遺物を含む包含層（第３層）、縄文時代の遺物を含む包含層（第４・５層）である。第６層より下層では、遺物が確認されず、地山とみられる。中近世遺物包含層（第２層）は、粘性や土壌化の度合い等をもとに、４層に細分した。いずれの層も土壌化が進んでおり、耕作土層とみられる。第３層は炭化物を含む黒色化した土壌化層である。第３層除去後面では、調査区の北端から西端にかけては花崗岩や礫層の地山を検出した。調査区東半の中ほどでは東西方向の谷筋を中心に下層に異なる土壌化層がみられ、縄文土器を確認したため、下層への調査を進めた。第４層は暗褐色シルト～粘土層、第５層は黄褐色シルト～粘土層であり、部分的にブロック状を呈する。第４層から縄文時代早期から中期末、第５層から縄文時代早期を中心とする遺物が出土する（図 23・写真図版 10－７・８・写真図版 11－１～７）。遺構面は、第２層除去面を第１面、第３層除去面を第２面、第４・５層除去面を第３面とした。

３区の層序は、表土及び近世耕作土（第１層）を機械により除去すると、山土である黄褐色シルト（第２層）、土壌化層である灰褐色シルト（第３層）である。これより下層は、トレンチ調査で確認したところ、遺構・遺物ともに皆無であった。遺構は、第２層の除去面である第１面で焼土坑を確認した。第３層の除去面である第２面では、とくに遺構は認められなかった（写真図版 73）。

第１面

１区では、現在の棚田より幅が狭く、細かな段に分かれる棚田とそれに伴う耕作痕を検出した。また、調査区西端のやや小高い平坦部では、焼土坑を９基検出した。焼土坑は、残存状態の比較的良好なものはいずれも平面が円形を呈し、側面が被熱により赤変している。土坑底部は、側面と同様に赤変するものと、炭化物が堆積しているものの２種に分かれる。うち一基からは火葬骨片が少量出土し、火葬墓の可能性がある。他の８基は、一部埋土に土器の細片を含むものはあるが、それ以外に出土遺物は認められず、性格は不明である。

第２面

１区では調査区の西側を中心に多数の遺構を検出し、丘陵裾の高台部分を居住域、川沿いの低い緩斜面を生産域に利用していた状況を確認した（図 97・写真図版 63・65－１）。

西側の居住域は、尾根から下降する斜面の一部を削り、排出した土砂を盛土に利用して平坦部を形成して造られたことがわかった。平坦部の範囲は調査区の西辺とほぼ同一であり、幅５～ 15 m、南北約 70 mにひろがる。東側の肩口が後世の耕地化に伴って削り取られ、建物の全体や形状を把握するまで

には至らなかったが、直線あるいは屈曲する溝に囲まれた範囲にピットが集中しており、建物を構成するピットの配置は認められないものの、何らかの施設が建て替えられた痕跡と考えられるためこれらを建物２～５として捉えた（図 97 グラデーション網部・写真図版 64・65 －２）。居住域がひろがる平坦部の東側斜面では遺構が散見されるにとどまるが、南半部で完形に近い瓦器椀や土師器皿の崩落した状況や、北半部で完形の瓦器椀が出土するピットを検出する等、人為の及んだことは明らかである。これら盛土に伴う遺物は 10 世紀後半から 13 世紀の遺物が含まれる（写真図版 68 －４・５・写真図版 71 －１～３）。また、これに隣接する斜面の下には、幅２m、南北約 30 mの狭い平坦部がひろがり、石組や溝、多数の土坑を検出した。狭い平坦部の北端では、屈曲する溝に囲まれた範囲に焼土塊や炭化物が集中しており、これを建物１とした（図 97 グラデーション網部・写真図版 64 －１）。

建物１　居住域がひろがる平坦部の東側斜面下に沿った狭い平坦部北端に位置する（図 98）。斜面の下端に沿った長辺 10 m、短辺 0.5 ～ 2.5 mの「コ」字形を呈する 318・48 溝に囲まれる。東側は後世の耕地開発のため削平されており、建物１とした範囲は長さ 10 m、幅１～２mである。318・48 溝は断面形が浅いU字形であり、深さは 10 ～ 15 ㎝である。

318・48 溝の背後となる斜面には、溝に沿って、70 ㎝～１m間隔でピット 249 ～ 253 が並ぶ。これらのピットは斜面に直交する方向に掘削されており、直径 20 ～ 40 ㎝、深さ 15 ～ 25 ㎝である。掘形からは、柱が斜面から斜めに突出するものと推定され、建物の支えであろうか。性格は不明であるが、これらのピットは建物に関連するものと考えられる。

建物内では、ピットの他に、中央やや北寄りで 326 土坑を、南寄りで 342 落込みを検出し、326 土坑と 342 落込みの間では焼土塊と炭化物のひろがりを検出した（写真図版 69 －１）。

ピットは北端の 254 ピットから 327、255、257、258、南端の 320 ピットまでが溝に沿って一列に並ぶ。320 ピットが深さ約 50 ㎝である他は、いずれのピットも深さ約 15 ㎝と浅い。建物の斜面側の柱筋になる可能性が考えられる。

326 土坑は、深さ約 10 ㎝の浅いものであり、埋土はやや粘性をもつ茶褐色シルトで、焼土塊や炭化物は含まない。318・48 溝側に人頭大の自然石が集中しており、人頭大の自然石は 318・48 溝から斜面にかけてひろがる。南側にひろがる焼土塊、炭化物とは同一面で検出されながらも、明確に埋土が区別できる。土坑の西辺は溝に沿っていることから、建物に付属する施設と考える。建物内においてこの部分のみ土がしまっておらず粘性が高いことから、水場の可能性が考えらえる（写真図版 69 －２）。

342 落込みは、焼土塊、炭化物を除去後に検出した。深さ約 10 ㎝の浅い落込みである（写真図版 69 －３）。

焼土塊と炭化物のひろがりは、326 土坑の南側から 342 落込みの上面にかけて検出した。厚さ５㎝前後である。当初竈の痕跡かと考え、慎重に焼土塊を検出したが、焼土塊はいずれも直径約 10 ㎝のブロックであり、馬蹄形などの形にはならなかった。具体的な構造は不明であるが、火処であることは明らかである。

鉱物滓などは出土しておらず性格は不明であるが、こうした火処と可能性ではあるが水場が隣接することから、本遺構は竈屋もしくは何らかの工房になる可能性が考えられる。

遺物は、318 溝から土師器皿が、342 落込みから黒色土器 A 類椀が出土した（図 100 － 684・685・写真図版 69 －４）。いずれも 10 世紀後半～ 11 世紀に位置付けられる。

建物２　居住域がひろがる平坦部のほぼ中央西端、崖面の下に位置する（図 98）。崖面の下端に沿った

長辺 13 m、短辺 2 mのＬ字形の溝 243・42 に囲まれる。すぐ東側に建物３の 239 溝が平行するため、建物２とした範囲は長さ 13 m、幅１～２mである。溝は断面形が浅いＵ字形であり、深さは 10 ～ 20 ㎝である。建物内では、南側でピット、北側で土坑を検出した。22・23・27・29・30・31・44・47 ピットは直径 30 ～ 50 ㎝、深さ 20 ～ 40 ㎝であり、とくに配列は認められない。土坑はいずれも浅く深さ 10 ～ 15 ㎝である。

遺物は、22・27 ピットから土師器皿が出土した（図 100 － 686・687）。土師器皿のほかに瓦器椀が出土しており（写真図版 69 － 5）、12 ～ 13 世紀に位置付けられる。

建物３　建物２の東側に沿った長辺９m、短辺２mのＬ字形の 239・21 溝に囲まれる（図 98）。239 溝の北端は建物４の 298 溝に先行しており、建物３とした範囲は長さ９m、幅６～７mである。溝は断面形が浅いＵ字形であり、深さは７～ 16 ㎝である。建物内では、ピット、土坑を検出した。ピットは 239 溝に平行する列を、大きく西側と東側で確認した。西側のピット列は、239 溝から東へ 1.3 ～ 2.0 m離れた位置にあり、225・229・302・234・26 ピットの列、231・233・235 ～ 237 ピットの列をみることができる。東側のピット列は、239 溝から東へ 6.0 ～ 6.7 m離れた位置にあり、210・308・217・218 ピットの列、209・211・212・219 ピットの列をみることができる。これらのピット列はピットの間隔や大きさ、深さは不統一であるが、方向性は認められ、また、それぞれの南端が溝 239・21 に囲まれた範囲内におさまることから、建物の柱筋と考えられる。

遺物は、24 土坑（図 100 － 688）、309 ピット（同 689）、213 ピット（同 690・691・写真図版 69 － 7）、321 ピット（同 692）、210 ピット（同 693）から土師器皿、311 ピット（同 694）から瓦器椀が出土した。瓦器椀は楠葉型で 12 世紀後半～ 13 世紀初頭、土師器皿は 12 ～ 13 世紀に位置付けられる。

建物４　建物２・３の北側に位置し、建物３の 239 溝を切るＬ字形の 244・298 溝とその北側の 161・160 土坑が本来一連の溝であったと考えられ、復原すると長辺 13 m、短辺２～３mのコ字形の溝に囲まれる（図 98）。建物４とした範囲は長さ 13 m、幅８mである。溝は断面形が浅いＵ字形であり、幅は 0.5 ～ 1.8 m、深さは 15 ～ 20 ㎝である。建物内では、ピットを検出した。ピットは 244 溝に平行するピット列を複数確認できる。最もピットが稠密な列をひとつあげると、244 溝から東へ２m離れた位置にある、133、150、245、162、180、186・189、190、194、197、198・199 の列がある。ここでは、198・199 など隣接するピットがみられることから、柱の建て替えがあった可能性がうかがえる。ピットの間隔や大きさ、深さは不統一であるが、方向性は認められることから、建物の柱筋と考えられる。

遺物は、183 ピット（図 100 － 695 ～ 697・写真図版 70 － 2・3）、184 ピット（同 698・699）、150 ピット（同 700）から土師器皿、195 ピット（同 701）から土錘が出土した。土師器皿のみであり、時期の特定が困難であるが、概ね 13 世紀に位置付けられる。

建物５　居住域がひろがる平坦部の南端部に位置する（図 99）。長辺 7.5 m、短辺 2.8 mのＬ字形の 73 溝に囲まれる。74 ～ 76 ピット、92 ～ 94 ピットが並び、76、85、94 ピットが並ぶことから、東側の段落ちまでは本来建物の範囲であったと考えられる。また、南側にある 62 土坑の四隅のピットも同一列に並ぶことから、ここもまた建物の範囲に含まれる可能性がある。その場合、建物の範囲は長さ 11 m、幅 3.5 mである。ただし、73 溝は 92 ～ 94 ピット列の延長上で途切れることから、62 土坑と四隅のピットは、別棟となる可能性も考えられる。62 土坑は、深さ約 20 ㎝であり、底面には細砂～粗砂とともに拳大の自然石が面的にひろがる。この層の上位はブロック土であり、人為的に埋められた

図 99　千提寺市阪遺跡１区　第２面　居住域南半部　平面図

ものと考えられる。62 土坑はその底面の埋土の状況から水場の可能性が考えられる（写真図版 71 － 7）。

遺物は、91 土坑から瓦器椀（図 100 － 702・写真図版 71 － 8）、62 土坑から白磁碗（同 703）が出土した。瓦器椀は楠葉型であり 13 世紀中頃、白磁碗は 12 世紀に位置付けられる。

以上より、建物の変遷は、建物 1（10 世紀後半～ 11 世紀）→建物 2（12 ～ 13 世紀）→建物 3（12 ～ 13 世紀）→建物 4（13 世紀）→建物 5（13 世紀中頃）と考えられる。

生産域では、段落ちやピットを検出した（図 97・写真図版 63 － 2・65 － 1）。北半部中央よりやや西側では傾斜面にピットが集中しており、段落ちに伴う水口などの施設があった可能性がうかがえる。これらピットのうち、287 ピットから土師器椀（図 100 － 704）、335 ピットから瓦器椀（同 705・写真図版 70 － 8）が出土した。瓦器椀は典型的な楠葉型ではなく、12 世紀後半に位置付けられる。土師器椀は瓦器椀を模倣したものであろうか。

1 区の第 3 面では、落込みや土坑を検出し、縄文土器・サヌカイト剥片・炭化物等が出土した（図 97・写真図版 66・67 － 1）。また、検出は第 2 面であるが、特筆すべき遺構として調査区北側のやや東寄りで検出した半円形の 260 溝がある（写真図版 63 － 2・67 － 1）。この遺構の周辺からはサヌ

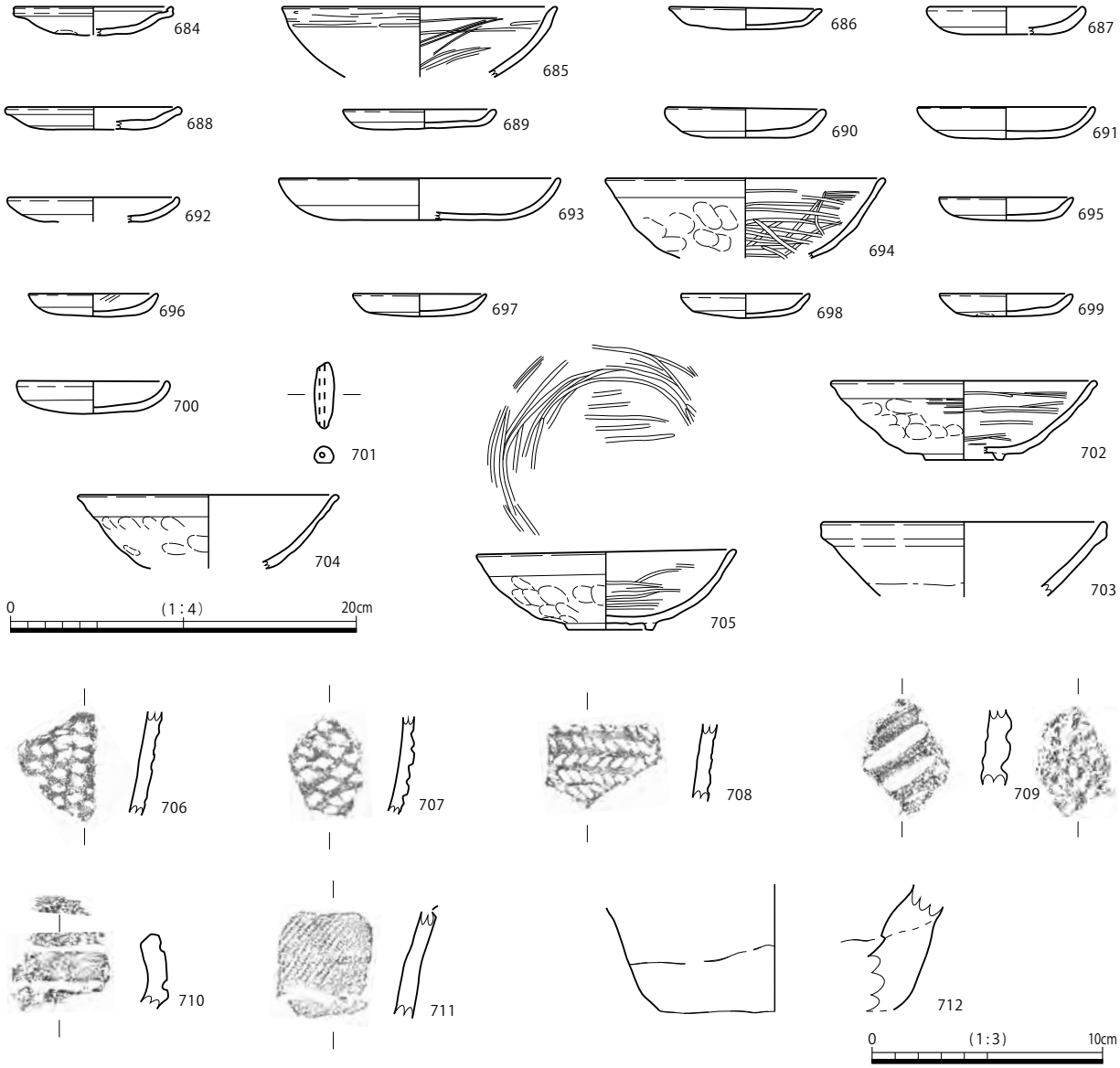


図 100　千提寺市阪遺跡 1 区　出土遺物（1）

カイト剥片や縄文時代早期～中期末の土器片が出土しており、同時期の遺構になる可能性が考えられる。また、260 溝の周辺には 361 落込みをはじめとする複数の落込みを検出しており（写真図版 72 － 4 ～ 7）、竪穴建物となる可能性も想定されたが、床面が明確でないことや炉跡等の付随施設が認められないことから、積極的な評価は困難であった。

なお、第４・５層が部分的にブロック状を呈する点について（写真図版 11 － 4 ～ 6）、当センター

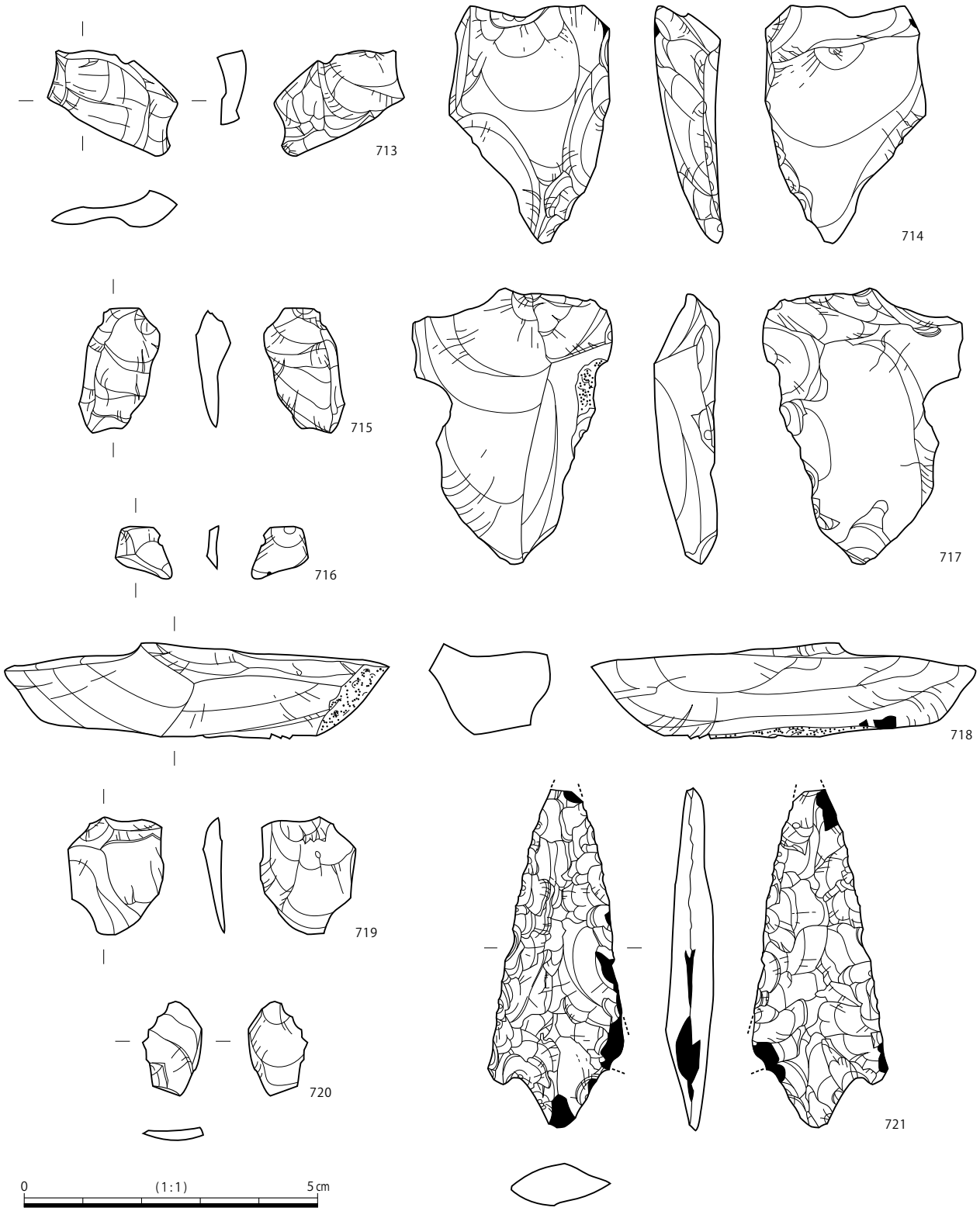


図 101　千提寺市阪遺跡１区　出土遺物（２）

職員の井上智博に意見を求めたところ、土層断面を詳細に観察した結果、直径５㎝前後の生物擾乱（根株）が認められることから、それらが多数重複し合って旧表土をブロック化させたものであるとの見解を得た。また、調査区内に点在する平面が卵形の土坑については、やはり断面の観察から、風倒木痕の可能性が高いとの指摘を受けた。

縄文土器は、346 落込み（図 100 － 706）、260 溝周辺の第 4 層（同 707 ～ 711）、360 土坑（同 712）から出土した。706 ～ 708 は押型文であり、早期の土器である。709 ～ 711 は中期末、北白川Ｃ式の土器である。712 は縄文土器の底部である。下面は接合面であり、丸底か平底かは不明である。

石器は、286 ピット（図 101 － 714）、349 ピット（同 713）、334 土坑（同 715）、346 落込み（同 716）、260 溝周辺の第 4 層（同 717 ～ 720）から出土したほか、第２面調査区北辺中央の北へ向かって落ちる崖下の平坦部で 721 が出土した。すべてサヌカイトである。714 は剥片刃器、713、715、716 はチップ、717 は石核を転用した刃器か、718 は剥片、719、720 はチップ、721 は尖頭器である。

１区の調査では、縄文時代早期から中期末の遺構面である第３面と、中世、10 世紀後半から 13 世紀の遺構面である第２面の様相が明らかとなった。

第３面では、調査区の南側で、東側の大岩川へ向かって開く浅い谷の存在が明らかになった。この谷の北側肩部にあたる調査区北東部に落込み、土坑などの遺構が集中する。また第２面ではあるが、地山上で検出した半円形の溝 260 周辺では縄文時代の遺物が多く出土したことから、260 溝も縄文時代の遺構に含めることができると考える。当初、半円形の 260 溝、361 落込み、346 落込みは遺物が集中することから竪穴建物の可能性を考えたが、明確な床面や炉など付属施設は確認できず、断定には至らなかった。この場所は大岩川に向かい下降する緩斜面の突端にあたり、ここから東側は斜面が急になるとともに大きな岩が散在するようになる。チップが出土していることから、ここで石器加工が行われたと考えられる。縄文時代早期から中期末、川に近い、日当たりのよい平坦部で石器加工をする縄文人の様子を想像することができる。早期～中期末の縄文土器片は 50 片弱であることから、長期の居住は考えられず、キャンプサイト的な性格が想定される。

第２面では、丘陵裾部にあたる調査区西側の平坦部で、溝や多数のピットを検出し、居住域の存在が明らかになった。Ｌ字形やコ字形に囲まれた建物を５棟検出した。建物５を除き、明確な柱配列は確認できなかったものの、溝に平行するピット列が認められ、柱筋と考えられることから、建物と認識した。西側平坦部から一段下の狭い平坦部で検出した建物１は 10 世紀後半から 11 世紀、西側平坦部で検出した建物２～５は 12 ～ 13 世紀に営まれたと考えられる。居住域である平坦部の東側は、後世の削平のため、急な傾斜面となっており、削平時の盛土が認められる。ここに包含される遺物は 10 世紀後半から 13 世紀のものであることから、もとは居住域の包含層であったものが削平、盛土されたものと考えられる。その東側の緩斜面には生産域がひろがり、ここでは段落ちに伴うと考えられるピットから 12 世紀の遺物が出土した。

本区では、中世、10 世紀後半から 13 世紀における、丘陵裾部の居住域とその下方にひろがる生産域の景観を復原することができた。西側丘陵の頂部にひろがる千提寺市阪遺跡２区では、近世墓に先立つ 12 ～ 13 世紀の中世墓が検出されており、本区で検出された居住域との関連が考えられる。

（10）千提寺クルス山遺跡２区

千提寺クルス山遺跡のうち、２区はクルス山丘陵部の西裾に貫入する谷地形と、その周囲をとりまく斜面地形に設定した調査区である。２区の平坦部は、発掘調査以前は棚田造成されており、耕作地として使用されていた。ただ最上段とその下段部分は、杉が植林されてから 20 年近く経過していたとみられる。これら棚田が造られていた部分は、「墓の丸」の丘陵の東側を、北東から南西方向に向けて下降する谷地形に向けて形成された支谷の一つだったとみられる。

土層は、土壌化の度合いや粘性、砂礫の混入の度合いなどに着目して大きく４層に区分し、５面の遺構面を調査した。土層は旧地形の谷の中央部に向けて厚く、面の数も多く認められた。したがって下層に向かうほど、遺構面の検出範囲は、長軸方向・短軸方向ともに谷の中央部に向けてゆるやかに傾斜しつつ、小さくなる傾向がある（図 24・写真図版 11 －８・写真図版 12）。

第１面

第１面は第１層（近世から現代の耕作土と床土）と第２－１層を除去した面で、土坑を検出した（図 102・写真図版 74 －２）。棚田造成の際の地形改変の痕跡が若干残るが、旧地形を反映して、北から南に向けてゆるやかに下降し、斜面際の部分から谷の中央部に向けて遺構面が下がる。斜面際の平坦部周辺で、直径 50 ～ 100 ㎝強の土坑を多数検出した。また丘陵頂部に近い緩斜面部分でも、同様の土坑を４基検出した。それらは近世から中世の土器を含む土壌化層を除去した段階で検出しており、第１面で検出した遺構とそれほど異なる時期のものではないと考え、ここに含めることとした。

第１面で検出した遺構には、遺構の時期を判断できる遺物が伴うものは認められなかった。したがって、第２－１層や、第１面の基盤層である第２－２層の出土遺物により、その形成時期を検討したい。

第２－１層では、土師器皿が 130 点強と最も多く出土し、瓦器椀 70 点強、煮炊具を主体とする土師質土器９点、東播系須恵器と瓦質土器が各４点、中世陶器２点、須恵器杯１点がある。出土遺物の大半が細片で磨滅しており、実測可能な遺物は限られる。口縁の断面形状や調整方法等で、かろうじて時期判断ができたものをみると、土師器皿では 11 ～ 12 世紀の可能性のあるものが１点、13 世紀代の可能性のあるものが４点、14 世紀もしくはそれ以降とみられるものが２点認められた。瓦器椀では 12 世紀代とみられるものが５点、13 世紀代とみられるものが９点、13 世紀後半もしくは 14 世紀代とみられるものを９点認めた。13 世紀代の瓦器椀片の中にも、13 世紀後半に含まれる可能性の高いものが数点含まれていたので、13 世紀後半以降のものの占める割合が最も多いとみられる。14 世紀代のものは、前葉までの時期におさまるとみられる。

第２－２層では、土師器皿が 160 点強と最も多く、瓦器椀 90 点強、煮炊具を主体とする土師質土器 17 点、土師器４点、瓦器皿３点、東播系須恵器と瓦質土器各２点がつづく。こちらも遺物の大半が細片で磨滅しており、実測可能なものはわずかだった。それ以外でかろうじて時期判断ができたものをみると、土師器皿では 13 世紀代とみられるものが３点、14 世紀以降とみられるものが３点だった。瓦器椀では 11 ～ 12 世紀とみられるものが２点、12 世紀代とみられるものが７点、13 世紀代とみられるものが 14 点、13 世紀後半以降とみられるものが８点だった。13 世紀代の瓦器椀片の中にも、13 世紀後半に含まれる可能性の高いものがほぼ半数を占めていたので、13 世紀後半以降のものの占める割合が最も多いとみられる。

12 世紀～ 14 世紀前半代の遺物が混在し、13 世紀後半以降の遺物が多数を占めるという点で、第２－１層と第２－２層における遺物の出土状況は類似する。ちなみに第１層出土遺物には、近世以降の時

期に用いられていた磁器が含まれるのに対し、第２層以下の層には含まれていなかった。これらのことから、第１面は 14 世紀前葉を上限とする中世のある時期に形成された可能性が高いと考える。

次に、土坑の概要を述べたい。側壁や底部が被熱により赤く変色するものが多く、底面に薄く炭層が堆積するものもみられた。また被熱による赤変がみられない場合でも、埋土が炭化物や焼土の混入により全体に黒色化するという共通点がある。したがってこれらの遺構では、高熱で何かを燃焼させたのではないかと考えられる。埋土中から土器片が出土したものもあるが、いずれも細片で磨滅しており、上層の包含層に含まれる遺物の出土状況と類似している。したがって、遺物は遺構が埋積されていく過程で混入したものであり、土坑の使用期間や時期を直接的に示すものではないと考えられる。

土坑の大きさは直径が約 80 ～ 90 ㎝のものが最も多い。55 土坑や 61・62 土坑のように、遺構の残存状態が比較的良いものをみると、おおむね平坦な底部からやや外方にひろがるように側壁が立ち上がる様子がうかがえる。したがって 48 土坑や 51 土坑のようにきわめて浅く、断面形が皿状のものは、底部のみがかろうじて残存したものと捉えられる。ただいずれにせよ遺構の上部は、程度の差はあれ、上層の形成過程で崩落もしくは削平され、欠損しているとみられる。土坑内部が、熱を受けて赤く変色しているものに関してみると、底面よりも壁面がより高温を受けたとみられ、赤変部の厚みが増し、焼けしまっている傾向が認められた（図 103・写真図版 78）。

47 土坑　調査区の東寄りの部分で検出した。土坑の北半部の壁面から底部にかけて、炭層が残存していた。その上に堆積していた埋土は、炭化物・焼土が若干混入してやや黒色化する。土坑内部は全体に熱を受けて赤く変色するが、特に壁面において熱変化が顕著である。

48 土坑　調査区の東寄りの部分で検出した。焼土・炭化物を含むため、埋土がやや黒色化する。きわめて浅く、内部に被熱による変色を認めなかった。もとの土坑の底部がかろうじて残存したものとみられる。

51 土坑　調査区の東寄りの部分で検出した。埋土下部には炭化物が多く混入し、黒色化が顕著だったが、土坑内部には被熱による赤変は認めなかった。

53 土坑　調査区の東寄りの部分で検出した。土坑の北半部に薄く炭層が堆積するのを認めた。その上層には炭化物・焼土が若干含まれる。土坑北半部の立ち上がり部分で、赤変する部分を若干認めた。

54 土坑　調査区の東寄りの部分で検出した。炭化物層が底部と南半部にかけて薄く堆積している。被熱による変色は、北半部の壁面で顕著である。埋土上部は地山の再堆積層に似る。

55 土坑　調査区の東寄りの部分で検出した。底部に薄く炭化物層が堆積する。その上層の埋土には炭化物が混入し、やや黒色化する。土坑内面は全体に被熱により赤く変色するが、底部はわずかに赤みを帯びる程度で、壁面の熱変化が顕著である。ただ北側の壁面に、変色が認められない部分がある。

59 土坑　調査区の東寄りの部分で検出した。底部にきわめて薄く、炭化物層の堆積が認められた。南辺にとりつくピットは、煙道の基部である可能性が考えられる。わずかに残存する側壁部分に、被熱による赤変を認める。きわめて浅く、もとの土坑の底部がかろうじて残存したものとみられる。

61 土坑　調査区の東寄りの部分で検出した。60 土坑の築造時に欠損したため、南北軸の径は不明だが、おそらく正円に近い平面形とみられる。60 土坑に比べてやや大きく、底部の標高は低い。残存する範囲の断面形状をみると、60 土坑と同様、側壁の立ち上がりは南側に比べて北半部でゆるやかになる可能性がうかがえる。底部に炭化物層が薄く堆積していた。土坑内部は熱を受けて全体的に赤く変色するが、熱変化の度合いは側壁がより顕著である。壁面の熱変化の度合いは、ほぼ一様である。

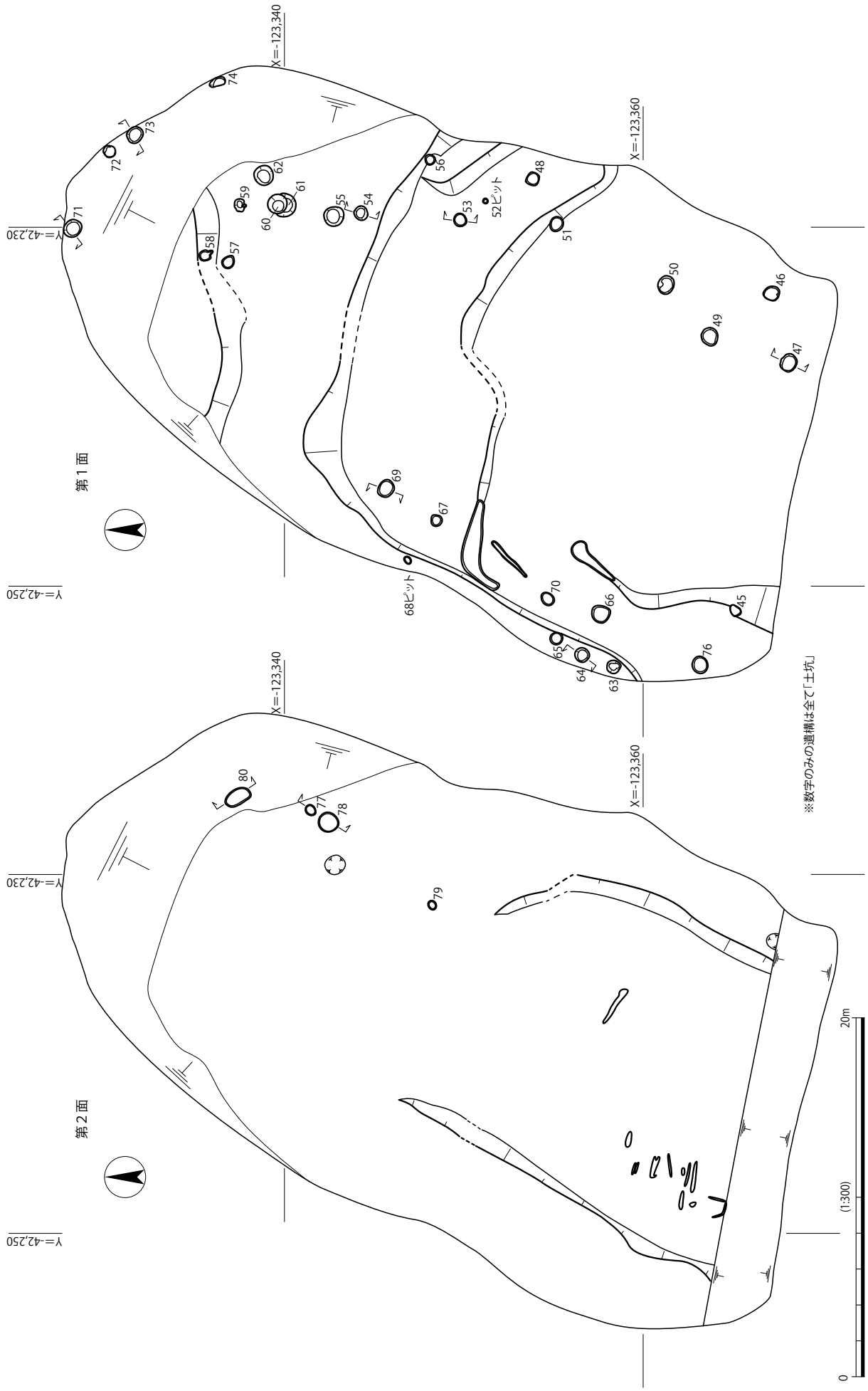


図 102　千提寺クルス山遺跡２区　第１面・第２面　全体平面図

62 土坑　調査区の東寄りの部分で検出した。底部に薄く炭化物が堆積していた。土坑内面は被熱により全体的に赤く変色するが、底部は若干赤みがさす程度で、壁面においてより顕著である。壁面でみると、北半部でより熱変化の度合いが顕著だった。

64 土坑　調査区の西寄りの部分で検出した。底部から壁面にかけて、炭化物層が薄く堆積していた。内部は赤く変色するが、底部は赤みがさす程度なのに対し、壁面は赤変が顕著で焼けしまっている。

69 土坑　調査区の西寄りの部分で検出した。埋土下部に炭化物が混入し、黒色化が顕著な土が薄く堆積していた。壁面がわずかに赤く変色する。

71 土坑　調査区の西寄りの部分で検出した。埋土下部は炭化物が混入してやや黒色化するが、上部は地山の再堆積層に類似する。土坑内部は全体的に被熱による赤変がみられるが、底部は若干赤みがさす程度である。壁面の変色は顕著で、焼けしまっていた。

73 土坑　北側の斜面部分で検出した。炭化物・焼土が混入して埋土がやや黒色化する。壁面が部分的に赤く変色するが、全体的に、熱による変化はそれほど顕著には認めなかった。

52 ピット　調査区東寄りの部分で検出した。炭化物・焼土が混入し、埋土が若干黒色化する。ピット内面には被熱による赤変は認められなかった。

68 ピット　調査区西よりの部分で検出した。埋土は炭化物が混入して黒色化する。内部には被熱による赤変は認められなかった。

第２面

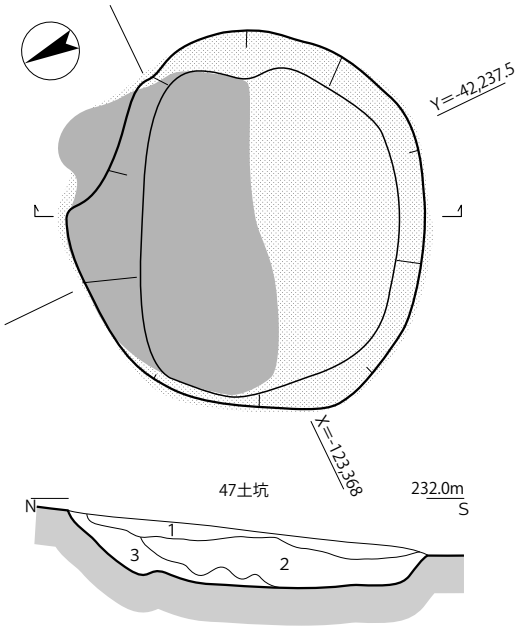
第２面は第２－２層を除去して検出した。第２面では土坑・ピットの他に溝状の遺構を検出した（図102・106・写真図版75・79－１～４）。第２－１層を除去した段階で、地山面が露出した箇所において検出した土坑は、いずれも第１面で検出した土坑と同様、内部が高熱を受け、側壁や底部が赤く変色していた。おそらく第１面検出の、焼土を含んだ土坑･ピットと同様の機能を有していたとみられる。また遺構埋土から出土した遺物は細片で磨滅が著しく、第２－２層における遺物の出土状況と類似していた。おそらく、遺構が埋積していく過程で混入したものと捉えられる。溝状の遺構は東西方向を指向する傾向があるが、きわめて細く、向きもやや不揃いで短いことから、耕作痕とは断定しにくい。

次に遺物の出土状況から、第２面の形成時期を検討したい。第２面を覆う、第２－２層における遺物の出土状況は、前項で述べたとおりである。第２面の基盤層である第３－１層出土遺物は、土師器皿が50数点と最も多く、瓦器椀16点、土師質土器８点、東播系須恵器･須恵器杯･瓦質土器各１点がつづく。遺物は大半が細片で磨滅しており、実測可能なものはわずかだった。形態的特徴からかろうじて時期比定できたものに関してみると、土師器皿では11～12世紀のものとみられるものが２点、13世紀代とみられるものが３点だった。瓦器椀では、12世紀とみられるものが３点、13世紀とみられるものが４点、12～13世紀とみられるものが１点だった。層厚が薄いため、第３－２層も含めて掘削してしまった際に出土した遺物にも、明らかに14世紀に含まれると捉えられる遺物は認めなかった。これらのことから、第２面は13世紀後半を上限、14世紀前葉を下限とする時期に形成されたと推測できる。

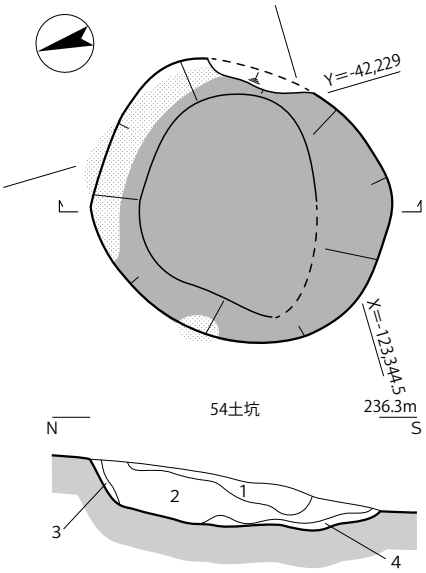
77 土坑　調査区東寄りの部分で検出した。南半部に薄く炭層が堆積する。その上の層には炭化物・焼土が混入し、若干黒色する。側壁部分が熱を受けてわずかに赤く変色する。

78 土坑　調査区東寄りの部分で検出した。炭化物・焼土の混入により埋土は黒色化するが、特に３層ではそれが顕著である。壁面部分が熱を受けて赤く変色するが、焼けしまりするほどではない。

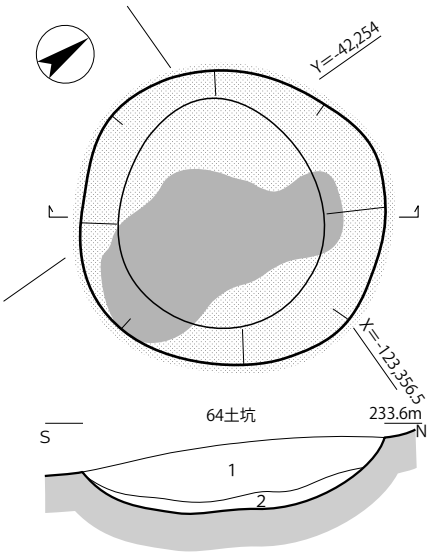
79 土坑　深さ数センチときわめて浅い。炭化物の混入により、埋土が黒色化する。もとの土坑の底部



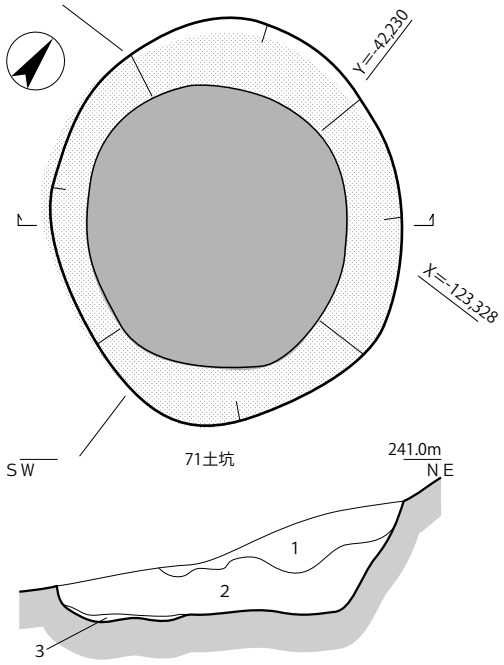
1 10YR6/2　灰黄褐色　細砂混粘土質微砂　数mm大の炭含む
2 10YR6/4　にぶい黄橙色　細砂混粘土質微砂　数mm大の炭含む　1より粘性小さい
3 N2/0　黒色　木炭片からなる



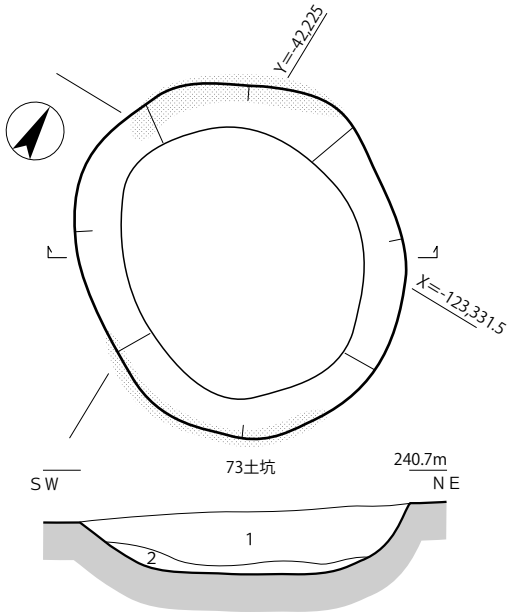
1 10YR6/4　にぶい黄橙色　細砂混粘土質微砂　5mm 大の炭若干含む
2 10YR5/2　灰黄褐色　細砂混粘土質微砂　小礫と 1cm 以下の炭含む
3 10YR3/1　黒褐色　細砂混粘土質微砂　炭顕著に含む
4 5YR5/6　明赤褐色　細砂混粘土質微砂　被熱による赤変範囲



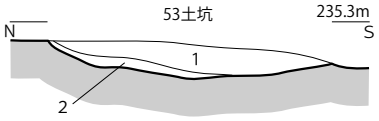
1 7.5YR6/4　にぶい橙色　中砂混砂質細砂　焼土・1cm 以下の炭含む
2 N3/0　暗灰色　微砂混粘土質細砂　炭顕著に入る



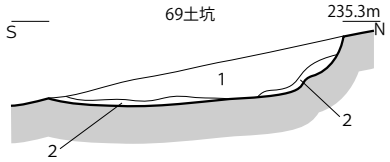
1 10YR6/4　にぶい黄橙色　中砂混粘土質微砂　地山の黄橙色シルトブロック含む
2 10YR5/4　にぶい黄橙色　細～中砂混粘土質微砂　2のブロックと 5mm 大の炭含む
3 10YR4/1　褐灰色　微砂混粘土質細砂　炭が混じり黒色化する



1 10YR5/4　にぶい黄褐色　細～中砂混粘土質微砂　2のブロックと 5mm 大の炭含む
2 10YR4/1　褐灰色　微砂混粘土質細砂　炭が混じり黒色化する



1 10YR5/3　にぶい黄褐色　細砂混粘土質微砂　1mm大の焼土・炭含む
2 N3/0　暗灰色　細砂混粘土質微砂　炭層



1 10YR5/2　灰黄褐色　中砂混粘土質細砂　5mm 大の炭含む
2 10YR4/1　褐灰色　中砂混粘土質細砂　炭顕著に含み黒色化する

図 103　千提寺クルス山遺跡２区　第１面　土坑　平・断面図

がかろうじて残存したものとみられる。

80 土坑　調査区東寄りの部分で検出した。埋土に焼土が若干混入するものの、内部には被熱による赤変を認めなかった。平面形が長楕円形で、底部から壁面への立ち上がりが不整形であることから、これに関しては焼土坑との共通性は低い。

第３面

第３面は第３－１～第３－３層を除去して検出した。ちなみに第３－１層除去面、第３－２層除去面においても遺構の検出を行ったが、それらの面では特に遺構を認めなかった。第３面ではピットと耕作痕跡を検出した（図 104・106・写真図版 76・79 －５・６）。第３面の基盤層の検出範囲でみると、縁辺部が旧谷地形の中心部にむけてゆるやかに傾斜する状況が認められ、その落ち際にほぼ等間隔に直線状にならぶ 75・82・83 ピットが位置する。したがってそれらは耕作地に向けての土砂の流入を防ぐために設けられた土留めの杭や、耕作地の周囲に設けられた柵の痕跡である可能性がある。耕作痕とみられる溝状の遺構は、旧地形の谷の長軸方向にほぼ直交する方向を指向しており、それらの埋土は第３－３層に類似していた。したがって第３面で検出した耕作痕は、第３－３層が形成される過程で行われていた耕作に起因して形成されたとみられる。75 ピットでは、中央部に伏せて据えた状態の瓦器椀を検出した。出土した瓦器椀は、地鎮等の祭祀に伴ってそこに意図的に据え置かれたものとみられ、12 世紀中ごろのものとみられる。なお第３面を覆う第３－３層では遺物は検出しなかった。

第３－２層では、土師器皿が 60 数点と最も多く含まれ、瓦器 24 点、土師質土器 10 点、須恵器２点、須恵器杯と瓦器皿各１点がつづく。かろうじて時期が推測される遺物に関してみると、瓦器椀では 11 世紀後葉とみられるものが１点、12 世紀とみられるものが６点、13 世紀とみられるものが１点だった。土師器皿では、11 世紀もしくは 12 世紀とみられるものが３点認められた。以上のことから第３面は、12 世紀中頃を上限、13 世紀を下限とする時期に形成された可能性が高いと考える。

第４面

第４面は第４－１層を除去して検出した面である（図 104・106・写真図版 77 －１・79 －７）。第４－１層は第３－３層に比べて格段に粘性が強く、より多くの有機物や炭化物を含み、黒色化が顕著だったが、遺物の含有量は上層に比べると明らかに少ない。第４面では、ピットと耕作痕とみられる溝状の遺構を検出した。耕作痕は､第４－１層の形成過程で生じたものと捉えられる。耕作痕は２方向あり、旧地形の谷の長軸方向に並行するものが先行してあり、直交する方向へと変化したことがうかがえる。このことから耕作が始まった当初は、もとの地形を最大限に生かす形で耕作が行われていたが、時間の経過とともに谷の長軸方向に直交する方向で壇状に耕作地が造成され、それに伴って畝溝の方向も変化したのではないかと考える。ただその段階の造成は、大規模な整地を伴うようなものではなかったことが、土層の堆積状況からうかがえる。

第４面で検出したピットは調査区の西寄りの部分と、東寄りの部分とで検出した。88・87 ピットを除いたピット群のうち、等間隔で直線的に並ぶピットの組み合わせを抽出することはできなかったが、調査区の東寄りで検出したピット群は、旧の谷地形を反映した緩斜面の落ち際に、西寄りの一群は緩斜面の肩に沿うように並ぶ状況が認められた。ピットの断面形状や配置からみても、それらは建物に伴うようなものではなく、耕作地の周囲に設置された柵、もしくは土留めの杭の痕跡ではないかと考えられる。88・87 ピットの埋土には、細かい炭化物の破片や熱を受けて赤く変色した焼土のブロックが混入していたが、残存深度はきわめて浅かった。おそらく第１面や第２面で検出した、側壁や底部が熱を受

けて赤く変色した土坑と同様の機能を有する遺構の、基底部がかろうじて残ったものとみられる。

第４－１層出土遺物は、土師器皿片が 15 点と最も多く、瓦器が８点、土師質土器が５点、チャートの破片が１点だった。瓦器はおおむね椀からなるとみられるが、片口の小型の鉢状のものが１点含まれていた。鉢は内外面とも丁寧にミガキが施され、光沢を帯びていることから、12 世紀中頃以前のものとみることができるかもしれない。その他、かろうじて時期比定が可能な瓦器椀片では、12 世紀代とみられるものが１点あった。第４面の基盤層である第４－２層からは、瓦器と土師器皿、土師質土器が各２点と黒色土器片１点が出土した。黒色土器は細片であり、形態的特徴から時期を判断することはできないが、最終段階の時期のものと考えれば、11 世紀後半～ 12 世紀初頭の時期とみることができるかもしれない。以上のことから第４面は、11 世紀後半～ 12 世紀初頭を上限とし、12 世紀中頃を下限とする時期に形成された可能性が指摘できる。

第５面

第５面は第４－２層除去面で検出した面で、地山の上面である（図 105・106・写真図版 77 －２・79 －８）。第４－２層は第４－１層に比べて土壌化が弱く、その上面と下面にマンガン斑紋の沈着が認められた。第５面で耕作痕を検出しなかったことも勘案すると、耕作に伴って形成された土壌化層とは捉えにくく、かつての地表面に形成された土層である可能性がある。この層からは、第４－１層よりさらに少量の遺物しか出土しなかった。いずれも細片で帰属時期を判断できるものはなかったが、黒色土器の細片が１点含まれていることから、当調査区を耕地開発する直前の時期の下限は、中世をさかのぼらないと考えられる。

土坑やピットをわずかに検出したが、それらは調査区平坦部の南半部に散在しており、それらの配置に何らかの関連性を捉えることはできなかった。

第５面で検出した遺構から遺物が出土しなかったため、第５面の形成時期の判断は困難であるが、前述した第４層出土遺物の状況から、11 世紀後半～ 12 世紀初頭の可能性を指摘できる。

以上をまとめると、かつての谷が埋積し、一旦、堆積活動が弱まった段階（第４－２層の堆積段階）で、この近辺が本格的に人々の活動域に含まれたことがうかがえる。やがて第４－１層や第３－３層の形成段階になると、当地が開墾され、生産域として利用されたとみられる。生産地として開発された当初の耕作は、微地形を利用した小規模なものだったらしく、その周囲には土留めもしくは柵を設けた様子がうかがえる。耕作痕の方向の変化から、その後に耕作地の区画が、旧の谷地形に直交する方向に変化したとみられる。それに伴って耕作痕の検出範囲も若干拡大することから、小規模な地形改変と耕作地の造成が行われた可能性も指摘できる。その生産域も、13 世紀を下限とする第３面の形成段階ではその役割を終えていた可能性がある。ただ第２面の基盤層である第３層や、その上層である第１層・第２層から、瓦器椀や瓦器皿、土師器皿などの 13 世紀以降の遺物が少なからず出土している。また焼土や被熱による赤変を伴う土坑・ピットが多数検出されたことから、耕作地としての機能を失ったのちも、当地が何らかの形で人々の活動領域に含まれていたことは明らかである。

出土遺物には、須恵器の鉢や大甕、土師器の羽釜や鍋、陶器の大甕の破片などの、この時期の集落遺跡では多量に出土する器種が少量しか含まれない。このことから、近隣に長期的に継続した集落があったとは考えにくい。耕作地として利用されていない期間、当地がどのように利用されていたのかを知るためには、焼土や被熱による赤変を伴う土坑・ピットを知る必要があろう。

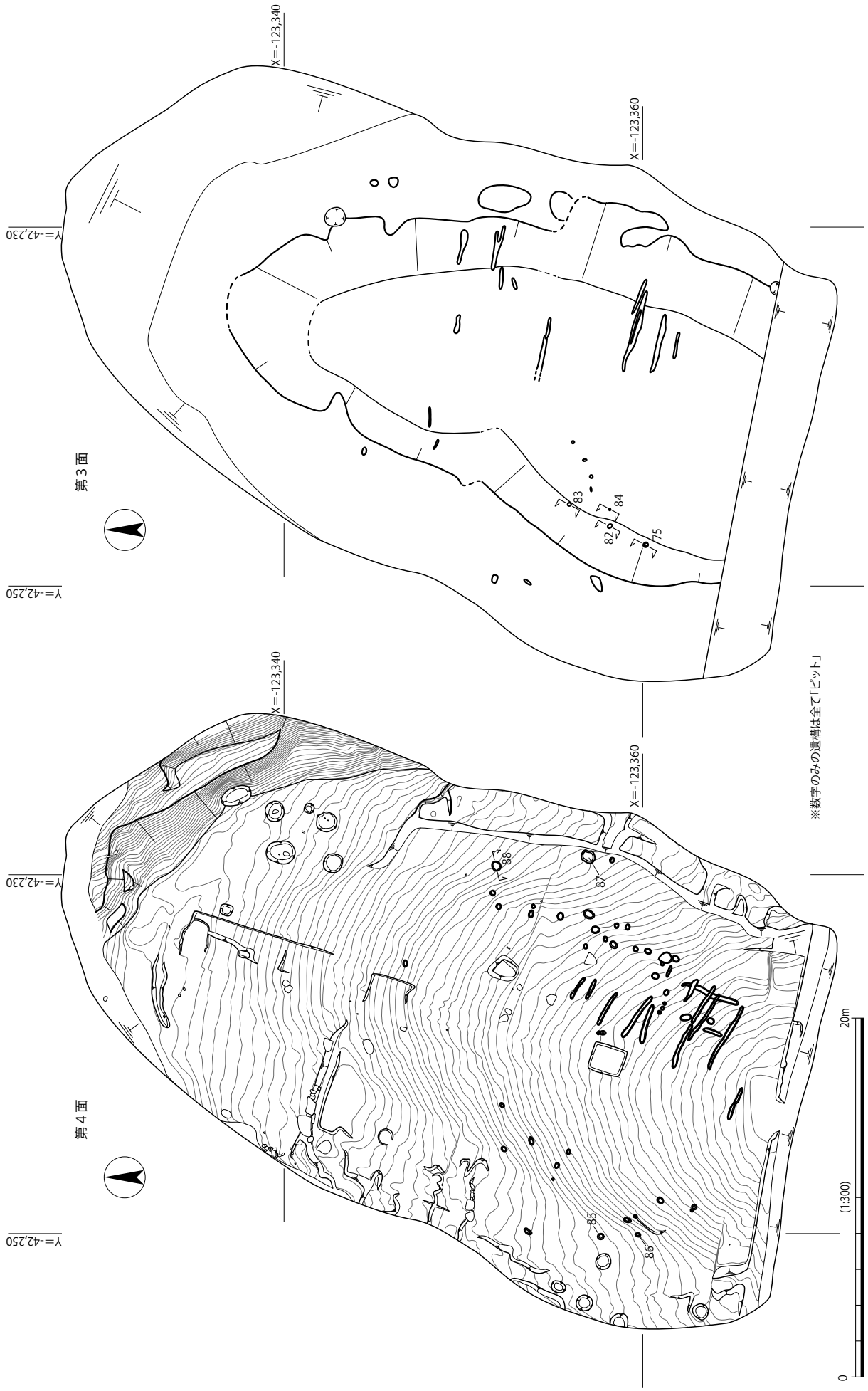


図 104　千提寺クルス山遺跡２区　第３面・第４面　全体平面図

遺構の立地や、遺構の検出状況、類例から推定される用途として、炭焼き窯があげられる。ただ当調査区で検出した遺構は、穴窯タイプ・石窯タイプとされるような、炭化室の入口に焚口がつき、背面や側面に煙道がつくような形態のものではなく、素掘りの穴の中で炭を焼くタイプの炭焼き窯と考えられる。このような最もシンプルな施設で炭を作る方法は、坑内製炭法と呼ばれている（岸本・杉浦2012）。前掲書によると、まず穴を掘り、掘り上げた土で土坑の周りをいくぶん高くし、内部の土を叩きしめる。その中に枯枝を敷いて焚火をし、燃え上がったらその上に炭材となる木片を積み重ね、一番上を枝条で覆う。土坑の木材が十分に燃え上がり、白煙があがってきたら中心部分だけを残して土をかけ、さらに白煙が紫色に変わったら、上面を完全に土で密閉して火を消し、一晩おく。この方法で、直径 1.0 m・深さ 0.5 ～ 0.6 mの大きさの土坑の場合に、15 キロくらいの炭を焼くことができ、製品はこたつの炭や、炭団の原料に用いられた。この製炭法の場合、炭を取り出す際に土が混ざってしまうので、ふるいにかけて炭をとりだすという。また坑内製炭法でも、煙道を設ける場合があるようで、59 土坑はその例にあたるかもしれない。同書には、窯場の適地の条件として、炭材を集めやすく水の便が良い

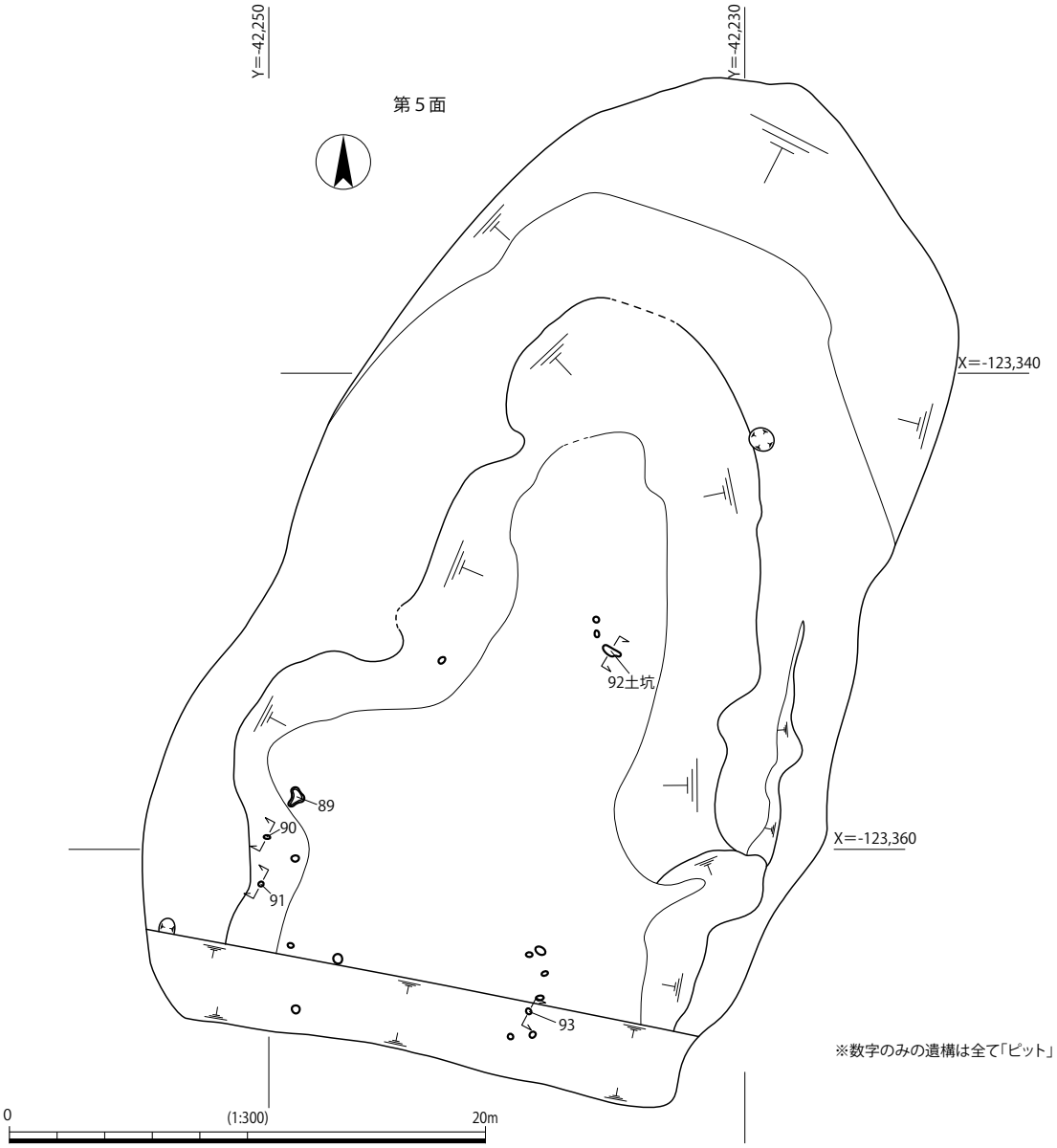
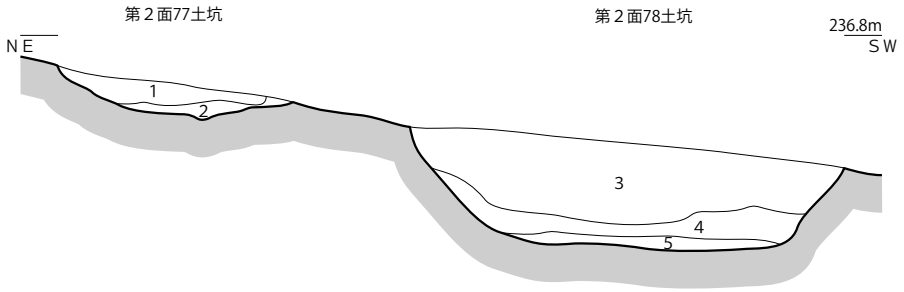
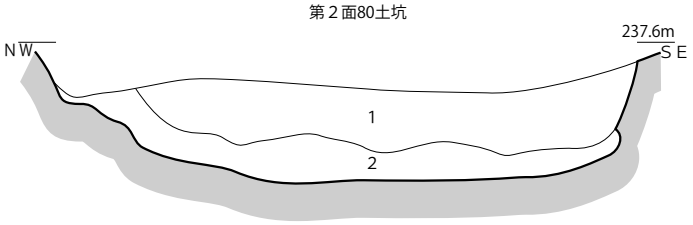


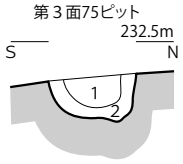
図 105　千提寺クルス山遺跡２区　第５面　全体平面図



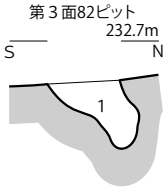
1 10YR5/4　にぶい黄褐色　小礫混粘土質微砂　5 mm 大の焼土・炭含む
2 N3/0　暗灰色　中砂混粘土質微砂　炭層・若干焼土混じる
3 10YR6/3　にぶい黄橙色　中～粗砂混粘土質微砂　2 cm 前後の炭・焼土含む
4 10YR5/3　にぶい黄褐色　中～粗砂混粘土質微砂　1 に似るが炭化物の含有量多い
5 N3/0　暗灰色　中砂混粘土質微砂　炭層・焼土含む



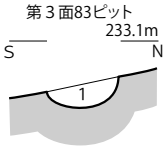
1 7.5YR5/3　にぶい褐色　粗砂混粘土質微砂　地山の再堆積層か
2 10YR6/4　にぶい黄橙色　中砂混粘土質細砂　地山の再堆積層か



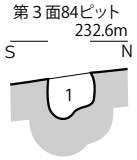
1 10YR6/4　にぶい黄橙色　粗砂混粘土質微砂
第４－１層ブロック若干混入
2 10YR7/4　にぶい黄橙色　粗砂混粘土質微砂
第４－１層ブロック混入　含有量は１より多い



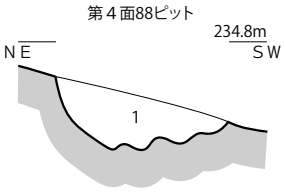
1 10YR7/4　にぶい黄橙色　粗砂混粘土質微砂
第４－１層ブロック混入　含有量は１より多い



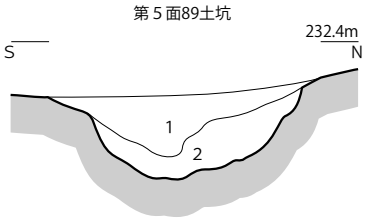
1 10YR7/4　にぶい黄橙色　粗砂混粘土質微砂
第４－１層ブロック混入　含有量は１より多い



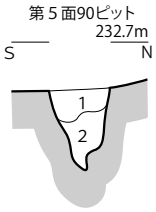
1 5Y6/1　灰色　粗砂混粘土質微砂
第４－１層ブロック若干含む



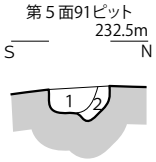
1 7.5YR5/2　褐灰色　中～粗砂混粘土質微砂
5 mm 以下の炭僅かに含む



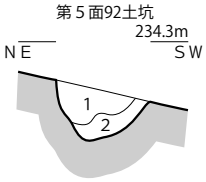
1 7.5YR6/4　にぶい橙色　中～粗砂混粘土質細砂
2 7.5YR5/3　にぶい褐色　中砂混粘土質細砂
1 に似るが若干粘性強い



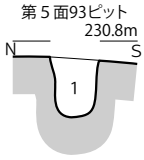
1 7.5YR6/4　にぶい橙色　中～粗砂混粘土質細砂
2 7.5YR5/3　にぶい褐色　中粗砂混粘土質細砂
1 に似るが若干粘性強い



1 7.5YR6/4　にぶい橙色　中～粗砂混粘土質細砂
2 7.5YR5/3　にぶい褐色　中砂混粘土質細砂
1 に似るが若干粘性強い



1 7.5YR5/4　にぶい褐色　中砂混粘土質細砂
5 mm 以下の炭化物含む
2 7.5YR4/1　褐灰色　中砂混粘土質細砂



1 7.5YR6/4　にぶい橙色　中～粗砂混粘土質細砂

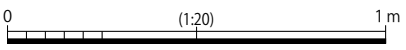


図 106　千提寺クルス山遺跡２区　第２面～第５面　土坑・ピット　断面図

こと、風当たりが少なく、乾燥地であること、岩石の少ない緩やかな傾斜地であることがあげられている。

村田文夫氏は、発掘調査で検出された炭焼き窯をタイプ別に集成した中で、坑内製炭遺構にもふれている。それによると、平面形状から円系統と方系統に分けられること、炭化中の通気を良好に保つための煙道を持つ可能性があるもののあることを指摘している（村田 1991）。

他方、多摩ニュータウン地域内の調査で検出された炭焼き窯から、それらが谷部の沖積地からあまり斜面を登らずに生活道路に沿う位置に設けられていること、炭焼き窯と集落立地との関係において、大半のものは炭材を収集しやすい山中を選地していることが指摘されている（財団法人東京都埋蔵文化財センター 1983）。

土坑埋土から時期比定が可能な遺物がほとんど出土しないこともあわせ、上記の諸点は当調査区で検出した、熱変化を帯びた土坑にみられる要素と合致する部分が多い。したがって当調査区で検出した焼土坑も、炭焼き窯の痕跡である可能性が高いと考える。もしそうであれば、炭焼きによって得られる炭のみならず、枯枝や枝条の燃焼残渣を多く含んだ土坑内の土砂も、山間部に作られた耕作地においては、肥料や土壌改良材として有効に利用されたのではないかと考える。

これらのことから丘陵頂部が墓域として利用される一方で、その周囲は 13 世紀以降、しばらく入会地のようなかたちで利用され、森林資源を利用した炭焼き等も行われていたのではないかと考える。そして近世中頃以降は、大規模な棚田造成が行われ、現代の地形に連なる状況が生み出されたのではないかと考える。

なお、当調査区では、第２－１層から第４－２層を対象として花粉分析を実施した (第４章第３節参照)。その結果、第３－３層、第４－１層、第４－２層（上位）から栽培種のソバに由来するソバ属花粉が検出された。これより、第３面、第４面にみられる耕作痕は、ソバの栽培に伴う可能性が考えられる。第４－２層では上位と下位の２点から試料を採取し、分析したが、その上位からのみソバ属花粉が検出されており、下位からは検出されなかった。そのため第５面では、耕作痕がみられないものと考えられる。先述したとおり、第３面は 12 世紀中頃、第４面は 11 世紀後半～ 12 世紀中頃と考えられ、このころにはソバが栽培されていたことが明らかとなった。なお、イネ科の花粉はいずれの層からも検出されておらず、イネの栽培については、花粉分析からは明らかにし得なかった。

〈参考文献〉

岸本定吉・杉浦銀治 2012『大人の週末遊び　日曜炭焼き師入門　完全改訂版』

村田文夫 1991「発掘された炭焼窯の基礎的研究－多摩丘陵における近世及び近・現代の発掘事例から－」『物質文化』55 号　物質文化研究会

財団法人東京都埋蔵文化財センター 1983『多摩ニュータウン遺跡－昭和 57 年度－第３分冊』Ⅳまとめ

第４節　石造物

石造物は、石仏 72 点、五輪塔部材 35 点、一石五輪塔１点、未成品とみられる石材３点、その他中世墓の台石１点とその周囲に置かれた自然石１組（6 点）、石臼１点の計１組と 113 点である（表７）。

このうち、1 組と 107 点が中世を中心とする墓域である千提寺西遺跡３・４区とその南側谷部である同９区から出土しており、他に千提寺市阪遺跡２区で５点、千提寺クルス山遺跡１区で１点が出土した。千提寺西遺跡３・４区では、多数の石造物が出土したが、67・68 石組、69 石組、102 ～ 104 石組、126 石組など、墓域脇の斜面にまとめて置かれた状態で検出されたものや、斜面から裾部へ転落したもの、棚田の石垣に転用されたものが多く、確実に墓に伴う石造物はみられない。千提寺市阪遺跡２区では、事前の踏査で木の根元に集中して置かれた５点の石造物が発見され、墓域発見の契機となった。千提寺クルス山遺跡１区では、長方形墓でキリシタン墓とみられる 14 土壙の上部施設として自然石とともに石仏１点が並置された状態で検出された。本来は中世墓に伴っていた石仏が転用されたものであろう。

石仏は、板碑、光背石仏があり、地蔵菩薩が１点あるほかはすべて阿弥陀とみられる。石仏、五輪塔の多くが 15 世紀頃～ 17 世紀初頭の範疇に含まれるものと考えられる。石材は花崗岩が主体である。

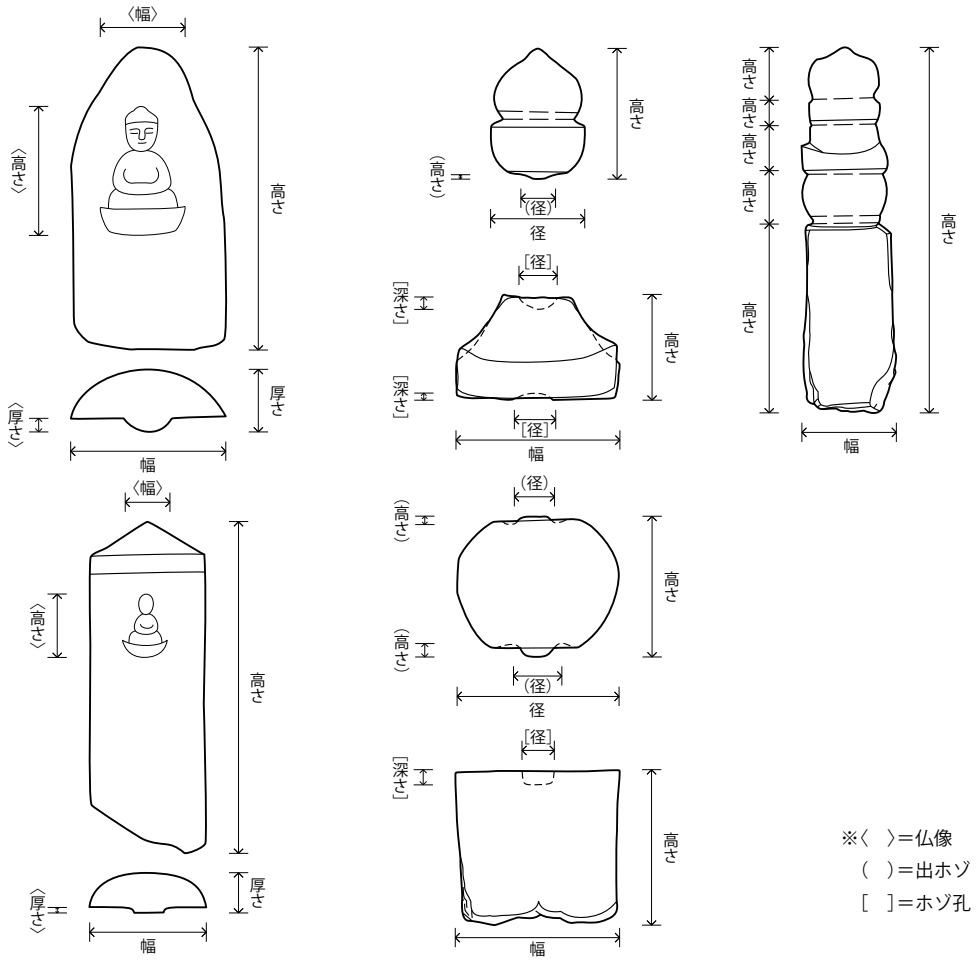


図 107　石造物計測位置

表７　　石造物一覧

図版番号	遺跡名	地区名	登録番号	遺構番号	遺構種類	名称	全体			仏像(左右は上方から)			備考
							高さ(cm)	幅/径(cm)	厚さ(cm)		高さ(cm)	幅(cm)	
図版80-722	千提寺西遺跡	３区	1317	126	石組	板碑(阿弥陀二尊)	50.2	23.0	14.2	右 左	15.2 15.2	7.3 6.8	風化著しい。下部未加工。額部。結跏趺坐。偏相右肩。蓮華座。
図版80-723	千提寺西遺跡	３区	2095	126	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	50.4	20.6	11.4		(14.7)[20]	8.5	結跏趺坐。衲衣。蓮華座か。
図版80-724	千提寺西遺跡	３区	2096	69	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	37.1	19.8	13.8		(11.0)[15]	8.8	膝部無し。偏相右肩。弥陀定印。足痕。台座痕。
図版80-725	千提寺西遺跡	３区	2097	67	石組	光背形石仏(阿弥陀)	36.0	22.8	13.5		24.0	11.4	螺髪。肉髻。白毫耳朶。衲衣。半跏趺坐。台座。
図版80-726	千提寺西遺跡	３区	2098	103	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	41.3	17.3	9.0		13.5	7.0	膝部無し。下位未加工。額部。衲衣。半跏趺坐。蓮華座。反花座。
図版80-727	千提寺西遺跡	３区	2099	66	石組	板碑形石仏(阿弥陀二尊)	41.3	20.0	10.7	右 左	13.6 13.6	6.2 5.8	額部。螺髪。衲衣。半跏趺坐。台座痕。
図版81-728	千提寺西遺跡	３区	2100	126	石組	光背形石仏(阿弥陀)	39.9	21.7	11.5		18.8	7.2	衲衣。半跏趺坐。蓮華座。反花座。
図版81-729	千提寺西遺跡	３区	2101	69	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	43.1	13.7	10.0		(12.5)[17]	7.3	膝部無し。額部。肉髻。通肩。半跏趺坐。台座痕。
図版81-730	千提寺西遺跡	３区	2102	69	石組	光背形石仏(阿弥陀)	40.4	23.3	14.4		20.8	9.8	膝部無し。螺髪。肉髻。白毫。耳朶環状。偏相右肩。半跏趺坐。
図版81-731	千提寺西遺跡	３区	2103	100	石組	石龕(阿弥陀二尊)	56.6	33.4	20.2	右 左	(20.5)[24] (20.5)[24.5]	8.8 9.5	螺髪。肉髻。偏相右肩。僧祇支。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁有)。反花座。
図版81-732	千提寺西遺跡	３区	2104	69	石組	石龕(阿弥陀二尊)	61.0	36.3	20.1	右 左	25.8 27.5	11.2 11.5	表現が仔細。古相を呈する。肉髻。白毫。偏相右肩。半跏趺坐。
図版81-733	千提寺西遺跡	３区	2105	66	石組	光背形石仏(阿弥陀)	41.0	27.0	15.3		(23.0)[28]	13.1	螺髪。肉髻。衲衣。半跏趺坐。弥陀定印。台座。
図版82-734	千提寺西遺跡	３区	2108	126	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	52.1	24.6	13.6		(16.0)[24]	9.0	膝部無し。肉髻。偏相右肩。半跏趺坐。蓮華座。
図版82-735	千提寺西遺跡	３区	2109	132	石仏	板碑形石仏(阿弥陀)	52.3	22.0	13.5		(12.5)[19.5]	9.6	白毫。耳朶環状。衲衣。半跏趺坐。台座痕。
図版82-736	千提寺西遺跡	３区	2110	67	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	51.2	21.1	14.3		(12.5)[20]	9.4	偏相右肩。半跏趺坐。台座痕。
図版82-737	千提寺西遺跡	３区	2111	110	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	53.3	22.3	11.5		(12.0)[18]	9.3	膝部無し。額部。耳朶。結跏趺坐。通肩。台座痕。
図版82-738	千提寺西遺跡	３区	2112	68	石組	光背形石仏(阿弥陀)	40.7	23.6	16.7		25.7	12.3	衲衣。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁痕)。
図版82-739	千提寺西遺跡	３区	2113	68	石組	光背形石仏(阿弥陀)	32.5	18.2	9.2		14.5	6.3	膝部無し。肉髻。偏相右肩。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁痕)。
図版83-740	千提寺西遺跡	３区	2115	110	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	46.0	18.0	13.0		(12.5)[16.5]	8.7	膝部無し。衲衣(通肩痕)。半跏趺坐。台座痕。
図版83-741	千提寺西遺跡	３区	2116	100	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	40.6	13.0	10.8		13.5	6.4	風化著しい。偏相右肩。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁痕)。
図版83-742	千提寺西遺跡	３区	2117	100	石組	光背形石仏(阿弥陀)	39.5	20.4	10.8		8.3	8.6	膝部無し。螺髪。衲衣。半跏趺坐。光背の放射光か。
図版83-743	千提寺西遺跡	３区	2118	110	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	35.7	16.5	11.2		(10.5)[15]	7.7	未加工の石材か。額部。偏相右肩。半跏趺坐。台座痕。
図版83-744	千提寺西遺跡	３区	2119	126	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	39.5	16.7	9.6		(15.0)[18]	8.2	膝部無し。耳朶。偏相右肩。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁)。反花座。
図版83-745	千提寺西遺跡	３区	2120	68	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	46.4	19.6	11.0		(12.5)[17]	8.0	額部。偏相右肩。弥陀定印(小孔２)。半跏趺坐。台座２段。
図版84-746	千提寺西遺跡	３区	2121	126	石組	光背形石仏(阿弥陀)	40.0	22.0	13.3		17.0	7.5	下位未加工。白毫。耳朶環状。偏相右肩。僧祇支。弥陀定印(小孔２)。半跏趺坐。蓮華座。
図版84-747	千提寺西遺跡	３区	2124	27	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	14.7	19.6	13.1		17.5	8.0	耳朶。偏相右肩。半跏趺坐。蓮華座。
図版84-748	千提寺西遺跡	３区	2125	67	石組	光背形石仏(阿弥陀)	39.5	23.3	11.3		18.5	7.6	下位未加工。弥陀定印(小孔)。偏相右肩。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁痕)。
図版84-749	千提寺西遺跡	３区	2126	100	石組	光背形石仏(阿弥陀)	48.0	21.6	9.3		19.7	7.6	下位未加工。彫出し浅。新相を呈す。偏相右肩。半跏趺坐。蓮華座。反花座。
図版84-750	千提寺西遺跡	３区	2129	173	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	41.2	20.3	9.5		18.5	8.3	通肩。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁有)。
図版84-751	千提寺西遺跡	３区	2131	126	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	40.5	17.0	10.3		(11.0)[16.5]	7.3	膝部無し。衲衣。半跏趺坐。台座痕。
図版85-752	千提寺西遺跡	３区	2132	126	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	41.7	15.3	10.7		(11.5)[16]	7.8	膝部無し。半跏趺坐。台座２段。
図版85-753	千提寺西遺跡	３区	2133	126	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	44.6	20.8	9.8		(14.0)[18.5]	8.2	膝部無し。額部。通肩。弥陀定印。半跏趺坐。台座痕。
図版85-754	千提寺西遺跡	３区	2134	126	石組	板碑形石仏(阿弥陀二尊)	46.0	24.8	15.6	右 左	(12.5)[17.5] (13.0)[17.5]	6.7 6.7	額部。通肩。結跏趺坐。台座は線刻。蓮華座。反花座。
図版85-755	千提寺西遺跡	３区	2137	126	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	42.9	23.3	10.5		(12.0)[18]	8.6	膝部無し。額部。肉髻。偏右通肩。半跏趺坐。台座痕。
図版85-756	千提寺西遺跡	３区	2140	172	石仏	板碑形石仏(阿弥陀)	43.2	20.5	11.5		(14.5)[16]	8.4	膝部無し。耳朶。偏相右肩。半跏趺坐。台座痕。
図版85-757	千提寺西遺跡	３区	2142	66・105	石組	光背形石仏(阿弥陀)	45.0	23.3	15.9		26.5	12.0	肉髻。耳朶環状。偏相右肩。半跏趺坐。蓮華座(蓮華痕)。
図版86-758	千提寺西遺跡	３区	2143	66・105	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	42.7	19.8	11.7		(13.4)[20]	8.7	膝部無し。肉髻。偏相右肩。弥陀定印。半跏趺坐。台座痕。
図版86-759	千提寺西遺跡	３区	2145	235	—	—	45.7	21.6	9.1				未加工の石材か。半円状の浅い窪み有り。年号・銘無し。
図版86-760	千提寺西遺跡	３区	2146	67・68	石組	板碑形石仏(阿弥陀)	44.9	18.5	11.9		(15.5)[19]	7.8	膝部無し。額部。肉髻。偏相右肩。半跏趺坐。
図版86-761	千提寺西遺跡	３区	2149	139	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	41.3	23.0	10.3		21.3	9.2	螺髪。肉髻。偏相右肩。弥陀定印。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁痕)。
図版86-762	千提寺西遺跡	３区	2152	102・103・104	石組	光背形石仏(阿弥陀)	43.4	25.1	13.7		23.5	10.5	肉髻。白毫。耳朶環状(小孔２)。偏相右肩。僧祇支。半跏趺坐。蓮華座(蓮華痕)。
図版86-763	千提寺西遺跡	３区	2153	234	石仏	板碑形石仏(阿弥陀)	39.1	18.6	9.5		(9.3)[13]	5.5	下位未加工。額部。螺髪痕。衲衣痕。半跏趺坐。台座２段(痕跡)。
図版87-764	千提寺西遺跡	３区	2155			—	57.4	26.9	14.9				未加工の石材か。68石組と119石仏の間で出土。仏像、年号、銘無し。
図版87-765	千提寺西遺跡	３区	2156	219	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	40.6	23.0	8.3		(15.0)[20.5]	8.0	膝部無し。肉髻。偏相右肩。弥陀定印か。台座痕。
図版87-766	千提寺西遺跡	３区	2157	168	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	62.7	35.8	23.8		37.0	18.6	風化著しい。螺髪。肉髻。白毫。耳朶痕。偏相右肩。僧祇支。結跏趺坐。蓮華座(蓮弁有り)。
図版87-767	千提寺西遺跡	３区	2158	237	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	37.8	21.5	12.1		18.2	8.7	下位未加工。肉髻痕。衲衣痕。弥陀定印か。半跏趺坐。蓮華座 (蓮華痕) 。
図版87-768	千提寺西遺跡	３区	2161	119	石仏	板碑形石仏(阿弥陀)	(34.4)	18.3	11.7		(15.0)[20]	9.0	下部折損。額部痕。肉髻痕。通肩か。半跏趺坐。台座痕。
図版87-769	千提寺西遺跡	３区	2190	28	石組(石仏1)	光背形石仏(阿弥陀)	35.0	23.5	14.0		18.0	9.3	通肩か。半跏趺坐。蓮華座か。
図版88-770	千提寺西遺跡	３区	2192	133	石仏	光背石仏(阿弥陀)	44.7	21.6	13.5		(18.5)[25]	10.3	下位未加工。螺髪。偏相右肩。僧祇支。半跏趺坐。弥陀定印(小孔２)、台座２段。
図版88-771	千提寺西遺跡	３区	2193	28	石組(石仏2)	板碑形石仏(阿弥陀)	42.8	18.4	12.0		(14.0)[18]	7.0	膝部無し。額部。偏相右肩。半跏趺坐。台座。
図版88-772	千提寺西遺跡	４区	786	247	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	40.9	25.3	13.3		(24.0)[28]	14.5	膝部無し。肉髻。白毫。偏相右肩。僧祇支。半跏趺坐。台座痕。
図版88-773	千提寺西遺跡	４区	788	249	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	(52.0)[52.8]	31.8	20.3		(23.5)[36]	15.5	膝部無し。螺髪。肉髻。通肩。僧祇支。半跏趺坐。弥陀定印。古相を呈する。
図版88-774	千提寺西遺跡	４区	787	248	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	39.3	28.3	19.3		31.5	16.5	螺髪。肉髻。白毫。耳朶環状。偏相右肩。僧祇支。弥陀定印(小孔２)。半跏趺坐。蓮華座 (蓮弁有り) 。
図版89-775	千提寺西遺跡	４区	2147	223	石仏	光背形石仏(阿弥陀二尊)	37.4	31.3	14.5	右 左	8.2 7.4	10.1 9.4	肉髻。螺髪。耳朶環状痕。衲衣痕。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁痕)。
図版89-776	千提寺西遺跡	４区	2162	232	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	39.7	22.1	11.0		18.0	9.8	膝部無し。肉髻。螺髪。衲衣。半跏趺坐。台座痕。
図版89-777	千提寺西遺跡	４区	2163	236	石仏	板碑形石仏(阿弥陀)	40.6	17.5	13.5		13.0	6.4	下位未加工。薄肉彫。偏相右肩。結跏趺坐。蓮華座。反花座(線刻か)。
図版89-778	千提寺西遺跡	４区	2165		谷南側	光背形石仏(阿弥陀)	44.8	27.4	15.4		(25.6)[29.5]	13.3	肉髻。偏相右肩。僧祇支。弥陀定印。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁有)。
図版89-779	千提寺西遺跡	４区	2168	233	石仏	板碑(阿弥陀)	37.0	18.2	12.4		(11.5)[14.0]	6.8	膝部無し。半跏趺坐。台座痕。風化著しい。
図版90-780	千提寺西遺跡	４区	2170	222	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	43.1	28.2	17.2		30.5	14.3	肉髻。螺髪。白毫。耳朶環状。弥陀定印(小孔1)。偏相右肩。僧祇支。蓮華座(蓮弁痕)。
図版90-781	千提寺西遺跡	４区	2171		谷南側	板碑形石仏(阿弥陀)	45.0	18.1	10.4		(12.0)[16.5]	7.8	膝部無し(痕跡)。額部。螺髪。衲衣痕(線刻？)。弥陀定印か。台座痕。
図版90-782	千提寺西遺跡	４区	2173	221	石仏	板碑形石仏(阿弥陀二尊)	55.9	30.1	14.6	右 左	(13.5)[19.5] (14.5)[21]	7.8 8.5	膝部無し。風化著しい。切込み。額部。衲衣痕。台座痕。
図版90-783	千提寺西遺跡	４区	2174	231	石仏	板碑形石仏(阿弥陀)	37.8	16.3	11.4		(11.7)[13.7]	6.4	額部。衲衣痕。半跏趺坐。蓮華座。反花座(花弁痕)。
図版90-784	千提寺西遺跡	４区	2178	253	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	34.5	17.4	9.0		16.5	7.8	下位未加工。肉髻痕。通肩。弥陀定印(小孔1)。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁有)。
図版90-785	千提寺西遺跡	４区	2181	250	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	36.7	18.6	11.5		(17.1)[21.5]	11.0	膝部無し(痕跡)。肉髻。螺髪。通肩。弥陀定印か。台座痕。
図版91-786	千提寺西遺跡	４区	2182	238	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	(30.6)	26.5	9.6		(16.4)[24]	(9.9)	頭部欠損。通肩か。弥陀定印か。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁有)。反花座痕。
図版91-787	千提寺西遺跡	４区	2189	254	石仏	光背形石仏(阿弥陀二尊)	42.8	36.2	14.5	右 左	20.5 20.5	10.0 10.6	下位未加工。肉髻。耳朶環状。偏相右肩。僧祇支。弥陀定印か。半跏趺坐。蓮華座(蓮弁有)。
図版91-788	千提寺西遺跡	４区	2187	251	石仏	光背形石仏(阿弥陀二尊)	46.8	32.2	18.3	右 左	(18.5)[22] (18.5)[23]	9.5 10.2	肉髻痕。通肩。弥陀定印か。半跏趺坐。蓮華座。反花座痕。
図版91-789	千提寺西遺跡	４区	2188	252	石仏	光背形石仏(阿弥陀)	36.8	26.9	13.8		(18.0)[24.5]	11.9	膝部無し。下位未加工。肉髻。耳朶痕。弥陀定印か。偏相右肩。半跏趺坐。台座痕。
図版92-790	千提寺西遺跡	３区	2122	99	石組	五輪塔(空風輪)	24.5	15.4					空風輪。径は風輪。下面に径4.8高さ2.1の出ホゾ有り。江戸時代に入るか。
図版92-791	千提寺西遺跡	３区	2123	68	石組	五輪塔(空風輪)	16.5	12.9					空風輪。径は風輪。下面に径3.5高さ0.7の出ホゾ有り。室町時代。
図版92-792	千提寺西遺跡	３区	2144	227	五輪塔	五輪塔(空風輪)	21.0	16.1					空風輪。径は風輪。下面に径4.2高さ1.0の出ホゾ有り。室町時代。
図版92-793	千提寺西遺跡	３区	2159	67・68	石組	五輪塔(空風輪)	17.9	11.6					空風輪。下面に径4.0高さ0.8の突起有り。江戸時代に入るか。
図版92-794	千提寺西遺跡	３区	2160	67・68	石組	五輪塔(空風輪)	22.2	13.8					空風輪。下面に径5.0高さ1.9の突起有り。室町時代。
図版92-795	千提寺西遺跡	４区	2194	244	五輪塔	五輪塔(空風輪)	24.2	17.1					空風輪。下面に径4.5高さ1.3の突起有り。室町時代。
図版92-796	千提寺西遺跡	３区	2135	126	石組	五輪塔(火輪)	17.4	25.9					火輪。上面に径6.4深さ1.6のホゾ孔有り。室町前期。
図版92-797	千提寺西遺跡	３区	2136	126	石組	五輪塔(火輪)	10.5	19.2					火輪。上面に径5.5深さ1.0、下面に径5.2深さ0.8のホゾ孔有り。室町時代。
図版92-798	千提寺西遺跡	３区	2148	102・103・104	石組	五輪塔(火輪)	14.4	21.6					火輪。上面に径5.5深さ2.0、下面に径6.1深さ1.0のホゾ孔有り。室町前期か。
図版92-799	千提寺西遺跡	３区	2150	67・68	石組	五輪塔(火輪)	14.3	21.5					火輪。上面に径5.9深さ3.0、下面に径6.8深さ1.3のホゾ孔有り。室町後期。
図版92-800	千提寺西遺跡	３区	2151	217	五輪塔	五輪塔(火輪)	15.6	24.6					火輪。上面に径5.3深さ1.9のホゾ孔有り。江戸時代に入るか。
図版92-801	千提寺西遺跡	４区	2166	229	五輪塔	五輪塔(火輪)	10.3	6.0					火輪。上面に径4.1深さ1.3のホゾ孔有り。室町後期。
図版92-802	千提寺西遺跡	４区	2167	225	五輪塔	五輪塔(火輪)	19.6	29.5					火輪。上面に径6.8のホゾ孔有り。下面に径20.0の浅い凹み有り。室町前期。
図版92-803	千提寺西遺跡	４区	2176	246	五輪塔	五輪塔(火輪)	12.7	21.5					火輪。上面に径5.5深さ1.3、下面に径6.0深さ0.9のホゾ孔有り。室町後期。
図版92-804	千提寺西遺跡	４区	2183	230	五輪塔	五輪塔(火輪)	14.5	23.1					火輪。上面に径5.0深さ1.3、下面に径6.2深さ1.3のホゾ孔有り。室町後期。
図版93-805	千提寺西遺跡	４区	2185	242	五輪塔	五輪塔(火輪)	16.9	26.2					火輪。上面に径6.0深さ1.3のホゾ孔有り。室町前期か。
図版93-806	千提寺西遺跡	３区	2154	218	五輪塔	五輪塔(水輪)	22.0	27.8					水輪。下面に径4.0高さ0.9の出ホゾ有り。室町時代。
図版93-807	千提寺西遺跡	３区	2191	220	五輪塔	五輪塔(水輪)	23.5	28.0					水輪。上面に深さ0.7の擂鉢状の凹み有り。下面に径5.5高さ1.1の出ホゾ有り。室町時代。
図版93-808	千提寺西遺跡	４区	2164		谷南側	五輪塔(水輪)	13.6	18.3					水輪。風化著しい。室町時代。
図版93-809	千提寺西遺跡	４区	2172		谷南側	五輪塔(水輪)	15.8	21.5					水輪。上下面平坦。室町時代。
図版93-810	千提寺西遺跡	４区	2186	245	五輪塔	五輪塔(水輪)	23.7	30.5					水輪。下面に径6.5高さ1.5の出ホゾ有り。風化著しい。室町時代。
図版93-811	千提寺西遺跡	３区	1393-1	156	石組	台石	18.5	39.7					地輪とは異なり、平たい。台石か。周囲に自然石が6個体巡る。砂岩か。
図版93-812	千提寺西遺跡	３区	2106	67	石組	五輪塔(地輪)	17.7	23.4					地輪。上面に径7.2深さ1.7のホゾ孔有り。
図版93-813	千提寺西遺跡	３区	2107	67	石組	五輪塔(地輪)	19.0	26.0					地輪。上面に径5.7深さ1.4のホゾ孔有り。下面未調整。
図版93-814	千提寺西遺跡	３区	2114	67	石組	五輪塔(地輪)	20.3	25.4					地輪。上面に径7.0深さ2.2のホゾ孔有り。
図版93-815	千提寺西遺跡	３区	2127	102	石組	五輪塔(地輪)	21.0	24.2					地輪。上面に径5.3深さ0.9のホゾ孔有り。下面未調整。
図版93-816	千提寺西遺跡	３区	2138	126	石組	五輪塔(地輪)	22.6	30.4					地輪。上面に径9.0深さ1.6のホゾ孔有り。下面未調整。
図版93-817	千提寺西遺跡	３区	2139	67	石組	五輪塔(地輪)	24.8	37.3					地輪。上面に径6.5深さ2.0のホゾ孔有り。下面未調整。
図版93-818	千提寺西遺跡	４区	2169	239	五輪塔	五輪塔(地輪)	17.6	27.8					地輪。上面に径7.2深さ1.0のホゾ孔有り。
図版93-819	千提寺西遺跡	４区	2175	226	五輪塔	五輪塔(地輪)	26.9	34.7					地輪。上面に径6.7深さ2.3のホゾ孔有り。風化著しい。
図版94-820	千提寺西遺跡	４区	2177	241	五輪塔	五輪塔(地輪)	13.5	19.6					地輪。
図版94-821	千提寺西遺跡	４区	2179	243	五輪塔	五輪塔(地輪)	17.8	24.1					地輪。上面に径7.5深さ1.9のホゾ孔有り。下面未調整。
図版94-822	千提寺西遺跡	４区	2180	224	五輪塔	五輪塔(地輪)	18.9	23.0					地輪。上面に径7.0高さ1.4のホゾ孔有り。下面未調整。
図版94-823	千提寺西遺跡	４区	2184	240	五輪塔	五輪塔(地輪)	23.2	29.1					地輪。上面に径6.5深さ1.9のホゾ孔有り。下面未調整。
図版94-824	千提寺西遺跡	３区	1393-2	156	石組	自然石							台石の周囲に巡る自然石、6個体。
図版94-825	千提寺西遺跡	３区	2128	169	五輪塔	一石五輪塔	51.5	16.0					空輪高さ8.7、風輪高さ4.3、火輪高さ8.0、水輪高さ8.0、地輪高さ22.5。江戸時代初めか。
図版94-826	千提寺西遺跡	９区	105		第2層(北側溝)	板碑形石仏(阿弥陀)	49.2	17.5	12.0		14.0	7.3	風化、破損著しい。半跏趺坐。
図版94-827	千提寺西遺跡	８区	663		第2層	五輪塔(空風輪)	22.0	15.9					空風輪。径は風輪。下面に径5.0高さ1.5の出ホゾ有り。室町時代。
図版94-828	千提寺西遺跡	９区	113		第1層～第2層	五輪塔(水輪)	19.9	27.9					水輪。下面に径6.0高さ1.0の出ホゾ有り。
図版94-829	千提寺西遺跡	９区	43		第2層上位	光背形石仏(阿弥陀三尊)	30.3	29.4	12.8	右 中 左	13.8 13.8 13.7	5.7 5.8 5.7	薄肉彫。偏相右肩。弥陀定印か。半跏趺坐。台座痕。右・中石仏蓮華座(蓮弁痕)。左は痕跡。
図版95-830	千提寺市阪道跡	２区(確認67区)	97		石仏1	光背形地蔵菩薩立像	54.0	25.2	18.8		38.4	10.4	剃髪。白毫。耳朶環状。三道。袈裟。通肩。僧祇支。蓮華座(蓮弁未開) 。
図版95-831	千提寺市阪道跡	２区(確認67区)	98		石仏2	光背形石仏(阿弥陀)	46.7	31.1	16.7		(28.0)[37.5]	19.6	膝部無し。顔面に十字の刻み有り。肉髻。弥陀定印か。半跏趺坐。台座痕。
図版95-832	千提寺市阪道跡	２区(確認67区)	99		石仏3	光背形石仏(阿弥陀)	(49.1)[52]	(21.0)[22]	(11.5)[12]		(22.0)[32]	12.5	膝部無し。肉髻。偏相右肩。僧祇支。半跏趺坐。台座痕。
図版95-833	千提寺市阪道跡	２区	326	47・48・49	第1層(表土層)	石臼	33.2	9.2					上臼
図版95-834	千提寺市阪道跡	２区(確認67区)	184			—	21.8	32.6					未製品か。上面平坦中央に小孔有り。小孔の周り磨滅。
図版95-835	千提寺クルス山遺跡	１区	68	14	土壙	光背形石仏(阿弥陀)	59.2	26.1	16.5		(31.5)[37]	18.5	長方形墓の上部施設に転用。白毫。弥陀定印(小孔２)。偏相右肩。半跏趺坐。台座痕。

※(残存)［推定］

第４章　分析

第１節　分析の概要

分析は、放射性炭素年代測定、花粉分析、ガラスの調査、人骨の調査を実施した。

放射性炭素年代測定は、キリシタン墓とみられる長方形墓の年代を知るために実施した。長方形墓は、千提寺西遺跡３・４区では中世墓に重複して設けられ、千提寺西遺跡５区、千提寺市阪遺跡２区では新たに独立した墓域を設け、千提寺クルス山遺跡ではその中庸の状況を示す状態で検出した。長方形墓は基本的に副葬品をもたず、人骨のほかに釘が出土するのみであり、明確に時期を限定できる遺物は出土していない。そうしたなかにあって、千提寺西遺跡３・４区の山頂西側平坦面の長方形墓は、17 世紀前半、古寛永（寛永 13（1636）年初鋳）流通以降に形成された火葬場の炭層で覆われることから、17 世紀前半以前の年代が考えられた。長方形墓の年代は、千提寺におけるキリスト教の布教以降、江戸幕府による禁教令前後までとみられ、16 世紀後半～ 17 世紀前半の年代が予測された。残念ながら、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定では、これまでの測定値の蓄積から 16 世紀前後のものについては、詳細な年代の特定は困難であることが知られていた。しかし、今回は長方形墓をキリシタン墓と考えるにあたり、年代の確定は必須であることから、千提寺西遺跡３・４区山頂南側斜面、同山頂西側平坦面、千提寺西遺跡５区、千提寺クルス山遺跡１区の各墓域１点ずつ計４点について、人骨を試料として放射性炭素年代測定を実施した。千提寺市阪遺跡２区の長方形墓では人骨が出土せず試料が得られないため、この墓域については放射性炭素年代測定を実施することはできなかった。年代測定の結果、千提寺西遺跡３・４区山頂南側斜面の 161 土壙の試料については、骨の外に由来する炭素による汚染の可能性があるため結果を除去せざるを得なかったが、残り３点については 15 世紀後半～ 17 世紀前半の暦年代範囲が示された。やや幅広い年代ではあるが、今回予測された年代が含まれ、長方形墓をキリシタン墓と考えるにあたり齟齬が無い結果を得ることができた。

花粉分析は、千提寺における、古環境の復元等を行うために実施した。今回の調査区は丘陵部と谷部からなるものであるが、丘陵部は花粉化石の残存が期待できないため谷部の調査区で行うこととし、千提寺クルス山遺跡２区において試料の採取を行った。千提寺クルス山遺跡２区では、11 世紀後半から 14 世紀に至る耕作面が検出されており、中世に何が栽培されていたのかを花粉分析により、解明することが期待された。

試料は、耕土とみられる包含層である、第２－１層から第４－２層を対象として採取した。その結果、第３－３層、第４－１層、第４－２層（上位）から栽培種のソバに由来するソバ属花粉が検出された。これより、第３面、第４面にみられる耕作痕は、ソバの栽培に伴う可能性が考えられた。第３面は 12 世紀中頃、第４面は 11 世紀後半～ 12 世紀中頃と考えられ、このころにはソバが栽培されていたことが明らかとなった。なお、イネ科の花粉はいずれの層からも検出されておらず、イネの栽培については、花粉分析からは明らかにし得なかった。

また、その他の花粉化石からは、11 世紀後半～ 13 世紀後半にかけては、調査地周囲の尾根にはナラ類やアカマツに、アラカシなどを交える薪炭林（里山）が分布していたことが、13 世紀後

半～ 14 世紀にかけては、調査地周囲の尾根にはナラ類やアカマツからなる薪炭林（里山）が分布していたことが考えられた。千提寺クルス山遺跡２区では、炭焼き窯とみられる焼土坑が第１面、第２面、第４面で検出されており、11 世紀後半～ 14 世紀のものと考えられる。以上より、11 世紀後半～ 14 世紀には、千提寺クルス山遺跡２区周辺において、薪炭林（里山）がひろがり、炭焼き窯が操業している景観が推察される。

ガラスの調査は、千提寺西遺跡５区 87 土壙出土の青緑色ガラス玉１点、千提寺市阪遺跡２区 17 土壙出土の緑色ガラス小玉 41 点と無色透明（白色半透明）ガラス小玉 26 点、同区 66 土壙出土の青緑色ガラス小玉 61 点と無色透明ガラス小玉 38 点、同区 95 土壙出土の青緑色ガラス小玉２点、同区出土地不明の無色透明（白色半透明）ガラス小玉１点について、顕微鏡観察による観察とともに蛍光Ｘ線分析法を用いてガラスの化学組成を明らかにして頂いた。これらのガラス玉が出土した土壙は、「隠れキリシタン」の一族墓とみられる近世墓であり、禁教後に潜伏した「潜伏キリシタン」に関連する遺構、遺物の検出が期待された。

千提寺西遺跡５区 87 土壙出土の青緑色ガラス玉１点は、８条の溝で分割される、花形のガラス玉である。こうしたガラス玉はキリシタン大名として著名な大友宗麟の城下町である大分市府内町遺跡に「コンタツ」とされる類例があり、キリシタン関連遺物の可能性が考えられた。しかし、同様のガラス玉は、キリスト教布教期よりもさかのぼる時期の山口県瑠璃光寺遺跡出土品や江戸時代の煙草入れにも類例があり、形態のみではキリシタン遺物との確証は得られないことから、化学組成を明らかにし大分市府内町遺跡出土「コンタツ」の化学組成と比較することとした。その結果、今回の資料はカリウム鉛ガラスであることがわかった。大分市府内町遺跡出土の花形のガラス玉は、カリガラス製と鉛ガラス製のものがあり、鉛ガラス製のものは、鉛同位体比分析結果から中国華南産の鉛原料が使用されていることが報告されている。今回の資料はカリウム鉛ガラスであるためガラスの素材は異なることがわかった。

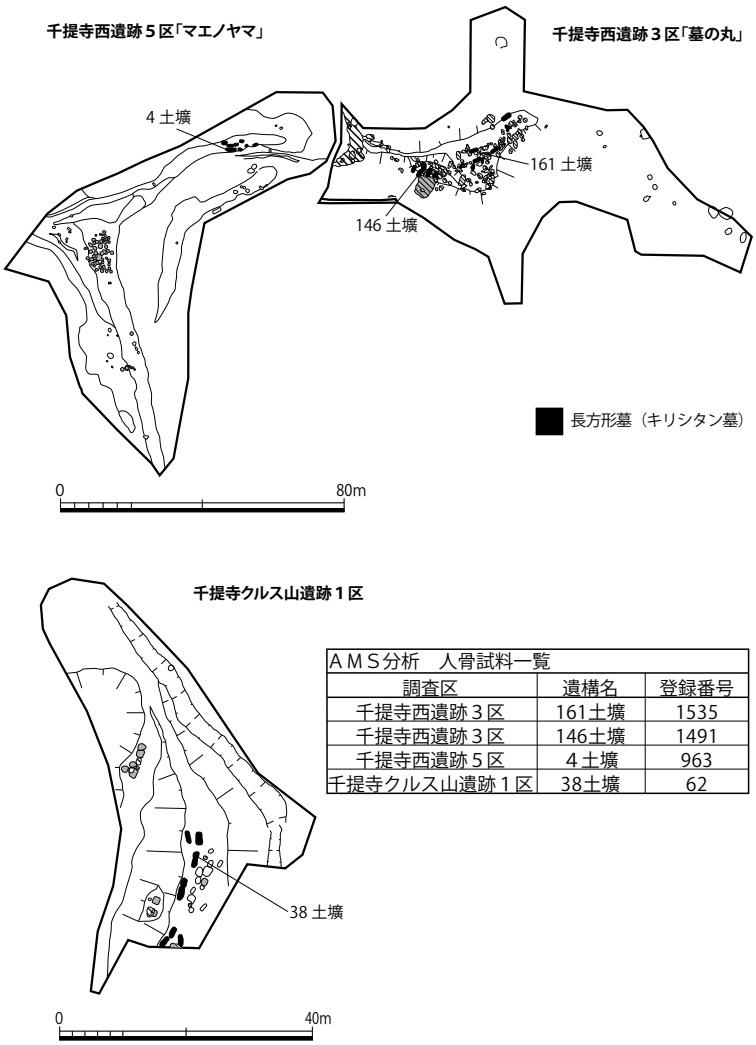
千提寺市阪遺跡２区 17 土壙、66 土壙、95 土壙から出土した資料は、すべてカリウム鉛ガラスであり、ガラスの素材としては同じであった。しかし、17 土壙と 66 土壙の資料は亜鉛の有無による違いが認められることから、異なる工房（製作地）での製品の可能性や使用した鉛原料が時期により異なる、または時期によりガラス素地製造工程が異なっていた可能性が考えられた。なお、95 土壙は 66 土壙の下部に位置しており、95 土壙出土のガラス小玉２点は、本来 66 土壙に含まれていたガラス小玉が混入した可能性が考えられた。分析の結果、95 土壙と 66 土壙の資料は化学組成の特徴が類似することから、95 土壙出土の２点のガラス小玉は 66 土壙のものであった可能性が高い。また、出土不明の資料は、亜鉛を検出することから、17 土壙から出土した可能性が高いことがわかった。

人骨の調査は、出土人骨すべてを対象とした。５箇所の墓域にひろがる中世墓、近世墓出土人骨が中心で、コンテナ 85 箱分の資料である。残存状態が良好な人骨 136 体について年齢推定、性別判定、身長の推定、歯と骨格の病変の観察をして頂いた。その結果、年令は乳児から 60 才以上にわたり「子墓」を形成しない埋葬様式であること、男女ともに生前における喪失歯が多いこと、千提寺西遺跡５区と６区は江戸時代の関東人に比べ男性が低身長、女性が高身長であること、重篤な変形性脊椎症や肘関節症がみられ地域の生業の影響と考えられることが判明した。

第２節　放射性炭素年代測定

（１）はじめに

千提寺西遺跡、日奈戸遺跡、千提寺市阪遺跡、千提寺クルス山遺跡の調査では、中世から近世の墓域と集落域が検出された。墓域は、千提寺西遺跡３・４区、同５区、同６区、千提寺市阪遺跡２区、千提寺クルス山遺跡１区の計５箇所でみつかっている。千提寺西遺跡３・４区では主に中世墓群が、千提寺西遺跡５区、同６区では主に近世墓群が、千提寺市阪遺跡２区と千提寺クルス山遺跡１区では少数の中世墓とともに近世墓群がみつかっている。墓の一部は、形態、木棺の使用、墓の配列などからキリシタン墓とみられている。キリシタン墓とみられる長方形墓は、時期が中世末から近世初頭とみられており、千提寺西遺跡３・４区では中世墓群の一画を占める状態で、５区では近世墓群とは独立する状態で、千提寺クルス山遺跡ではそれらの中間の状態でみつかっている。キリシタン墓とみられる長方形墓の時期を考察する材料を得るために、長方形墓出土人骨のうち、千提寺西遺跡３区の２体、千提寺西遺跡５区の１体、千提寺クルス山遺跡１区の１体、計４体について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った（図 108）。



ＡＭＳ分析　人骨試料一覧

調査区	遺構名	登録番号
千提寺西遺跡３区	161土壙	1535
千提寺西遺跡３区	146土壙	1491
千提寺西遺跡５区	４土壙	963
千提寺クルス山遺跡１区	38土壙	62

図 108　AMS 試料分析土壙

（２）試料と方法

試料は、キリシタン墓と考えられる長方形墓から出土した人骨４体である。千提寺西遺跡の３区では、161 土壙出土人骨の頭蓋骨片（PLD-26931）、146 土壙出土人骨の頭蓋骨片（PLD-26932）、同５区では４土壙出土人骨の長骨片（PLD-26933）、千提寺クルス山遺跡の１区では 38 土壙出土人骨の頭蓋骨片（PLD-26934）が採取された。

まず、コラーゲン抽出処理を施して、試料中に含まれるコラーゲンを抽出した。161 土壙出土人骨（PDL-26931）は、4241.50 ㎎の骨片から 182.90 ㎎のコラーゲンが抽出され、コラーゲン収率は 4.31％であった。146 土壙出土人骨（PLD-26932）は、2336.50 ㎎の骨片から 135.70 ㎎のコラーゲンが抽出され、コラーゲン収率は 5.81％であった。４土壙出土人骨（PLD-26933）

表８　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-26931	遺跡名：千提寺西遺跡 調査区：3区 遺構：161土壙 登録番号：1535	種類：人骨（頭蓋骨） 状態：dry	超音波洗浄 コラーゲン抽出（収率4.31%）
PLD-26932	遺跡名：千提寺西遺跡 調査区：3区 遺構：146土壙 登録番号：1491	種類：人骨（頭蓋骨） 状態：dry	超音波洗浄 コラーゲン抽出（収率5.81%）
PLD-26933	遺跡名：千提寺西遺跡 調査区：5区 遺構：4土壙 登録番号：963	種類：人骨（長骨） 状態：dry	超音波洗浄 コラーゲン抽出（収率5.06%）
PLD-26934	遺跡名：千提寺クルス山遺跡 調査区：1区 遺構：38土壙 登録番号：62	種類：人骨（頭蓋骨） 状態：dry	超音波洗浄 コラーゲン抽出（収率9.16%）

は、1472.30 mgの骨片から 74.50 mgのコラーゲンが抽出され、コラーゲン収率は 5.06％であった。38 土壙出土人骨（PLD-26934）は、2143.30 mgの骨片から 196.30 mgのコラーゲンが抽出され、コラーゲン収率は 9.16％であった。抽出したコラーゲンは、放射性炭素年代測定に供した他、一部をコラーゲンの質をチェックするための炭素窒素比（C/N 比）の測定に供した。

炭素窒素比（C/N 比）を算出するための炭素含有量及び窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）である Flash EA1112（Thermo Fisher Scientific 社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA 内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで CO_2 と N_2 を分離し、TCD でそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度 1000℃、還元炉温度 680℃、分離カラム温度 45℃である。

放射性炭素年代測定試料の情報、調製データは表８のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

（３）結果

表９に、EA で測定した炭素含有量、窒素含有量、炭素含有量と窒素含有量に基づいて算出した C/N 比を示す。

表 10 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± １ σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

表９　コラーゲンのＣ／Ｎ比

試料番号	試料情報	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C／N比
PLD-26931	遺跡名：千提寺西遺跡 遺構：161土壙 登録番号：1535 試料の種類：人骨（頭蓋骨）	32.4	9.81	3.85
PLD-26932	遺跡名：千提寺西遺跡 遺構：146土壙 登録番号：1491 試料の種類：人骨（頭蓋骨）	36.5	12.3	3.46
PLD-26933	遺跡名：千提寺西遺跡 遺構：4土壙 登録番号：963 試料の種類：人骨（長骨）	41.9	14.4	3.39
PLD-26934	遺跡名：千提寺クルス山遺跡 遺構：38土壙 登録番号：62 試料の種類：人骨（頭蓋骨）	43.1	15.4	3.26

表 10　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-26931 (161土壙)	-20.68±0.20	176±17	175±15	1669AD(16.4%)1681AD 1739AD(13.5%)1750AD 1763AD(24.6%)1781AD 1799AD(3.9%)1802AD 1938AD(9.9%)1946AD	1665AD(18.0%)1686AD 1731AD(47.9%)1785AD 1794AD(9.4%)1809AD 1926AD(20.1%)...
PLD-26932 (146土壙)	-20.86±0.13	330±18	330±20	1513AD(11.9%)1528AD 1551AD(41.8%)1601AD 1617AD(14.6%)1634AD	1488AD(76.3%)1604AD 1610AD(19.1%)1640AD
PLD-26933 (4土壙)	-20.64±0.14	327±17	325±15	1515AD(10.3%)1529AD 1543AD(44.0%)1597AD 1618AD(13.9%)1634AD	1491AD(76.8%)1603AD 1614AD(18.6%)1640AD
PLD-26934 (38土壙)	-21.21±0.14	362±19	360±20	1470AD(45.1%)1517AD 1595AD(23.1%)1618AD	1455AD(55.1%)1524AD 1559AD(1.3%)1564AD 1571AD(39.0%)1631AD

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す（図 109）。

（４）考察

一般的に骨コラーゲンの C/N 比は 2.9 ～ 3.6 の間に収まる (DeNiro, 1985)。千提寺西遺跡３区の 161 土壙出土人骨（PLD-26931）の C/N 比は 3.85 であり、この範囲より少し高い値を示した。コラーゲン収率は 4.31％と遺跡出土骨としては高いが、C/N 比が高いため、コラーゲンの劣化・

変質が疑われ、骨の外に由来する炭素による汚染の可能性がある。そのため、161 土壙出土人骨（PLD-26931）の年代測定結果については、考察の対象から除外する。

他３点のコラーゲンは、収率、C/N 比共に問題は見られず、深刻な劣化・変質を被っていないと考えられる。

千提寺西遺跡３区の 146 土壙出土人骨（PLD-26932）は、^{14}C 年代が 330±20 ^{14}C BP、２σ 暦年代範囲（確率 95.4％）が 1488-1604 cal AD(76.3%)、1610-1640 cal AD(19.1%) であった。千提寺西遺跡５区の４土壙出土人骨（PLD-26933）は、^{14}C 年代が 325±15 ^{14}C BP、２σ 暦年代範囲が 1491-1603 cal AD(76.8%)、1614-1640 cal AD(18.6%) であった。

千提寺クルス山遺跡１区の 38 土壙出土人骨（PLD-26934）は、^{14}C 年代が 360±20 ^{14}C BP、２σ 暦年代範囲が 1455-1524 cal AD(55.1%)、1559-1564 cal AD(1.3%)、1571-1631 cal AD(39.0%) であった。

３体はいずれも 15 世紀後半～ 17 世紀前半の暦年代範囲を示した。

〈参考文献〉

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

DeNiro MJ.（1985）Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. Nature 317: 806-9.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会.

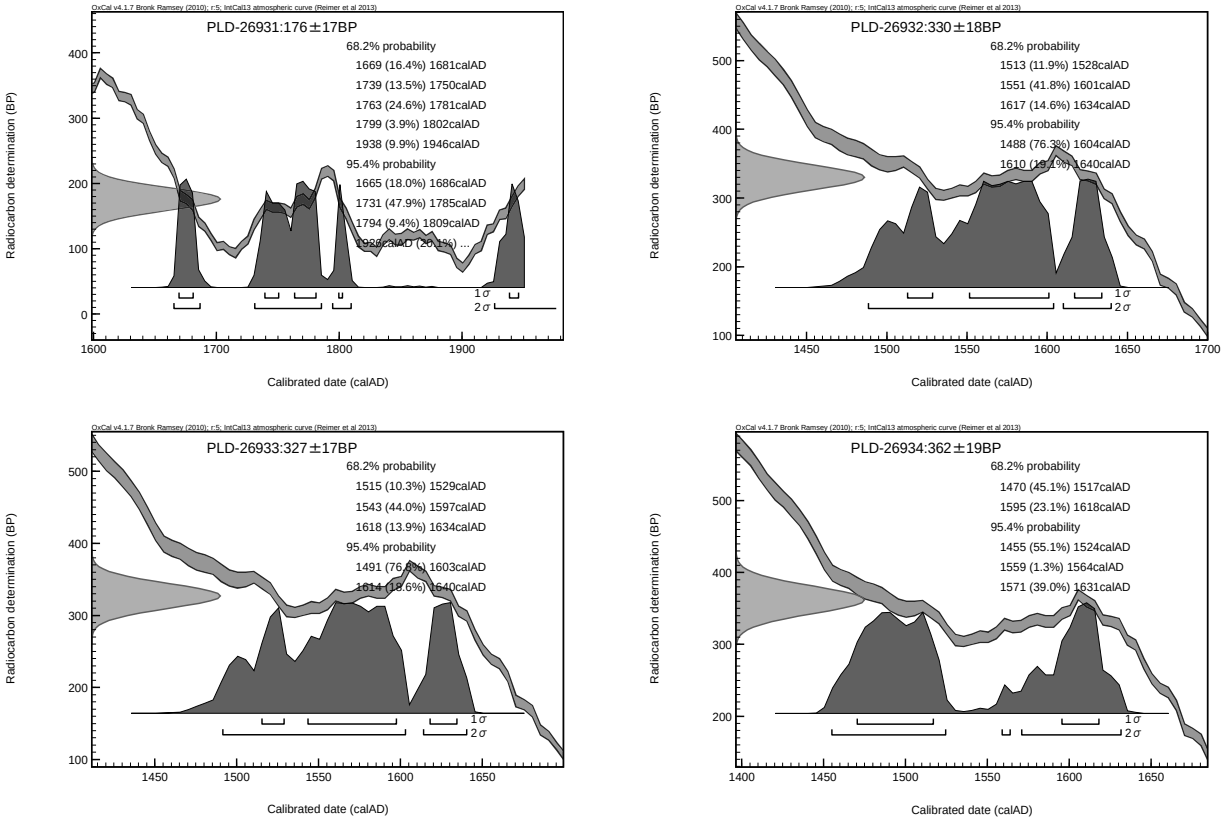


図 109　暦年較正結果

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第３節　花粉分析

（１）はじめに

千提寺クルス山遺跡２区における地層の形成過程を明らかにし、古環境の復元、土壌の堆積環境の推定、地層の対比等を行う目的で実施した花粉分析について報告する。更に、試料の軟Ｘ線写真観察結果についても報告する。

（２）分析試料について

分析試料は千提寺クルス山遺跡２区南壁中央部においてブロック試料で採取された。試料の分割にあたり軟Ｘ線写真を撮影し、この観察結果に基づいてブロックを分割、分析試料を分取した。観察結果を図 110 に示す。また、分析試料の形状、位置は、図 111・112 の花粉ダイアグラム中と断面図（図 24）に示す。

（３）分析方法及び分析結果

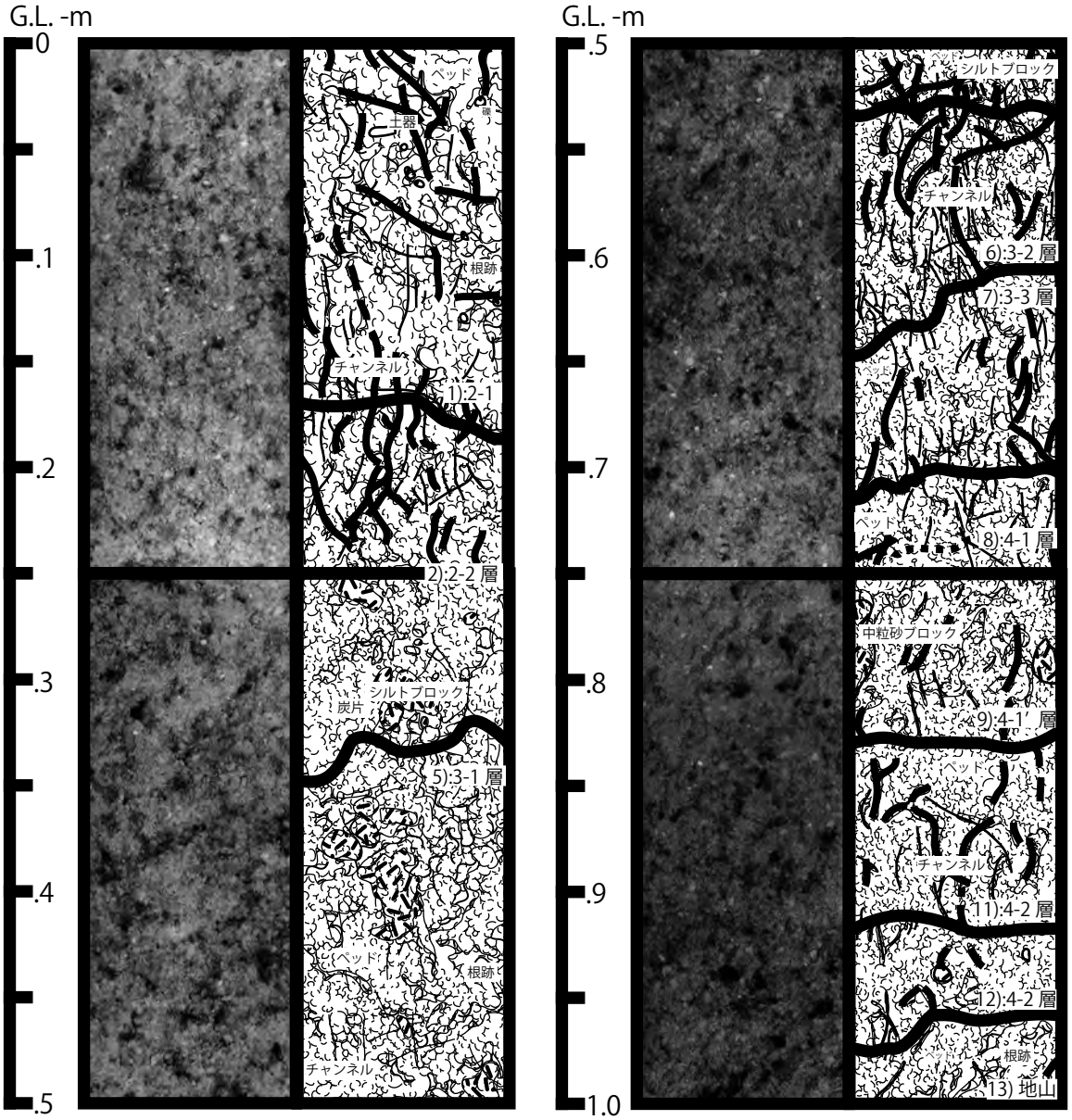


図 110　軟Ｘ線写真観察結果

①分析方法

渡辺（2010）にしたがって分析処理を行った。花粉化石の同定は光学顕微鏡下（400 ～ 1000 倍）で、原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40 ミクロン未満）に細分している。また、花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を概観し、花粉、炭、植物片、珪藻、火山ガラス、プラント・オパールの含有状況を「微化石概査結果」として 5 段階で示した。

表 11　微化石概査結果

試料No.	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ｶﾞﾗｽ	ﾌﾟﾗﾝﾄ･ｵﾊﾟｰﾙ
1	△×	◎	△×	×	◎	△
2	△×	◎	△×	×	◎	△
3	△×	○	△×	×	◎	△
4	△×	◎	△×	×	◎	△
5	△×	◎	△×	×	△	△
6	△×	◎	△	×	◎	△
7	△×	◎	△×	×	△	△
8	△×	◎	△×	×	○	○
9	△×	◎	△×	×	○	△
10	△×	◎	△×	×	○	○
11	△×	◎	△×	×	○	△
12	△×	◎	△×	×	○	△
13	△×	◎	△×	△×	◎	○

凡例 ◎ ：十分な数量が検出できる　○ ：少ないが検出できる　△ ：非常に少ない
△× ：極めてまれに検出できる　× ：検出できない

②分析結果

微化石概査結果を表 11 に、花粉分析結果を図 111・112 に示す。図 111 の「花粉ダイアグラム」では、各々の分類群について計数した花粉・胞子の総数を基数にした百分率を算出し帯で示している。さらに、木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に分け、これらに草本・藤本花粉、胞子の総数を加えたものの割合を、累積グラフとして示したほか、木本、草本・藤本花粉、胞子ごとの含有量（粒 /g）を示している。図 112 の「粒数花粉ダイアグラム」では、分類群ごとの含有量（粒 /g）を示した。

各試料での花粉化石群集特徴を、下位から上位に向けて示す。

試料№ 13 ～ 3（地山～第３－１層）ではシノブ属が 40 ～ 50％と高率を示すほか、オシダ科 - チャセンシダ科が 10 ～ 30％と続く。草本花粉ではイネ科（40 ミクロン未満）、キク亜科、ヨモギ即、タンポポ亜科が、低率ではあるがこの間の多くの試料で検出される。また、ソバ属が試料№ 11 ～ 9（第４－２層～４－１’層）、試料№ 6（第３－３層）で検出されるほか、試料№ 8（第４－１層）ではアカザ科－ヒユ科、ナデシコ科が検出される。またこの間の花粉化石含有量は、試料№ 5（第３－３層）と試料№ 4（第３－２層）の間で減少する。

試料№ 2、1(第２－２層・第２－１層) ではオシダ科－チャセンシダ科が 50％を超える高率を示すほか、シノブ属が 24 ～ 8％と続くが、減少傾向を示す。花粉化石ではキク亜科、タンポポ亜科が試料により複数粒検出されたが、含有量では 0.2 ～ 0.4 粒 /g に止まっている。

（４）遺跡内での耕作について

栽培種に由来するソバ属が検出された層準は、第３－３層（試料№ 6）、第４－１’層（試料№ 9）、第４－２層（試料№ 10・11）であった。これらのうち試料№ 8（第４－１層）では、栽培種に由来する可能性があるアカザ科－ヒユ科、ナデシコ科花粉も検出された。ソバを含む草本花粉の花粉生産量は木本花粉に比べて極めて少なく、散布距離も短いことから、検出された場所で生育していた可能性が高いと考えられる。したがって、ソバが検出された３層の堆積時期には、ソバが栽培されていた（各層が耕作層である）可能性が高いと考えられる。また、アカザ、ヒユ、ハコベなどの雑穀、野菜が栽培されていた可能性も指摘できる。

一方、軟Ｘ線写真観察において、これらの層内ではペッドが強度に発達し、土壌化が進んでいることが示唆される。このことは、これらの層準が耕作層であると考えることと矛盾しない。

（５）調査地周辺の古植生

上部の一部に埋土の可能性が指摘されるものの、多くの層で土壌化が進んでいることが明らかであった。一連の層は、ゆっくりと堆積したと推定できる。土壌化が顕著でゆっくりした堆積速度が推定されることから、今回得られた花粉・胞子化石群集は、堆積中の紫外線、堆積後のバクテリアや酸化・還元作用による劣化・消滅による選別を受けていたと考えられる。これらの作用によって花粉粒の多くが消滅し、花粉粒の一部と胞子粒が選択的に残ったと考えられる。一般にシノブ属（シノブ）は、林内の岩や大木の幹などに着生し、オシダ科－チャセンシダ科の多くは林床に生育する。オシダ科－チャセンシダ科には日当たりの良い所を好む種もわずかに存在する。検出した花粉・胞子の多くがシノブ属とオシダ科－チャセンシダ科で占められているが、花粉粒の多くが淘汰を受け消滅したもので、周辺に樹木や草本が生育していたものと考えられる。

① 試料№.13 ～ 3（地山～第３－１層）：古代末から中世（11 世紀後半から 13 世紀後半）

地山（試料№.13) で検出された花粉・胞子粒の含有量は、上位の第４－２層（試料№.10）をピークとして急激に減少している。このことは、土壌化に伴う擾乱によって花粉・胞子粒が、第４－２層上部から下位に移動したことを示唆する可能性がある。同様に第３－１層（試料№.3）でも上位の第２－１層(試料№.1)をピークに含有量が急減しており、土壌化に伴うかく乱によって花粉・胞子粒が移動した可能性が指摘できる。

調査地三方を囲む尾根筋に沿って、わずかに花粉が検出されたナラ類やアカマツ類にアラカシなどが混じる薪炭林（里山）が分布していたと考えられる。また、林床にはオシダ科、チャセンシダ科を始めヒモランやトウゲシバなどのシダ類が生育し、樹木の幹にはシノブが着生していたと考えられる。また、ソバが栽培された耕作地近辺では、ヨモギ類やタンポポ類などの草本のほか、ヒカゲノカズラ、フユノハナワラビ、ハナヤスリなどのほか、イノモトソウ科でも日当たりを好むワラビやヒメウラジロ、オシダ科でも日当たりを好むオクマワラビやゲジゲジシダなどのシダ類も生育していたと考えられる。

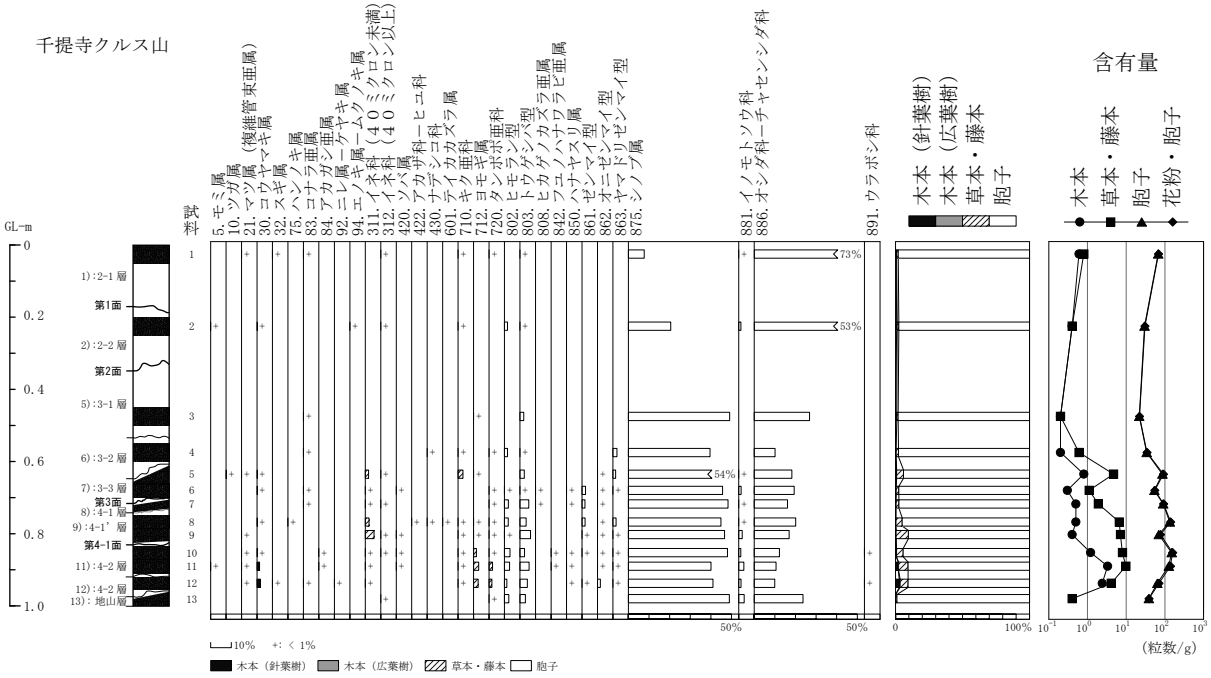


図 111　花粉ダイアグラム

②試料№.2、1（第２－２層・第２－１層）：中世（13 世紀後半～ 14 世紀）

軟Ｘ線写真観察によって第２－２層には、埋土（あるいは崖錐堆積物）の可能性が指摘されていた。花粉粒がほとんど検出されなかったことから、堆積時の地表面はキク科の草本やシダ類がわずかに分布している程度であったと考えられる。ただし、オシダ科－チャセンシダ科の含有量、出現率が高いことから、イノモトソウ科でも日当たりを好むワラビやヒメウラジロが群落を形成していた可能性もある。また、調査地三方を囲む尾根筋に沿って、わずかに花粉が検出されたナラ類やアカマツ類を主とする薪炭林（里山）が分布していたと考えられる。ここにはオシダ科、チャセンシダ科のシダ類が生育し、樹木の幹にはシノブが着生していたと考えられる。

（６）まとめ

千提寺クルス山遺跡２区の発掘調査に伴う花粉分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

①第 ３－３層（試料№.6）、第４－１’層（試料№.9）、第４－２層（試料№.10・11）ではソバ属花粉やアカザ科－ヒユ科、ナデシコ科が検出された。これらの層準では土壌化が進んでいることを合わせると、これらが耕作層で、ソバが栽培されていた可能性が高く、アカザ、ヒユ、ハコベが栽培されていた可能性も指摘できる。

② 11 世紀後半から 13 世紀後半にかけて、調査地周囲の尾根にはナラ類やアカマツに、アラカシなどを交える薪炭林（里山）が分布していたと考えられる。また、ソバ畑の周囲（林縁）にはヨモギ類やタンポポ類のほかワラビやヒカゲノカズラなどのシダ類が生育していたと考えられる。

③ 13 世紀後半～ 14 世紀にかけて、調査地周囲の尾根にはナラ類やアカマツからなる薪炭林（里山）が分布していたと考えられる。また、谷底は貧弱な植生が推定され、ヨモギ類やタンポポ類のほか、ワラビやオクマワラビなどのシダ類が生育していたと考えられる。ただし、シダ類胞子の含有量が比較的多いことから、これらのシダ類が群落を形成していた可能性もある。

〈参考文献〉

中村　純 1974 イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究 , 13，187-197.

渡辺正巳 2010 花粉分析法．必携考古資料の自然科学調査法，174-177. ニュー・サイエンス社

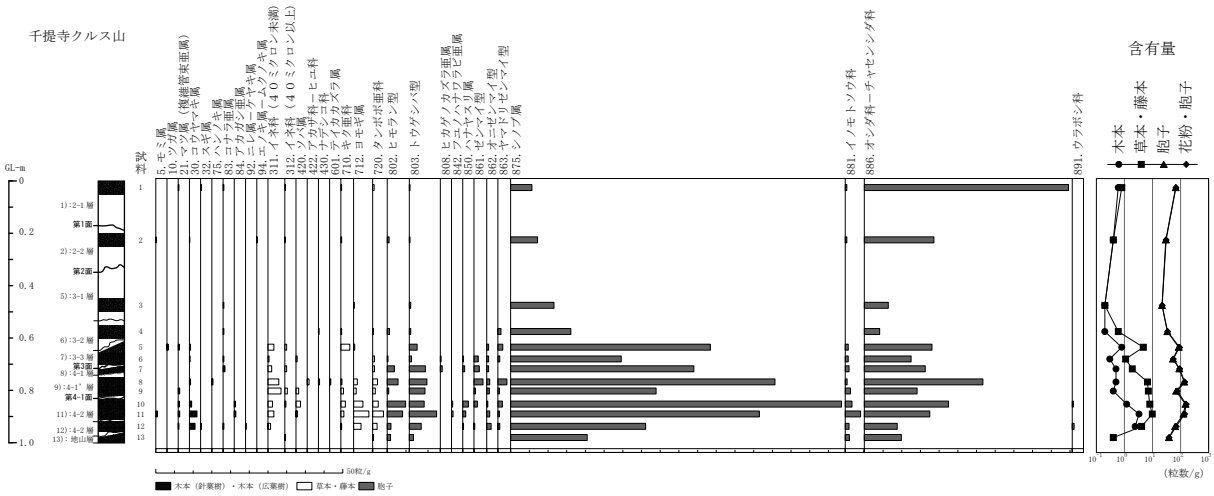


図 112　粒数花粉ダイアグラム

第４節　千提寺西遺跡・千提寺市阪遺跡出土ガラスの調査

独立行政法人　奈良文化財研究所　降幡順子

（１）はじめに

千提寺西遺跡５区から出土したコンタとよばれるガラス製の玉１点、千提寺市阪遺跡２区の 17 土壙から出土したガラス小玉 67 点、同 66 土壙から出土したガラス小玉 99 点、17 土壙もしくは 66 土壙から出土したガラス小玉１点、同 95 土壙から出土したガラス小玉２点の計 170 点について、分析調査を行った。これらの顕微鏡観察、蛍光Ｘ線分析を行い、製作技法及び化学組成の特徴を明らかにすることを目的とした。

（２）分析資料（図 113）

千提寺西遺跡５区 87 土壙から出土したガラス玉（蜜柑玉）1 点は青緑色を呈している。8 条の溝で分割されるが均等ではない。花形のガラスコンタの可能性もある資料である。表面は風化により白色化・銀化がみられる。溝に沿った亀裂が多数観察できる。

千提寺市阪遺跡２区 17 土壙から出土したガラス小玉は、半透明の緑色ガラス小玉 41 点、無色透明（白色半透明）ガラス小玉 26 点である。緑色ガラス小玉は風化の程度が少ない資料が多く、巻き付け法で成形されている。無色ガラス小玉は、気泡が少なく、緑色ガラス小玉と同様に風化の程度が少ない資料が多い。これらも巻き付け法で製作されている。無色ガラス小玉のうち、No.42 ～ 46 の５点は、他の資料と比較し風化が進行している。千提寺市阪遺跡２区 17 土壙は 18 世紀中頃に比定されている。

千提寺市阪遺跡２区 66 土壙から出土したガラス小玉は、半透明の青緑色ガラス小玉 61 点、無色透明ガラス小玉 38 点である。青緑色ガラス小玉は、17 土壙のガラス小玉と比較すると明らかに風化が進行している資料も多い。17 土壙と同様に巻き付け法で製作されているものの、巻き付けたガラスの痕跡がそのまま残存しているなど､形を整えていない資料も多い。無色ガラス小玉は、気泡が少なく、風化の程度が少ない資料が多い。これらも巻き付け法で製作されている。千提寺市阪遺跡２区 66 土壙は近世の遺構と考えられている。

千提寺市阪遺跡２区 17 土壙または 66 土壙から出土した無色ガラス小玉も、風化の程度が少なく、巻き付け法で製作されている。

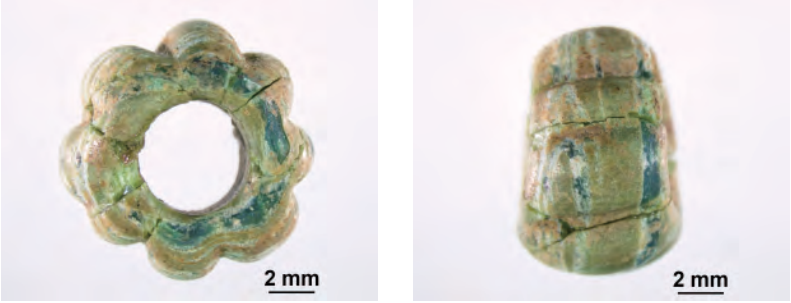
千提寺市阪遺跡２区 95 土壙から出土した半透明の青緑色ガラス小玉は、風化がやや進行し、表面に鱗片状の亀裂が多数観察できる。巻き付け法で製作されている。千提寺市阪遺跡２区 95 土壙は近世の遺構と考えられている。

（３）分析方法

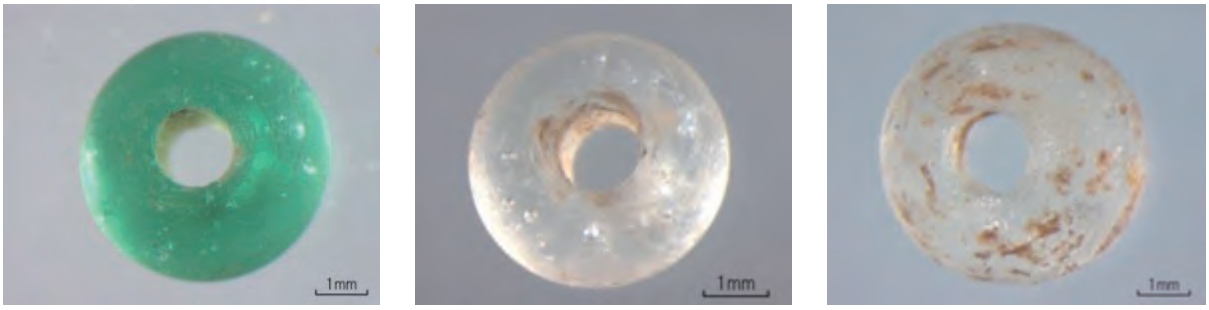
各資料は顕微鏡観察による観察を行い、ガラスの化学組成は、蛍光Ｘ線分析法によって求めた。ガラスは、風化の程度によって得られる分析値がさまざまに変動する。本調査では、ガラス表面の風化層をわずかに研削して内部を測定し、表面風化による変質の程度が少ない部分による測定を行った。そのため得られる数値は表面風化の影響による組成の変動を出来るだけ少なくしている。

測定は EDAX 製 EAGLE Ⅲを使用し、測定条件は、管電圧 20kV、管電流 200μA、コリメータ径 50 μ m、測定時間 300 秒、真空雰囲気中とした。定量分析の標準試料には、NIST（National

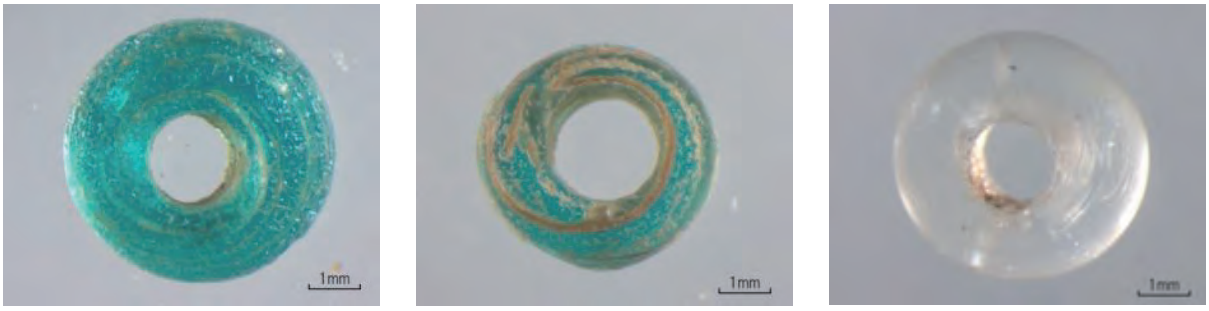
Institute of Standards and Technology）発行の 89、620、1412、BAS（Bureau of Analysed Samples Ltd.）発行の STG －７、８、コーニングガラス博物館標準試料 CMG －A、B、C、および産業技術総合研究所地質調査総合センター岩石標準試料 JB-1a、JGb-2 を用い、検出元素の各酸



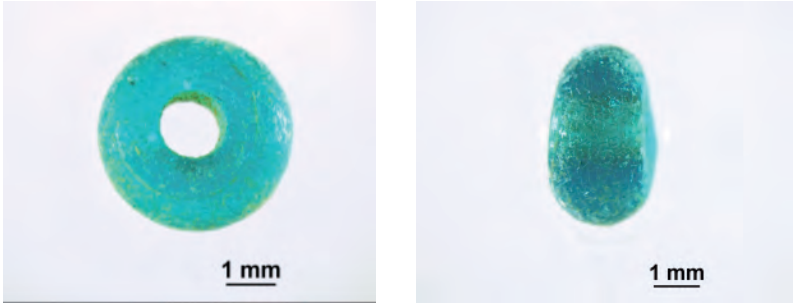
千提寺西遺跡５区 87 土壙出土のガラス玉（蜜柑玉・ガラスコンタ）



千提寺市阪遺跡２区 17 土壙出土ガラス小玉
（左；№19 緑色ガラス小玉、中央；№66 無色ガラス小玉、右；№45 風化によりやや失透した無色ガラス小玉）



千提寺市阪遺跡２区 66 土壙出土ガラス小玉
（左；№53 青緑色ガラス小玉、中央；№95 風化により失透した青緑色ガラス小玉、右；№11 無色透明ガラス小玉）



千提寺市阪遺跡２区 95 土壙出土ガラス小玉（№２）

図 113　分析資料の一例

化物の合計が 100wt% になるよう規格化し FP（ファンダメンタル・パラメーター）法により定量値を求めた。測定はひとつの資料について 3 回行い平均値をとった。錫、アンチモンの含有の有無を確認するため、管電圧 40kV、管電流 30μA、コリメータ径 50μm、測定時間 300 秒、真空雰囲気中で測定を行った（高圧）。参考値としてノンスタンダードによる FP 法により定量値を算出した。

（4）分析結果

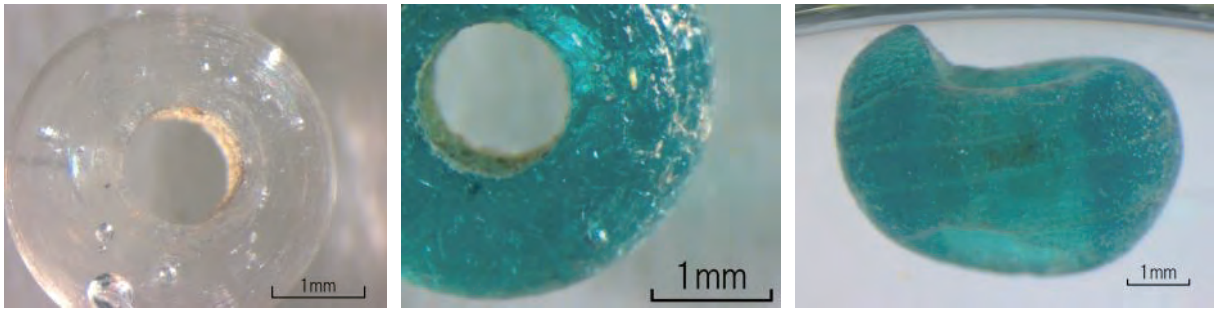
千提寺市阪遺跡 2 区 66 土壙は、風化の程度の少ない、透明度の高い無色透明ガラス資料が含まれている。また青緑色ガラスでは鱗片状に亀裂が生じている資料がみられ、巻き付けの痕跡が顕著であり、巻き始め・終わりの痕跡や、巻き付けの方向も孔に垂直なものや斜め方向への巻き付け痕跡がある資料もみられた（図 114）。

今回分析に供した資料の蛍光X線分析結果を表 12、主成分の分布を図 115・116 に示す。今回の資料では錫はすべての資料で検出限界以下であったが、高圧の条件下での測定によりアンチモンが検出されたことから、表中には顕著に検出した資料◎、検出された資料○、わずかに検出された資料 tr と表示する。

千提寺西遺跡 5 区 87 土壙出土の青緑色ガラスで、ガラスコンタの可能性が考えられる資料は、カリウム鉛ガラスであった。銅による着色で、酸化銅として約 1.5wt% 含有している。他に酸化亜鉛約 0.1wt%、酸化鉄約 1wt% を検出している。錫は検出限界以下であった。酸化アンチモンを顕著に検出することが特徴といえる（ノンスタンダードでの定量値は約 7wt%）。アンチモンは消泡剤として添加された可能性が考えられるが含有量は多い。豊後の大友府内町跡遺跡から出土した 16 世紀の花弁形のガラスコンタは、カリガラス製と鉛ガラス製のものがあり、鉛ガラス製のものは、鉛同位体比分析結果から中国華南産の鉛原料が使用されていることが報告されている。千提寺西遺跡出土資料は、所属時期も 19 世紀代に比定される可能性があるなど、16 世紀のコンタとそのまま比較はできないが、今回の資料はカリウム鉛ガラスであるためガラスの素材は異なる。

千提寺市阪遺跡 2 区 17 土壙、66 土壙、95 土壙から出土した資料は、すべてカリウム鉛ガラスであり、ガラスの素材としては同じといえる。しかし含まれている元素が土壙と色調により異なることがわかったため、以下に詳述する。

無色透明ガラスは、ばらつく資料もあるが、どちらの土壙から出土した資料も主成分は類似している（表 13）。しかし 66 土壙は、17 土壙では検出されない亜鉛をすべての資料から検出している。無色ガラスから検出されていることから、銅などの着色料に含まれる不純物とは考えられ



（左；透過度の高いガラス玉、中央；鱗片状の風化、右；斜め方向の巻き付け痕跡）

図 114　顕微鏡観察

ないことから、ガラスの主成分である鉛の鉱石にともなう不純物、もしくは 19 世紀前半の文献には亜鉛による鉛滓の除去に関する記載がみられるため、溶融時に鉛滓の除去のために添加されたものと考えられる。したがって、66 土壙と 17 土壙では、鉛鉱石の原料が異なる、またはガラス素地製造の工程が異なる可能性が高い。化学組成は類似しているが、亜鉛の有無による違いが認められることから、66 土壙と 17 土壙のガラス小玉は、異なる工房（製作地）での製品の可能性があり、また遺構の所属時期が同時期とはいえないことから、同じ工房（製作地）のものとすると、使用した鉛原料が時期により異なる、または時期によりガラス素地製造工程が異なっていたことなども考えられる。

出土した土壙が不明であった資料（17 土壙または 66 土壙から出土したとされた No.100）は、亜鉛を検出することから、17 土壙から出土した可能性が高いといえる。

やや白濁している無色ガラス玉 5 点は、化学組成に顕著な差異は認められなかった。鉄含有量がやや多いことや、顕微鏡観察からやや風化の進行が他資料よりも進行し白濁しているといえるため、色調の差異は、組成の違いというよりも、風化の程度が異なることによるものと考えられる。

緑色および青緑色ガラス資料は、17 土壙の緑色ガラス小玉と 66 土壙、95 土壙の青緑色ガラス小玉は、すべてカリウム鉛ガラスであり、銅による着色といえる。酸化カリウム含有量は、66 土壙のほうがやや多い傾向を示すなど、土壙により化学組成にわずかに違いが認められる（表 13）。これが、時期差と表しているのか、工房（製作地）の違いを示しているのかは現状では不明のため、今後の同時期の分析資料数を増加していきたい。66 土壙の資料では値にややばらつきがみられるが、これは風化の影響によるものと考えられる。

また 66 土壙の青緑色ガラスは、すべての資料から亜鉛およびアンチモンを検出し、分析結果の値は比較的類似する資料が多い。それに対して、17 土壙は亜鉛およびアンチモンを顕著に検出しない。66 土壙の白色透明資料からも亜鉛を検出していることから、66 土壙から出土した青緑色ガラスも着色料である銅に亜鉛が含まれているというよりも、ガラスの主成分である鉛の鉱石に亜鉛が含まれている、もしくは溶融時に鉛滓の除去のために添加されたものと考えられる。このようなガラス素地を基に、消泡剤としてアンチモンを、銅を含む着色料を加えて青緑色ガラスを生産していると考えられるが、無色透明ガラスと青緑色ガラスは、酸化カリウム含有量に差異が認められることから、本資料群が同じガラス素地から生産されたとはいえない。それに対して 17 土壙の酸化カリウムと酸化鉛の組成は、66 土壙よりもまとまりを持つため、同じガラス素地から無色透明ガラスと緑色ガラスが製作された可能性も考えられる。

95 土壙の青緑色ガラスは、66 土壙の青緑色ガラスを化学組成の特徴が類似している。この 95 土壙は、66 土壙の下部から検出された土壙である。そのため 66 土壙の遺物が混入した可能性も指摘されており、それと矛盾しない結果となった。

今回の分析結果から、千提寺西遺跡 5 区出土のガラス玉（蜜柑玉・ガラスコンタ）はアンチモンを顕著に検出するカリウム鉛ガラスであることがわかった。化学組成の特徴は、亜鉛、アンチモンを検出する点などから、17 土壙よりも 66 土壙の特徴により近いといえる。また千提寺市阪遺跡 2 区出土資料はカリウム鉛ガラスであり、遺構および色調の違いにより化学組成の特徴が異なっていることがわかった。これが工房（製作地）の違いを示すのか、時期差を示すのかは現状では不明であるため、今後、当該時期のガラス資料の分析事例が増加した段階で再度検討を行っ

ていく必要があると考えている。18 世紀中頃に比定される 17 土壙のガラス小玉には、亜鉛が含まれていないことから、少なくとも亜鉛を含まない無色透明および緑色のカリウム鉛ガラス製のガラス玉が 18 世紀中頃には流通していたといえる。これらの化学組成などから、近世のガラスの特徴を明らかにする一助になれば幸いである。

〈参考文献〉

新免歳靖・豊田亜希子・川口洋平・齋藤努 2011「長崎万才町遺跡出土のガラス製品の自然科学的分析」『総研大文化科学研究』第 7 号、pp.47-58

棚橋淳二 1974「鉛丹ガラスと金属鉛ガラス（Ⅰ）」『研究紀要 16』松蔭女子学院大学、pp.1-75

棚橋淳二 1983「江戸時代におけるガラス技術の変遷と伝播」『研究紀要 25』松蔭女子学院大学、pp.59-94

（公財）大阪府文化財センター 2014『シンポジウム「発掘！検証！キリシタン墓―高山右近とキリシタン」』

表 12　分析資料の化学組織　（wt％、tr；微少量、nd；検出限界以下）Sn と Sb は高圧測定

No.	掲載No.	遺跡	遺構	色調	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	Fe_2O_3	CuO	ZnO	PbO	Sb
1	203	千提寺西遺跡5区	87土壙	青緑	0.50	0.08	1.9	55.4	8.7	0.55	1.1	1.5	0.11	30.2	◎
2	640	千提寺市阪遺跡2区	95土壙	青緑	0.67	0.08	1.0	50.2	8.5	0.41	0.30	1.5	0.17	37.2	○
3	641	千提寺市阪遺跡2区	95土壙	青緑	0.38	0.10	1.0	46.2	10.4	0.40	0.31	1.6	0.19	39.5	○
4	432	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.50	0.11	1.3	49.0	8.4	0.41	0.48	1.2	nd	38.6	nd
5	433	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.49	0.13	1.0	46.3	8.9	0.41	0.48	1.3	nd	41.0	nd
6	434	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.55	0.12	0.86	44.7	8.7	0.44	0.49	1.3	nd	42.9	nd
7	435	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.31	0.10	1.1	43.9	8.7	0.39	0.51	1.4	0.05	43.7	nd
8	436	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.72	0.09	0.94	44.3	9.1	0.46	0.50	1.3	nd	42.4	nd
9	437	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.69	0.16	0.89	44.6	9.2	0.47	0.50	1.3	nd	42.1	nd
10	438	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.70	0.13	0.90	44.4	9.1	0.47	0.50	1.4	0.05	42.5	nd
11	439	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.60	0.13	1.1	45.5	8.9	0.45	0.51	1.3	nd	41.5	nd
12	440	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.46	0.13	1.2	50.6	8.3	0.48	0.47	1.2	nd	37.0	nd
13	441	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.74	0.16	1.0	46.0	8.9	0.39	0.49	1.3	nd	41.0	nd
14	442	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.51	0.16	1.4	46.1	9.4	0.42	0.53	1.4	nd	40.1	nd
15	443	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.67	0.12	0.89	45.2	8.7	0.41	0.50	1.4	nd	42.1	nd
16	444	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.55	0.11	2.2	50.3	8.7	0.42	0.66	1.2	nd	35.9	nd
17	445	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.63	0.11	1.3	44.3	8.4	0.62	0.63	1.5	nd	42.7	nd
18	446	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.42	0.09	1.0	45.1	8.8	0.46	0.50	1.3	nd	42.3	nd
19	447	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.89	0.15	0.93	46.1	8.3	0.43	0.48	1.3	nd	41.4	nd
20	448	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.43	0.11	1.0	46.2	8.8	0.44	0.49	1.3	nd	41.2	nd
21	449	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.55	0.10	1.0	45.9	9.2	0.42	0.52	1.4	nd	41.0	nd
22	450	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.52	0.07	1.0	48.2	8.3	0.44	0.50	1.3	nd	39.6	nd
23	451	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.64	0.11	1.0	46.1	8.8	0.43	0.52	1.4	nd	41.1	nd
24	452	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.48	0.08	0.94	44.1	9.2	0.44	0.50	1.4	nd	42.8	nd
25	453	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.63	0.14	0.93	44.5	9.2	0.44	0.50	1.3	nd	42.3	nd
26	454	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.64	0.12	1.0	44.3	8.9	0.41	0.49	1.3	0.05	42.8	nd
27	455	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.81	0.16	0.91	44.4	8.8	0.41	0.49	1.3	nd	42.7	nd
28	456	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.53	0.09	0.94	44.5	9.5	0.45	0.51	1.4	nd	42.0	nd
29	457	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.50	0.10	0.92	44.7	9.2	0.45	0.50	1.4	nd	42.3	nd
30	458	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.44	0.09	1.2	47.9	8.6	0.43	0.49	1.3	nd	39.3	nd
31	459	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.49	0.11	1.0	46.9	9.0	0.41	0.50	1.3	nd	40.3	nd
32	460	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.49	0.13	0.99	45.4	9.1	0.40	0.51	1.4	nd	41.6	nd
33	461	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.51	0.10	1.0	46.2	9.0	0.42	0.52	1.4	nd	40.8	nd
34	462	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.60	0.11	0.94	45.3	9.1	0.43	0.52	1.4	nd	41.6	nd
35	463	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.66	0.14	0.98	45.0	9.0	0.41	0.52	1.4	nd	41.9	nd
36	464	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.43	0.05	1.0	44.6	9.5	0.46	0.53	1.4	nd	42.0	nd
37	465	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.68	0.11	0.95	45.3	9.0	0.43	0.50	1.3	nd	41.7	nd
38	466	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.71	0.09	1.0	46.9	8.6	0.41	0.48	1.3	nd	40.4	nd

No.	掲載No.	遺跡	遺構	色調	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	Fe_2O_3	CuO	ZnO	PbO	Sb
39	367	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.46	0.13	0.97	44.4	9.3	0.46	0.52	1.4	nd	42.4	nd
40	468	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.62	0.11	0.93	46.4	9.6	0.43	0.52	1.4	nd	40.0	nd
41	469	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.55	0.09	0.95	45.1	9.0	0.41	0.50	1.3	nd	42.0	nd
42	470	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.68	0.15	1.1	47.8	8.5	0.43	0.51	1.3	nd	39.6	nd
43	471	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.48	0.12	0.95	45.5	8.9	0.45	0.52	1.4	nd	41.6	nd
44	472	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	緑	0.69	0.09	1.1	45.0	9.1	0.46	0.53	1.4	nd	41.6	nd
45	473	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.36	0.11	0.84	48.9	9.5	0.15	0.13	0.08	nd	39.9	nd
46	474	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.33	0.09	0.75	49.6	9.2	0.08	0.13	0.07	nd	39.7	nd
47	475	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.40	0.09	0.84	52.1	7.2	0.06	0.13	0.07	nd	39.2	nd
48	476	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.53	0.10	0.75	46.3	9.0	0.2	0.14	0.07	nd	43.0	nd
49	477	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.43	0.09	0.86	47.9	8.1	0.04	0.10	0.06	nd	42.4	nd
50	478	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.42	0.10	0.80	47.4	8.8	0.13	0.10	0.06	nd	42.3	nd
51	479	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.35	0.07	0.78	46.7	8.6	0.05	0.10	0.07	nd	43.2	nd
52	480	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.55	0.08	0.81	47.8	7.7	tr	0.10	0.07	nd	42.9	nd
53	481	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.39	0.08	0.81	48.1	8.5	tr	0.11	0.06	nd	41.9	nd
54	482	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.44	0.09	0.91	50.1	7.6	tr	0.09	0.06	nd	40.7	nd
55	483	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.78	0.13	0.75	46.6	8.2	tr	0.10	0.06	nd	43.2	nd
56	484	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.33	0.08	0.74	47.4	8.9	tr	0.10	0.06	nd	42.4	nd
57	485	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.53	0.11	0.77	46.0	9.4	0.19	0.09	0.06	nd	42.8	nd
58	486	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.38	0.08	0.70	46.4	8.9	tr	0.10	0.07	nd	43.3	nd
59	487	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.29	0.11	0.68	47.1	8.7	0.05	0.10	0.06	nd	42.9	nd
60	488	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.54	0.14	0.82	47.6	8.5	0.19	0.11	0.06	nd	42.0	nd
61	489	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.39	0.09	0.70	46.2	8.7	tr	0.10	0.07	nd	43.7	nd
62	490	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.46	0.11	0.74	45.4	8.6	tr	0.10	0.06	nd	44.4	nd
63	491	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.48	0.09	0.73	47.0	8.7	tr	0.10	0.07	nd	42.8	nd
64	492	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.49	0.12	0.76	47.3	9.2	tr	0.10	0.06	nd	41.9	nd
65	493	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.54	0.10	0.78	47.3	8.4	tr	0.10	0.06	nd	42.7	nd
66	494	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.43	0.11	0.79	47.3	8.9	tr	0.10	0.06	nd	42.5	nd
67	495	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.52	0.10	0.78	46.5	8.9	tr	0.10	0.06	nd	42.9	nd
68	496	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.44	0.10	0.78	46.6	9.1	tr	0.10	0.06	nd	42.8	nd
69	497	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.52	0.09	0.79	46.1	10.0	tr	0.10	0.07	nd	42.3	nd
70	498	千提寺市阪遺跡2区	17土壙	白	0.46	0.07	0.79	46.4	9.1	0.05	0.10	0.06	nd	42.9	nd
71		千提寺市阪遺跡2区	17or66土壙	白	0.49	0.09	0.78	46.3	6.3	0.06	0.11	0.10	nd	45.7	nd
72	592	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.51	0.12	0.92	47.1	8.6	0.65	0.09	tr	0.23	41.8	nd
73	593	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.51	0.13	0.88	45.6	8.1	0.67	0.10	tr	0.23	43.8	nd
74	594	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.53	0.10	0.85	45.3	7.9	0.67	0.09	tr	0.22	44.3	nd
75	595	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.51	0.10	0.77	44.1	8.1	0.63	0.09	tr	0.23	45.5	nd
76	596	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.41	0.08	0.81	44.6	8.7	0.68	0.09	tr	0.23	44.4	nd
77	597	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.36	0.09	0.82	43.6	8.3	0.82	0.10	tr	0.23	45.7	nd
78	598	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.50	0.10	0.83	45.3	8.4	0.67	0.09	tr	0.22	43.9	nd
79	599	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.55	0.15	0.82	45.2	8.3	0.77	0.10	tr	0.22	44.0	nd
80	600	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.43	0.11	0.76	46.7	7.9	0.67	0.09	tr	0.21	43.1	nd
81	601	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.63	0.15	0.79	46.0	8.3	0.67	0.09	tr	0.22	43.1	nd
82	602	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.45	0.10	0.82	47.8	8.4	0.66	0.08	tr	0.22	41.4	nd
83	603	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.54	0.12	0.75	45.1	8.5	0.67	0.09	tr	0.22	44.0	nd
84	604	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.38	0.09	0.9	51.5	7.2	0.60	0.08	tr	0.20	39.1	nd
85	605	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.45	0.12	0.91	47.4	8.0	0.57	0.08	tr	0.22	42.2	nd
86	606	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.36	0.09	0.91	48.1	7.9	0.62	0.08	tr	0.22	41.6	nd
87	607	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.61	0.09	0.89	46.6	8.4	0.63	0.09	tr	0.22	42.5	nd
88	608	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.56	0.09	0.94	48.5	7.6	0.65	0.09	tr	0.21	41.4	nd
89	609	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.50	0.10	0.90	47.1	8.3	0.61	0.09	tr	0.22	42.1	nd
90	610	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.57	0.13	0.81	45.0	8.5	0.74	0.09	tr	0.23	43.9	nd
91	611	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.64	0.10	0.86	45.0	8.0	0.62	0.08	tr	0.23	44.4	nd
92	612	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.39	0.07	0.72	44.0	6.4	tr	0.10	tr	0.15	48.1	nd
93	613	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.46	0.10	0.82	45.4	8.1	0.59	0.08	tr	0.23	44.2	nd
94	614	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.47	0.08	0.82	45.3	7.8	0.59	0.09	tr	0.22	44.5	nd
95	615	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.49	0.14	0.89	44.7	8.0	0.67	0.09	tr	0.22	44.8	nd
96	616	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.63	0.09	0.87	45.5	7.8	0.61	0.09	tr	0.22	44.2	nd

No.	掲載No.	遺跡	遺構	色調	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	Fe_2O_3	CuO	ZnO	PbO	Sb
97	617	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.58	0.12	0.92	46.7	8.1	0.73	0.09	tr	0.22	42.5	nd
98	618	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.38	0.11	1.2	48.9	7.7	0.62	0.08	tr	0.22	40.8	nd
99	619	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.51	0.10	0.83	45.6	8.2	0.60	0.09	tr	0.22	43.9	nd
100	620	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.58	0.09	0.86	45.7	8.0	0.57	0.09	tr	0.22	43.9	nd
101	621	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.45	0.12	0.84	46.1	8.1	0.61	0.09	tr	0.22	43.5	nd
102	622	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.45	0.10	0.87	45.4	7.9	0.62	0.09	tr	0.22	44.3	nd
103	263	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.59	0.14	0.79	44.1	8.3	0.63	0.09	tr	0.22	45.0	nd
104	624	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.50	0.11	0.83	46.3	8.0	0.62	0.08	tr	0.22	43.3	nd
105	625	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.60	0.19	0.83	46.4	7.9	0.60	0.09	tr	0.21	43.2	nd
106	626	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.43	0.11	0.83	45.3	8.8	0.68	0.10	tr	0.23	43.5	nd
107	627	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.50	0.17	0.92	47.5	8.4	0.64	0.09	tr	0.21	41.6	nd
108	628	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.44	0.14	0.79	45.9	8.3	0.65	0.29	tr	0.22	43.4	nd
109	629	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	白	0.43	0.13	0.85	45.2	8.1	0.64	0.09	tr	0.22	44.3	nd
110	531	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.53	0.11	1.0	43.1	10.8	0.39	0.32	1.7	0.19	41.8	○
111	532	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.64	0.15	1.1	43.9	10.2	0.42	0.31	1.6	0.19	41.5	○
112	533	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.46	0.11	0.93	43.7	10.7	0.40	0.33	1.7	0.19	41.6	tr
113	534	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.57	0.12	1.1	48.9	9.1	0.36	0.29	1.5	0.17	38.0	○
114	535	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.74	0.12	0.96	44.1	10.4	0.38	0.31	1.6	0.19	41.1	○
115	536	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.47	0.11	0.96	44.9	10.2	0.38	0.31	1.6	0.19	40.8	tr
116	537	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.61	0.12	0.91	42.5	10.8	0.35	0.32	1.7	0.20	42.5	tr
117	538	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.56	0.08	0.93	42.6	11.4	0.40	0.33	1.7	0.19	41.8	tr
118	539	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.49	0.10	0.99	44.4	10.6	0.40	0.31	1.6	0.19	40.8	○
119	540	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.47	0.11	1.0	45.0	10.2	0.41	0.31	1.6	0.19	40.7	tr
120	541	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.39	0.10	0.99	45.3	10.4	0.40	0.31	1.6	0.18	40.3	tr
121	542	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.53	0.12	0.90	44.1	9.9	0.40	0.31	1.6	0.19	41.9	tr
122	543	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.47	0.10	0.85	42.2	10.8	0.42	0.32	1.7	0.19	43.1	○
123	544	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.52	0.10	0.85	41.8	11.6	0.45	0.34	1.7	0.20	42.4	tr
124	545	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.56	0.13	0.86	41.5	10.1	0.40	0.31	1.6	0.20	44.3	○
125	546	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.62	0.15	0.92	42.4	10.9	0.42	0.33	1.7	0.19	42.5	○
126	547	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.65	0.12	0.88	43.5	10.8	0.43	0.32	1.6	0.19	41.6	tr
127	548	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.74	0.19	0.89	43.2	10.8	0.42	0.31	1.7	0.19	41.6	○
128	549	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.67	0.09	0.94	44.0	10.6	0.43	0.31	1.6	0.19	41.2	tr
129	550	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.58	0.11	0.92	42.7	10.9	0.43	0.33	1.7	0.19	42.2	○
130	551	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.48	0.09	0.84	42.9	11.3	0.45	0.32	1.7	0.19	41.8	tr
131	552	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.71	0.15	0.93	44.6	10.6	0.39	0.31	1.6	0.18	40.4	tr
132	553	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.57	0.11	0.96	44.3	10.9	0.42	0.33	1.6	0.19	40.6	tr
133	554	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.63	0.13	0.88	42.8	10.6	0.41	0.32	1.6	0.19	42.4	tr
134	555	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.51	0.09	0.93	42.2	11.3	0.44	0.34	1.7	0.20	42.2	tr
135	556	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.53	0.13	0.89	42.5	10.7	0.43	0.32	1.7	0.20	42.6	tr
136	557	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.58	0.11	0.87	42.7	10.2	0.44	0.31	1.6	0.19	43.0	tr
137	558	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.42	0.12	0.91	44.5	10.8	0.44	0.33	1.6	0.18	40.7	tr
138	559	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.63	0.17	0.88	43.5	10.5	0.45	0.32	1.6	0.19	41.8	○
139	560	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.60	0.12	0.91	42.3	10.6	0.45	0.32	1.6	0.20	43.0	tr
140	561	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.56	0.12	1.0	43.3	10.7	0.42	0.32	1.7	0.19	41.7	tr
141	562	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.59	0.09	0.88	42.7	11.2	0.46	0.33	1.7	0.20	41.8	tr
142	563	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.49	0.11	0.95	44.4	11.1	0.44	0.32	1.7	0.19	40.3	tr
143	564	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.48	0.11	0.92	42.8	11.2	0.46	0.32	1.7	0.20	41.8	tr
144	656	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.63	0.13	0.90	43.4	10.7	0.45	0.32	1.7	0.19	41.7	○
145	566	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.53	0.10	0.99	43.5	11.0	0.35	0.32	1.7	0.20	41.3	tr
146	567	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.46	0.08	1.0	42.7	11.1	0.34	0.33	1.7	0.20	42.1	tr
147	568	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.62	0.14	1.0	43.1	10.4	0.32	0.31	1.6	0.20	42.2	tr
148	569	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.50	0.11	0.96	48.5	9.4	0.34	0.29	1.5	0.18	38.2	○
149	570	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.49	0.11	0.90	42.7	11.2	0.35	0.33	1.7	0.20	42.0	○
150	571	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.66	0.12	0.99	43.4	10.9	0.37	0.32	1.6	0.19	41.4	tr
151	572	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.42	0.10	0.98	43.1	11.2	0.38	0.33	1.7	0.20	41.5	tr
152	573	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.49	0.11	0.95	44.4	11.1	0.44	0.32	1.7	0.19	40.3	○
153	574	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.48	0.11	0.92	42.8	11.2	0.46	0.32	1.7	0.20	41.8	○
154	575	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.63	0.13	0.90	43.4	10.7	0.45	0.32	1.7	0.19	41.7	tr

No.	掲載No.	遺跡	遺構	色調	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	Fe_2O_3	CuO	ZnO	PbO	Sb
155	576	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.53	0.10	0.99	43.5	11.0	0.35	0.32	1.7	0.20	41.3	tr
156	577	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.46	0.08	1.0	42.7	11.1	0.34	0.33	1.7	0.20	42.1	tr
157	578	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.62	0.14	1.0	43.1	10.4	0.32	0.31	1.6	0.20	42.2	○
158	579	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.50	0.11	0.96	48.5	9.4	0.34	0.29	1.5	0.18	38.2	tr
159	580	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.49	0.11	0.90	42.7	11.2	0.35	0.33	1.7	0.20	42.0	tr
160	581	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.66	0.12	0.99	43.4	10.9	0.37	0.32	1.6	0.19	41.4	tr
161	582	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.59	0.12	1.1	44.4	11.1	0.35	0.33	1.7	0.19	40.3	tr
162	583	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.39	0.08	0.93	43.7	11.5	0.41	0.32	1.7	0.19	40.7	tr
163	584	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.71	0.08	1.1	42.3	11.0	0.41	0.31	1.7	0.20	42.2	tr
164	585	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.46	0.11	0.92	44.2	10.7	0.40	0.32	1.6	0.19	41.1	○
165	586	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.73	0.13	1.1	43.7	9.3	0.44	0.32	1.6	0.19	42.7	tr
166	587	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.51	0.10	0.88	42.7	10.7	0.39	0.32	1.7	0.20	42.5	○
167	588	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.61	0.09	1.8	52.8	7.5	0.5	0.30	1.4	0.16	34.9	tr
168	589	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.60	0.09	0.90	42.7	11.1	0.40	0.32	1.7	0.20	42.1	tr
169	590	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.65	0.09	0.85	42.2	11.1	0.40	0.33	1.7	0.20	42.5	tr
170	591	千提寺市阪遺跡2区	66土壙	青緑	0.87	0.13	1.4	43.4	10.1	0.49	0.33	1.70	0.20	41.5	tr

（Sb；顕著に検出◎、検出○）

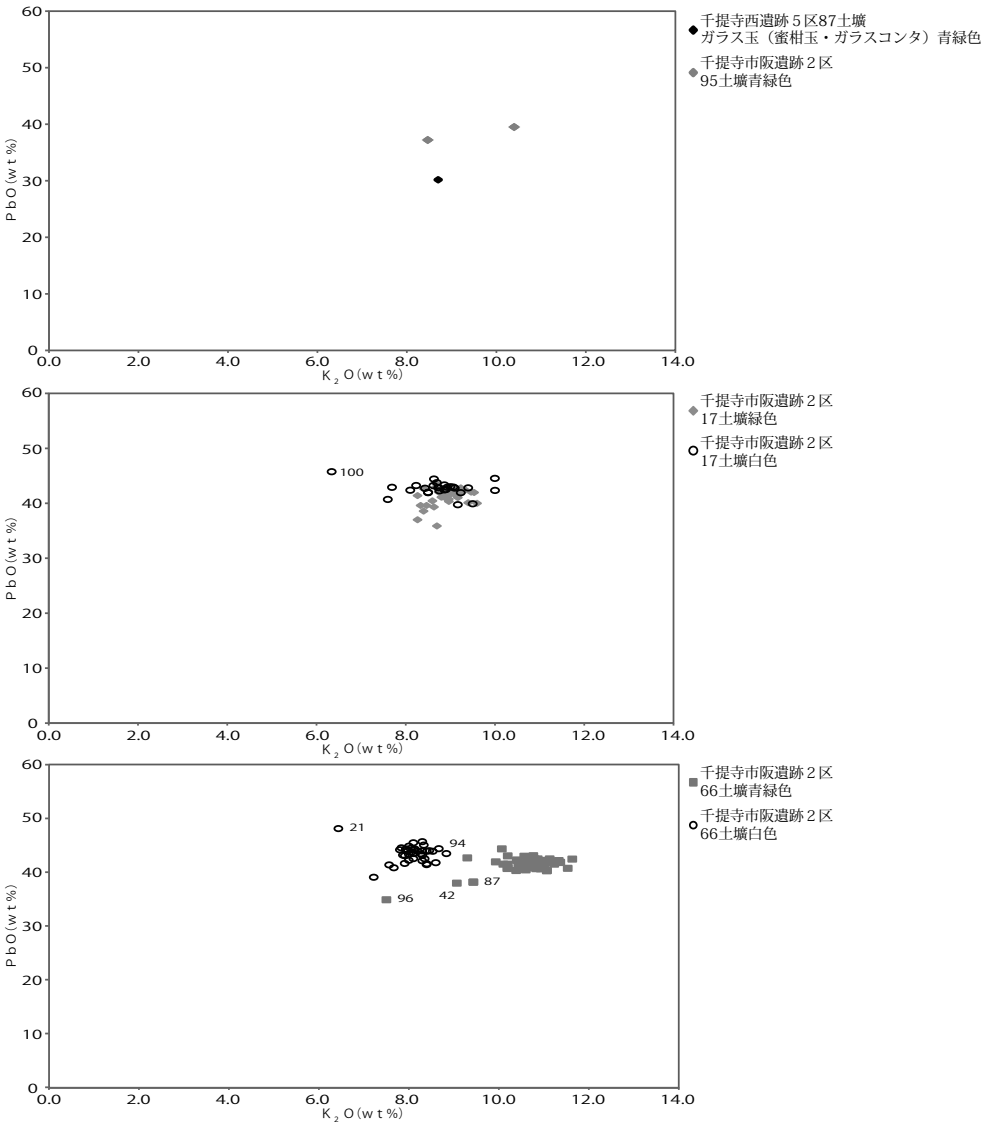


図 115　各遺構から出土した資料の主成分元素の分布

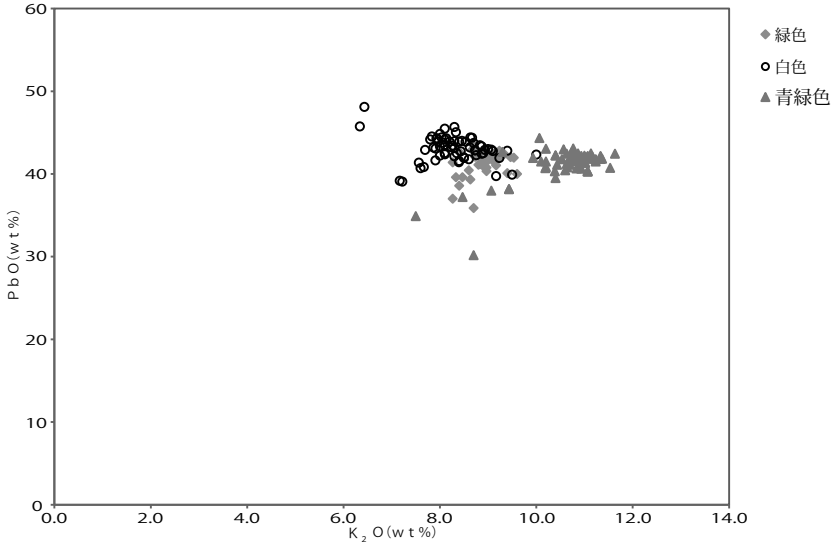


図 116　色調別でみた主成分の分布

表 13　各遺構から出土した色調別の化学組織の平均値　（wt％、tr；微少量、nd；検出限界以下）

	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	Fe_2O_3	CuO	ZnO	PbO	Sb
千提寺西遺跡５区87土壙青緑色	0.50	0.08	1.9	55.4	8.7	0.55	1.1	1.5	0.11	30.2	◎
千提寺市阪遺跡２区17土壙緑色	0.58	0.11	1.0	45.8	8.9	0.44	0.51	1.3	0.05	41.3	nd
千提寺市阪遺跡２区66土壙青緑色	0.56	0.11	0.97	43.7	10.7	0.40	0.32	1.7	0.19	41.4	○
千提寺市阪遺跡２区95土壙青緑色	0.53	0.09	1.0	48.2	9.4	0.41	0.31	1.6	0.18	38.4	○
千提寺市阪遺跡２区17土壙白色	0.45	0.10	0.78	47.3	8.6	0.10	0.11	0.07	nd	42.5	nd
千提寺市阪遺跡２区66土壙白色	0.50	0.11	0.85	46.0	8.1	0.65	0.09	nd	0.22	43.4	nd

（Sb；顕著に検出◎、検出○）

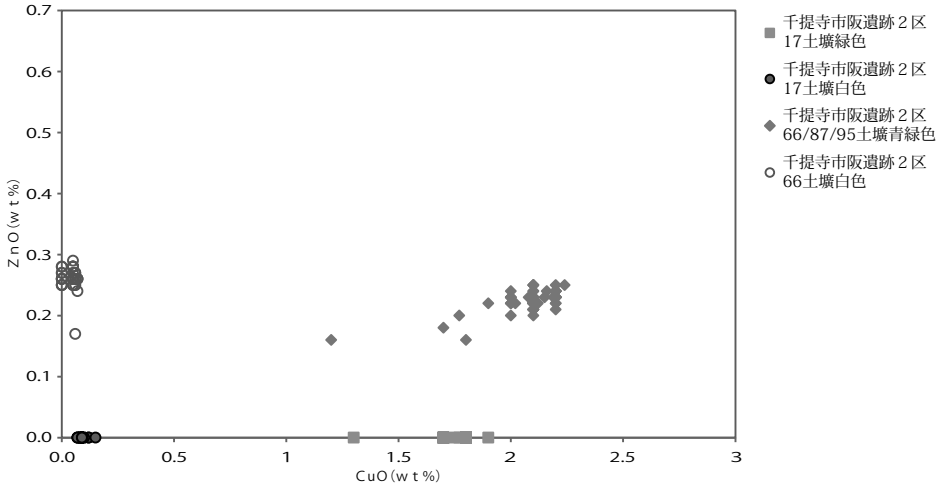


図 117　遺構および色調でみた亜鉛含有量の有無

第５節　千提寺地区出土の人骨

大阪市立大学大学院医学研究科　安部　みき子
聖マリアンナ医科大学医学部　　長岡　朋人

（１）はじめに

大阪府茨木市に位置する千提寺地区の発掘調査では、キリシタン墓を含む中世～近世墓（一部近代）が検出され、多数の人骨が出土した。

人骨が出土した調査区は千提寺西遺跡３・４区 (以後　３区)、千提寺西遺跡５区 (以後　５区)、千提寺西遺跡６区 (以後　６区)、千提寺市阪遺跡２区 (以後　市阪)、千提寺クルス山遺跡１区 (以後　クルス山) で、５区と６区の人骨の遺存状態は良かったが、クルス山の人骨は保存状態が悪かった。各調査区は、それぞれ歴史的背景が明確であり、資料的価値も高い。

（２）方法

人骨の死亡年齢の推定は、未成年では歯の形成と萌出（Moorrees et al., 1963a, 1963b; Ubelaker, 1989）、四肢骨骨体長（Scheuer and Black, 2000）、骨端の軟骨内骨化や頭蓋・鎖骨の膜内骨化（Brothwell, 1981; Krogman and Iscan, 1986）、成人では腸骨耳状面（Lovejoy et al., 1985; Buckberry and Chamberlain, 2002）、恥骨結合面（Todd 1920, 1921; Brooks and Suchey, 1990）の加齢変化に基づく。頭蓋のみの年齢推定は頭蓋縫合（Krogman and Iscan, 1986）と歯の咬耗（Lovejoy, 1985）を手がかりにしたが，精度が高い推定法ではない。

性別判定は Phenice (1973) と Bruzek (2002) の方法に従った。Phenice (1973) の方法は，腹側弧，恥骨下陥凹，恥骨下枝内側面隆起の３つの特徴に基づく性別判定法であり、Bruzek (2002) の方法は，骨盤の前腸骨耳状面，大坐骨切痕，大坐骨切痕弧，寛骨下端，坐骨恥骨示数の５つの特徴に基づくものである。骨盤が残らない資料に対しては，頭蓋の項稜，乳様突起，眼窩上縁，眉上隆起，オトガイ隆起の発達を性別判定の手がかりとした（Walker, 2008）。

身長の推定は性の判定ができた個体のみを用いた。身長の推定にはマルチン式計測法 (Martin and Knussmann, 1988) より、上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨の各長骨の最大長を計測し、藤井の推定式 (藤井，1960）を用いた。左右が計測できた長骨は平均を算出しその長骨の推定値とした。また、複数個所計測できた個体については上肢と下肢の推定値の平均を算出した。

本遺跡人骨の肉眼観察項目として、歯と骨格の病変について行った。歯は萌出の状況や喪失歯の観察、歯槽の状況や齲歯の有無を観察した。骨格については主に椎骨の椎体および関節面にできる骨棘や、四肢における関節の変形を観察した。

（３）結果

本遺跡の出土人骨は３区 22 体、５区 40 体、６区 40 体、市阪 32 体、クルス山 24 体である。３区の人骨は焼骨で骨の観察ができる部位がみられないため、出土したことの記録にとどめた。

性の判定と年齢の推定の結果

性と年齢の推定を、５区 40 体、６区 40 体、市阪 31 体、クルス山 24 体について行った（図 118）。

５区は全身骨格が出土している個体が最も多い。性の判定の結果、男性 17 体、女性 13 体、不明 10 体であった。性の判定ができなかった個体には５体の幼児と１体の週産期と推定される乳

児が含まれる。年齢の分布は、10 才以下の乳幼児 6 体、20 ～ 40 才の男性 6 体、女性 4 体、40 ～ 60 才が男女とも 3 体、60 才以上の男性 3 体、女性 2 体である。成人は男性 5 体、女性 4 体と性差はほぼなかった。性の判定、年齢の推定ができなかった個体は 2 体である。

6 区は、性の判定ができた個体が男性 9 体、女性 8 体、不明 23 体と 5 区より判定ができない個体が多い。5 区同様、不明のなかには幼児骨が 7 体含まれ、5 区とほぼ同数である。年齢の分布は、周産期の乳児 1 体、10 才以下の幼児 6 体であり、5 区ではみられなかった 15 ～ 20 才の男性 3 体と女性 1 体が出土している。20 才～ 60 才では男女の差があまりみられないが、60 才以上では女性のみ 2 体出土している。成人では性の判定ができない個体が 8 体あった。

市阪は、性の判定ができた個体が男性 4 体、女性 6 体、不明 21 体であり、幼児 1 体を含む。年齢の分布は 10 才以下の幼児 1 体、男性は 40 ～ 60 才が 3 体と成人が 1 体のみで、女性は 20 ～ 40 才が 2 体と 60 才以上の高齢個体が 1 体、成人が 3 体である。成人で性の判定ができない個体は 3 体あった。

クルス山から出土した人骨は 24 体で、遺存状態は悪い。また、火葬骨も多数混在する。出土人骨中、性の判定ができた個体は男性 1 体、女性 3 体の計 4 体である。年齢は成人の男性 1 体と女性 3 体、性別が判定できなかった成人が 3 体である。

身長の推定の結果

身長の推定ができた個体は 5 区の男性 12 体、女性 6 体、6 区の男性 2 体、女性 1 体、市阪の男女各 1 体である。最も多く推定できた部位は左脛骨の 21 で、最も少ない部位は左上腕骨の 1 であり、上肢骨より下肢骨の方が保存状態が良いことを反映している。各個体の推定値において、左右差はいずれの長骨も 1 ㎝以内であり、有意差はないが、上肢骨と下肢骨の平均値を比較すると最大で約 3cm の差がみられ、身長との相関が高い下肢骨の推定値を本遺跡人骨の推定身長とした（表 14)。

5 区は最も多く推定できた地区で、下肢骨の平均値は男性 154.9cm、女性 149.8cm で、推定値の幅は男性で約 10cm、女性で約 8cm である。男女間の平均値の差は約 5cm であり、男性の最小値は女性の平均値よりはやや高いものの女性の最高値より約 4cm 低い。

6 区は男性 3 体の計測ができ、平均値は 150.7cm で 5 区の男性の最小個体とほぼ同じ値であり、5 区の女性の平均値とほぼ同じ値である。女性は 1 体のみで、5 区の最小個体とほぼ同じである。

市阪の男性は 1 体のみで上肢骨が 163.7cm、下肢骨が 162.0cm であり、本遺跡の男性のなかで最も高い。女性は 2 体計測でき、推定値は 146.4cm と 146.5cm である。

大腿骨最大長を用いた推定身長を江戸時代の関東人男性（平本 1972）と比較すると、本遺跡人骨の平均値は 152.7cm で関東人の 157.1cm より約 4cm 低い。一方、本遺跡の女性の平均値は 151.5cm で、関東人女性（平本 1972）の 145.6cm より約 6cm 高身長である。今回の結果は市阪と 6 区の資料数が少ないため、今後の検討が必要である。

歯の観察結果

歯の観察は 5 区、6 区、市阪の成人 52 体について行った。歯槽の破損が大きい個体が多く、観察ができた個体は 47％であり、うち齲歯の観察ができた個体は男性が 26％、女性が 40％である。齲歯がみられなかった人骨は男性では 5 区と 6 区の各 1 体、女性は 5 区の 3 体のみである。

上顎骨または下顎骨のいずれかに 10 本以上の歯が釘植している個体、上・下顎骨のいずれも

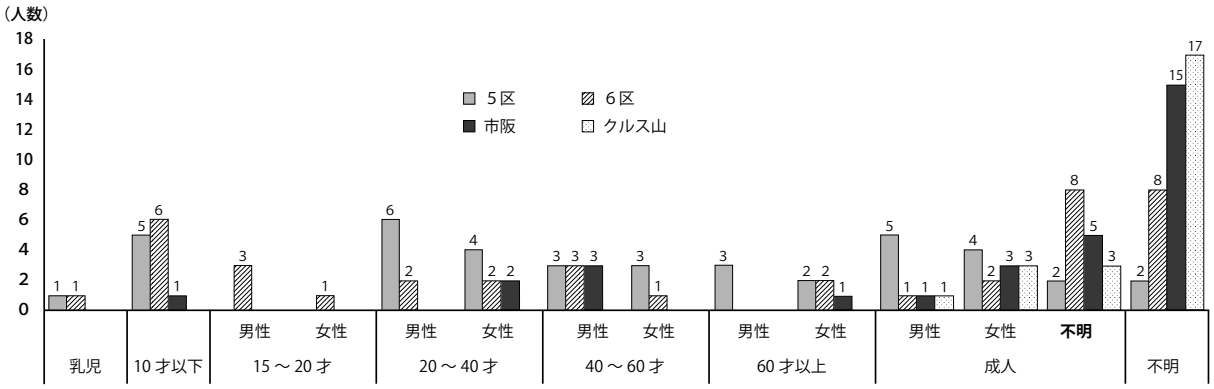


図 118　千提寺遺跡における年齢構成

表 14　長骨最大長から推定した身長

調査区	性別	遺構No	上腕骨 右	上腕骨 左	橈骨 右	橈骨 左	大腿骨 右	大腿骨 左	脛骨 右	脛骨 左	上・下肢骨の平均値 上肢	上・下肢骨の平均値 下肢
5 区	男性	32	151.7								151.7	
		44	158.6						160.9	160.1	158.6	160.5
		45	150.1	150.0	150.6		151.2	150.1	152.7	152.8	150.2	151.7
		46								153.2		153.2
		62								154.9		154.9
		63							150.9	149.9		150.4
		64	156.6						159.0	158.1	156.6	158.6
		68								157.2		157.2
		72	153.8				150.9		150.4	150.7	153.8	150.7
		87	156.6		154.4		155.8	155.7	155.5	156.1	155.5	155.8
		93								159.3		159.3
		65				152.7		152.6	150.7	150.2	152.7	151.2
		平均値	154.6	150.0	152.5	152.7	152.6	152.8	154.3	154.8	154.2	154.9
	女性	52								150.6		150.6
		33					152.7	155.5	148.9	149.1		151.6
		43						149.0		148.6		148.8
		48								146.1		146.1
		51							147.4			147.4
		67							153.8	154.6		154.2
		平均値					152.7	152.2	150.0	149.8		149.8
6 区	男性	15	149.5			150.1		148.6	146.6	147.7	149.8	147.6
		19(下部)				153.6		156.5	153.7	154.4	153.6	154.9
		26(下部)							149.6			149.6
		平均値				151.8		152.5	150.0	151.0	151.7	150.7
	女性	25								146.3		146.3
市阪	男性	32	162.6		164.9				161.6	162.4	163.7	162.0
	女性	61						146.4	146.4			146.4
		66			146.5						146.5	

単位はcm

下肢骨から推定した身長

		n	mean	min.	max.
男性	5 区	11	154.9	150.4	160.5
	6 区	3	150.7	147.6	154.9
	市阪	1	162.0		
	平均値	15	155.8		
女性	5 区	6	149.8	146.1	154.2
	6 区	1	146.3		
	市阪	1	146.4		
	平均値	8	147.5		

単位はcm

表 15　変形性脊椎関節症と肘関節症の病変の割合

	男性 市阪	男性 5区	男性 6区	女性 市阪	女性 5区	女性 6区
個体数	4	17	9	6	13	8
変形性脊椎関節症		1	4			2
黄色靭帯骨化症	1			1	2	
変形性脊椎関節症＋黄色靭帯骨化症		1			1	1
変形性脊椎関節症＋黄色靭帯骨化症+圧迫骨折		1		1		
変形性肘関節症	1	2				
変形性脊椎関節症+変形性肘関節症		2	2			
変形性脊椎関節症+変形性顎関節症、その他		1		1		
	50%	47%	66.7%	50%	23%	37.5%

10 本以下の個体、どちらかの顎骨の歯が生前に全て脱落し歯槽が閉鎖または吸収され始めている個体のグループに分類した。その結果、男性では 10 本以上ある個体が市阪ではみられず、5 区 5 体、6 区 3 体で全体の 30％を占め、女性では市阪 5 体、5 区 6 体、6 区 2 体で 52％と男女差が大きく、10 本以下の場合でも男性が 26％、女性が 8％と男女差がみられた。しかし、歯が全て脱落している割合は男性で 44％、女性で 40％と性差はなかった。歯が全て脱落している最も若い個体は 40 才前後であり、40 才を超えると男女ともに全て脱落する個体が多くなる。男性は早期より歯を喪失する傾向にあり、女性は老年期になると短期間で歯を失う傾向を示す。

骨病変の観察結果

骨病変が観察できた個体は、男性は 5 区 17 体、6 区 9 体、市阪 4 体、女性は 5 区 13 体、6 区 8 体、市阪 6 体である。本遺跡の人骨の病変は椎骨に最も多く認められる。椎骨において椎間板と椎間関節の退行変性が原因で起こる変形性脊椎症が全体の 30％を占め、最も若い個体は 18 才前後の男性である。椎骨の病変で黄色靭帯骨化症も 16％みられる。変形性脊椎症の高頻発部位は腰椎で、次いで頚椎であり、黄色靭帯骨化症は胸椎の出現頻度が高い。肘関節も関節面周縁に骨棘が現れる肘関節症が男性に限りみられ、男性の約 23％の出現頻度である。また、変形性脊椎症は黄色靭帯骨化症や変形性肘関節症などの疾患と合併している個体が多数みられる（表 15）。出現頻度は低いが、顎関節症と大腿骨の骨膜炎と推察される病変が各 1 体みられる。

5 区は男性 17 体中 8 体 (47％) に病変があり、変形性脊椎症は 6 体にみられる。変形性脊椎症のみの個体は 1 体のみで、他の個体は黄色靭帯骨化症や変形性肘関節症と合併している。変形性肘関節症は 4 体あり、うち 2 体は変形性脊椎症との合併症で、残り 2 体は合併していない。女性で病変がみられる個体は 13 体中 3 体 (23％) で、病変の出現率は男女間で約 2 倍の差がある。病変はいずれも変形性脊椎症と黄色靭帯骨化症の合併症であり、うち 1 体に圧迫骨折が認められる。

6 区の男性は 9 体中 6 体 (67％) に病変が認められ、いずれも変形性脊椎症である。その中の 2 体は変形性肘関節症を伴う。女性は 8 体中 3 体 (38％) に認められ、男性と比較して女性の方が罹患率は低い。病変はいずれも変形性脊椎症で、うち 1 体は黄色靭帯骨化症もみられる。その他、10 才前後と年齢推定される幼児の側頭骨に外耳道骨腫を疑う病変がある。また、6 才未満と推定される幼児の前頭骨に 2 箇所、腸骨に 1 箇所刀痕と思われる痕跡を認めた。

市阪では男女ともに骨病変の出現率が 50％と高いが、変形性脊椎症は黄色靭帯骨化症と圧迫骨折を合併している女性 1 体のみである。男性では変形性肘関節症が 1 体ある。

（4）考察

本遺跡の出土人骨は、今まで報告が少なかった畿内における江戸時代の山村の庶民を代表する資料である。出土人骨の性比に大きな差はなく、また、周産期の乳児骨や 10 才以下の幼児骨から 60 才以上と推定された人骨が同一墓域から出土していることは、「子墓」を形成しない埋葬様式であったと考えられる。

身体的な特徴として、男女ともに生前における喪失歯の多いことと、男性における低身長と脊柱に関する病変の出現が高頻度であることが挙げられる。生前に全ての歯を喪失する過程が男女で異なる傾向にあることは、男性の生業と関係する可能性がある。すべての歯を喪失し始める年齢が 40 才前後であることは、加齢だけが原因ではなく歯の衛生環境が悪かったとも考えられる。

男性の低身長化傾向は 5 区と 6 区に顕著に表れているが、市阪の男性は 1 例ではあるが江戸時

代の関東人より高い。一方､5 区と 6 区の女性の平均は江戸時代人の関東人よりやや高身長であり、市阪の女性は平均的である。5 区と 6 区は調査区ごとにそれぞれが同一家系の墓として独立しており、近世は男系社会であったことより、各家系の特徴が遺伝的に男性に世襲された可能性も考えられる。しかし、比較するこの地域の資料がすくないため、さらに今後の検討が必要である。

一般的に変形性脊椎症は加齢が原因の場合が多いが、若年からの重労働や職業によることも指摘され、職業病としては農夫症や漁夫症などが挙げられる。今回 5 区と 6 区の成人男性には変形性脊椎症が高頻度に現れ、重症の個体が多い。肘関節においても重症の変形性肘関節症を発症している個体がみられ、肘が十分に伸展できなかったと推察される。変形性肘関節症は、加齢によるものとスポーツや大工仕事などで過度の肘を使うことが原因とされている。今回みられた変形性肘関節症は男性のみにみられ、重症であることより、職業的要素が大きいと考えられる。この地域の環境や生活調査をした（財）大阪府文化財調査研究センター（1991）は、山間部であることを利用した酒米作りが主な産業であり、さらに、墓石や灯篭のような石材を産出していたと報告する。前述した重篤な変形性脊椎症や肘関節症は男性のみにみられ、女性には全くみられないことより、この地域の生業の影響が大きいと考えられる。

今回の報告は、近世の山間部の人たちの生活を解明する手掛かりとなるであろう。

謝辞

本報告をするにあたり、長骨の計測を行い身長を推定することと骨病変の観察を行っていただいた大阪市立大学医学部医学科の岡村千鶴氏、米田瑛氏に深謝の意を表します。

< 参考文献 >

馬場悠男 1991 人類学講座 , 別巻 1,173-336, 雄山閣出版株式会社，東京.
Brothwell, D. R. 1981 Digging up bones. pp.59-75. Cornel University Press, Ithaca.
Bruzek, J. 2002 A method for visual determination of sex using the human hip bone. American Journal of Physical Anthropology 117, 157-168.
Buckberry, J.L. and A.T. Chamberlain 2002 Age estimation from the auricular surface of the ilium: A revised method. American Journal of Physical Anthropology 119, 231-239.
藤井明　1960　四肢長骨の長さと身長の関係について．順天堂大学体育学部紀要，3: 49–61.
平本嘉助 1972 縄文時代から近代に至る関東地方人身長の時代的変化．人類学雑誌，80: 221–236.
Krogman, W.M. and M.Y. Iscan 1986 The Human Skeleton in Forensic Medicine. pp. 103-132. C.C. Thomas, Springfield.
Lovejoy, C.O. 1985 Dental wear in the Libben population: its functional pattern and role in the determination of adult skeletal age at death. American Journal of Physical Anthropology 68, 47–56.
Lovejoy, C.O., R.S. Meindl, T.R. Pryzbeck, and R.P. Mensforth 1985 Chronological metamorphosis of the auricular surface of the illium: A new method of determining adult age at death. American Journal of Physical Anthropology 68, 15-28.
Martin, R. and R. Knussmann 1988 Anthropologie. Band 1. Stuttgart: Gustav Fischer.
Moorrees, C.F., E.A. Fanning, and E.E. Jr. Hunt 1963a Age variation of formation stages for ten permanent teeth. Journal of Dental Research 42, 1490-1502.
Moorrees, C.F., E.A. Fanning, and E.E. Jr. Hunt 1963b Formation and resorption of three deciduous teeth in children. American Journal of Physical Anthropology 21, 205-213.
（財）大阪府文化財調査研究センター ,(1999), 彩都 (国際文化公園都市) 周辺地域の歴史・文化総合調査報告書 ,494-495
Scheuer, L. and S. Black 2000 Developmental juvenile osteology. Academic Press, New York.
Todd, T.W. 1920 Age changes in the pubic bone: I. The white male pubis. American Journal of Physical Anthropology 3, 285-334.
Todd, T.W. 1921 Age changes in the pubic bone: II, the pubis of the male Negro-White hybrid; III, the pubis of the White female; IV, the pubis of the female Negro-White hybrid. American Journal of Physical Anthropology 4, 1-70.
Ubelaker, D.H. 1989 Human Skeletal Remains. Excavation, Analysis, Interpretation, 2nd edition. Chicago, Aldine.
Walker, P.L. 2008 Sexing Skulls Using Discriminant Function Analysis of Visually Assessed Traits. American Journal of Physical Anthropology 136, 39–50.

第５章　総括

第１節　調査の成果

千提寺西遺跡、日奈戸遺跡、千提寺市阪遺跡、千提寺クルス山遺跡の調査において、丘陵部では墓域を５箇所、谷部では集落域を８箇所検出した。それぞれ成果の大要を述べる。

（１）墓域について（表 16・図 119）

千提寺西遺跡３・４区

丘陵部の山頂南側斜面と山頂西側平坦部において中世墓を中心とする墓域を検出した。

中世墓は、本来上部施設である石組と下部施設である土壙の組み合わせから構成される遺構である。

しかし、当墓域では、石組は後世の改変を受けているため大半の墓では残存せず、石組と土壙が対応する墓は山頂東側の限られた一群のみである。

上部施設とみられる石組は、①人頭大の自然石の集石であり、不整方形に石をめぐらせた後内側を充填し、１～３段に積み上げる構造、②方形の台石の周囲を自然石がめぐり、かつ台石の上部に自然石がまとめて置かれる構造、が認められる。

後世の改変により、山頂南側斜面の東辺と西辺では五輪塔部材、石仏がまとめて置かれたような状態で出土しており、石造物の存在からは、本来は土壙上に石造物が据えられていたと想定できる。散在する自然石には扁平なものが含まれ、石造物の基礎石であったと考えられる。

土壙は、総数 86 基であり、土葬墓と火葬墓がある。

土葬墓は、円形、方形を呈する断面形が弧状の浅い土壙と、長方形を呈する断面形がコの字形の深い土壙がある。

円形、方形墓は、棺台や鉄釘の存在から木棺の使用が考えられる。13 世紀後半～ 14 世紀前半の土壙は２基のみである。大半の土壙は、北宋銭、土師器皿が出土するのみで時期の確定は困難であるが、石造物を含む墓域出土遺物から 14 世紀後半～ 16 世紀後葉の時期幅が考えられる。

長方形墓は、釘と人骨の出土から木棺での伸展葬が考えられる。山頂の尾根上でほぼ東西方向に主軸をもつものが５基、山頂西側平坦部でほぼ南北方向に主軸をもつものが５基存在する。遺物は釘以外出土しないが、後者は 16 世紀の土師器皿が出土する中世墓より後出し、火葬場の上層炭層除去後に検出されていることから、16 世紀後半～ 17 世紀前半の範疇に含まれる。長方形墓は、土壙の形態、埋葬方法、棺の形態、キリシタン遺物が伝わる周辺の環境から、キリシタン墓と考えられる。なお、千提寺西遺跡３・４区、同５区、千提寺クルス山遺跡１区の長方形墓出土の人骨をもとに実施した放射性炭素年代測定では、15 世紀後半から 17 世紀前半の暦年代範囲が示された（第４章第２節参照）。

火葬墓は、被熱痕跡、炭化物、火葬骨のいずれかが検出される土壙である。①被熱痕跡、炭化物、火葬骨がみられる土壙はその場で火葬、拾骨、納骨が行われたものと考えられる。これには棺台や煙道など、燃焼効果を高める施設をもつものがある。②火葬骨のみが蔵骨器の羽釜、鍋に納められた状態で検出される土壙、③炭化物、火葬骨が検出される土壙は火葬場で火葬、拾骨後に納骨が行われたものと考えられる。②は蔵骨器から 14 世紀後半～ 15 世紀前半、①・③は土葬墓の円形、方形墓と同様 14 世紀後半～ 16 世紀後葉の時期幅で考えるのが妥当である。

火葬場は、山頂西側平坦部で1箇所検出した。14世紀後半以降17世紀前半まで機能しており、17世紀前半に規模が大きくなり、盛んに火葬が行われたことがうかがえる。銭貨、釘、火葬骨が多量に出土しており、木棺に遺骸を納めた状態で火葬されたものであろう。火葬墓②・③の火葬は出土遺物の年代幅が同様であることから、ここで行われたものと考えられる。

その他、近世墓を2基検出した。煙管と毛垂（剃刀）の出土から近世墓と認識した。

千提寺西遺跡5区

丘陵部の山頂から東へのびる尾根上で長方形墓を中心とする9基の墓群を、山頂を中心とする範囲で近世墓を中心とする62基の墓群を検出した。山頂には、調査前まで、キリシタン遺物所蔵家の一族墓が立地していた。

長方形墓は、尾根上でほぼ東西方向に主軸をもつものが6基あり、これと配列を共にする円形墓3基とともに墓群を形成する。長方形墓は釘と人骨の出土から木棺での伸展葬が考えられる。長方形墓のうち4土壙では直上で長方形の枠状に自然石がめぐる上部施設を確認し、長方形墓をキリシタン墓と認識する端緒となった。類例は、千提寺地区の北に隣接する下音羽地区のキリシタン遺物所蔵家である大神家の墓地「オガミジョ」（(財）大阪府文化財調査研究センター1999）のほか、大分県臼杵市下藤地区キリシタン墓地（臼杵市教育委員会2013・神田2013）で確認できる。長方形墓については複数のキリシタン墓研究者に現地で実見して頂き、当該期に構築する墓の形態としてキリシタン墓以外考えられないとする見解を得た。遺物が出土しないため、時期の確定は困難であるが、形態の類似から千提寺西遺跡3・4区の長方形墓と同様16世紀後半～17世紀前半の範疇に含まれるものと考えられる。

近世墓は、方形あるいは円形の土壙であり、箱形木棺や桶形木棺での座位による土葬が主体である。人骨の残存状況が良好な墓が多く、箱形木棺では隅部に座る場合が多いことを確認した。副葬品は土師器皿・磁器紅猪口（皿）・磁器碗・銭貨・毛垂（剃刀）・刀子・火打金・握り鋏・棒状鉄製品・板状鉄製品・鎌・土人形・煙管・小鉤・硯・石筆・漆器椀・板材（天蓋？）・ガラス玉・釘・煙草入れ・紙・皮製品・鉛弾といった多様な遺物が出土していることが特徴的である。天蓋とみられる板材は類例が伏見城跡にある（(財）京都市埋蔵文化財研究所2007)。座棺を運ぶときに使用したものであろうか。これら副葬品のなかでも、煙草入れの部品として出土したガラス玉は大友宗麟の城下町である大分市府内町遺跡に「コンタツ」とされる類例があり（田中2007・2008)、キリシタン関連遺物の可能性がある。しかし、同種のガラス玉は、キリスト教布教期よりもさかのぼる時期の山口県瑠璃光寺遺跡出土品（山口市教育委員会1988）や江戸時代の煙草入れにも類例があり、キリシタン関連遺物となる当否は判然としない。また、土人形には太夫人形のほか、外国人のようなものがあり、希少な遺物が含まれる。土人形は、キリシタン信仰の仮託品として使用された可能性もあり、注視すべき遺物である。加えて、後述する仏教徒の墓域である千提寺西遺跡6区に比べ、当墓域では冥銭とみられる銭貨を埋葬する墓の割合が少ない点も特徴としてあげられる。

当墓域の近世墓は、江戸幕府禁教令以降の潜伏キリシタンの実態を知る手掛かりの発見が期待されたが、残念ながら直接的な資料を得ることはできなかった。

千提寺西遺跡6区

丘陵部の山頂から裾部にかけて近世墓を66基検出した。「浄土墓」という字名で、調査前まで浄土宗に帰依する一族墓が立地しており、キリシタン信仰とは関係をもたない墓域と類推された。

近世墓は、千提寺西遺跡5区同様、方形あるいは円形の土壙であり、箱形木棺や桶形木棺での座位

による土葬が主体であるが、人骨の残存状況は千提寺西遺跡 5 区や千提寺市阪遺跡 2 区に比べ劣る。当墓域では、一つの土壙で上部と下部とに土葬される墓が多い点が他の墓域に比べ特徴的である。副葬品は土師器皿・磁器碗・磁器小坏・銭貨・環・煙管・入歯・漆器椀・板材・箱・釘であり、千提寺西遺跡 5 区や千提寺市阪遺跡 2 区に比べ種類が少ない。ただし、銭貨を副葬する墓の割合はこの 2 箇所の墓域に比べ高く、仏教徒の墓域の特徴となる可能性が考えられる。特殊品として入歯が出土している。類例は大阪市佐賀藩蔵屋敷跡で江戸時代後期、18 世紀末に位置付けられる資料が出土している。同遺跡出土の入歯は上の前歯 5 本分の部分入歯で、滑石を加工し、側面には穴が開けられ、糸を通して隣の歯に結び付ける形で固定したらしい。本遺跡出土品と同じく、実用性より見栄えのためのものと考えられている。

火葬場は 16 世紀後葉～ 17 世紀前半の小規模な焼土坑、及びこれに隣接して 17 世紀前半以降のやや規模の大きな焼土坑が裾部に位置しており、17 世紀前半において、小規模なものからやや規模の大きなものへと変化したとみられる。千提寺西遺跡 3・4 区の火葬場も 17 世紀前半に規模が大きくなっており動向が共通する。

千提寺市阪遺跡 2 区

丘陵部の山頂において中世墓を 1 基、長方形墓を 2 基、近世墓を 83 基検出した。中世墓と近世墓は同じ地点で墓群を形成するが、長方形墓はやや離れた箇所に立地する。

中世墓は、被熱痕跡、炭化物、火葬骨がみられ、その場で火葬、拾骨、納骨が行われたものと考えられる。東播系須恵質鉢が頭蓋骨上を覆うように伏せて置かれる。13 世紀前半に位置付けられる。

長方形墓は、他の墓域の長方形墓と同様キリシタン墓とみられ、16 世紀後半～ 17 世紀前半の範疇に含まれるものと考えられる。他の墓域の長方形墓に比べやや浅い形状であり、2 基のうち 1 基からは長方形墓で唯一土師器皿が出土した。人骨は出土しないが、1 基は釘が出土しており木棺とみられる。残る 1 基は釘が出土しておらず、浅いことから、東京駅八重洲北口遺跡でみられるような布巻きの埋葬が想定される（今野ほか 2003）。長方形墓周辺ではピット群及び角柱が単独で確認され、礼拝堂と十字架の可能性が考えられる。大分県下藤地区キリシタン墓地においても、遺構の内容は異なるものの同様の性格をもつ遺構が検出されている（臼杵市教育委員会 2013・神田 2013）。

表 16　墓域の概要

調査区	墓数	中世墓(土葬墓)	中世墓(火葬墓)	長方形墓(キリシタン墓)(土葬墓)	近世墓(土葬墓)	近世墓(火葬墓)	骨出土墓数	火葬場数	副葬品の種類	土器出土墓数	銭貨出土墓数	鉄製品出土墓数	土製品出土墓数	銅製品出土墓数	石製品出土墓数	木製品出土墓数	玉類出土墓数	釘出土墓数	炭化物出土墓数	出土遺物無し
千提寺西遺跡 3・4区	86	55	19	10	2	0	52	1	土師器皿・土師器羽釜・瓦器椀・瓦質土器羽釜・銭貨・毛垂(剃刀)・煙管・釘	44	7	1	0	2	0	0	0	26	27	24
千提寺西遺跡5区	71	0	0	9(長方形墓6基+土壙3基)	61	1	38	0	土師器皿・磁器紅猪口(皿)・磁器碗・銭貨・毛垂(剃刀)・刀子・火打金・握り鋏・棒状鉄製品・板状鉄製品・鎌・土人形・煙管・小鉤・硯・石筆・漆器椀・棺材・板材・ガラス玉・釘・煙草入れ・紙・皮製品・鉛弾	8	21	20	3	14	2	4	1	35	1	29
千提寺西遺跡6区	66	0	0	0	66	0	41	2	土師器皿・磁器碗・磁器小坏・銭貨・環・煙管・入歯・漆器椀・板材・箱・釘	25	33	0	0	6	1	3	0	32	0	19
千提寺市阪遺跡2区	86	0	1	2	83	0	31	0	土師器皿・須恵器片口鉢・磁器碗・陶器耳付花入・陶器碗・銭貨・握り鋏・火打金・鎌・飾金具・土人形・煙管・煙草入れ・棺材・ガラス小玉・火打石・釘	9	3	6	1	5	3	3	3	26	5	54
千提寺クルス山遺跡1区	37	1	5	8	10	13	23	2	土師器皿・瓦器椀・磁器碗・銭貨・鉄製品・釘	8	2	1	0	0	0	0	0	15	21	16

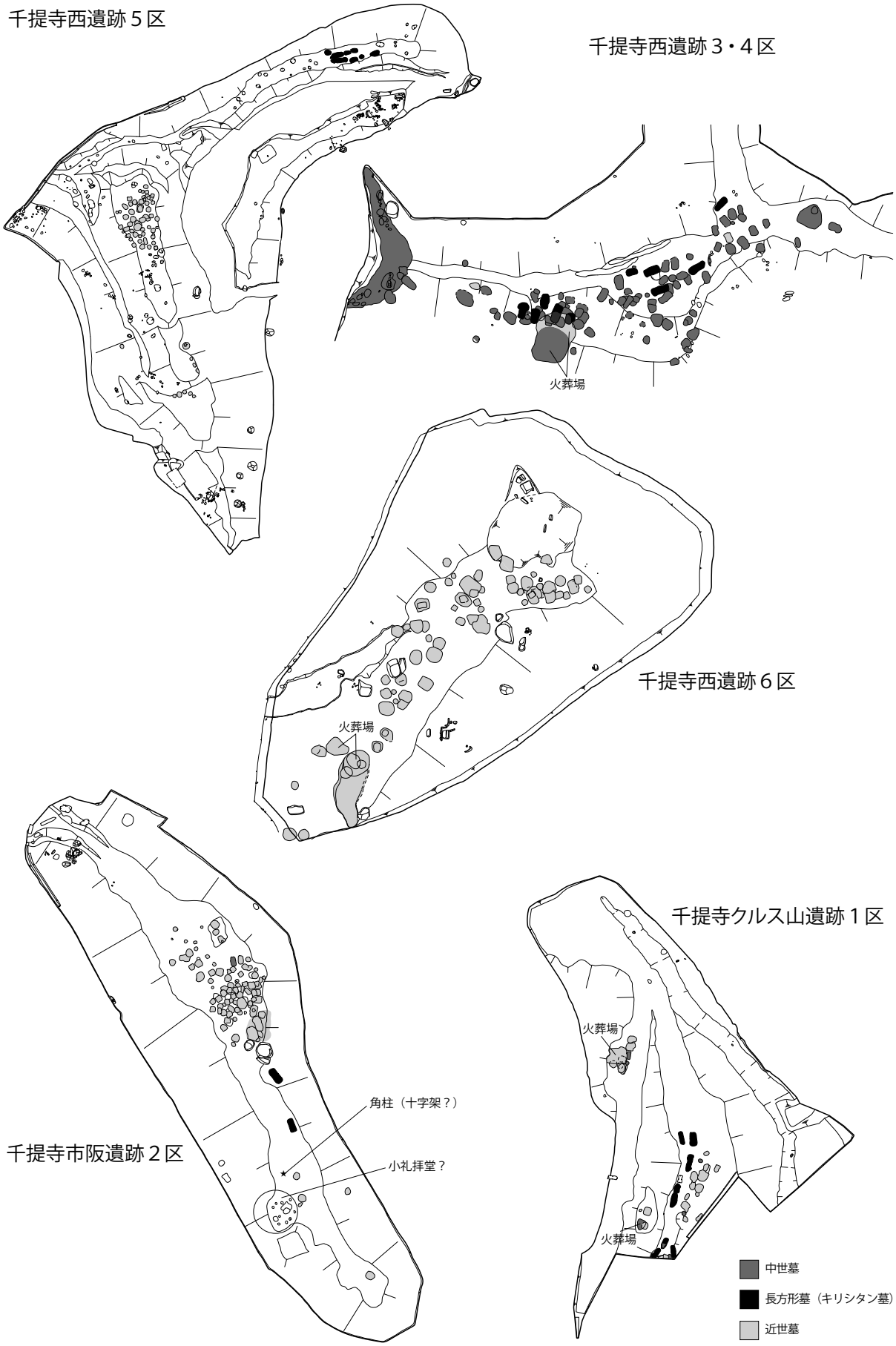


図 119　各墓域の中近世墓

近世墓は、千提寺西遺跡５区と同様、方形あるいは円形の土壙であり、箱形木棺や桶形木棺での座位による土葬が主体である。人骨の残存状況が良好な墓が多く、箱形木棺では隅部に座る例が多い。副葬品は土師器皿・磁器碗・陶器耳付花入・陶器碗・銭貨・握り鋏・火打金・飾金具・土人形・煙管・煙草入れ・ガラス小玉・火打石・釘であり、千提寺西遺跡５区同様、多様な遺物が出土している。当墓域では、仏教的な銭貨や嗜好品である煙管の出土は少ない一方、ガラス小玉のような特殊品の存在が特徴的である。

ガラス小玉は青緑色と無色のものが実質２基の土壙から 67 点、99 点とまとまって出土している。近世墓ではガラス小玉の出土は余り例をみず、三重県で一例を知るにすぎない（三重県埋蔵文化財センター 2006）。ガラス小玉は、キリシタン墓が検出された大分市府内町遺跡、東京駅八重洲北口遺跡で出土しており、また、東京大学付属図書館蔵の中谷家のロザリオ（（財）大阪府文化財調査研究センター 1999）、水戸家収蔵品のロザリオ（立原 1928・水戸市史編纂委員会 1968）に認められることから、キリシタン関連遺物の可能性が考えられる。

当墓域では現在に残る墓は存在せず、管理する家などの詳細は不明であるが、隠れキリシタンの一族墓であった可能性が考えられる。

千提寺クルス山遺跡

丘陵部尾根上と西側斜面の北側平坦面、南側平坦面の計３箇所の墓域がある。

丘陵部尾根上では、12 世紀前半にさかのぼる中世墓１基、中世後葉から末葉の中世墓３基、長方形墓８基、近世墓 15 基を、尾根西側斜面の北側平坦面では中世後葉から末葉とみられる中世墓２基、近世墓６基、南側平坦面では近世墓２基を検出した。

中世墓のうち、12 世紀前半に位置付けられる１基は、調査地南端で土壙の一部を検出したもので土葬墓とみられる。中世後葉から末葉の中世墓３基は尾根上で等間隔に並ぶ小規模な土壙であり、炭化物、火葬骨が出土する火葬墓である。火葬場で火葬、拾骨後に納骨が行われたものと考えられる。同様の土壙は西側斜面の北側平坦面においても２基認められる。なお、同時期の火葬場とみられる土坑が西側斜面の南側平坦面に１箇所存在することから、ここで火葬された可能性が考えられる。

長方形墓は、他の墓域の長方形墓と同様キリシタン墓とみられ、16 世紀後半～ 17 世紀前半の範疇に含まれるものと考えられる。釘と人骨の出土から木棺での伸展葬が考えられる。先の中世後葉から末葉の中世墓を避けるような状態で、尾根上平坦面でも西側に寄った箇所で、ほぼ南北方向に主軸をもつものが８基並び、うち 18 土壙は中世後葉から末葉の中世墓と重複し、18 土壙が後出する。南端の 14 土壙では、自然石と石仏を並べた上部施設を確認しており、15 ～ 16 世紀に位置付けられる石仏を転用したものとして注目できる。

近世墓は、他の墓域と同様、方形あるいは円形の土壙を尾根上で１基、西側斜面の北側平坦面で７基、同南側平坦面で２基検出した。箱形木棺や桶形木棺での座位による土葬である。人骨の残存状況は千提寺西遺跡５区や千提寺市阪遺跡２区に比べ劣り千提寺西遺跡６区の状況に似る。副葬品は土師器皿・瓦器椀・磁器碗・銭貨・鉄製品と種類が少なく、これも千提寺西遺跡６区の状況に似る。一方、近世の火葬墓が尾根上の東側で集中して検出された。炭化物、火葬骨が出土する火葬墓であり、火葬場で火葬、拾骨後に納骨が行われたものと考えられる。この時期の火葬場は西側斜面の北側平坦面で小規模な焼土坑を確認しており、ここでの火葬が考えられる。

当墓域も、千提寺市阪遺跡２区同様、現在に残る墓は存在せず、管理する家などの詳細は不明である

が、隠れキリシタンの一族墓であった可能性が考えられる。

（２）集落域について

居住域は、千提寺西遺跡１区、７区、千提寺市阪遺跡１区で検出した。

千提寺西遺跡１区では 12 ～ 13 世紀の存続が考えられる建物を４棟、同７区では 10 世紀後葉～ 11 世紀前葉の時期幅が考えられる建物を３棟、千提寺市阪遺跡１区では 10 世紀後半から 13 世紀中頃にかけて変遷する建物を５棟検出した。今回検出した５箇所の墓域の東端にあたる千提寺市阪遺跡１区と西端にあたる千提寺西遺跡７区において 10 世紀後半からの居住が確認でき、その後、千提寺西遺跡７区は 11 世紀で途絶えるが、12 世紀～ 13 世紀には千提寺市阪遺跡１区と小規模ではあるが千提寺西遺跡１区において居住域が継続したことを確認した。その後の居住域は、今回の調査では検出しておらず、千提寺西遺跡３・４区と千提寺クルス山遺跡２区の間の谷頭周辺にひろがる現在の千提寺地区集落の場所へ継続するのではないかと考えられる。なお、千提寺市阪遺跡１区で検出した建物は、明確なピットの配列は認められないものの、柱筋は確認でき、複数回の建替えがあったと考えられる。斜面地に平坦面を造成して設ける中世の建物の様相を知る好資料である。

生産域は、千提寺西遺跡 11 － 1 － 1 ～ 4 区、千提寺西遺跡２区、同９区、日奈戸遺跡、千提寺市阪遺跡１区、千提寺クルス山遺跡２区で棚田を検出した。千提寺クルス山遺跡２区では、花粉分析により、11 世紀後半～ 13 世紀後半にソバが栽培されていた可能性が指摘された（第４章第３節参照）。

棚田は、出土遺物からその開発は 10 世紀にさかのぼる可能性があり、12 ～ 13 世紀にはひろく棚田が開発され、派生する小規模な谷部にまで開発が及び、14 世紀には谷頭まで棚田がひろがる。その後中世後半以降、谷筋の中で弧状に設けられていた棚田が、谷幅いっぱいまで拡張されたと考えられる。

第２節　遺構の変遷とその背景（表 17・図 120）

１期 10 世紀～ 11 世紀後葉

棚田の開発が始まるとともに、千提寺西遺跡７区と千提寺市阪遺跡１区において居住域が形成される。

忍頂寺が史上に姿を現すのは９世紀中頃であり、当時は 23 もの僧坊をもつ山岳寺院として栄え、10 世紀後半には国の保護を受けていたことが仁和寺文書からわかる。山岳宗教の聖地として盛行する忍頂寺を中心とし、千提寺においても村落が出現したことがうかがえる。

２期 12 世紀前半～ 14 世紀前半

千提寺クルス山遺跡１区において 12 世紀前半の土葬墓が１基、千提寺市阪遺跡２区において 13 世紀前半の火葬墓が１基、千提寺西遺跡３・４区において 14 世紀前半の土葬墓が２基設けられる。

12 世紀～ 13 世紀には千提寺市阪遺跡１区と小規模ではあるが千提寺西遺跡１区において居住域が営まれる。

造墓数が少ないことから、この時期の村落の特権身分とされる名主層でも家長のみが埋葬されたものと考えられる。13 世紀後半は、土葬から火葬への葬制の展開と墳丘墓から石組墓への展開が指摘される時期であるが（藤澤 1990）、当遺跡においては、土葬、火葬がともにみられ、墳丘墓か石組墓かは上部施設が不明であり、判然としなかった。

13 世紀後半には、真言律宗の中興の祖である西大寺叡尊がその晩年に勝尾寺や忍頂寺で受戒を行っている。律宗では下級僧侶が死者の火葬、埋骨などの葬送に携わっていたことが指摘されており（細川

1987)、当遺跡においてもこのような僧が関与していた可能性が考えられる。

竜王山からその南麓にかけては寺辺村とよばれ、千提寺はこの寺辺村に属する。寺辺村を含む周辺の村落は忍頂寺五箇荘とよばれ忍頂寺の支配下にあったが、13 世紀中頃には忍頂寺は寺勢が衰え仁和寺の末寺として存続していたことが仁和寺文書にみえる。また、現在、忍頂寺の命脈を受け継ぐ寿命院の墓地には元亨元（1321）年の銘が残る五輪塔があり、14 世紀前半には供養塔が造立されたことを知る。忍頂寺の求心力が低下するなか、名主層が力を付けてきたことが個人墓に表出する。

３期 14 世紀中葉～ 15 世紀中葉・後半

千提寺西遺跡３・４区において広範囲に集団墓が群在することから、集落の共同墓地の萌芽が認められ、葬送を営むことができる階層のひろがりがうかがえる。

この時期は、村落共同体である惣村が成立した時期にあたる。惣村は名主層の分解の中から成長してきた土豪層と一般農民の結合によるものとされており（峰岸 1970)、この時期、墓の構造や埋葬方法が多様性を増し、数が増加する状況は、このような村落内部の状態が墓群に現れたものであろう。土葬墓と火葬墓が混在するが、蔵骨器を用いた火葬墓が多くみられる。火葬場はこの時期に成立したものと考えられる。

15 世紀には、火葬や埋葬、墓の管理に三昧聖が関与したことが『浄土三国仏祖伝集』にみえる。三昧聖による広範な活動がこの山間の地にも及んだのかもしれない。

４期 15 世紀後半～ 16 世紀中葉・後葉

３期に続き、千提寺西遺跡３・4 区において広範囲に集団墓が群在するとともに、千提寺クルス山遺跡 1 区においても 5 基の火葬墓が設けられる。

千提寺西遺跡３・4 区では、火葬場が継続利用され、五輪塔、石仏が多数造立される。小型の五輪塔の造立が盛んになるのは 15 世紀後半からと考えられ（白石 1993)、とくに 16 世紀後半に入ると石塔類の急激な増大が大和の中世墓では共通してみられることから（藤澤 1990)、この時期の墓は多くが石塔を持っていたと考えられる。散在する自然石には扁平なものが含まれることから、扁平な基礎石の上に石塔・石仏が立て並べられていたと想定できる。土葬、火葬は併存するが、墓の構造は画一的であり、墓葬の安定化をみてとれる。村落共同体が強化、維持された状態を示すものであろうか。

このような惣墓は、一定範囲の勢力圏をもつ政治的な勢力がないと成立しえないものであるが、千提寺の場合、忍頂寺を紐帯とした緩やかな結合が想定できる。しかし、応仁・文明の乱で地域寺院や門跡の権威が衰え、山岳宗教の組織が分解したことが指摘されている（茨木市史編さん委員会 2012)。おそらく忍頂寺が依拠する仁和寺の勢力も衰退したことが推察される。一方、高山氏など地域の土豪が台頭する時期でもあり（Hubert Cieslik1976a)、こうした政治勢力の転換期において、村落共同体は一層、強化、維持されたものと考えられる。この時期以降、棚田が谷筋を中心に弧状に造られていたものから谷幅いっぱいまで拡張されることは、村落共同体の強化を背景として成されたものかもしれない。

15 世紀後半以降には、蓮如が山科から摂津・河内国へとその活動の場をひろげており、北摂地域では真宗寺院が増加している（市本・瀬戸 2001)。石仏で阿弥陀仏が圧倒的に多数を占めることはこの動きと関連するものであろうか。短絡的に結論をだすことは躊躇されるが考慮すべき動向であろう。

なお、中世墓について周辺の遺跡をみると、当遺跡の南 2.5 ㎞に位置する栗栖山南墳墓群では 13 ～ 16 世紀の 601 基の土葬墓・火葬墓が火葬場とともに検出されており（(財）大阪府文化財調査研究センター 2000)、高槻市岡本山古墓群では 13 ～ 14 世紀を中心として約 400 基（高槻市教育委員会

1984・森田 1986)、箕面市小畑遺跡では 13 世紀後半～ 15 世紀の 201 基の土葬墓・火葬墓が検出されている（(財）大阪府文化財調査研究センター 1998)。岡本山古墓群は時期もややさかのぼり、被葬者の階層は当遺跡に比べ上層であるとみえるが、至近の栗栖山南墳墓群と小畑遺跡は検出遺構、遺物が類似しており、当遺跡を含む北摂山間部一帯が中世において、同様の墓葬の変遷を辿ることがみてとれる。

5 期 16 世紀後葉～ 17 世紀前半

長方形墓が、千提寺西遺跡 3・4 区、同 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区、千提寺クルス山遺跡 1 区でそれぞれ成立する。長方形墓は、①千提寺西遺跡 5 区 4 土壙の上部施設が下音羽地区大神家（キリシタン遺物所蔵家）墓地の墓や大分県臼杵市下藤地区キリシタン墓と類似すること、②土壙の配列や形態、木棺での伸展葬という埋葬方法が高槻城跡キリシタン墓と酷似すること、③周辺の千提寺地区や下音羽地区からキリシタン遺物が発見されていること、④同時期の周辺の埋葬方法とは明らかに異なること(中世墓資料集成研究会 2006)、からキリシタン墓と考えられる。

長方形墓は、千提寺西遺跡 3・4 区では、中世墓に重複して長方形墓が設けられ、千提寺西遺跡 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区では新たに独立した墓域を設け、千提寺クルス山遺跡ではその中庸の状況を示す。

長方形墓から明確に時期を限定できる遺物は出土していないが、千提寺西遺跡 3 ・ 4 区の山頂西側平坦面の長方形墓は、17 世紀前半、古寛永（寛永 13（1636）年初鋳）が流通以降、その上層に火葬場がひろがることから、この時点で長方形墓は廃絶したものと考えられる。

この頃の千提寺の歴史的な背景は、次の通りである。

天正 6（1578）年、荒木村重謀反の制圧に対する功績が認められ、千提寺を含む五箇荘が高山右近に加増される。しかし忍頂寺が織田信長から安堵状を得ていたことから高山右近は積極的な布教を控えており、信長が本能寺の変で死去する天正 10（1582）年の翌年、天正 11（1583）年に、高槻の初代主任司祭であったイエズス会士ジョゼッペ・フォルナレッティにより忍頂寺を拠点として集中的な伝道が進み、千提寺を含む山間部のほとんどが改宗したとされる（児嶋 2014)。

千提寺の統治及び宗教環境ついては、チースリク神父ならびに井藤暁子氏の詳細な研究があり(Hubert Cieslik1976a・井藤暁子 2010)、以下これに導かれながら概要を記す。

高山右近が明石へ移封後、五箇荘は豊臣家直轄領となり、茨木城管轄下に置かれた。天正 15（1587）年には豊臣秀吉により禁教令が発布される。初代代官はキリシタンである安威了佐が文禄 2（1593）年まで務め、2 代目は豊臣家家臣で異教徒である川尻肥前守秀長が慶長 5（1600）年まで務めた。その後慶長 5（1600）年以降は徳川方に変わり、右近旧領は、京都所司代である板倉伊賀守勝重が元和 5（1619）年まで、その息子周防守重宗が承応 3（1654）年まで目配りすることとなる。この間、慶長 17 ～ 19（1612 ～ 1614）年には徳川幕府禁教令がだされ、潜伏キリシタンの時代が始まり、重宗のときに、下音羽、千提寺の潜伏キリシタンは檀家としてまとめられ、このころ曹洞宗耕雲寺が創建されたらしい。

千提寺と下音羽に残るキリシタン遺物をみると、第 2 章で述べた通り、時期が推定されるものは 1590 年代から 1620 年代のものが認められることから、キリシタン遺物の多くは高山右近が明石へ移封後にもたらされた可能性が考えられる。キリシタン墓碑は 1600 年代のものであり（大石 2012)、この頃には、キリスト教の信仰環境に大きな変化は無かったものとみられる。1622 年にはザヴィエルが列聖されており、千提寺で発見された聖フランシスコ・ザヴィエル像やマリア十五玄義図には名前の

頭に「S.」が付されていることから、元和８（1622）年以降においても密かにキリシタンの活動が行われていたことが示唆される。

寛永 10（1633）年には、下音羽に潜んでいた司祭達が捕縛され長崎で刑死したという（西村 1958）。

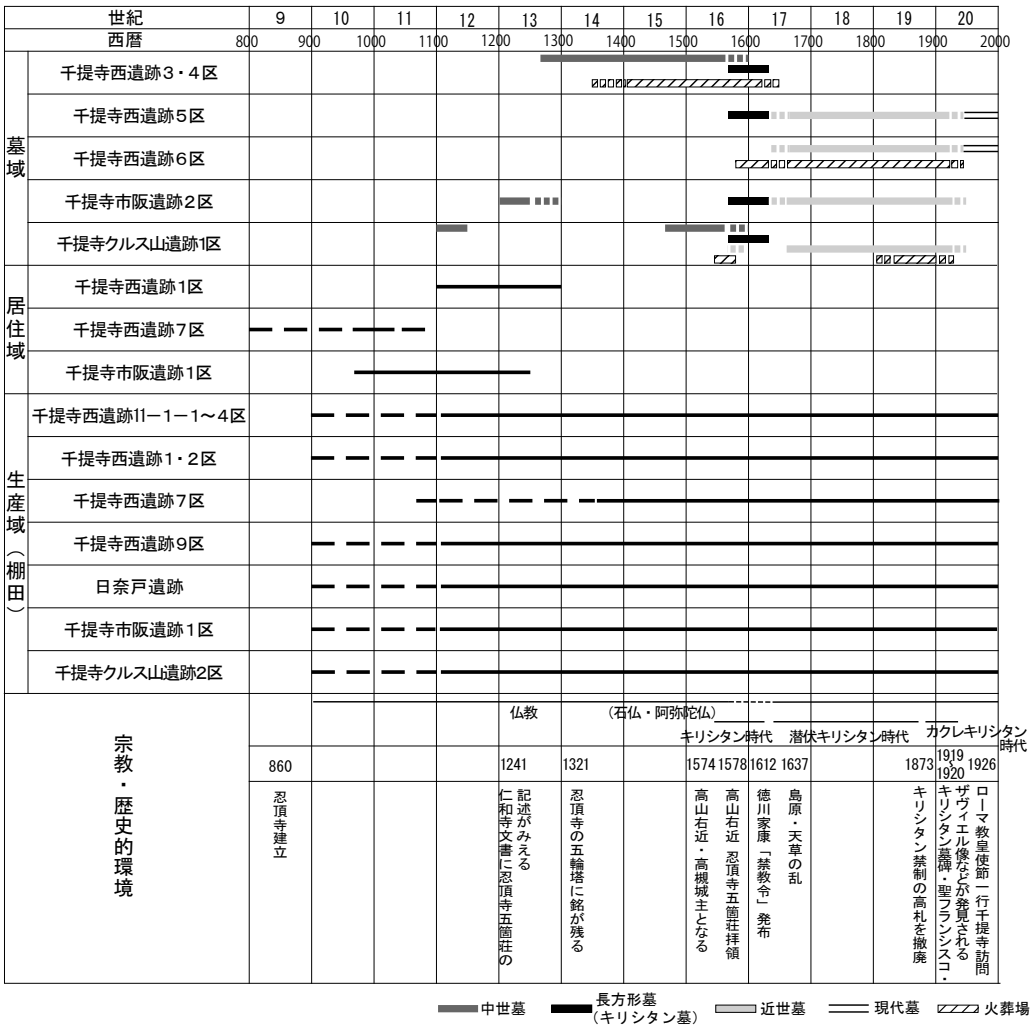
重宗の後任、牧野親成は、明暦年間（1655 ～ 58 年）に下音羽村において宗門不定者病死の際、キリシタンの葬儀ではなかったことを報告している（Hubert Cieslik1976a・井藤暁子 2010）。

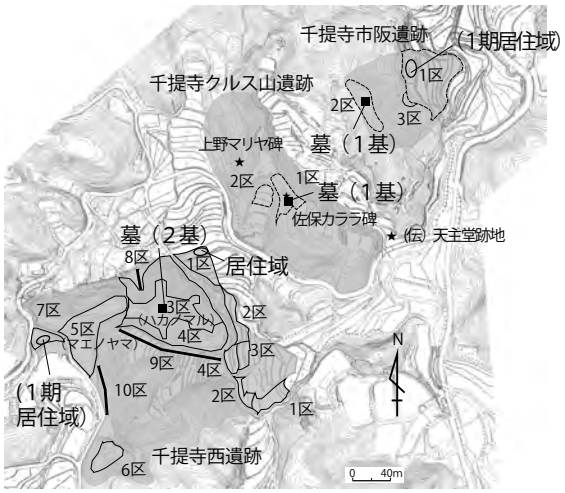
こうした事象から千提寺におけるキリスト教信仰の環境をみると、1583 年の精力的な布教後、1590 年代から 1600 年代には安定した環境にあり、徳川幕府の禁教令以降も 1620 年代にはいまだ環境は密かに保持されるが、1630 年代に入ると取締が厳しくなり、1650 年代以降には潜伏していたものと考えられる。板倉周防守重宗（1620 ～ 54 年在職）は、父伊賀守とともにキリシタンに対してかなり寛容な態度をとり、流血の迫害を避けていたとされるが、島原の乱後、幕府がキリシタン対策を徹底するなかで、1630 年代以降千提寺の宗教環境も大きく変化したと考えられる。

また、キリスト教受容後の葬送のあり方についてみておきたい。

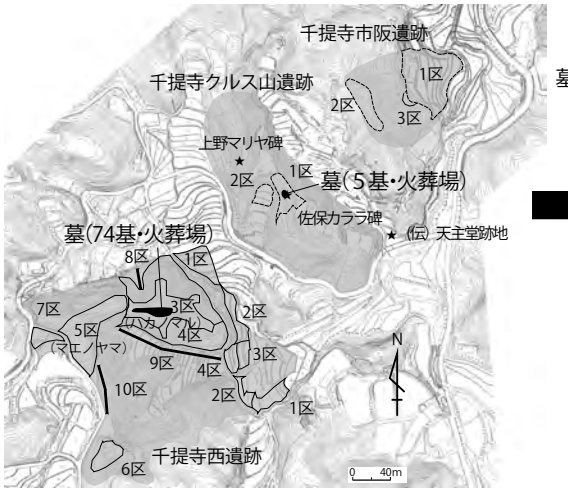
キリスト教が日本へ伝えられ、宣教師が葬儀や埋葬に関わるなか、これまでの仏教儀礼の慣習とキリシタンの葬送儀礼の違いについて、その認識と解決策をめぐって様々な議論がなされた。墓地についても、「仏教徒の墓地の一隅をキリシタン墓地として使用すること」が当面の共存の措置としてとられて

表 17　遺構の変遷

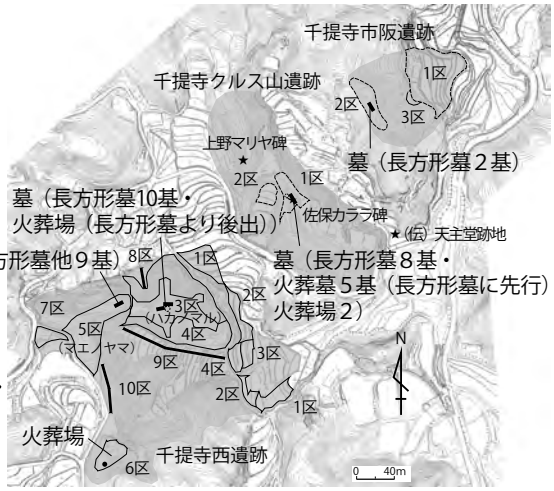




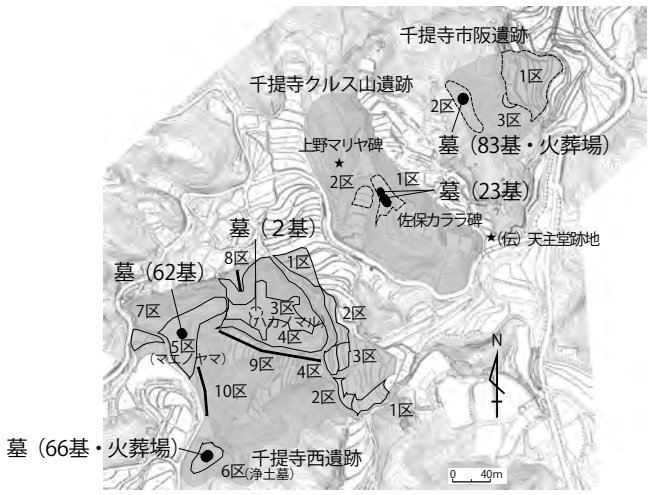
1期　10～11世紀後葉（居住域）
2期　12世紀前半～14世紀前半（墓域）



3期　14世紀中葉～15世紀中葉・後半
4期　15世紀後半～16世紀中葉・後葉



5期　16世紀後葉～17世紀前半



6期　17世紀後半～19世紀

図 120　墓域の変遷

いたことが報告されている。また、ヨーロッパでは、たいてい教会の周囲に大きな共同墓地を造ったが、日本では「その家の先祖代々のために一定の墓所を設ける習慣が多く行われていたので、キリシタンたちもそれを守った」ようである（Hubert Cieslik1976b・ロペス・ガイ（井手勝美訳）1983）。

このような布教にあたっての具体的な問題については、ゴアと日本、そしてローマと日本の往復書簡のなかで議論されるとともに、1580 年、1590 年、1592 年の三回の協議会と管区会議における検討から抜粋して日本管区巡察師ヴァリニャーノが『服務規程』（ロペス・ガイ（井手勝美訳）1983）を規定し、その後 1612 年に日本管区巡察師に就任したフランシスコ・パシオがヴァリニャーノの「規定」を追認し、その抜書きを日本在留のパードレ達に残した（五野井 2012）。

こうした『服務規程』の成立過程をみると、キリシタンの葬儀や埋葬についても、規定が定まるまでには布教後一定の期間が必要であったことがうかがえ、1590 年代中頃以降にようやく安定してきたのではないかと推定する。

以上の、歴史的な背景とキリスト教受容後の葬送のあり方をもとに千提寺における長方形墓について検討する。

千提寺西遺跡 3・4 区で中世墓と長方形墓が重複することは、「仏教徒の墓地の一隅をキリシタン墓地として使用すること」に該当する可能性がある。キリスト教の葬送儀礼がいまだ試行錯誤段階にあることがうかがわれる。まとめて置かれたような状態で重なって出土する石仏や五輪塔は、長方形墓を新たに設ける際に片付けられた可能性が考えられる。しかし、この時期は、豊臣大坂城をはじめとして大和郡山城などでみられる通り石造物の転用が盛行する時期であり（中世葬送墓制研究会 2015）、時代の趨勢として石造物が片付けられた可能性もあるため即断はできない。

千提寺西遺跡 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区、千提寺クルス山遺跡 1 区で各尾根上に長方形墓が成立することは、「その家の先祖代々のために一定の墓所を設ける習慣が多く行われていたので、キリシタンたちもそれを守った」に該当する可能性がある。なかでも千提寺西遺跡 5 区は同 3 区から連続する尾根に長方形墓が独立して設けられることから、キリシタン墓のあり方が試行錯誤段階から進展し、ひとまず安定した段階の様相を示すものと推定する。

以上の諸事象を勘案すると、千提寺西遺跡 3・4 区は 1583 年の布教以降の様相、千提寺西遺跡 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区、千提寺クルス山遺跡 1 区は 1590 年代中頃以降の様相を示すものではないかと考えられる。

いまひとつ検討すべき課題は、惣墓であった千提寺西遺跡 3・ 4 区にまずはキリシタン墓が設けられたとして、その後どうしてキリシタン墓は他の 3 箇所の墓域へ分散したのだろうか、という問題である。先述した「その家の先祖代々のために一定の墓所を設ける習慣」に沿った可能性や山間の丘陵部であるためまとまった平坦地を確保できないという地理的要因も考えられる。

また、これに関連して、千提寺西遺跡 3・4 区の墓群は近世墓へと展開しないが、千提寺西遺跡 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区、千提寺クルス山遺跡 1 区の墓群はそれぞれ近世墓へと継続するという事象がある。

中世墓は中世末段階で断絶するものと、近世墓地へと展開するものがあり、その分岐は、中世末期に百姓身分の村落民が「惣」や「講」などの組織を背景にして従来の墓地の周辺に主体的に自らの墓地を造っていったか否かによる、とする見解がある（吉井 1993）。

このような見解からみれば、近世墓へと展開する千提寺においては、中世末段階において村落民が主体的に自らの墓地を造っていった姿を看取できる。そしてこの場合、背景となる組織を考えたとき、キ

リシタン信仰の浸透によって成立した組織をひとつ可能性として考えられないだろうか。

キリスト教の布教のあり方は、各地において信徒の自主運営のもとに民間指導者が存在する信徒組織であり「コンフラリア」、またはポルトガルでは「ミゼリコルヂア」と呼称され、この形態は浄土真宗の民間道場のあり方との類似性が指摘されている。また、信徒組織では、医療活動とともに、死者の埋葬や募金による共同出資によって貧者の葬儀を出すなどの活動が行われていたという（川村 2007）。

千提寺においても、天正 11（1583）年の改宗以降、当初は千提寺西遺跡 3・4 区の惣墓の一画に新たにキリシタン墓を設けていたが、信仰組織がしだいに整備され「家」をもとにする一族を単位として形成されるに際して、千提寺西遺跡 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区、千提寺クルス山遺跡 1 区においてそれぞれ墓域がみられるようになったのではなかろうか。千提寺に残るキリシタン遺物の検討からも特定所蔵家の一族が信仰組織を形成した可能性が示唆されている（井藤 2010）。

見方を変えると、惣村としてまとまって惣墓を形成していた共同体が、信仰組織＝家に分割されたとも言え、地縁から血縁への集団の変化、分解がみてとれる。

千提寺における中世後葉の墓域の拡散からは、このような背景が想定されるが、今後の検討を経て判断していきたい。

加えて、より詳細にみると、長方形墓による墓域を、それ以前の墓域と明確に区別しようとした千提寺西遺跡 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区と、あまり明確な区別をもたせなかった千提寺クルス山遺跡 1 区があり、前者ではその後の近世墓の墓域とも区別する傾向がある。このような差が何によって生じているのかについては今後検討する必要がある。

その後、17 世紀前半のなかでも、古寛永（寛永 13（1636）年初鋳）が流通以降、千提寺西遺跡 3・4 区の山頂西側平坦面の長方形墓の上層には火葬場がひろがり、この時点で長方形墓は廃絶したものと考えられる。先述した歴史的な背景にみる通り、1630 年代にはキリシタンの取締が厳しくなることと合致する。火葬を盛んにすることで、仏教的な葬送を強調したのかもしれない。

一方、仏教徒の墓域とみられる千提寺西遺跡 6 区では、この時期、火葬場とその周辺に墓が設けられ、墓域が新たに成立する。

6 期 17 世紀後半～ 19 世紀

千提寺西遺跡 5 区、同 6 区、千提寺市阪遺跡 2 区、千提寺クルス山遺跡 1 区において、座棺による土葬を主体とする近世墓の墓域が成立する。とくに千提寺西遺跡 5 区、同 6 区、千提寺市阪遺跡 2 区では、極めて限定されたところに集約的に造墓されていることから血縁的紐帯の強い人々の累世墓としての性格が考えられる。

千提寺西遺跡 6 区は「浄土墓」の字名が残り、調査前まで浄土宗を信仰される一族の墓が存続していたことから、仏教を信仰する一族の墓域と考えられる。

徳川幕府の禁教令、島原の乱以降キリシタンの取締は強化され、千提寺においても 1650 年代以降には潜伏したものと考えられる。

長方形墓を検出した千提寺西遺跡 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区、千提寺クルス山遺跡 1 区においても、仏教徒と同様の座棺墓による土葬がなされ、禁教政策が確立されるなかで潜伏キリシタンとなった人々は、表面上改宗し、仏教徒と同様の葬送儀礼を受け入れたとみられる。

この 4 箇所の近世墓を比較すると、副葬品の様相に相違がみられる。すなわち、千提寺西遺跡 6 区と千提寺クルス山遺跡 1 区では副葬品が土師器皿、磁器碗、煙管、銭貨と限られた種類であり特殊品

がみられないのに対し、千提寺西遺跡５区と千提寺市阪遺跡２区では、これに加え毛垂（剃刀）・刀子・火打金・握り鋏など副葬品が多様であり、土人形やガラス玉といった特殊品を含むことが注意される。また、前者に比べ、後者は人骨の残存が良好な墓が多い。

千提寺西遺跡５区で煙草入れの緒締めとして用いられていたとみられるガラス玉は、キリシタン大名大友宗麟の城下町である大分市府内町遺跡に「コンタツ」とされる類例があり、また、千提寺市阪遺跡２区で２基の墓から出土した多量のガラス小玉は、キリシタン遺物に類例があることから、これらはキリシタン関連遺物の可能性がある。成分分析からは、双方ともカリウム鉛ガラスであり、前者のガラス玉は大分市府内町遺跡の「コンタツ」と素材が異なること、後者のガラス小玉は出土した墓によって素材が異なるため、時期差または工房（製作地）が複数である可能性が考えられた（第４章第４節参照）。双方のガラス玉ともキリシタン遺物と断定するには至らず、今後、キリシタン遺物のガラス小玉の成分分析を含め検討が必要である。

ほかに、近世墓では、土壙の深さが２mを超える墓が多くみられる点が注意される。とくに千提寺西遺跡５区、同６区に集中する。山間の墓域であり、獣害を避けるためかとも考えられたが、全ての墓が深いわけでもなく、要因は不明である。当地域における近世墓の特徴となる可能性がある。

千提寺市阪遺跡２区と千提寺クルス山遺跡１区の墓域は江戸時代のなかで途絶えるが、千提寺西遺跡５区、同６区の墓域は幕末を迎え、近現代へとつづく墓域となった。千提寺では明治時代末に共同墓地が千提寺西遺跡５区の北側丘陵に成立し、村落内の墓域はしだいにここへと収斂したようであり、千提寺西遺跡５区、同６区の墓も調査前にはここへ移動されたということである。

第３節　キリシタン墓について

以上述べてきた通り、今回の調査では、千提寺西遺跡３・４区で 10 基、同５区で９基、千提寺市阪遺跡２区で２基、千提寺クルス山遺跡１区で８基のキリシタン墓を検出した。

最後に、これまでに発掘調査により判明しているキリシタン墓と今回の調査で検出したキリシタン墓の比較を通して、類似と相違を明らかにすることで、千提寺におけるキリシタン墓の性格について考えたい。このような視点はすでに今野春樹氏（今野 2004）、田中裕介氏（田中 2007）の適切な考察があり、これらに導かれながら比較することとする。

高槻城キリシタン墓地（高橋ほか 2001）は、大阪府高槻市に所在し、平成 10（1998）年に調査された。高槻城は高山右近の居城であり、キリシタン墓地は高槻を右近が領した元亀元（1570）年から天正 15（1587）年、豊臣秀吉が伴天連追放令を発令する頃まで存続したと考えられている。墓地は高槻城内にあり、隣接地には天正２（1574）年建立の教会があったと推定されていることから、イエズス会高槻教会に併設された墓地とみられる。

キリシタン墓は 27 基検出されており、特徴は次の通りである。①墓域を区画する溝や柵列が存在する、②南北方向に主軸をもち頭位を北にする墓が、東西方向に等間隔で列状に配置される、③成人墓と幼児・小児墓が混在する、④木棺での伸展葬である、⑤木棺の蓋板に「二支十字」の墨書が１例有る、⑥２基から木製のロザリオが出土。

東京駅八重洲北口遺跡（今野ほか 2003）は、平成 13（2001）年に調査された。同遺跡は江戸城東部外堀の内側に位置する。江戸におけるキリスト教布教は慶長４（1599）年に八丁堀または日本橋石

町に、イエズス会に先駆けてフランシスコ会が教会を建てるが、慶長 17（1612）年の江戸幕府禁教令により破却される。同遺跡のキリシタン墓地は 1590 ～ 1605 年の存続が推定されている。

キリシタン墓は 10 基検出されており、特徴は次の通りである。①墓域を区画する溝が存在する、②墓群は群集する土坑墓が古く、散在する木棺墓が新しい可能性がある、③東西方向に主軸をもち、頭位は一定しない、④成人墓と幼児･小児墓が混在する、⑤木棺の側板に「ローマ十字」の墨書が 1 例有る、⑥ 1 基からメダイ 1 点と木製のロザリオ玉 2 点とガラス製のロザリオ玉 49 点が、別の 1 基からガラス製のロザリオ玉 1 点が出土。

大分市府内町遺跡（田中 2007・2008）は、平成 13（2001）年以降に調査された。豊後府内は大友氏の首府であり、イエズス会府内教会の推定地においてキリシタン墓が検出された。第 2 期と第 3 期の墓があり、第 2 期は 1560 年代、第 3 期は 1570 年代の 1 点から 1587 年以前と想定されている。

第 2 期は、ほとんど幼児埋葬に限られる 8 基の墓が検出されており、あまり規則性をもたず 1 箇所に集中する。方形木棺が利用されるものと直葬される土壙墓がある。

第 3 期は、長方形のキリシタン墓 4 基が等間隔に並んで検出されており、周囲には幼児墓が追葬される。第 2 期の墓が終わった後に新たに整備されたものと推定されている。

特徴は次の通りである。①墓域を区画する溝が存在する、②第 2 期の墓群は土壙墓と木棺墓が混在するが、第 3 期の墓群は成人墓、幼児墓ともに木棺墓である、③第 3 期の長方形墓は、ほぼ南北方向に主軸をもち頭位を北にする墓が等間隔に並ぶ､④副葬品でキリシタン墓と断定する遺物は皆無である。幼児墓からガラス小玉 1 点が出土するのみであり、八重洲北口遺跡に類例をみるが、仏教の数珠にも使われるものであり、キリシタン関連遺物とは断定できない。

大分県史跡下藤地区キリシタン墓（神田 2013・臼杵市教育委員会 2013）は、平成 22（2010）年から調査され、平成 25（2013）年には大分県史跡となった。キリシタン墓碑の存在からキリシタン墓地であることが伝えられてきたが、発掘調査により石組や石敷遺構が検出され、キリシタン時代（1549 ～ 1612 年）のキリシタン墓地であることが確認された。

キリシタン墓の上部施設として長方形や長方形の枠状の石組が明らかであり、キリシタン墓は主軸をそろえ、等間隔に列状に配置される。墓地では、礎石建物状遺構や円形石敷遺構が検出されており、墓のほかに小礼拝堂や十字架を建てる広場などの礼拝施設が存在したと想定された。

以上の事例と千提寺西遺跡 3・4 区、同 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区、千提寺クルス山遺跡 1 区のキリシタン墓を比較した場合、類似点と相違点は下記の通りである。

類似点

①千提寺では墓域を区画する溝などの施設の存在は認められないが、独立した墓域を形成する点は千提寺西遺跡 5 区、千提寺市阪遺跡 2 区において類似する。

②主軸をそろえる墓が、列状に配置される。

③長方形墓で木棺に伸展葬で埋葬される。

④成人墓とみられる長方形墓と幼児・小児墓とみられる土壙墓が混在する状況は、千提寺西遺跡 5 区において類似する。

⑤千提寺西遺跡 5 区の長方形墓（ 4 土壙）の上部施設として確認した長方形の枠状にめぐる石組は、臼杵市下藤地区キリシタン墓の上部施設と類似する。

⑥千提寺市阪遺跡 2 区では、長方形墓の周辺でピット群ならびに角柱が検出されており、小礼拝堂な

らびに十字架の可能性が考えられる。遺構の内容は異なるものの下藤地区キリシタン墓でみられる施設に類似する。

相違点

①千提寺では墓域を区画する溝などの施設は認められない。

②キリシタン時代に位置付けられるキリシタン関連遺物は出土しなかった。東京駅八重洲北口遺跡、大分市府内町遺跡では、キリシタン関連遺物と断定はできないもののガラス小玉が出土している。千提寺では、千提寺西遺跡５区で「コンタツ」に類似するガラス玉が、千提寺市阪遺跡２区でガラス小玉が出土しているが、いずれも近世の潜伏キリシタンの時代に属するものである。

　他に、千提寺のキリシタン墓でみられる特徴は次の通りである

①千提寺では、いずれも墓域が狭小な尾根に立地するため、並列する墓は１～２基であり、基本的に直列する。

②墓域によって頭位の方向が異なる。

②千提寺西遺跡３・４区では、中世墓に重複してキリシタン墓が設けられる。

　高槻城キリシタン墓地は、「高山一族が高槻城下に造った墓地は有名になった。」とする宣教師の報告にみるとおり（ロペス・ガイ（井手勝美訳）1983)、おそらく当時最も洗練されたキリシタン墓地であったと想像できる。教会堂に隣接し、道によって区画され、列と向きをそろえて整然と墓が並ぶ状況が考えられる。一方、右近の領地ではあるが山間に位置する千提寺のキリシタン墓は、中世以来の村落の墓地に新たに設けられ（千提寺西遺跡３・４区)、しだいに各家の一族（＝信仰組織）の墓地がそれぞれの丘陵上に成立する（千提寺西遺跡５区・千提寺市阪遺跡２区・千提寺クルス山遺跡１区)。中世の墓地は単に死者を埋葬する場ということのみでなく、その後の追善供養に伴う儀礼の場であり、高槻城キリシタン墓地と千提寺にみるキリシタン墓は､その景観だけでなく､機能においても差異は大きい（小林 2014)。千提寺のキリシタン墓地は、山間部の村落におけるキリスト教受容時のキリシタンの様相を具体的に知ることができる貴重な資料である。

　千提寺から約 2.5 ㎞南へ山を降ったところに所在する栗栖山南墳墓群においても長方形墓が検出されており、キリシタン墓の可能性が指摘されている（市本・瀬戸 2001)。ここでも広範囲にひろがる中世墓のなかで列状に並ぶ長方形墓が検出されたが、キリシタン関連遺物の出土が無く、決めてに欠くためキリシタン墓についてはあまり語られなかった。キリシタン墓は副葬品をもたないことが特徴のひとつであり、なかなか特定しがたい遺構であるが、上部施設、土壙の形状や配置、埋葬方法、周辺の環境を含めて総合的に判断していく必要がある。これまでのキリシタン墓の調査成果に、今回の調査成果が加わることで、今後キリシタン墓の認識や調査研究が進捗することを期待したい。

〈参考文献〉

市本芳三・瀬戸哲也 2001「東クルス山中世墓」『日引』第１号

井藤暁子 2010「茨木キリシタン遺跡発見 90 周年」『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

茨木市史編さん委員会 2012『新修茨木市史』第一巻　通史Ⅰ

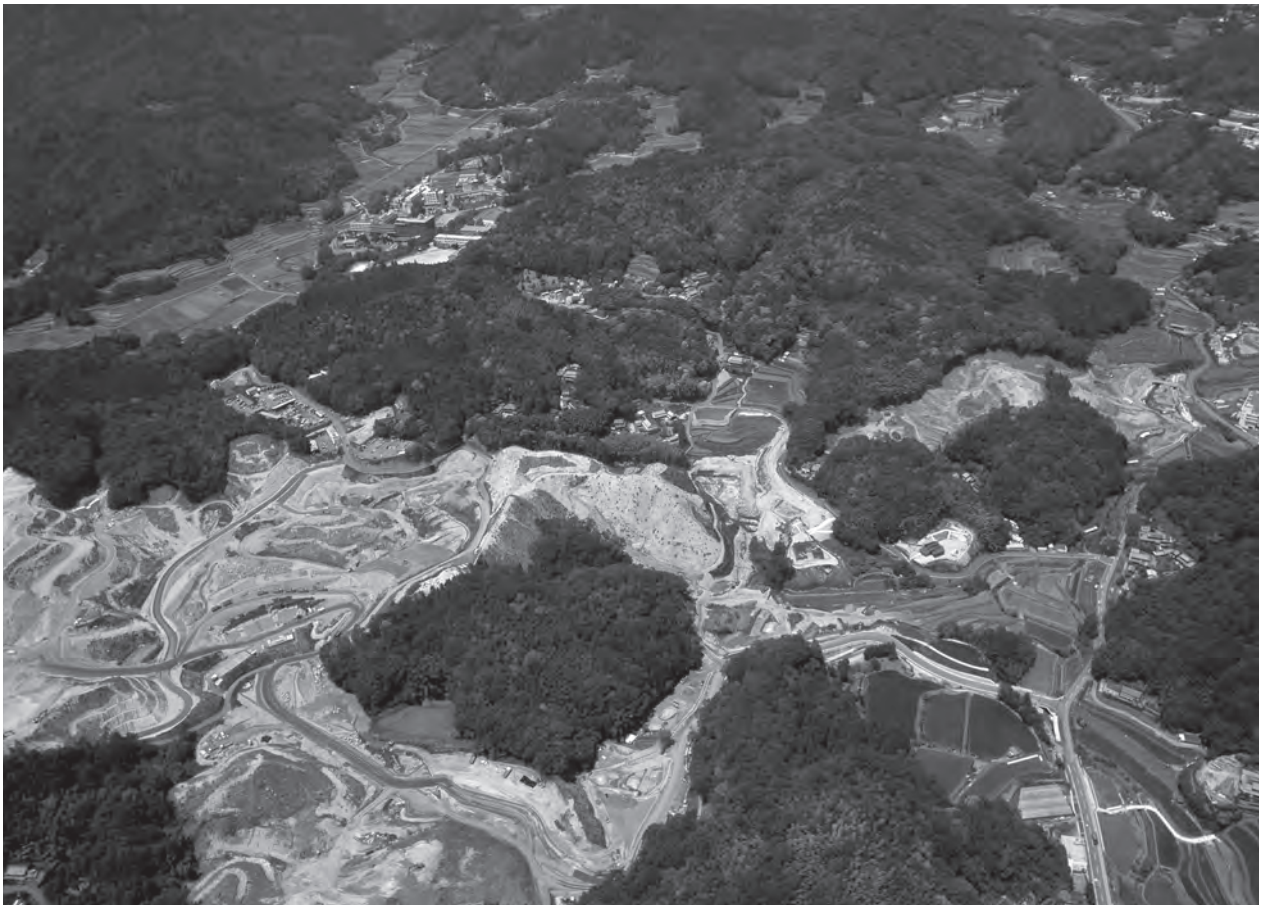
今野春樹ほか 2003『東京駅八重洲北口遺跡』森トラスト・千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会

今野春樹 2004「キリシタンの葬制」『キリシタン文化研究会会報』123　キリシタン文化研究会

今野春樹 2014「キリシタン考古学の到達点」『歴史考古学』第 68 号　歴史考古学研究会
臼杵市教育委員会 2013『大分県史跡下藤地区キリシタン墓地　現地説明会資料』
大石一久編 2012『南島原市世界遺産地域調査報告書　日本キリシタン墓碑総覧』
川村信三 2007「戦国および近世初期日本におけるキリスト教と民衆」『歴史評論』690
神田高士 2013「遺跡速報　大分県史跡　下藤地区キリシタン墓地の調査から」『月刊考古学ジャーナル』643　ニュー・サイエンス社
児嶋由枝 2014「聖地ロレートと茨木のキリシタン美術」『千提寺・下音羽のキリシタン遺物研究』長崎純心大学
五野井隆史 2012「キリシタンの葬礼と墓碑」『キリスト教文化研究所紀要』第 27 巻 1 号
小林義孝 2014「「礼幡」と「満所」の墓碑―河内キリシタンの痕跡―」『シンポジウム発掘！検証！キリシタン墓―高山右近とキリシタン―』（公財）大阪府文化財センター
（財）大阪府文化財調査研究センター 1998『小畑遺跡』
（財）大阪府文化財調査研究センター 1999『彩都（国際文化公園都市）周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』
（財）大阪府文化財調査研究センター 2000『栗栖山南墳墓群』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007『伏見城跡』
静岡県考古学 1997『静岡県考古学シンポジウム 1996 年度静岡県における中世墓』
白石太一郎 1993「奈良県宇陀地方の中世墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 49 集　国立歴史民俗博物館
高槻市教育委員会 1984『昭和 56・57・58 年度高槻市文化財年報』
高橋公一ほか 2001『高槻城キリシタン墓地』高槻市教育委員会
立原翠軒 1928「吉利支丹法服諸器物」『珍書大観吉利支丹叢書』大阪毎日新聞社編
田中裕介 2007「第 6 章　総括」『豊後府内 6』大分県教育庁埋蔵文化財センター
田中裕介 2008「イエズス会豊後府内教会と付属墓地―戦国時代のキリシタン墓地の一例―」『戦国大名大内氏と豊後府内』高志書院
中世葬送墓制研究会 2015『第 8 回中世葬送墓制研究会資料　石造物の転用と中世墓の終焉』中世葬送墓制研究会
中世墓資料集成研究会 2006『中世墓資料集成　近畿編（1）・（2）』
西村　貞 1958『南蛮美術』講談社
藤澤典彦 1990「墓地景観の変遷とその背景」『日本史研究』330 号
細川涼一 1987『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館
三重県埋蔵文化財センター 2006『浄土近世墓地調査報告－近世墓地の発掘調査及び周辺文化財調査－』
水戸市史編纂委員会 1968『水戸市史』中巻（一）
峰岸純夫 1970「村落と土豪」『講座日本史 3 封建社会の展開』東京大学出版会
森田克行 1986「岡本山古墓群」『歴史手帖』14 巻 11 号
山口市教育委員会 1988『瑠璃光寺跡遺跡　中世墓群の調査』
吉井敏幸 1993「中世群集墓遺跡からみた惣墓の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 49 集　国立歴史民俗博物館
ロペス・ガイ（井手勝美訳）1983『キリシタン文化研究シリーズ 24　キリシタン時代の典礼』キリシタン文化研究会
Hubert Cieslik1976a「高山右近領の山間部におけるキリシタン―布教、司牧上の一考察―」『キリシタン研究』第 16 輯　キリシタン文化研究会
Hubert Cieslik1976b「キリシタンと葬礼」『キリシタン研究』第 5 輯　キリシタン文化研究会

写　真　図　版

1．遠景（西から）



2．遠景（南から）

図版 2

1．遠景（北東から）

2．遠景（南西から）

１．３・４区東西断面西端部（南東から）

２．３・４区東西断面山頂部（南西から）

３．３・４区東西断面山頂東半部（南西から）

４．３・４区東西断面東端部（南西から）

５．３・４区南北断面北半部（南東から）

６．３・４区南北断面南半部（南東から）

７．５区東西断面１西端部（北西から）

８．５区東西断面１山頂東半部（南東から）

千提寺西遺跡５・６区　基本層序

図版 4

１．５区東西断面１東端部（南西から）

２．５区東西断面２西半部（南西から）

３．５区東西断面２東半部（南から）

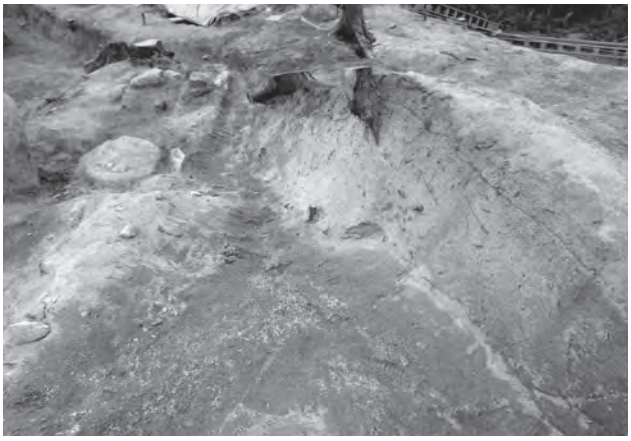
４．５区南北断面北端部（北東から）

５．５区南北断面中央部（南東から）

６．５区南北断面南半部（南東から）

７．６区北東一南西断面北東部（南東から）

８．６区北東一南西断面山頂南西部（東から）



１．６区北東ー南西断面南西部（北東から）

２．６区北西ー南東断面北西部（南東から）

３．６区北西ー南東断面南東部（西から）

４．２区北西ー南東断面北西端部（北東から）

５．２区北西ー南東断面北西部（北東から）

６．２区北西ー南東断面中央部（東から）

７．２区北西ー南東断面南東部（北東から）

８．２区北西ー南東断面南東端部（南東から）

千提寺市阪遺跡２区・千提寺クルス山遺跡１区　基本層序

図版 6

１．２区南西ー北東断面南西部（南西から）

２．２区南西ー北東断面北東部（南西から）

３．１区南北断面北端部（西から）

４．１区南北断面北半部（西から）

５．１区南北断面中央部（東から）

６．１区南北断面南半部（東から）

７．１区南北断面南端部（東から）

８．１区東西断面西半部（南から）

１．１区東西断面東半部（北東から）

２．11－１－１区南西ー北東断面南西部（南から）

３．11－１－１区南西ー北東断面中央部（東から）

４．11－１－１区南西ー北東断面北東部（南から）

５．11－１－２区東西断面（南から）

６．11－１－３区東西断面上層（東から）

７．11－１－３区東西断面下層（南から）

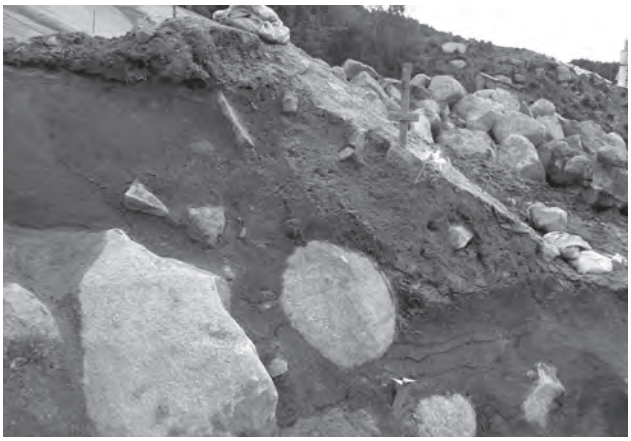
８．11－１－３区東西断面下層（東から）

千提寺西 11 －１－４区・千提寺西遺跡１・２・７区　基本層序

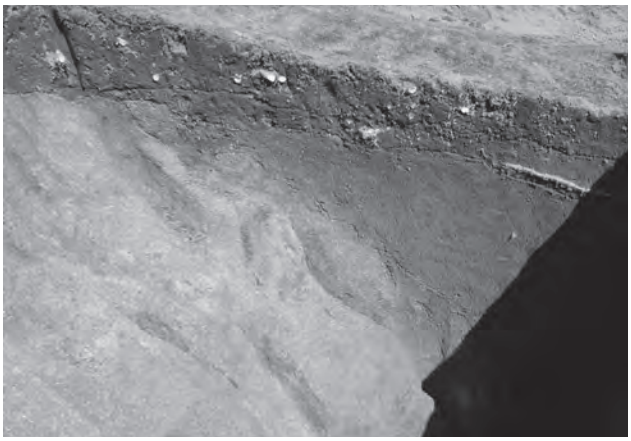
１．11 －１－４区東西断面（南西から）

２．１区南北断面１（西から）

３．１区南北断面２北半部（西から）



４．１区南北断面２南半部（西から）



５．２－１区東西断面（東から）

６．２－２区東西断面（南西から）

７．７区北西ー南東断面上層（南から）

８．７区北西ー南東断面下層（南から）

１．８区南北断面（南西から）

２．９区東西断面西半部西側（西から）

３．９区東西断面西半部東側（西から）

４．９区東西断面中央部（西から）

５．９区東西断面東半部（南西から）

６．10 区南北断面（北西から）

７．１区東西断面西端部（南西から）

８．１区東西断面西半部（南西から）

日奈戸遺跡１～３区・千提寺市阪遺跡１区　基本層序

１．１区東西断面中央部（南西から）

２．１区東西断面東半部（南西から）

３．１区東西断面東端部（南西から）

４．２区南北断面（東から）

５．３区南北断面南半部（南東から）

６．３区南北断面北半谷部（南東から）

７．１区東西断面西端部１（南から）

８．１区東西断面西端部２（南東から）

１．１区東西断面西端部３（上層除去後）（南東から）

２．１区東西断面西端部４（南西から）

３．１区東西断面中央部（南西から）

４．１区東西断面中央部第３～６層（南から）

５．１区東西断面東端部１（南西から）

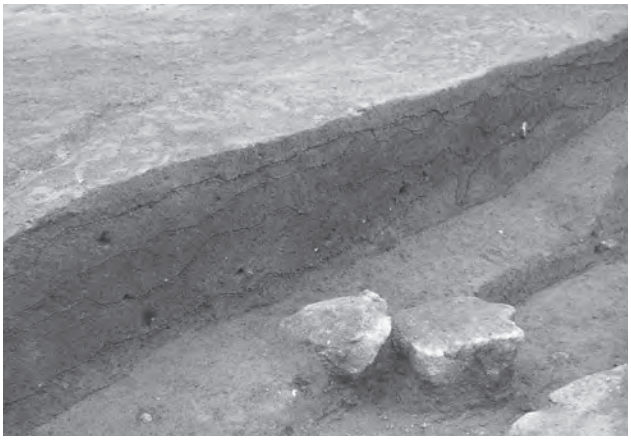
６．１区東西断面東端部２（ｂ－ｃ間）（南西から）

７．３区東西断面（北東から）

８．２区南北断面北端部（南東から）

千提寺クルス山遺跡２区　基本層序

１．２区南北断面北半部（南東から）



２．２区南北断面北半部第３層（東から）

３．２区南北断面南半部（北東から）

４．２区南北断面南端部（北東から）

５．２区東西断面西半部（西から）

６．２区東西断面西半部（西から）

７．２区東西断面東半部（東から）

８．２区東西断面東半部第３層（南から）

1．遠景（南から）

2．近景（南から）

１．３区第１面　全景（南西から）

２．３区第１面　全景（西から）

１．３・４区第２面　全景（南西から）

２．３・４区第２面　全景（西から）

1．３区第２面（南西から）

2．３区第２面西側平坦面
（南西から）

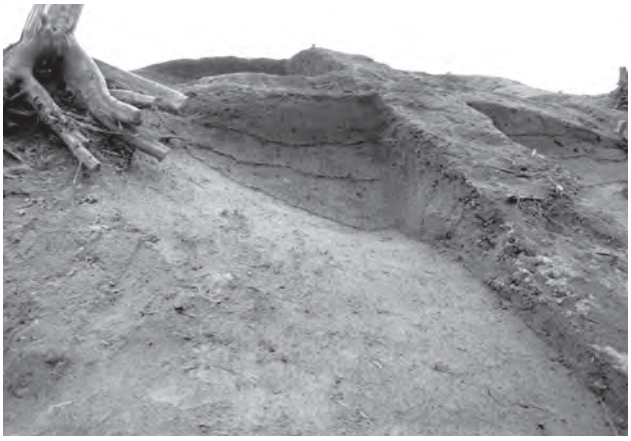
3．３区第２面西側平坦面
（北東から）

１．３区第２面山頂部
（南西から）

２．３区第２面山頂部（東から）

３．４区第１・２面　全景
（南西から）

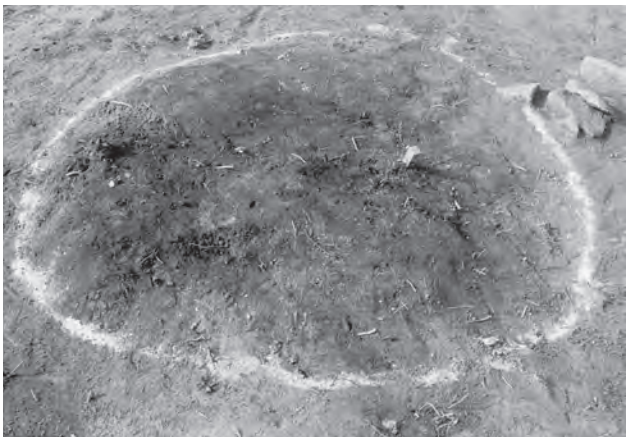
1．3区第1面22土坑（北東から）


2．3区第1面22土坑　断面（南西から）

3．3区第1面22土坑　断面（北東から）

4．3区第1面22土坑（南西から）

5．3区第1面22土坑（北から）


6．3区第1面23土坑（北から）

7．3区第1面23土坑（南から）

8．3区第1面29ピット　断面（東から）

1．３区第１面 50 土坑　断面（南から）

2．３区第１面 57 土坑　断面（東から）

3．３区第１面 61・62 土坑　断面（北から）

4．３区第１面 61・62 土坑（西から）

5．３区第１面 64 土坑　断面（東から）

6．３区第１面 64 土坑　断面（南から）

7．３区第１面 65 ピット　断面（東から）

8．３区第１面 27 石仏（南から）

1．3区第1面66・105石仏・石組（西から）

2．3区第1面66・105石仏・石組下層（南から）

3．3区第1面67石組下層（南西から）

4．3区第1面67石組（東から）

5．3区第1面68石組（南から）

6．3区第1面68石組下層（南西から）

7．3区第1面69石組（南から）

1．３区第１面 99 五輪塔（南から）

2．３区第１面 100 石組（西から）

3．３区第１面 100 石組下層石組（東から）

4．３区第１面 100 石組下層石仏（南から）

5．３区第１面 102・103 石組（西から）

6．３区第１面 102 ～ 104 石組下層石組（南から）

7．３区第１面 102 ～ 104 石組下層石組（南から）

1．3区第1面126石組（南から）

2．3区第1面126石組（南から）

3．3区第1面126石組下層（西から）

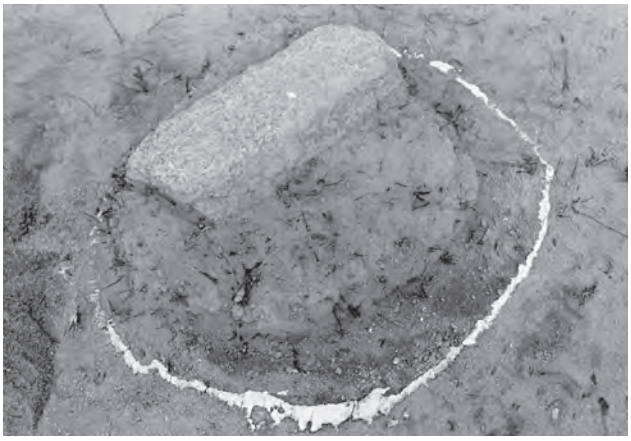
4．3区第1面133石仏（東から）

5．3区第1面139石仏（東から）

6．3区第1面168石仏（西から）

7．3区第1面168石仏（西から）

8．3区第1面169一石五輪塔（西から）


1．３区第１面 172 石仏（南から）

2．３区第１面 173 石仏（南から）

3．３区第１面 217・218 五輪塔（西から）

4．３区第１面 219 石仏（南から）

5．３区第１面 220 五輪塔（南西から）

6．３区第１面 237 石仏（南から）

7．３区第１面山頂東側墓群の上部施設（東から）

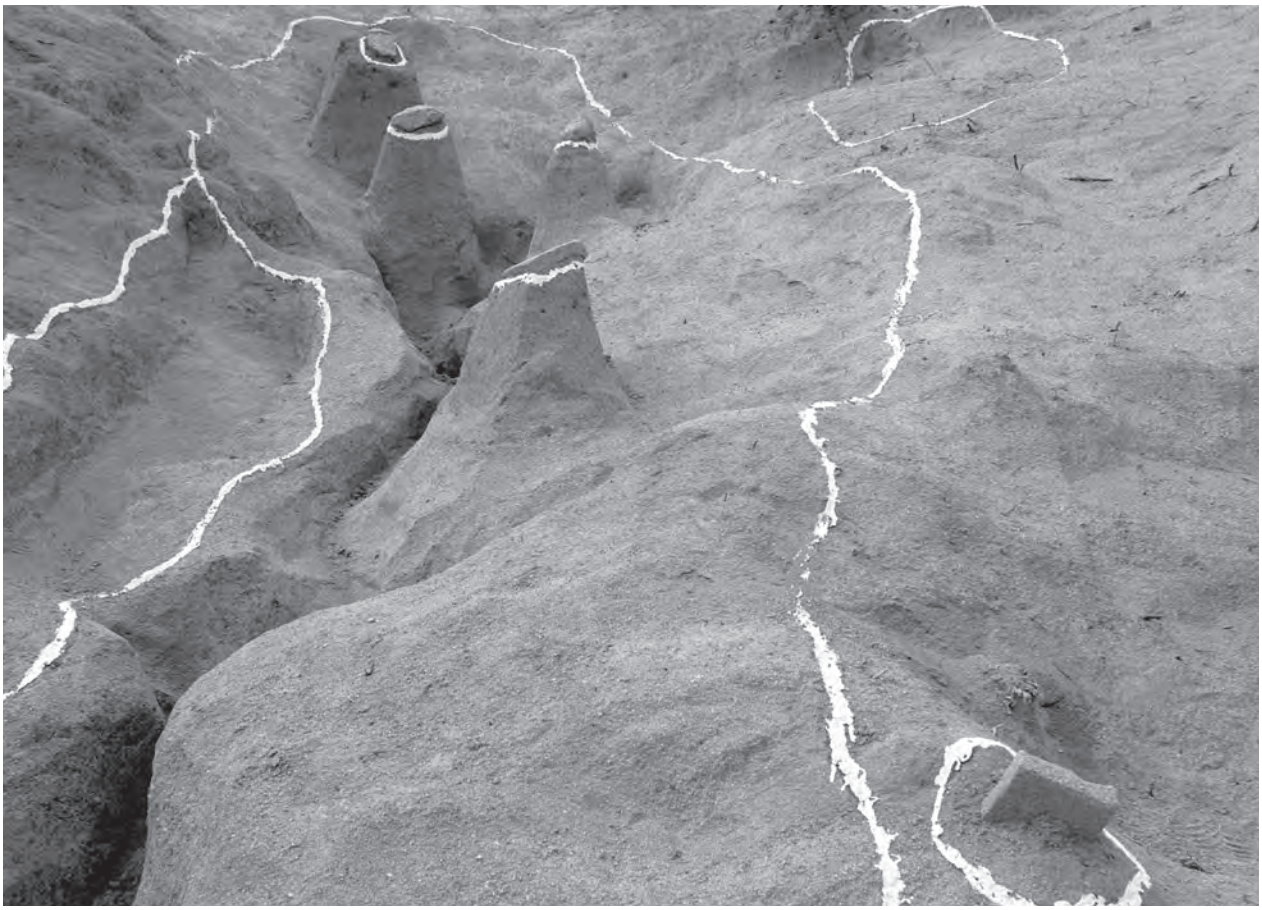
8．４区第１面谷（西から）

1．４区第１面 221 ～ 225 石仏・五輪塔（南西から）

2．４区第１面谷～谷頭（南から）

3．４区第１面 226・227 五輪塔（南から）

4．４区第１面 236 石仏（南から）



5．４区第１面 229 ～ 233 五輪塔・石仏（南から）

1．３区第１・２面 40 溝　断面（東から）

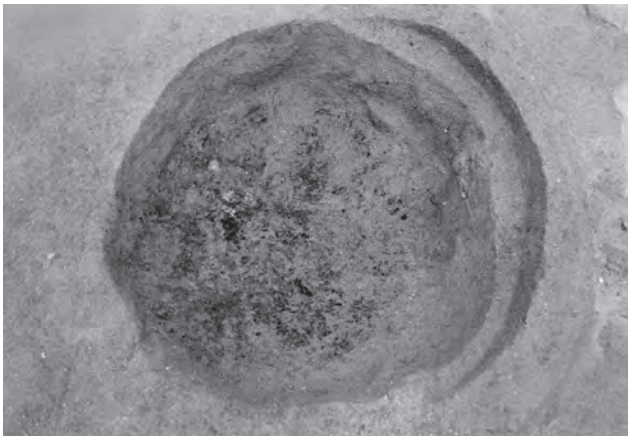
2．３区第１・２面 41 溝　断面（東から）

3．３区第２面１堀（北から）

4．３区第２面１堀　断面（南から）

5．３区第２面１堀　全景（西から）

1．４区第２面 185 土坑　断面（東から）



2．４区第２面 185 土坑（東から）

3．４区第２面 187 土坑　断面（東から）

4．４区第２面 188 土坑　断面（東から）

5．４区第２面 190 落込み　断面（東から）

6．４区第２面 190 落込み内ピット　断面（西から）

7．４区第２面 186 溝　断面（東から）

8．４区第２面 189 溝　断面（東から）

１．遠景（南から）

２．近景（南から）

１．西半　全景（西から）

２．西半　全景（西から）

１．西半　全景（南西から）

２．１焼土坑　断面（北東から）

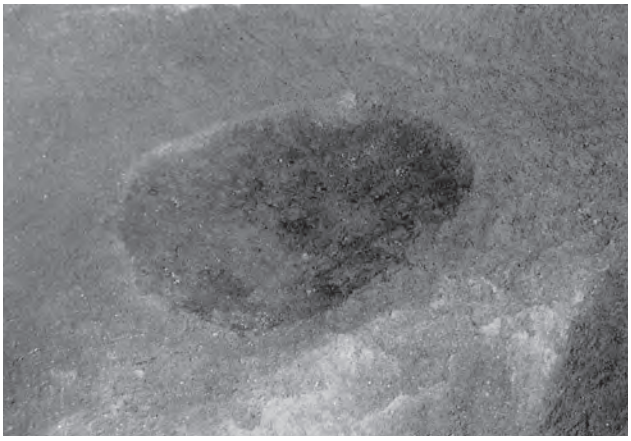
３．１焼土坑（北東から）

４．１焼土坑（東から）

５．１焼土坑　断面（東から）

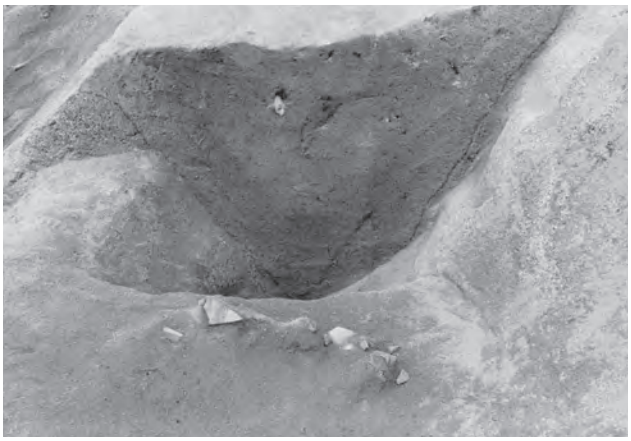
１．25 焼土坑（北西から）

２．25 焼土坑（北から）



３．20 土坑（西から）

４．19 土坑（西から）



５．３溝　断面（東から）

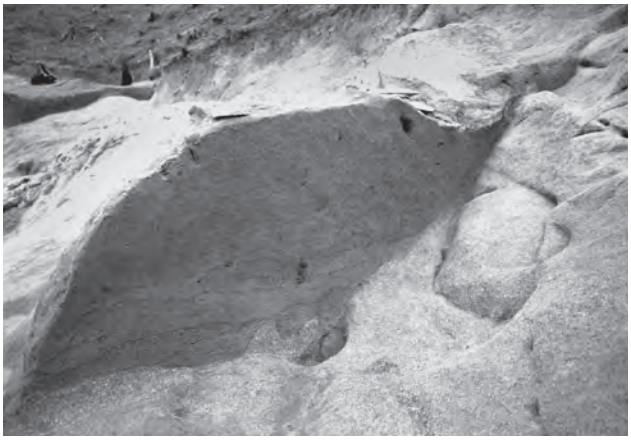
６．３溝　断面（東から）

７．23 檀状遺構（南東から）

８．２集石遺構（北東から）

１．２集石遺構（南西から）

２．２集石遺構（南西から）



３．２集石遺構　断面（東から）

４．17 道路状遺構西端（ａ－ａ′）　断面（東から）

５．17 道路状遺構（西から）

６．74・75 土坑　断面（北東から）

７．82・83・84 土坑（南から）

1．4・5・6・12・13 土坑（東から）

2．4・5・6・12・13 土坑（西から）

3．4・5・6・12・13 土坑（西から）

１．遠景（南西から）

２．近景（南西から）

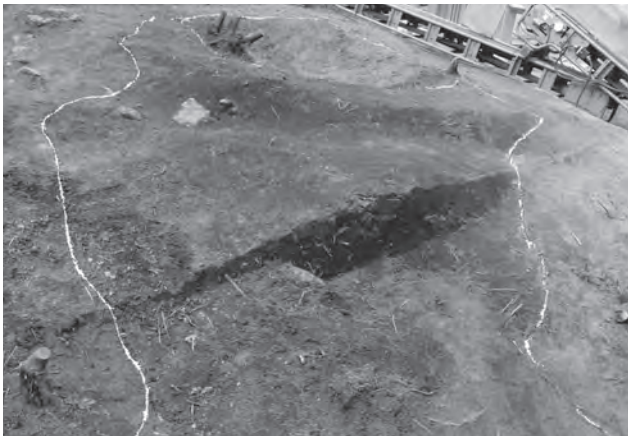
１．調査前　全景（北から）

２．第１面調査区南半　全景（北東 から）

１．第２面調査区北半　全景（南西から）

２．第２面調査区南半（北東から）

1．第１面１土坑調査前骨片散在（北から）



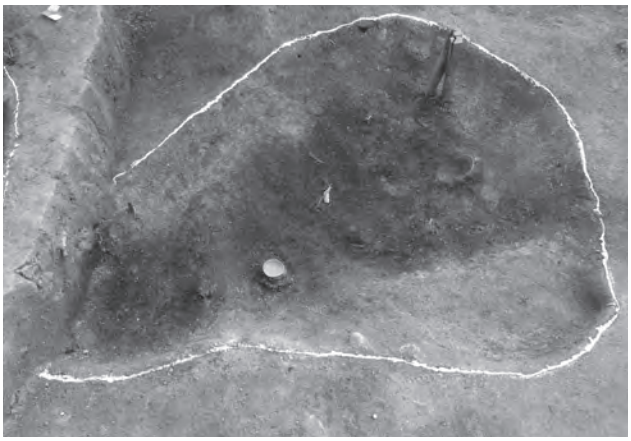
2．第１面１土坑（南から）

3．第１面１土坑　断面（北から）

4．第１面１土坑（西から）

5．第１面７土坑（東から）

6．第１面７土坑（西から）



7．第２面 14 土坑（北から）

8．第２面 14 土坑（東から）

１．近景（南東から）

２．近景（東から）

1．全景（北西から）

2．全景（北西から）

１．２土坑（北東から）

２．８土坑　断面（北から）

３．７ピット　断面（南東から）

４．96 柱痕（南西から）

５．遺構　検出状況（北西から）

1．全景（南東から）

2．全景（東から）

3．83 溝　断面（南から）

4．炭化物堆積層　断面（北から）

1．遠景（西から）

2．北側　全景（北から）

千提寺クルス山遺跡１区

１．中央部　全景（北から）

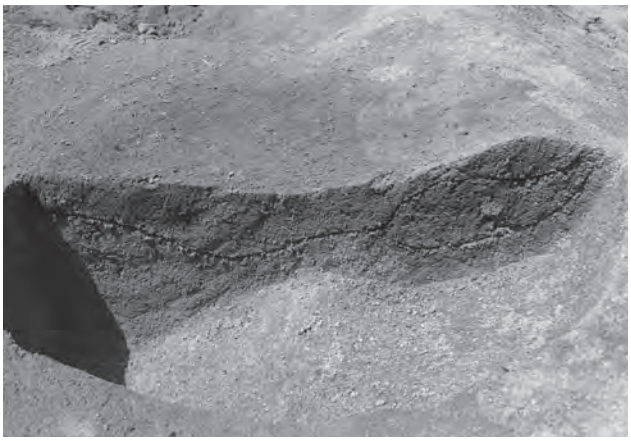
２．南側　全景（北から）

1．26 土坑　断面（南から）

2．26 土坑（東から）

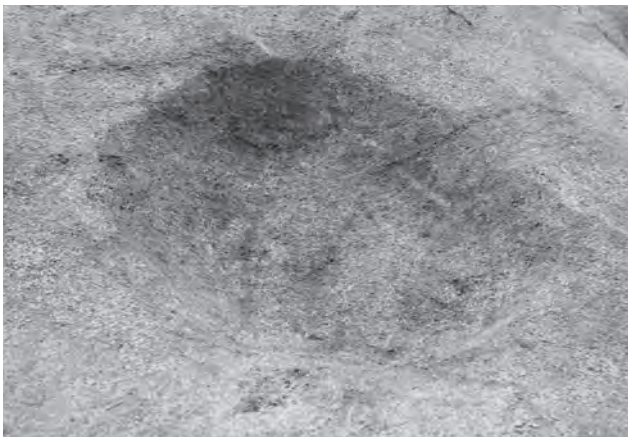
3．32 ピット　断面（南から）

4．23 土坑　断面（南から）


5．24 土坑　断面（南から）

6．24 土坑（北から）

7．25 土坑　断面（南から）


8．25 土坑（北から）

1．遠景（北から）

2．近景（北から）

1．第２面　全景（東から）

2．第２面　全景（西から）

1．第 2 面 27 ピット　断面（東から）

2．第 2 面 29 ピット　断面（東から）

3．第 2 面 30 ピット　断面（東から）

4．第 2 面 18 土坑　断面（北から）

5．第 2 面 22 土坑　断面（北から）

6．第 2 面 20 土坑　断面（南から）

7．第 2 面 17 土坑　断面（東から）

8．第 2 面 11 溝　断面（北から）

1．近景（東から）

2．第 2 面　全景（南から）

3．第 2 面 45 土坑（北東から）

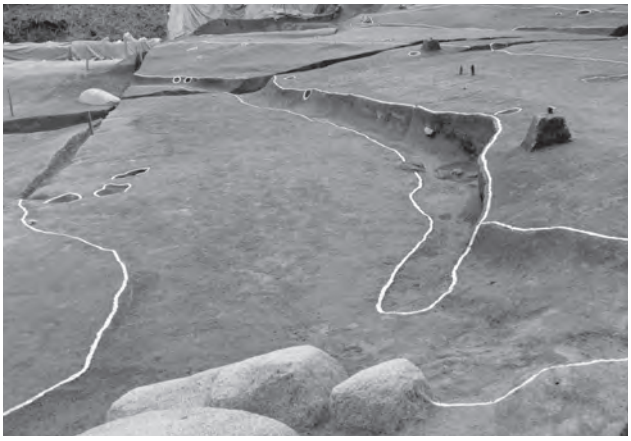
4．第 2 面 35 溝　断面（南から）

1．11－１－３区　近景
（東から）

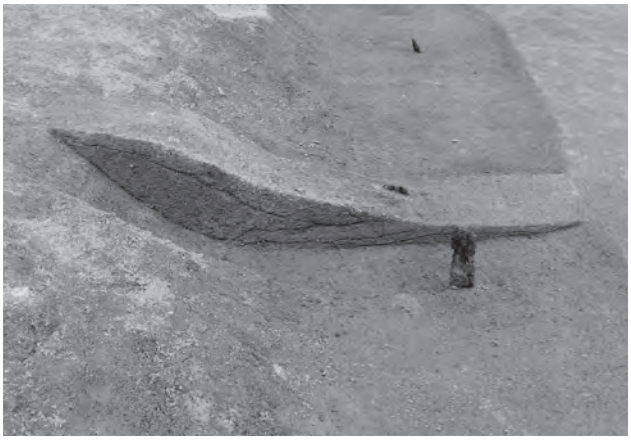
2．11－１－４区　近景
（東から）

3．11－１－３区第２面　全景
（西から）

1．11 －１－３区第２面 21 ピット周辺遺構（西から）


2．11 －１－３区第２面 10 溝（北から）

3．11 －１－４区第２面　全景（北西から）


4．11 －１－４区第２面１溝　断面（南から）

5．11 －１－３区第３面　全景（北西から）

6．11 －１－３区第３面 54 ピット（南から）

7．11 －１－３区第３面 58 ピット（南から）

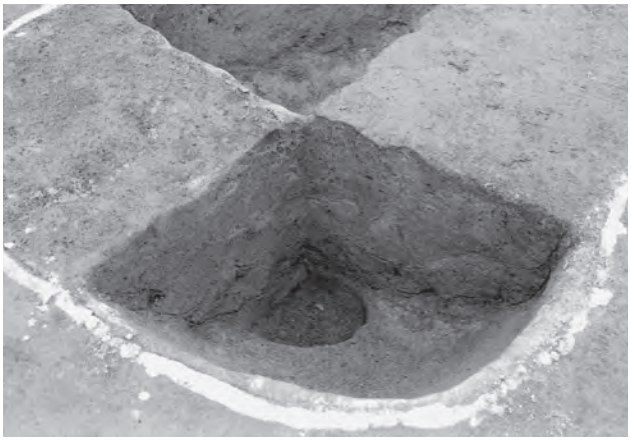
8．11 －１－４区第３面　全景（北から）

1．全景（南から）

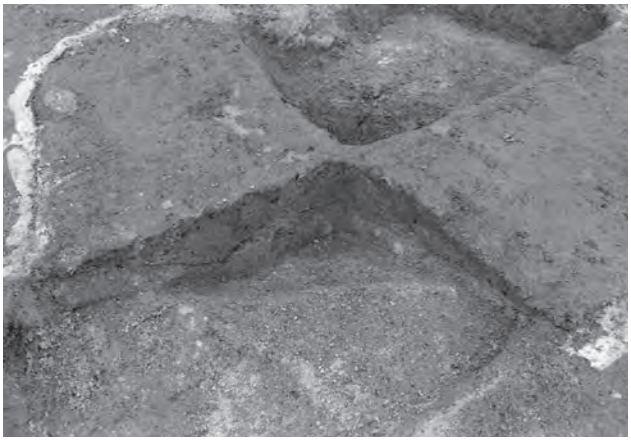
2．全景（南から）

1．全景（西から）

2．石垣（西から）

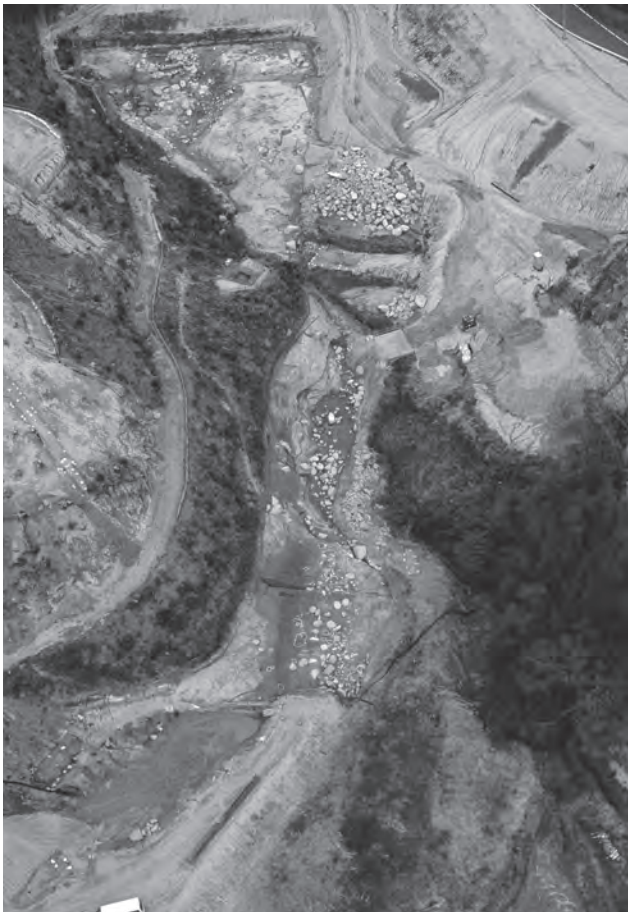


3．57 土坑　断面（北西から）



4．57 土坑　断面（南東から）

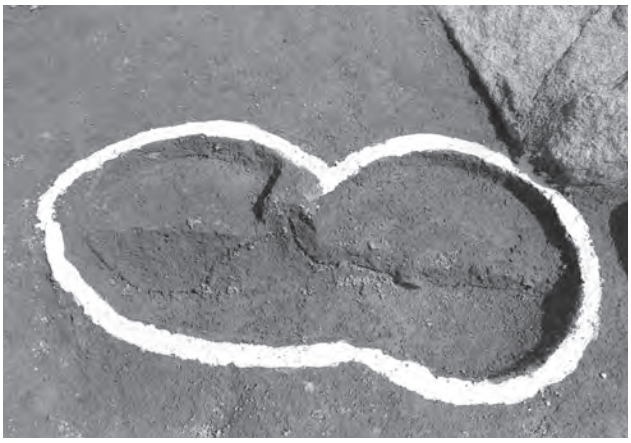
5．74 土坑（西から）



1．近景（南から）

2．全景（南から）

3．12 ピット　断面（西から）



4．15・16 ピット　断面（南から）

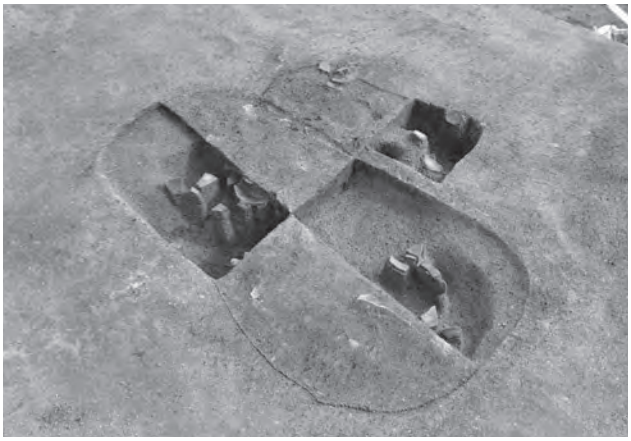
5．18 土坑　断面（南から）

6．ピット　完掘状況（北西から）

１．調査区　近景（西から）

２．第２面　全景（南東から）

1．第２面　全景（南から）



2．第１面石垣周辺土器群（南から）

3．第１面石垣周辺土器群（南から）

4．第２面ピット（南から）

5．第２面 52 土坑　断面（北から）

１．調査前　全景（西から）

２．第２面　全景（南から）

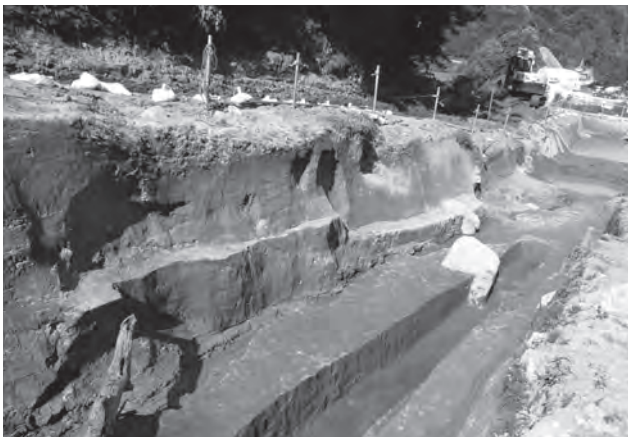
1．第２面西側　全景（西から）

2．第２面中央部　全景（西から）

3．第２面東側　全景（西から）

4．第３－２面西側　全景（西から）

5．第３－２面中央部　全景（西から）



6．第３－２面東側　全景（西から）

7．第３－２面西側　銭貨出土状況（東から）

8．第３－３面西側　土師器出土状況（北から）

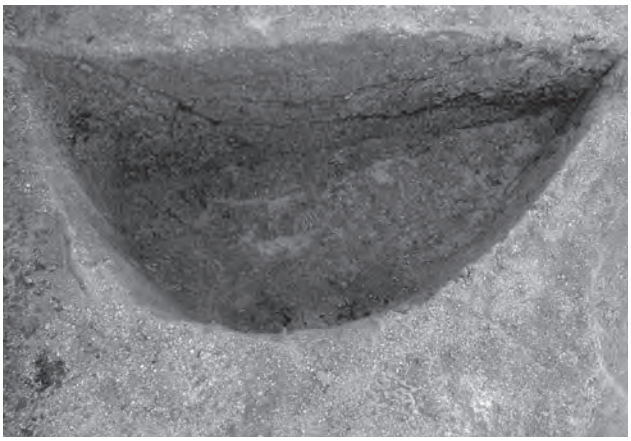
1．調査前　全景（南から）

2．北側　全景（北から）

3．中央部　全景（北から）

4．南側　全景（北から）

5．南側土坑（北から）


6．1 土坑　断面（南から）

7．2 土坑　断面（南から）

8．3 土坑（東から）

１．近景（東から）

２．１区第２面西半（東から）

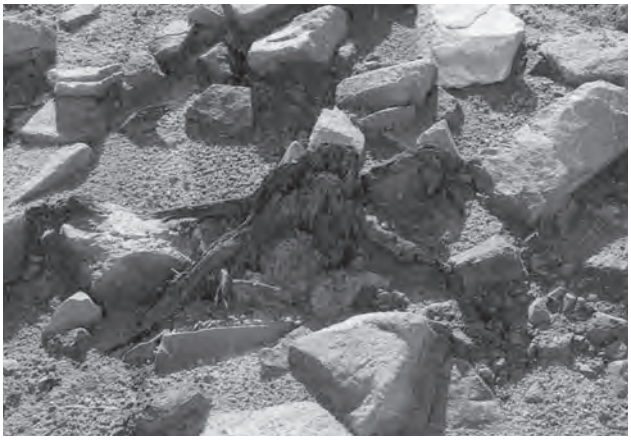
３．１区第２面東半（北東から）

４．１区第２面　全景（北東から）

１．１区第２面 14・19 溝（南から）

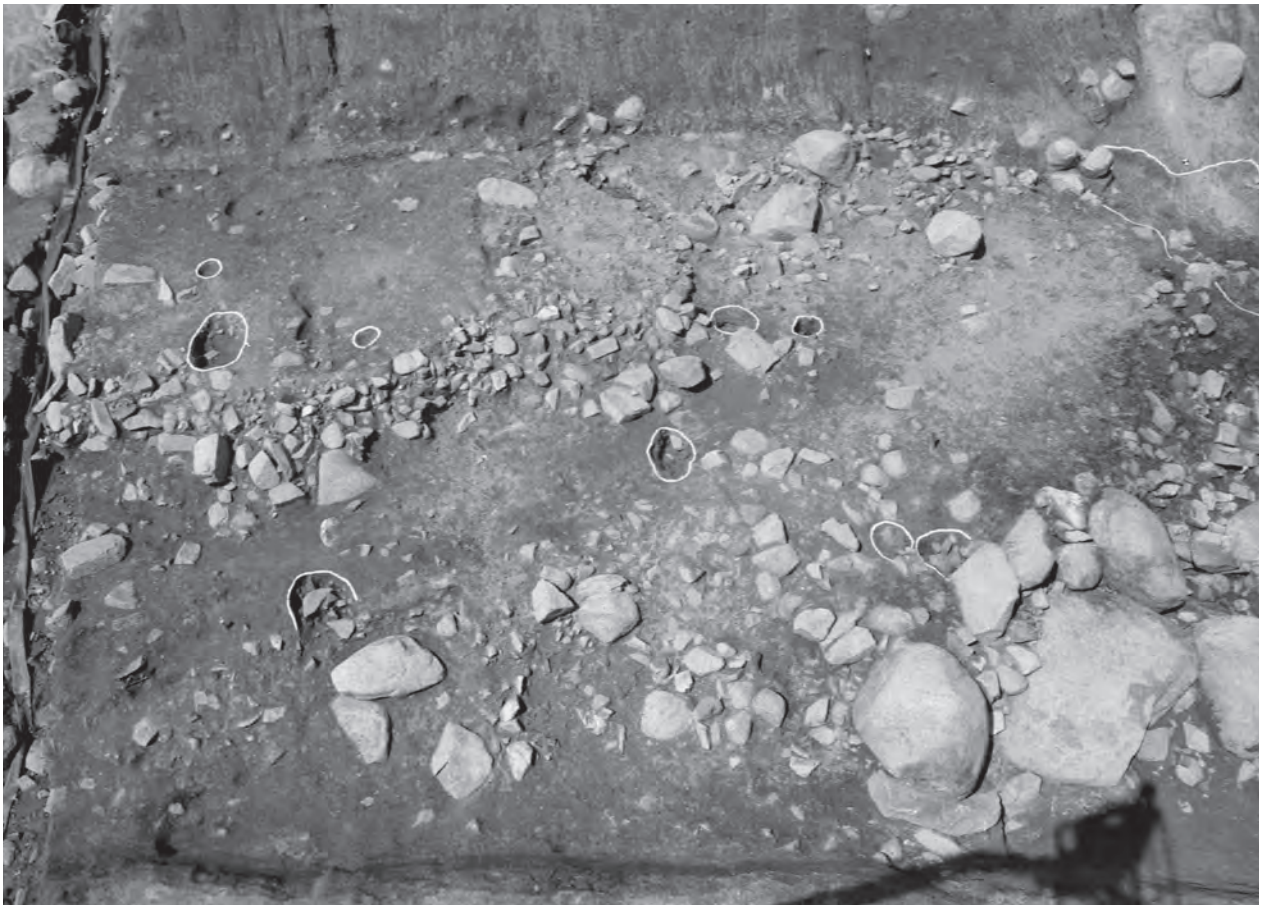
２．１区第２面 15 焼土（南から）

３．１区第２面５土坑　断面（南から）



４．１区第２面立木（東から）

５．２区第２面　全景（南東から）



１．２区第２面　全景（東から）

２．２区第２面 22 ピット（東から）

３．３区第２面谷部（南から）

４．３区第２面　全景（南から）

１．３区第２面谷部　全景（東から）

２．３区第２面谷部　断面
（北から）

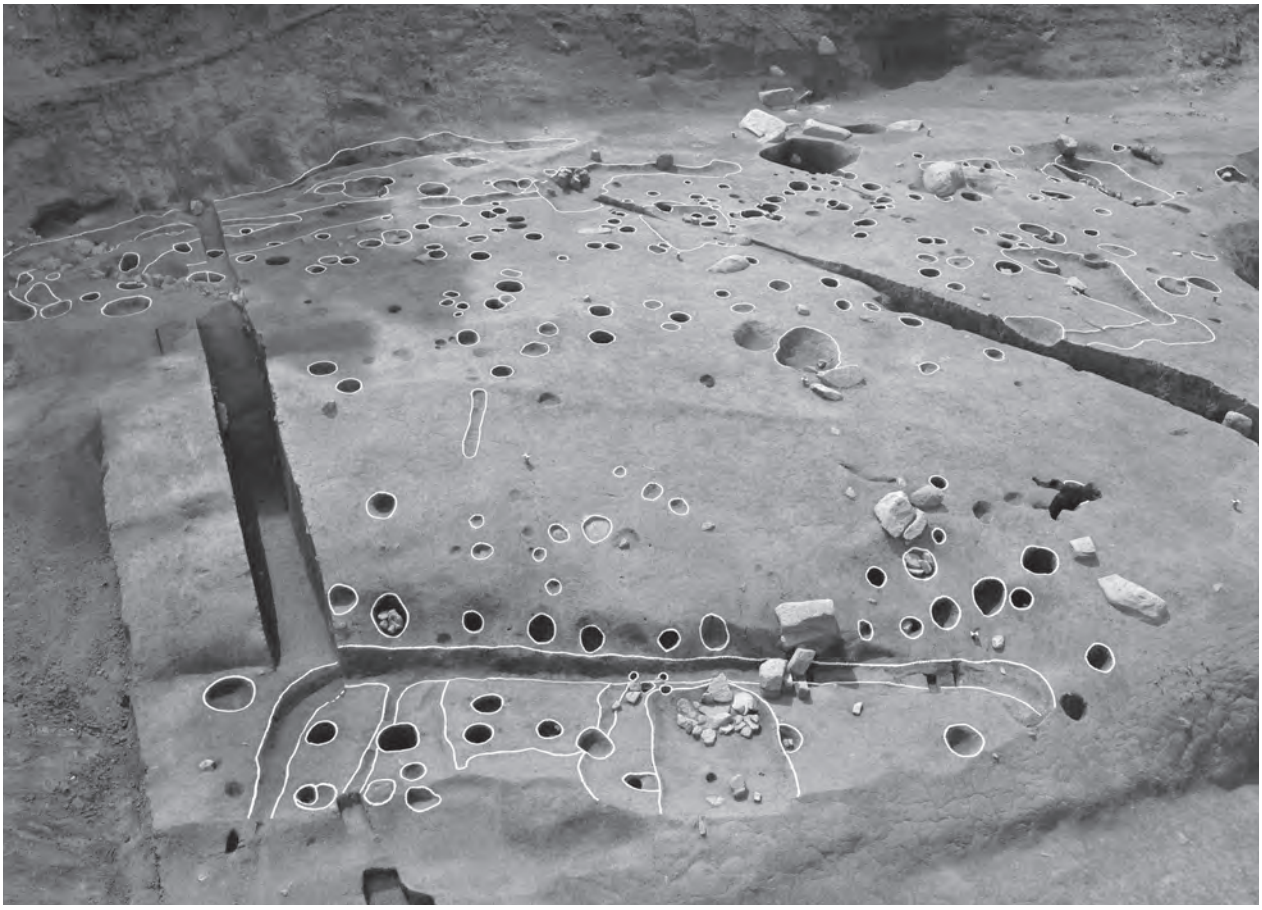
３．２区第３面１落込み　断面
（北から）

1．近景（東から）

2．近景（南東から）

1．第２面　全景（東から）

2．第２面　全景（南から）



１．第２面建物群　全景（東から）

２．第２面建物群　全景（南から）

１．第２面　全景（北東から）

２．第２面建物　全景（北から）

1．第３面　全景（東から）

2．第３面西半　全景（南東から）

１．第３面東半　全景（東から）

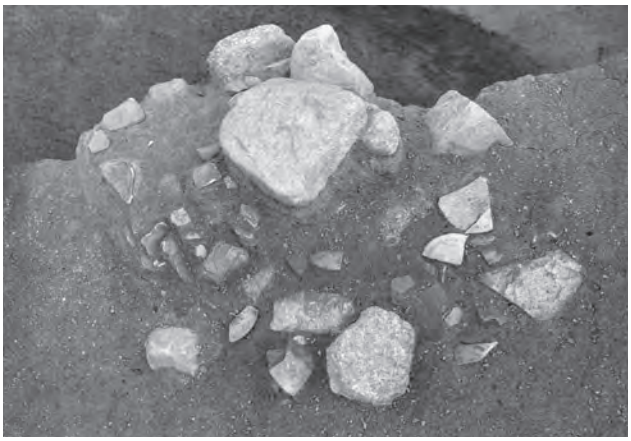
２．第４－２層除去面　全景（北から）

1．第１面土坑群（北西から）

2．第２面耕作痕（南から）

3．第２面 121 石器（南から）

4．第３層崩落土中 119 土器群（南から）


5．第３層崩落土中 119 土器群（北から）

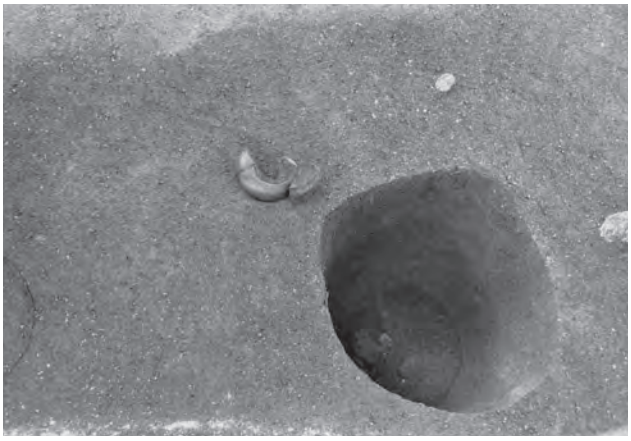
6．第２面建物１　249 ピット石（東から）

7．第２面建物１　328 ピット石（東から）

8．第２面建物１　325 ピット焼土（南から）

1．第２面建物１　122 焼土（南から）

2．第２面建物１　326 土坑（南から）


3．第２面建物１　342 落込み（南から）

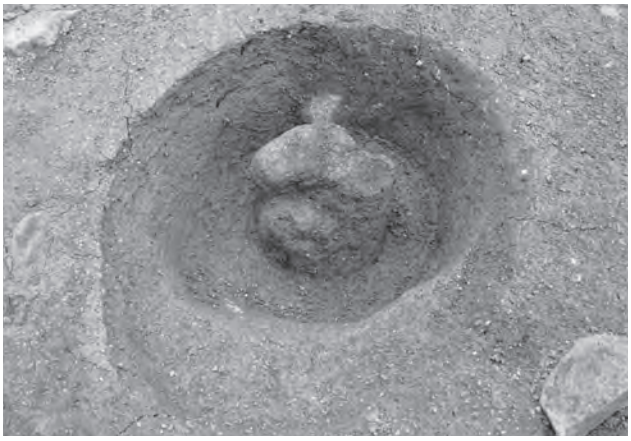
4．第２面建物１　318 溝（東から）

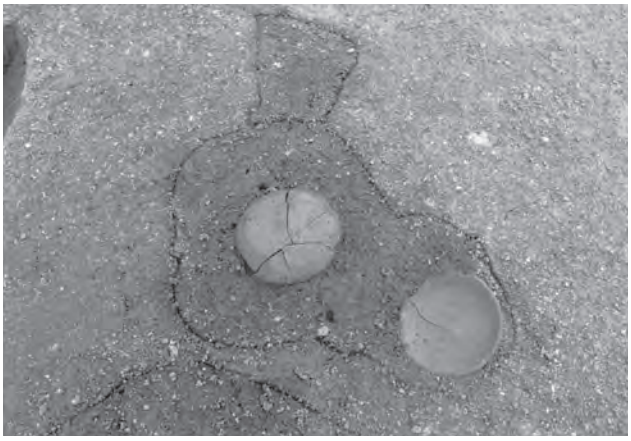
5．第２面建物２　336 土器（東から）

6．第２面建物２　21 溝（東から）

7．第２面建物３　213 ピット　断面（南から）

8．第２面建物３　219 ピット（南から）

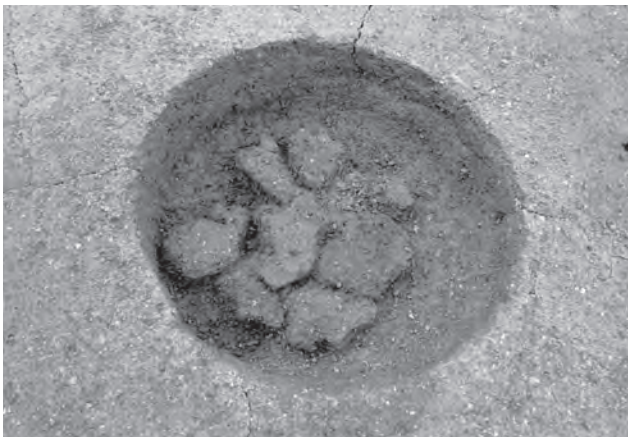

1．第２面建物３　234 ピット焼土（南から）

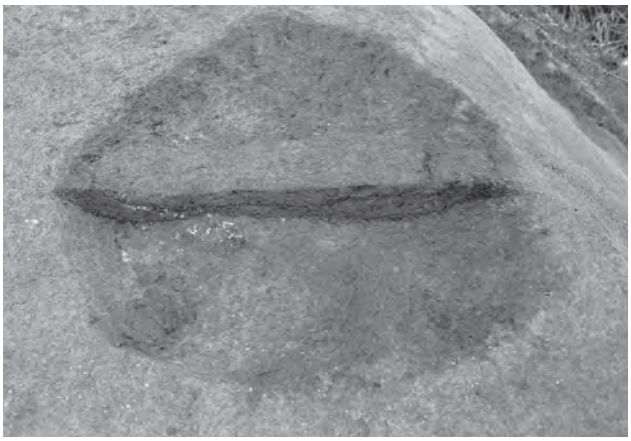

2．第２面建物４　183 ピット上面（南から）

3．第２面建物４　183 ピット下面（南から）

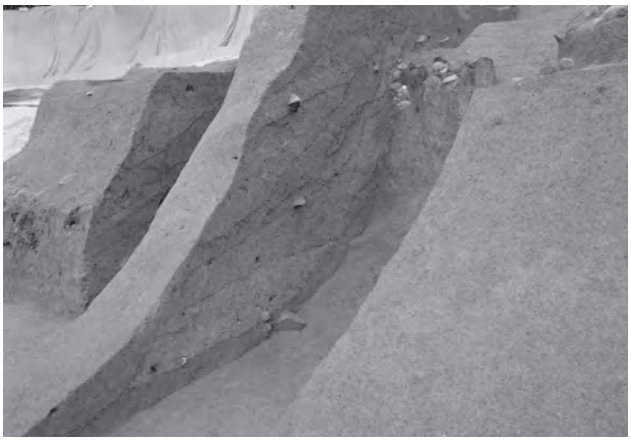
4．第２面建物４　184 ピット（南から）

5．第２面建物４　208 ピット（南から）


6．第２面建物４　294 ピット焼土（南から）


7．第２面 248 土壙　断面（南から）

8．第２面水田 335 ピット出土瓦器（西から）

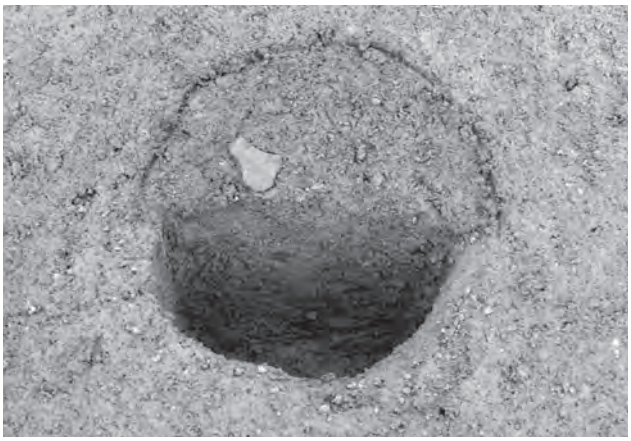

1．第３層盛土中土器群（北から）

2．第３層盛土中土器群（北東から）

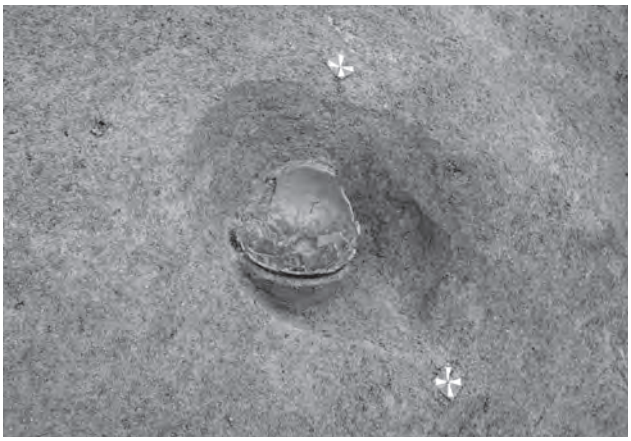
3．第３層盛土中土器群（北西から）

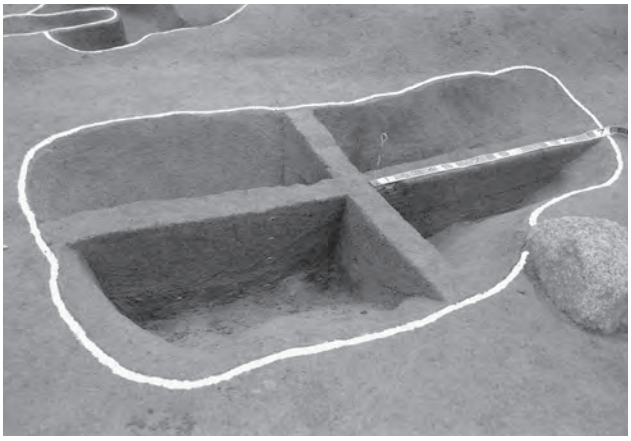
4．第２面建物２南端（北東から）

5．第２面建物１南端（南から）


6．第２面建物５　85 ピット　断面（東から）

7．第２面建物５　62 土坑（北西から）


8．第２面建物５　61 土坑（南東から）


1．第３面 350 土坑（東から）

2．第３面 357 土坑（東から）

3．第３面 352 土坑　断面（北から）

4．第３面 346 落込み（東から）

5．第３面 346 落込み　断面（西から）

6．第３面 346 落込み（南西から）

7．第３面 361 落込み（南から）

8．第３面 361 落込み（東から）

１．全景（南東から）

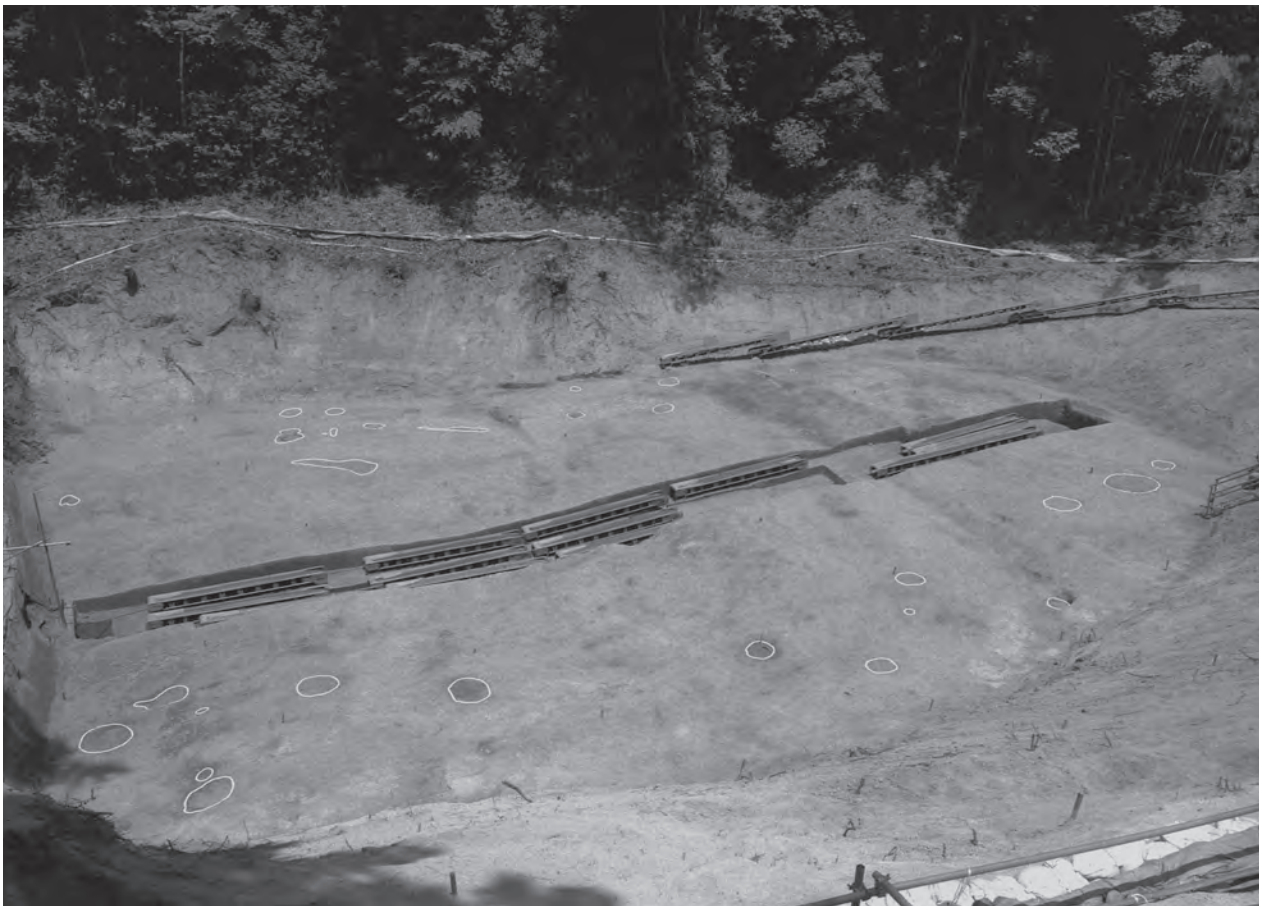
２．１焼土坑　断面（北西から）

３．１焼土坑（北西から）

４．２焼土坑　断面（北東から）

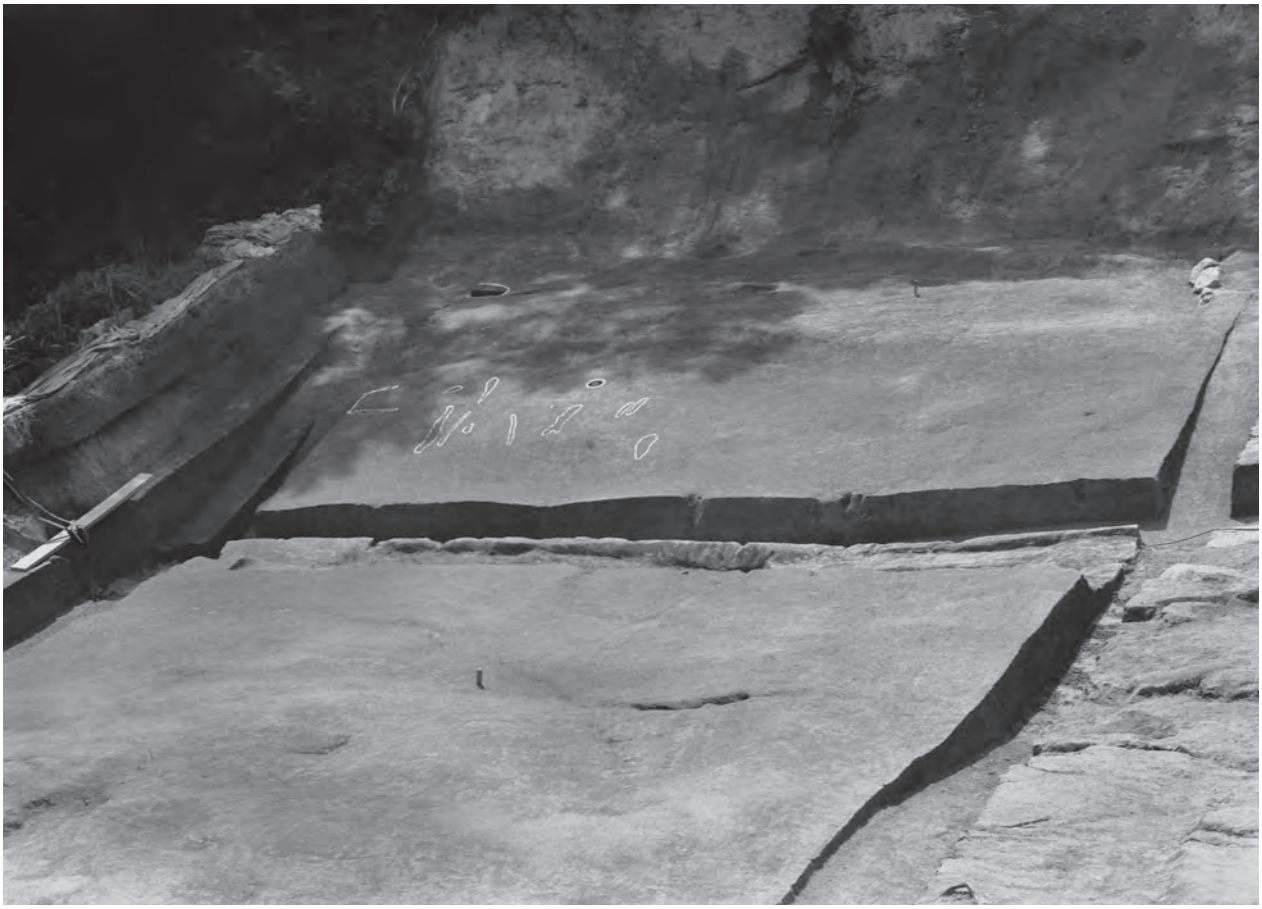
５．２焼土坑（北東から）

1．遠景（南から）

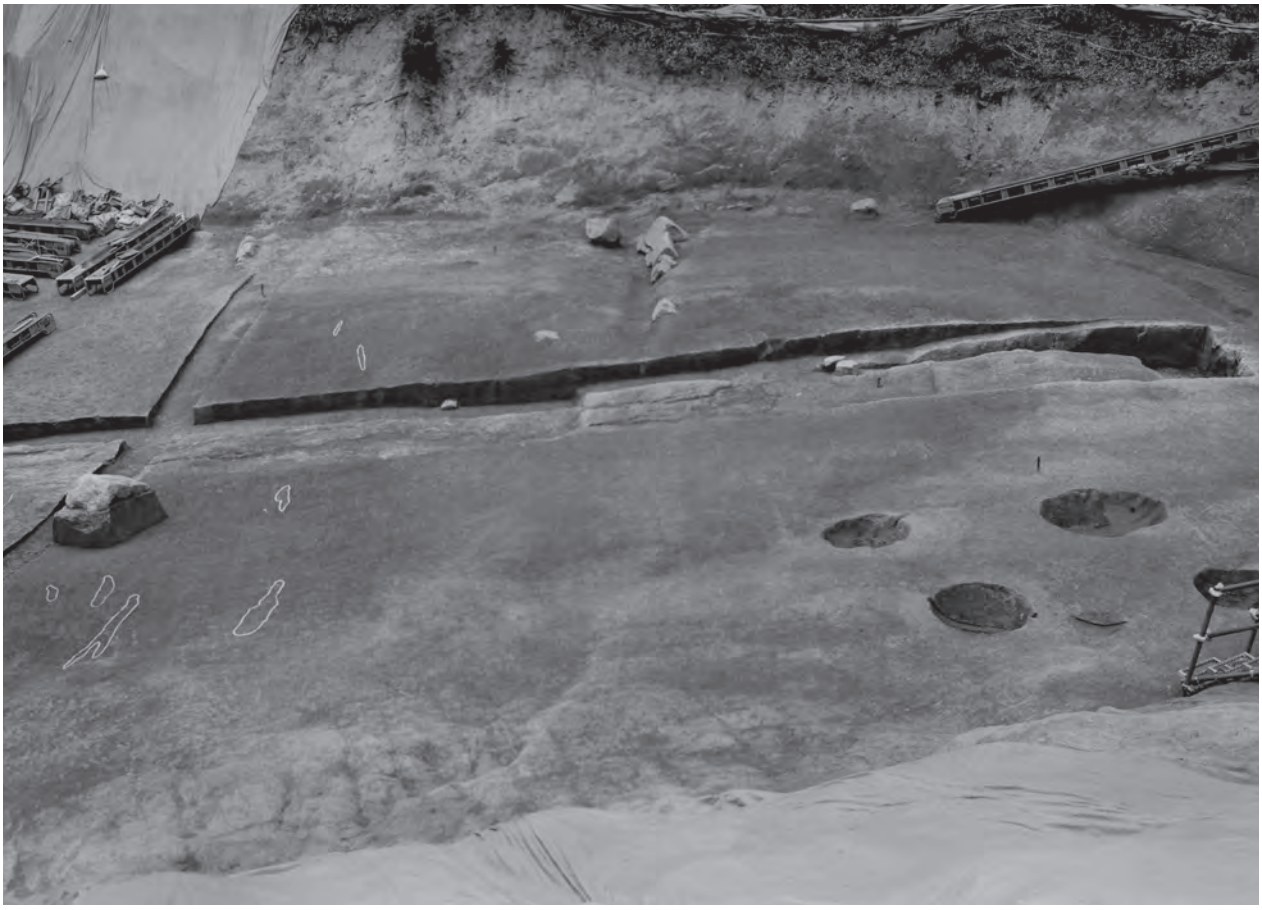


2．第１面　全景（東から）

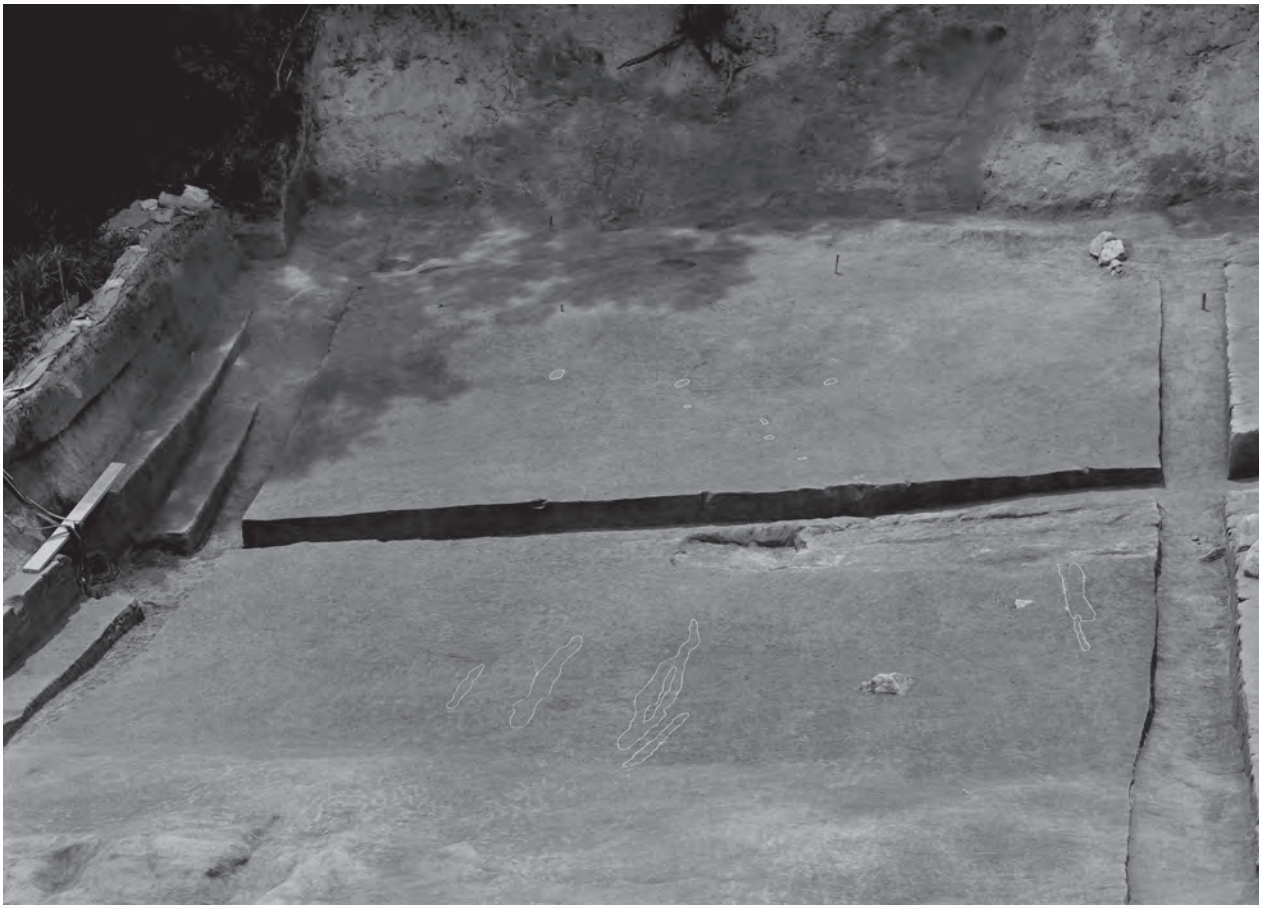
１．第２面北半　全景（東から）



２．第２面南半　全景（東から）



1．第３面北半　全景（東から）

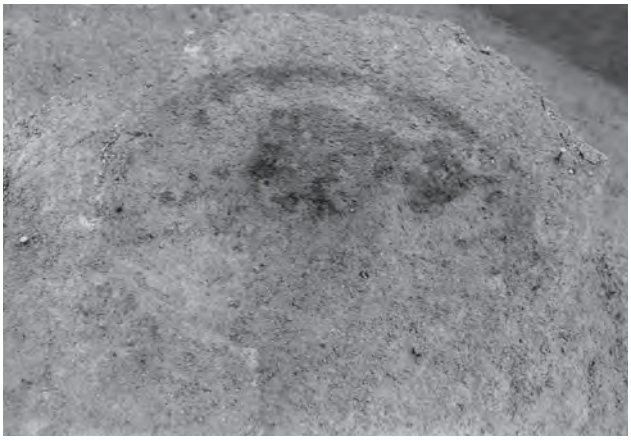


2．第３面南半　全景（東から）

１．第４面　全景（北から）

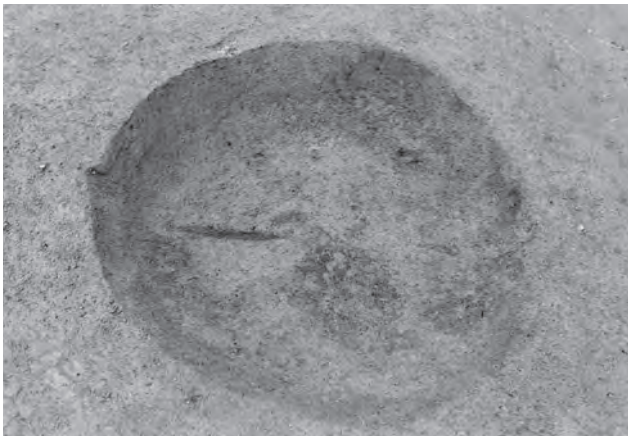
２．第５面　全景（北から）

1．第１面 45 土坑　断面（東から）



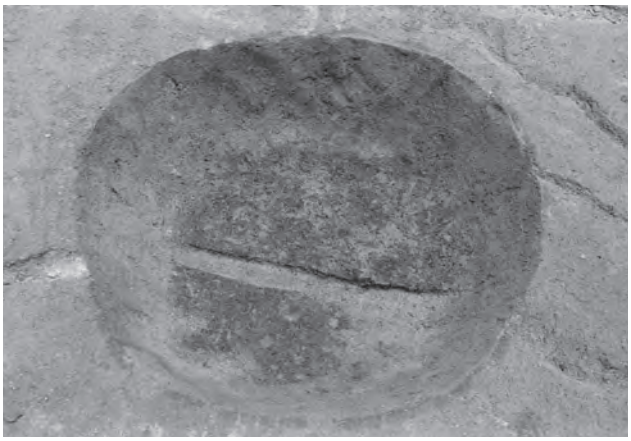
2．第１面 45 土坑（南東から）

3．第１面 49 土坑　断面（西から）

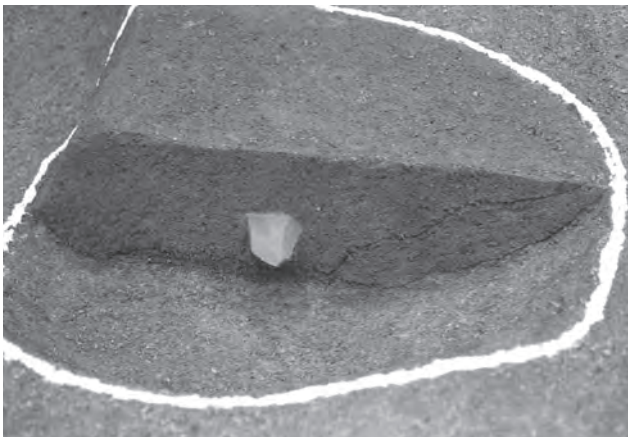


4．第１面 49 土坑（西から）

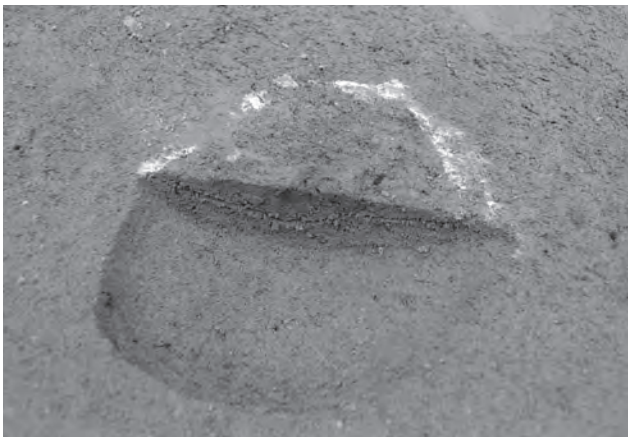
5．第１面 55 土坑　断面（西から）



6．第１面 55 土坑（西から）



7．第１面 76 土坑　断面（南から）



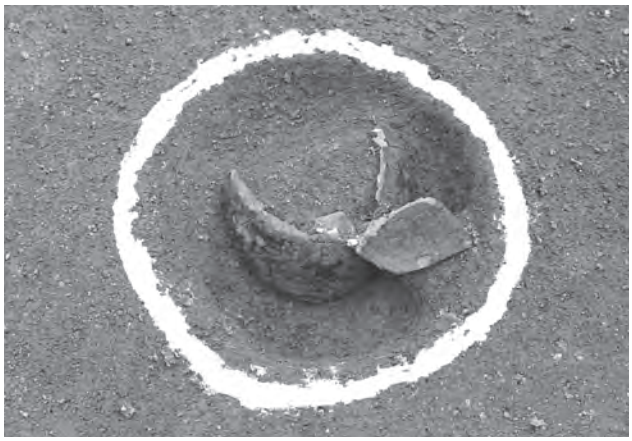
8．第１面 52 ピット　断面（西から）

1．第２面 77 土坑　断面（西から）

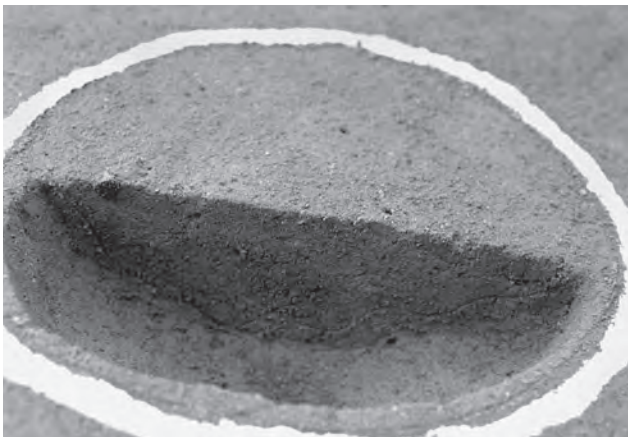
2．第２面 77 土坑（西から）

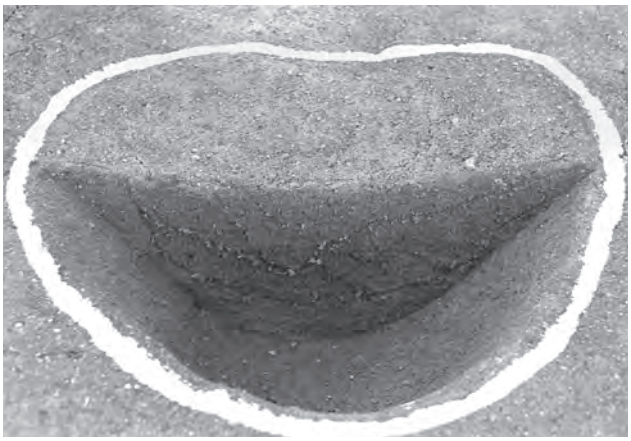
3．第２面 80 土坑　断面（西から）

4．第２面 80 土坑（西から）


5．第３面 75 ピット（西から）

6．第３面 81 ピット　断面（東から）


7．第４面 88 ピット　断面（北から）


8．第５面 89 土坑　断面（東から）

722

723

724

725

726

727

728

729

730

731

732

733

千提寺西遺跡３区　石造物

734

735

736

737

738

739

740

741

742

743

744

745

746

747

748

749

750

751

752

753

754

755

756

757

千提寺西遺跡３区　石造物

758

759

760

761

762

763

764

765

766

767

768

769

770

771

772

773

774

775

776

777

778

779

千提寺西遺跡４区　石造物

780

781

782

783

784

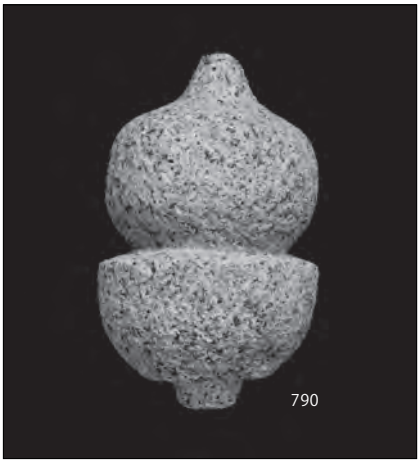
785

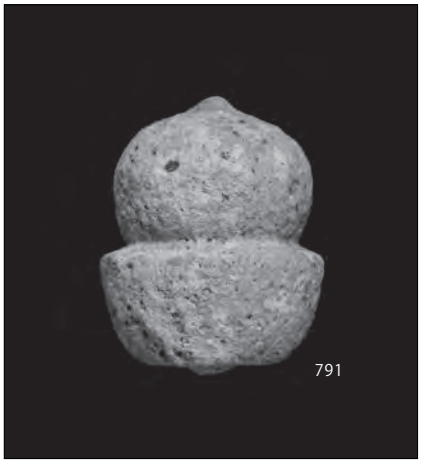
786

787

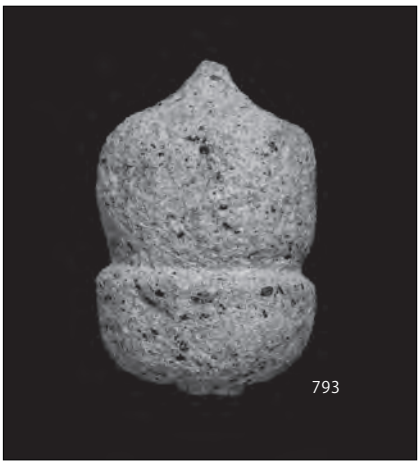
788

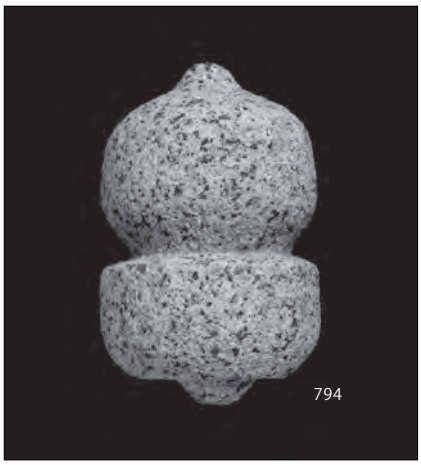
789

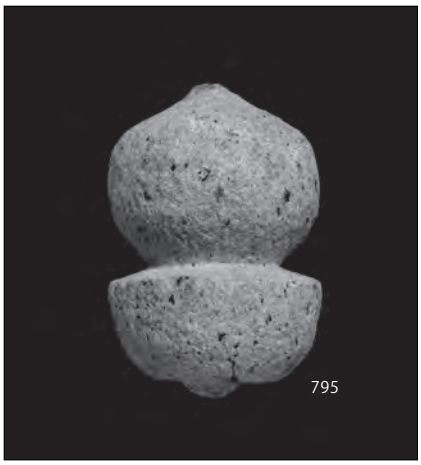

790

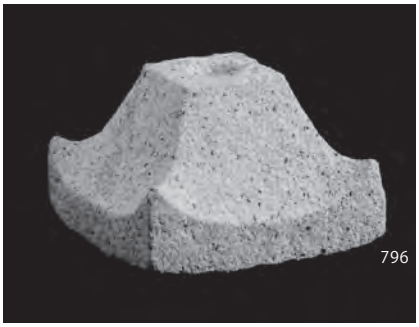

791

792


793

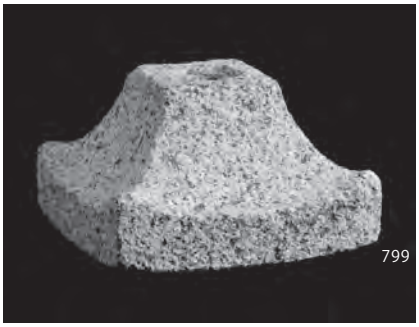

794


795

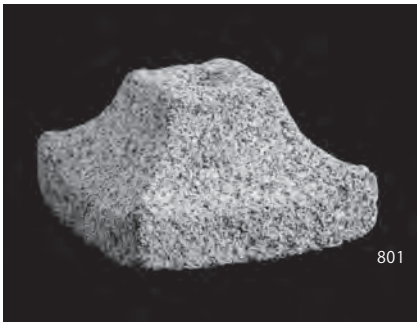

796

797

798

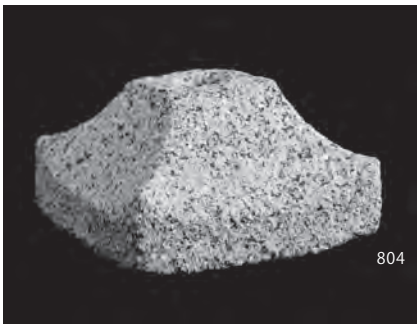

799

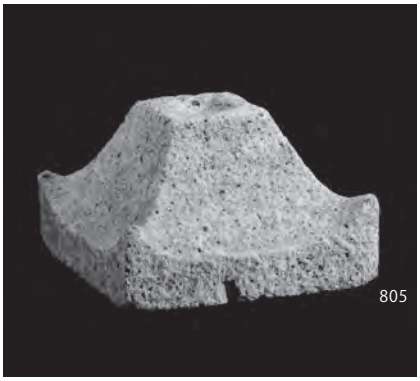
800

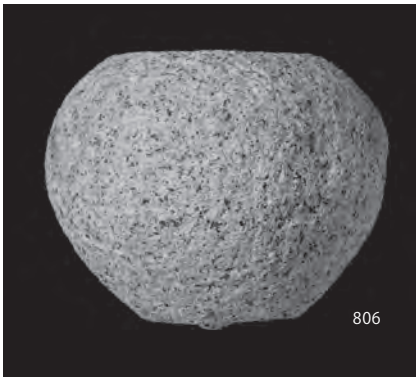

801

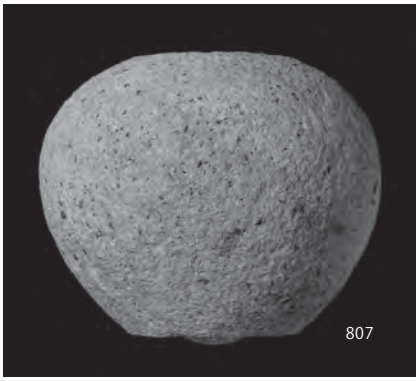
802

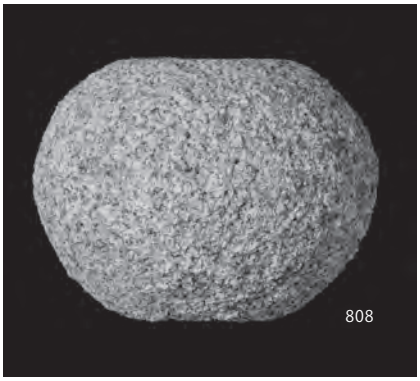
803

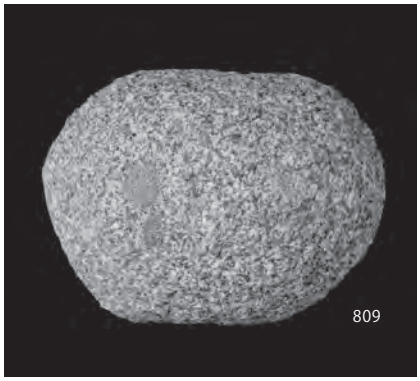

804

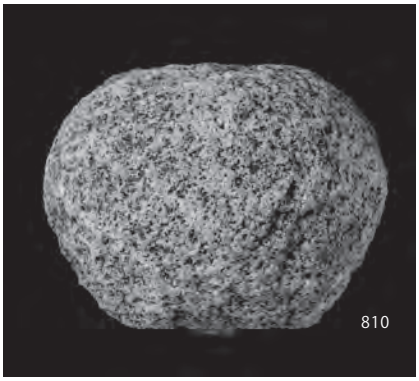

805


806

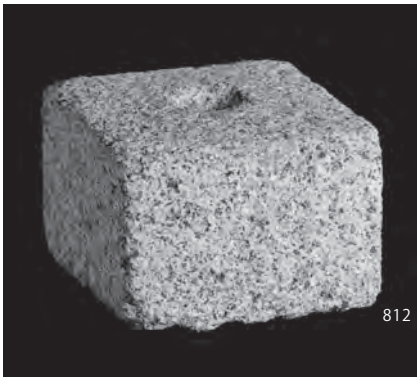

807


808


809

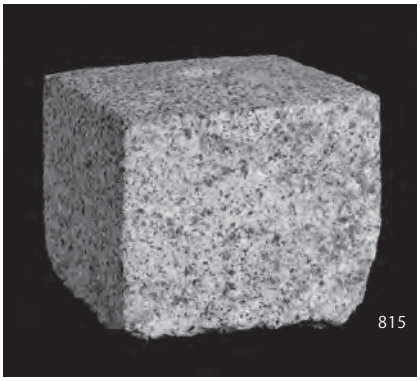

810

811

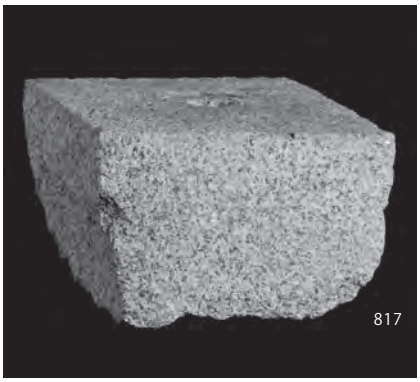

812

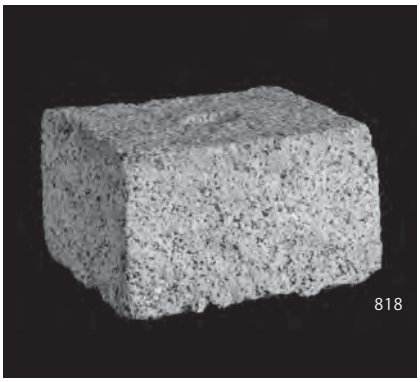
813

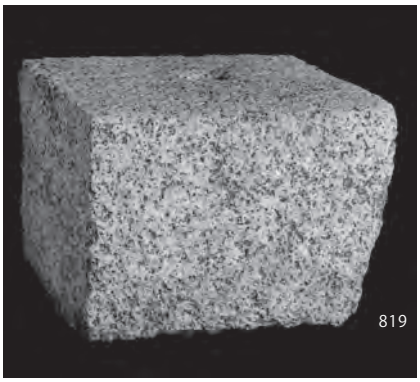
814


815

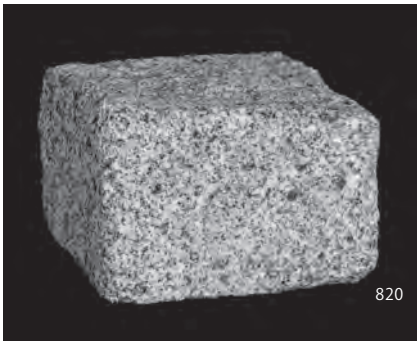
816

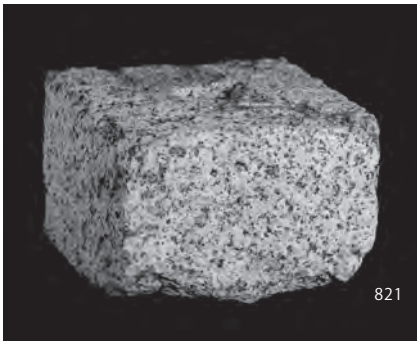

817


818


819

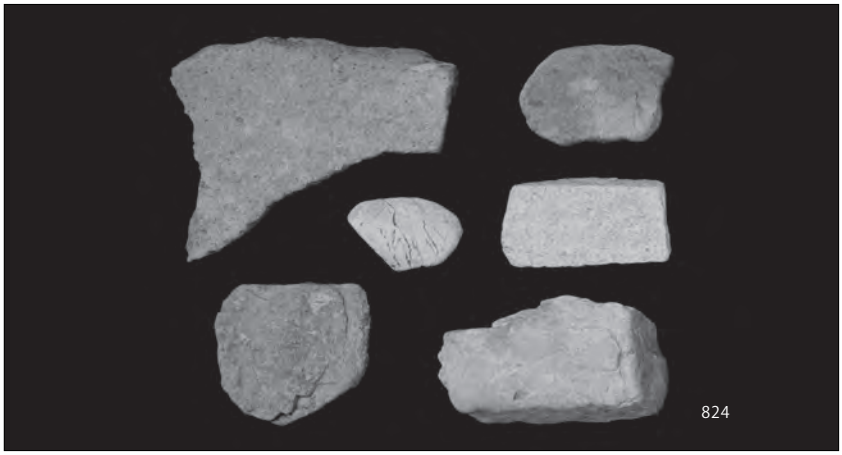
千提寺西遺跡３・４・８・９区　石造物


820


821

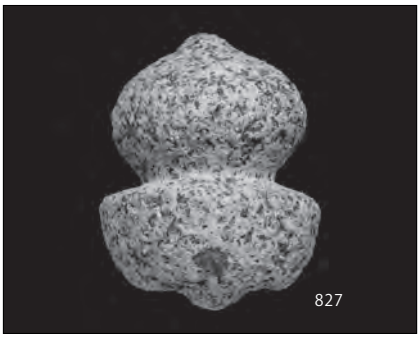
822

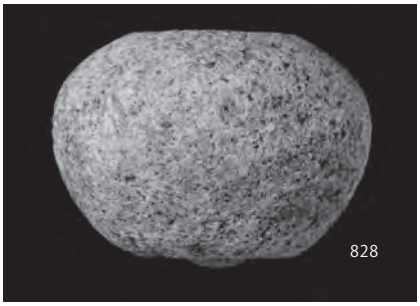
823


824

825

826


827


828

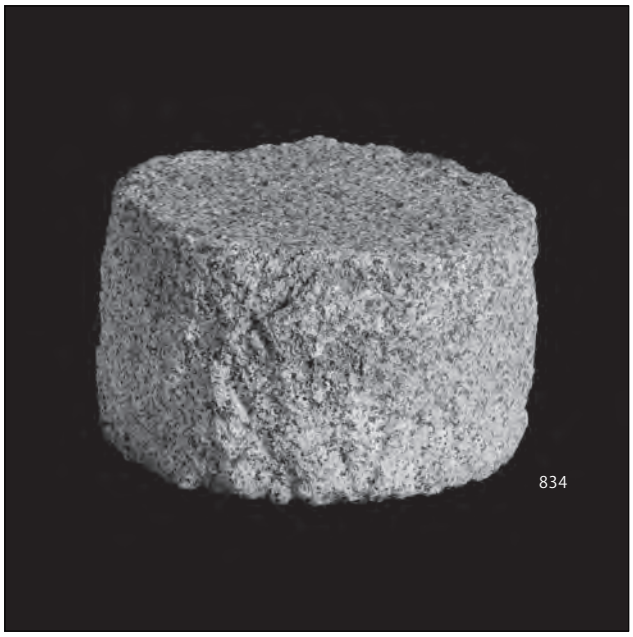
829

830

831

832

833


834

835

報　告　書　抄　録

ふりがな	せんだいじにしいせき・ひなといせき・せんだいじいちさかいせき・せんだいじくるすやまいせき
書名	千提寺西遺跡・日奈戸遺跡・千提寺市阪遺跡・千提寺クルス山遺跡
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次数	
シリーズ名	公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第256集
編著者名	合田幸美（編）　亀井聡　若林幸子　安部みき子　降幡順子　他
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　℡072 - 299 - 8791
発行年月日	2015年 6月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	緯度・経度	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
せんだいじにしいせき 千提寺西遺跡	おおさかふいばらきし 大阪府茨木市 せんだいじ　ちない 千提寺　地内	27211	9487	北緯 34度53分09秒 東経 135度32分10秒	（11－1試掘） 20110601～20120131 （11－1調査） 20111101～20120531 （12－1試掘） 20120501～20121120 （12－1調査） 20120507～20130521	2119㎡ 2446㎡ 1444㎡ 16111㎡	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設
ひなといせき 日奈戸遺跡	おおさかふいばらきし 大阪府茨木市 せんだいじ　ちない 千提寺　地内	27211	9497	北緯 34度53分01秒 東経 135度32分00秒	20120507～20120926	2563㎡	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設
せんだいじいちさかいせき 千提寺市阪遺跡	おおさかふいばらきし 大阪府茨木市 せんだいじ　ちない 千提寺　地内	27211	9499	北緯 34度53分12秒 東経 135度32分18秒	20121105～20130731	6624㎡	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設
せんだいじくるすやまいせき 千提寺クルス山遺跡	おおさかふいばらきし 大阪府茨木市 せんだいじ　ちない 千提寺　地内	27211	9514	北緯 34度53分18秒 東経 135度32分25秒	20130131～20130810	2619㎡	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千提寺西遺跡	墓域 集落	古代末～近代	土壙（中・近世墓）・キリシタン墓・座棺墓・焼土坑（火葬場）・石組（土壙上部施設）・土坑・溝・道路状遺構・石組・ピット・掘立柱建物・棚田	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶磁器・染付・人骨・鉄製品（鋏・剃刀・火打金・釘）・銅製品（煙管・金具）・土人形（花魁・虚無僧・鳩・外国人）・銭貨・棺材・鉛弾・漆器椀・ガラス玉・細紐・五輪塔・石仏・石筆	３区、５区でキリシタン墓を検出。 ５区のキリシタン墓は石組（上部施設）を伴う。
日奈戸遺跡	生産 集落	古代末～中世	ピット・土坑・落込み・石組・棚田	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶磁器	
千提寺市阪遺跡	墓域 集落	古代末～近代	土壙（中・近世墓）・キリシタン墓・座棺墓・石組（土壙上部施設）・土坑・ピット・掘立柱建物・棚田	縄文土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・輸入磁器・陶磁器・染付・人骨・毛髪・鉄製品（鋏・釘・金具）・銭貨・銅製品（煙管）・土人形（鶏・鳩・酒飲猿・虚無尼僧・饅頭喰い）・ガラス小玉・石器・石仏	キリシタン墓？を検出
千提寺クルス山遺跡	墓域 集落	中世～近代	土壙（中・近世墓）・キリシタン墓・座棺墓・焼土坑（火葬場）・石組（土壙上部施設）・土坑・ピット・溝・落込み・棚田	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・染付・人骨・鉄製品（釘）・石仏	キリシタン墓を検出。 うち１基は石組（上部施設）に石仏を伴う。

要　約

上記４遺跡において、丘陵部の調査では墓域を５箇所、谷部の調査では集落域を８箇所検出した。墓域では、中世墓、長方形墓（キリシタン墓）、近世墓を３００基余り検出した。墓域は、中世墓を中心とする墓域（千提寺西遺跡３・４区）、近世墓を中心とする墓域（千提寺西遺跡５区・同６区・千提寺市阪遺跡２区）、中世墓と近世墓が混在する墓域（千提寺クルス山遺跡１区）に大別できる。長方形墓（キリシタン墓）は、千提寺西遺跡３・４区と同５区、千提寺市阪遺跡２区、千提寺クルス山遺跡１区で検出した。とくに千提寺西遺跡５区の長方形墓（キリシタン墓）は、上部に石組をもち、キリシタン墓と判断する根拠となった。長方形墓（キリシタン墓）は、千提寺西遺跡３・４区では中世墓に混在し、千提寺西遺跡５区、千提寺市阪遺跡２区では独立した墓域を形成し、千提寺クルス山遺跡１区では両者の中庸の状態で検出しており、このような多様な長方形墓（キリシタン墓）のあり方は、キリスト教受容に際しての状況をうかがう資料として重要である。集落域では、掘立柱建物からなる居住域と棚田を検出し、千提寺西遺跡７区では古代末、千提寺市阪遺跡１区では古代末～中世を中心とする集落を確認した。

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第256集

千提寺西遺跡
日奈戸遺跡
千提寺市阪遺跡
千提寺クルス山遺跡

―高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書―

発行年月日／2015年６月30日

編集・発行／公益財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号

印刷・製本／株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南２丁目６番８号